

京都府遺跡調査概報

第 61 冊

1. 名神高速道路関係遺跡
 - (1) 長岡京跡左京第286・304・313・317次
 - (2) 長岡京跡左京第303・314・315次
 - (3) 長岡京跡右京第428次
2. 京都南道路関係遺跡
 - (1) 内里八丁遺跡
 - (2) 荒坂横穴群
 - (3) 松井古墳状隆起
3. 木津地区所在遺跡
 - (1) 瓦谷遺跡第7次
 - (2) 上人ヶ平埴輪窯第2次
 - (3) 梅谷瓦窯・中ノ島遺跡
 - (4) 市坂瓦窯

1 9 9 5

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。発掘調査については、『京都府遺跡調査報告書』・『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』などの各種刊行物によってその成果を公表するとともに、毎年、展覧会や研修会を開催し、各遺跡の調査内容や出土遺物などを広く府民に紹介し、普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成5年度に実施した発掘調査のうち、日本道路公団大阪建設局、建設省近畿地方建設局、住宅・都市整備公団の各機関の依頼を受けて行った、名神高速道路関係遺跡の長岡京跡、京都南道路関係の内里八丁遺跡・荒坂横穴群・松井古墳状隆起、木津地区所在遺跡関係の瓦谷遺跡第7次・上人ヶ平埴輪窯第2次・梅谷瓦窯・中ノ島遺跡・市坂瓦窯に関する発掘調査概要を取めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会、京都市埋蔵文化財調査センター、(財)京都市埋蔵文化財研究所、向日市教育委員会、(財)向日市埋蔵文化財センター、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、大山崎町教育委員会、八幡市教育委員会、田辺町教育委員会、木津町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々へ厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 福山敏男

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 名神高速道路関係遺跡 2. 京都南道路関係遺跡 3. 木津地区所在遺跡

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 名神高速道路関係遺跡				
(1) 長岡京跡左京第286 ・304・313・317次	京都市南区久世東土川町 ～伏見区久我本町	平5.4.7～ 平6.3.4	日本道路公団 大阪建設局	中川和哉 鍋田 勇
(2) 長岡京跡左京第303 ・314・315次	京都市南区久世東土川町 ～伏見区久我西出町	平5.5.6～ 平6.2.25		石尾政信 竹井治雄
(3) 長岡京跡右京第428 次	乙訓郡大山崎町下植野	平5.4.7～ 平6.3.4		岩松 保 戸原和人
2. 京都南道路関係遺跡				
(1) 内里八丁遺跡	八幡市内里小字八丁・日 向堂	平5.5.20～ 平6.2.10	建設省近畿地 方建設局	竹原一彦
(2) 荒坂横穴群	八幡市美濃山小字荒坂 ～綴喜郡田辺町松井地先	平5.7.19～ 平5.11.2		竹原一彦
(3) 松井古墳状隆起	綴喜郡田辺町	平5.8.9～ 平5.9.14		森島康雄
3. 木津地区所在遺跡				
(1) 瓦谷遺跡第7次	相楽郡木津町大字市坂	平5.8.5～ 平6.3.4	住宅・都市整 備公団	石井清司 森正哲次
(2) 上人ヶ平埴輪窯第 2次	相楽郡木津町大字市坂	平5.9.2～ 平6.3.4		石井清司
(3) 梅谷瓦窯・中ノ島 遺跡	相楽郡木津町大字梅谷	平5.4.12～ 平6.3.4		有井広幸
(4) 市坂瓦窯	相楽郡木津町大字市坂	平5.11.10～ 平6.3.4		森島康雄

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

目 次

1. 名神高速道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要-----	1
(1) 長岡京跡左京第286・304・313・317次 京都工区-----	5
(2) 長岡京跡左京第303・314・315次 PA工区-----	60
(3) 長岡京跡右京第428次 下植野工区-----	75
2. 京都南道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要-----	87
(1) 内里八丁遺跡-----	91
(2) 荒坂横穴群-----	103
(3) 松井古墳状隆起-----	108
3. 木津地区所在遺跡平成5年度発掘調査概要-----	111
(1) 瓦谷遺跡第7次-----	113
(2) 上人ヶ平埴輪窯第2次-----	135
(3) 梅谷瓦窯・中ノ島遺跡-----	147
(4) 市坂瓦窯-----	157

挿 図 目 次

1. 名神高速道路関係遺跡

第1図	調査地区位置図(長岡京全体図)-----	3
(1)長岡京跡左京第286・304・313・317次		
第2図	京都工区調査トレンチ配置図-----	5
第3図	A-1地区 遺構平面図-----	6
第4図	京都工区 A-2地区遺構平面図-----	8
第5図	A-2トレンチ断面図-----	9
第6図	京都工区A-2地区 出土遺物実測図(1)-----	11
第7図	京都工区A-2地区 出土遺物実測図(2)-----	12
第8図	京都工区A-2地区 出土遺物実測図(3)-----	13
第9図	京都工区B-1地区 遺構平面図-----	15
第10図	京都工区B-1地区 出土遺物実測図-----	17
第11図	京都工区B-2地区 遺構平面図-----	21
第12図	京都工区B-2地区 溝S D286101実測図-----	23
第13図	京都工区B-2地区 溝S D286102・S D286103・ 柵列跡S A286104実測図	25
第14図	京都工区B-2地区 出土遺物実測図-----	26
第15図	京都工区C-1a地区 遺構平面図-----	30
第16図	京都工区C-1a地区 遺構平面図-----	31
第17図	京都工区C-1a地区 掘立柱建物跡S B31353実測図-----	32
第18図	京都工区C-1a地区 S X31316土層断面図-----	33
第19図	京都工区C-1地区 出土遺物実測図-----	35
第20図	京都工区C-2a・b地区 遺構平面図-----	38
第21図	京都工区C-2c・d地区 遺構平面図-----	39
第22図	京都工区C-2地区及び溝S D286408・S D286409土層断面図-----	40
第23図	京都工区C-2b地区 掘立柱建物跡S B286227・溝S D286211実測図-----	41
第24図	掘立柱建物跡S B286227柱穴(P7)実測図-----	42
第25図	京都工区C-2c地区 溝S D286311実測図-----	43

第26図	京都工区C-2c地区	溝SD286311出土土器量分布図	44
第27図	京都工区C-2c地区	溝SD286311出土遺物実測図(1)	46
第28図	京都工区C-2c地区	溝SD286311出土遺物実測図(2)	47
第29図	京都工区C-2地区	出土遺物実測図	49
第30図	京都工区E-1・2・3地区	遺構平面図〔古墳時代～近世〕	52
第31図	京都工区E-2・3地区	遺構平面図〔弥生～古墳時代〕	53
第32図	京都工区E-1・2・3地区	土層断面図	54
第33図	京都工区E-2地区	溝SD317137弥生土器出土状況図	55
第34図	京都工区E-1・2地区	出土遺物実測図〔弥生土器〕	57
第35図	京都工区E-1・2・3地区	出土遺物実測図	58

(2)長岡京跡左京第303・314・315次

第36図	PA工区	調査トレンチ配置図	60
第37図	PA工区B-1a地区	遺構平面図	62
第38図	PA工区B-1a地区	出土遺物実測図(1)	64
第39図	PA工区B-1a地区	出土遺物実測図(2)	65
第40図	PA工区B-1a地区	出土遺物実測図(3)	66
第41図	PA工区B-1a地区	出土遺物実測図(4)	67
第42図	PA工区B-1b地区	遺構平面図	68
第43図	PA工区B-2a地区	遺構平面図	69
第44図	PA工区B-2a地区	掘立柱建物跡群	70
第45図	PA工区B-2a地区	出土遺物実測図	71
第46図	PA工区D-2a地区	遺構平面図	73

(3)長岡京跡右京第428次

第47図	下植野工区	調査トレンチ配置図	75
第48図	下植野工区C-4c地区	遺構配置図	76
第49図	下植野工区C-5a地区	遺構平面図	79
第50図	下植野工区C-5a地区	出土遺物実測図	81
第51図	下植野工区C-5b地区	遺構平面図	82
第52図	下植野工区C-3・4・5地区	主要遺構図	83

2. 京都南道路関係遺跡

第53図	調査地周辺遺跡分布図	89
------	------------	----

(1)内里八丁遺跡		
第54図	内里八丁遺跡調査区配置図-----	92
第55図	第3遺構面平面図-----	93
第56図	B地区竪穴式住居跡実測図-----	94
第57図	竪穴式住居跡出土遺物実測図-----	95
第58図	S X07出土遺物実測図-----	96
第59図	S X08・09出土遺物実測図-----	97
第60図	第4遺構面平面図-----	99
第61図	S X10実測図-----	100
第62図	水田跡遺物実測図-----	101
(2)荒坂横穴群		
第63図	荒坂横穴群調査地地形測量図(調査前)-----	104
(3)松井古墳状隆起		
第64図	松井古墳状隆起地形測量図-----	107
第65図	土層断面図-----	109
2. 木津地区所在遺跡		
第66図	調査地位置図-----	112
第67図	上人ヶ平遺跡・瓦谷遺跡周辺遺構配置図-----	113
(1)瓦谷遺跡第7次		
第68図	瓦谷遺跡トレンチ配置図-----	115
第69図	瓦谷遺跡遺構配置図-----	116
第70図	瓦谷遺跡土層断面柱状図-----	117
第71図	瓦谷遺跡1号埴輪窯実測図-----	118
第72図	瓦谷遺跡2号埴輪窯実測図-----	119
第73図	瓦谷遺跡3号埴輪窯実測図-----	121
第74図	瓦谷遺跡埴輪棺S X01実測図-----	125
第75図	瓦谷遺跡S X02・03実測図-----	127
第76図	瓦谷遺跡埴輪窯出土遺物実測図(1)-----	128
第77図	瓦谷遺跡埴輪窯出土遺物実測図(2)-----	129
第78図	瓦谷遺跡埴輪窯出土遺物実測図(3)-----	130
第79図	瓦谷遺跡埴輪棺S X01出土遺物実測図-----	131
第80図	瓦谷遺跡出土遺物実測図(1)-----	132

第81図	瓦谷遺跡出土遺物実測図(2)-----	133
(2)上人ヶ平埴輪窯第2次		
第82図	上人ヶ平埴輪窯遺構配置図-----	136
第83図	上人ヶ平2号埴輪窯実測図-----	137
第84図	上人ヶ平3号埴輪窯実測図-----	139
第85図	S D01土層断面図-----	142
第86図	上人ヶ平埴輪窯出土遺物実測図(1)-----	143
第87図	上人ヶ平埴輪窯出土遺物実測図(2)-----	144
第88図	上人ヶ平埴輪窯出土遺物実測図(3)-----	145
(3)梅谷瓦窯・中ノ島遺跡		
第89図	梅谷瓦窯・中ノ島遺跡トレンチ配置図-----	147
第90図	Jトレンチ平・断面図-----	148
第91図	調査地土層断面柱状図-----	149
第92図	梅谷瓦窯遺構配置図-----	151
第93図	出土遺物実測図(1)-----	154
第94図	出土遺物実測図(2)-----	155
(4)市坂瓦窯		
第95図	地形測量図及びトレンチ配置図-----	158
第96図	市坂瓦窯平面図-----	159
第97図	8トレンチ土層断面図-----	160

付 表 目 次

1. 名神高速道路関係遺跡		
付表1	調査地一覧表-----	2

図 版 目 次

1. 名神高速道路関係遺跡

(1) 長岡京跡左京第286・304・313・317次

- 図版第1 (1) A-1 地区トレンチ全景(東から)
(2) A-1 地区土器出土状況(北から)
- 図版第2 (1) A-2 a 地区東半(南西から) (2) A-2 a 地区西半(南西から)
- 図版第3 (1) 旧河道 S R304103 肩部杭列(東から)
(2) 旧河道 S R304105・106(東から)
- 図版第4 (1) A-2 a 地区南東壁旧河道 S R304106 堆積層(北西から)
(2) A-2 a 地区南東壁旧河道 S R304105 堆積層(北西から)
- 図版第5 (1) 墨書人面土器 (2) ミニチュアカマド
(3) ミニチュアカマド (4) 土馬
- 図版第6 A-2 a 地区出土遺物(1) (S R304105~S R304107)
- 図版第7 A-2 a 地区出土遺物(2) (S R304106)
- 図版第8 (1) A-2 b 地区北壁(南から) (2) A-2 b 地区東壁(西から)
- 図版第9 (1) B-1 地区トレンチ東半部(東から)
(2) B-1 地区縄文土器出土状況(南から)
- 図版第10 (1) B-1 地区縄文の土坑(S K28603)(南から)
(2) B-1 地区縄文土器出土状況(西から)
- 図版第11 (1) B-2 地区東端の土坑群と素掘り溝(東から)
(2) B-2 地区北東部の素掘り溝群(南西から)
- 図版第12 (1) B-2 地区調査地全景・溝 S D286106ほか(北東から)
(2) B-2 地区溝 S D286102ほか(西から)
- 図版第13 (1) B-2 地区溝 S D286101(北から)
(2) B-2 地区溝 S D286103・柵列跡 S A286104(西から)
- 図版第14 (1) C-1 a 地区全景(南西から) (2) C-1 a 地区全景(北東から)
- 図版第15 (1) C-1 a 地区建物跡 S B31353(北東から)
(2) a トレンチ S B31353・S A31354(東から)

- (3) C-1 a 地区溝 S D31334(南から)
- 図版第16 (1) C-1 b 地区全景(南西から)
 (2) C-1 b 地区土坑 S K31301(北から)
 (3) C-1 b 地区土坑 S K31302(東から)
- 図版第17 (1) C-1 b 地区 S X31316(西から)
 (2) C-1 b 地区 S X31316西側肩部付近(北西から)
 (3) C-1 b 地区 S X31316全景(南西から)
- 図版第18 (1) C-1 b 地区 S X31316土層観察状況
 (2) C-1 b 地区 S X31316噴泥(平面) 4'層中間面
 (3) C-1 b 地区 S X31316噴泥(断面)
 (4) C-1 b 地区 S X31316噴泥(断面)
- 図版第19 C-1 地区出土遺物
- 図版第20 (1) C-2 a 地区全景(北東から)
 (2) C-2 a 地区溝 S D286119・286120(南西から)
 (3) C-2 a 地区溝 S D286120土層断面(南東から)
- 図版第21 (1) C-2 b 地区全景(北東から) (2) C-2 b 地区全景(北東から)
- 図版第22 (1) C-2 b 地区建物跡 S B286227(西から)
 (2) C-2 b 地区建物跡 S B286227柱穴(P7)(南から)
 (3) C-2 b 地区建物跡 S B286227柱穴(P3・8)(北から)
 (4) C-2 b 地区溝 S D286226(南東から)
- 図版第23 (1) C-2 c 地区西部全景(北東から)
 (2) C-2 c 地区溝 S D286311(南から)
- 図版第24 (1) C-2 c 地区溝 S D286311(南から)
 (2) C-2 c 地区溝 S D286311土層断面(北から)
 (3) C-2 c 地区溝 S D286311遺物出土状況(1)
- 図版第25 C-2 c 地区溝 S D286311遺物出土状況(2)
- 図版第26 (1) C-2 d 地区上層全景(北東から)
 (2) C-2 d 地区下層全景(南西から)
 (3) C-2 d 地区溝 S D286408(南から)
 (4) C-2 d 地区溝 S D286409(北西から)
- 図版第27 C-2 c 地区溝 S D286311出土遺物(1)
- 図版第28 C-2 c 地区溝 S D286311出土遺物(2)

- 図版第29 C-2 c 地区溝 S D286311出土遺物(3)
- 図版第30 (1) E-1 地区全景(北東から) (2) E-1 地区西部中世溝(東から)
(3) E-1 地区溝 S D31705(南から)
- 図版第31 (1) E-2・E-3 地区全景(西から) (2) E-2 地区全景(南西から)
(3) E-2 地区東部全景(北東から)
- 図版第32 (1) E-2 地区溝 S D317139・S D317138(南東から)
(2) E-2 地区溝 S D317137遺物出土状況
- 図版第33 E-2 地区溝 S D317137出土遺物
- 図版第34 (1) E-3 地区全景(西から) (2) E-3 地区南北溝(南から)
(3) E-3 地区 S X317141(南から)

(2) 長岡京跡左京第303・314・315次

- 図版第35 (1) B-1 a・B-2 a 地区全景(北東から) (2) B-1 a 地区全景
- 図版第36 (1) B-1 a 地区溝群(南西から)
(2) B-1 a 地区建物跡 S B303003(東から)
- 図版第37 (1) B-1 a 地区南西部(北東から)
(2) B-1 a 地区溝 S D303004(西から)
- 図版第38 B-1 a 地区出土遺物
- 図版第39 (1) B-1 b 地区掘立柱建物跡検出状況(南から)
(2) B-1 b 地区素掘り溝群検出状況(東から)
- 図版第40 (1) B-2 a 地区トレンチ全景 (2) B-2 a 地区中世溝群(南西から)
- 図版第41 (1) B-2 a 地区掘立柱建物跡群(南から)
(2) B-2 a 地区溝 S D315003(北東から)
- 図版第42 B-2 a 地区出土遺物
- 図版第43 (1) D-2 a 地区トレンチ全景(西から)
(2) D-2 a 地区掘立柱建物跡検出状況(東から)

(3) 長岡京跡右京第428次

- 図版第44 (1) C-4 c 地区全景(南西から)
(2) C-4 c 地区建物跡 S B395821(北から)
- 図版第45 (1) C-5 a 地区全景(東から)
(2) C-5 a 地区素掘り溝群と建物跡 S B428106検出状況(南東から)
- 図版第46 (1) C-5 a 地区建物跡 S B428106完掘状況(南から)
(2) C-5 a 地区溝 S D428108・109完掘状況(南東から)

- 図版第47 (1) C-5 a 地区建物跡 S B 428106-柱穴 P 1
 (2) C-5 a 地区建物跡 S B 428106-柱穴 P 2
 (3) C-5 a 地区建物跡 S B 428106-柱穴 P 3
 (4) C-5 a 地区建物跡 S B 428106-柱穴 P 5
- 図版第48 (1) C-5 a 地区出土遺物 (2) C-5 b 地区全景(西から)

2. 京都南道路関係遺跡

(1) 内里八丁遺跡

- 図版第49 (1) 竪穴式住居跡 S H 02 全景(南西から)
 (2) 竪穴式住居跡 S H 03 全景(南東から)
- 図版第50 (1) 土器溜まり S X 08(南から) (2) 土器溜まり S X 07(北から)
- 図版第51 (1) 埋葬主体部 S X 06 全景(東から) (2) B 地区水田畦畔検出状況
- 図版第52 (1) 水田畦畔遺物出土状況(南から) (2) B 地区南西部水田畦畔検出状況
- 図版第53 主要出土遺物

(2) 荒坂横穴群

- 図版第54 (1) 荒坂横穴群調査地遠景(東から)
 (2) 22号横穴玄門部(北東前庭部から)
- 図版第55 (1) 18号横穴前庭部(東から) (2) 20号・21号横穴前庭部(東から)

(3) 松井古墳状隆起

- 図版第56 (1) 調査前風景(北西から) (2) 1 トレンチ全景(北から)

3. 木津地区所在遺跡

(1) 瓦谷遺跡第7次

- 図版第57 (1) 調査前風景(西から) (2) 埴輪窯全景(南から)
- 図版第58 (1) 2号窯焼成部最奥付近埴輪出土状況
 (2) 2号窯焼成部中央付近埴輪出土状況(1)
- 図版第59 (1) 2号窯焼成部中央付近埴輪出土状況(2)
 (2) 2号窯焼成部中央付近埴輪出土状況(3)
- 図版第60 (1) 1号窯焼成部天井残存状況(南から)
 (2) 3号窯中央部横断面
- 図版第61 (1) 埴輪窯～灰原全景(南から) (2) 灰原及び流路掘削状況(西から)
- 図版第62 (1) 埴輪棺出土状況(東から) (2) 埴輪棺東側鉄鏃出土状況
- 図版第63 出土遺物(1)
- 図版第64 出土遺物(2)

図版第65 出土遺物(3)

(2) 上人ヶ平埴輪窯第2次

図版第66 (1)調査前全景(北から) (2)3号窯窯体内土層断面(南西から)

図版第67 (1)1・2・3号埴輪窯全景(北東から)
(2)調査地全景(北西から)

図版第68 (1)2・3号埴輪窯掘削状況(北東から)
(2)3号埴輪窯窯体内遺物出土状態(北東から)

図版第69 (1)2号埴輪窯窯体内全景(北東から)
(2)2号埴輪窯窯体内排水施設(北東から)

図版第70 (1)2号埴輪窯北側排水施設(南東から)
(2)2号埴輪窯燃焼部土層断面(北西から)

図版第71 (1)SD01上層埴輪出土状態(北西から)
(2)SD01上層埴輪出土状態(東から)

図版第72 出土遺物(1)

図版第73 出土遺物(2)

図版第74 出土遺物(3)

(3) 梅谷瓦窯・中ノ島遺跡

図版第75 (1)調査地全景(北から) (2)調査地地山堆積状況(西から)

図版第76 (1)Aトレンチ全景(東から) (2)Jトレンチ全景(南から)

図版第77 (1)窯跡群全景1(北から) (2)窯跡群全景2(北から)

図版第78 (1)調査地・丘陵頂部全景(東から)
(2)SK01完掘状況(北から)

図版第79 (1)礫敷検出状況(東から) (2)整地土堆積状況(調査地北西斜面付近)

図版第80 (1)1号窯完掘状況(北から)
(2)2号窯焼成部第1面検出状況(北から)

図版第81 (1)2号窯燃焼部掘削状況(北から)
(2)2号窯焼成部第2床面検出状況

図版第82 (1)7号窯燃焼部掘削状況(北西から)
(2)7号窯掘削状況(北から)

図版第83 (1)6号窯上面灰釉陶器出土状況(南から)
(2)5号窯上面瓦出土状況

図版第84 出土遺物

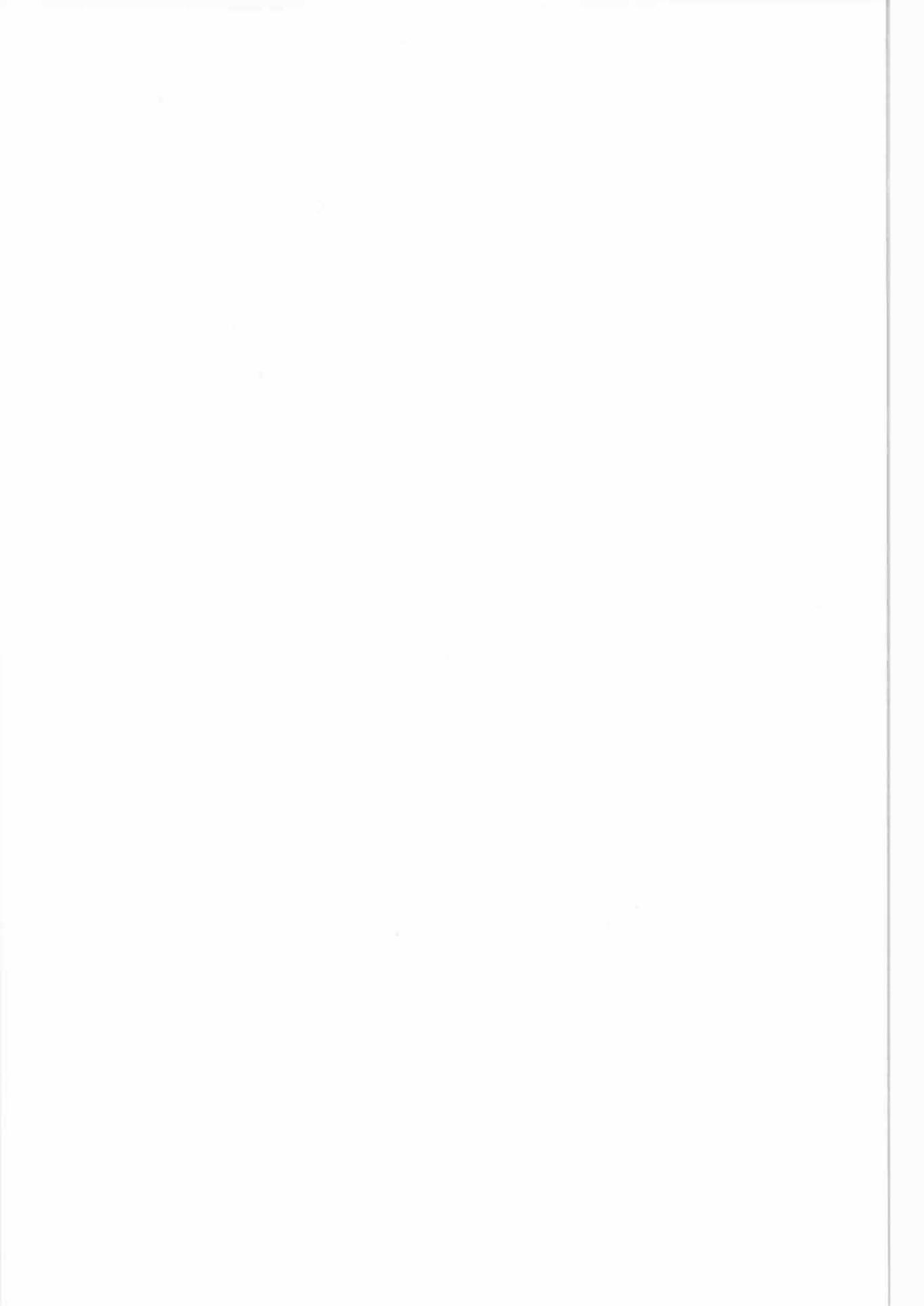
(4) 市坂瓦窯

図版第85 (1) 市坂瓦窯と上人ヶ平遺跡(上が西北西)

(2) 調査前風景(北西から)

図版第86 (1) 1～3号窯検出状況(南西から)

(2) 8号窯焚き口検出状況(北東から)



1. 名神高速道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要

はじめに

日本道路公団では、大阪茨木インターチェンジから京都南インターチェンジ間の慢性的な交通渋滞解消のため、走行車線の拡張工事を計画された。本調査は、この名神高速道路拡幅工事に伴い影響を受ける遺跡(名神高速道路関係遺跡)の事前調査である。

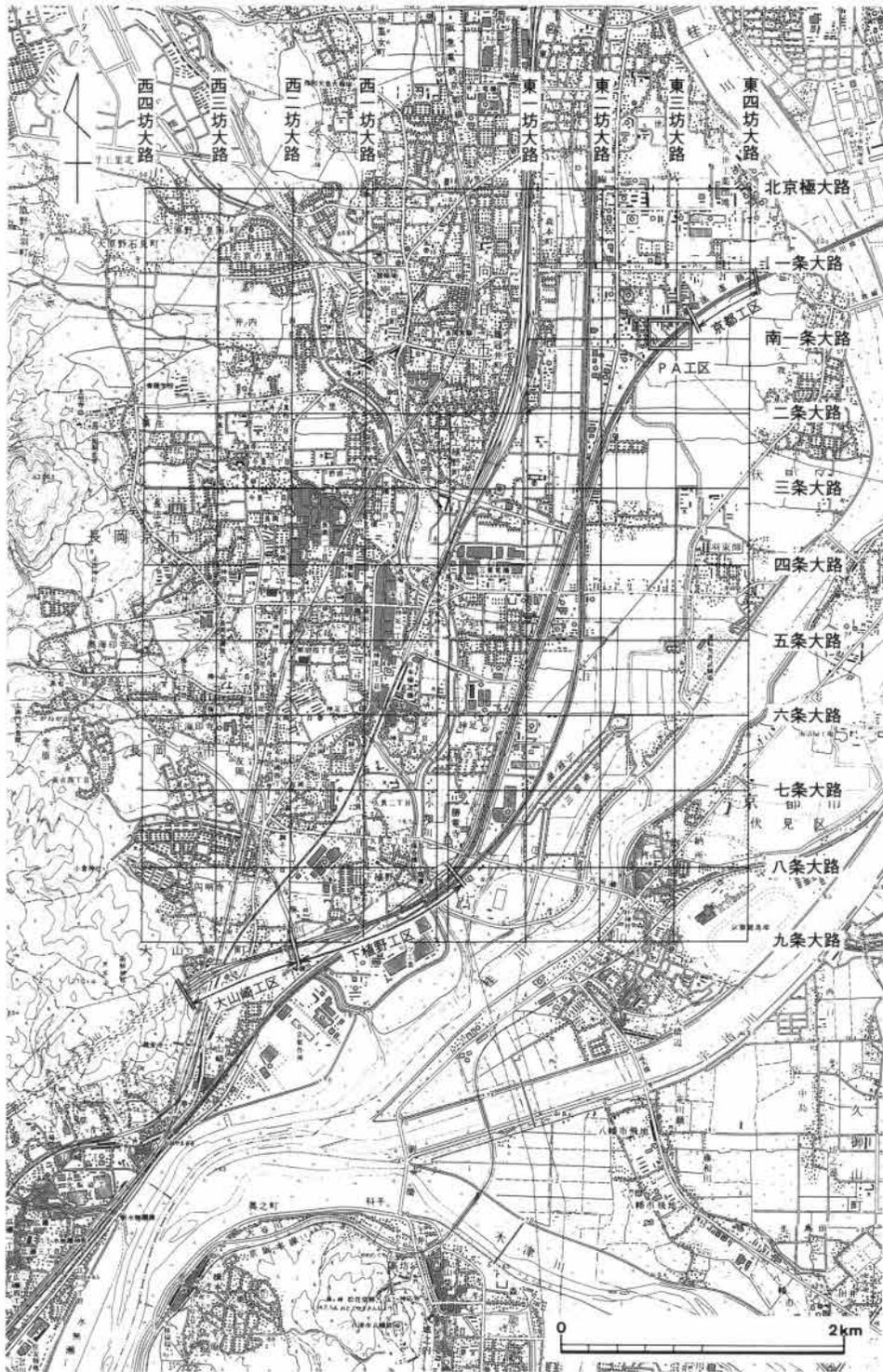
名神高速道路の走る京都市西南部は、京都市南区・伏見区、向日市、長岡京市、乙訓郡大山崎町の行政区にわたり、地形的には、南に桂川、宇治川、木津川の3河川の合流地点、西には、天王山を頂点とする西山の連峰が南北に連なる。調査地の大半は、低位段丘面及び沖積平野を横切って走り、ほぼ全域が長岡京域に含まれている。さらに、該当地域には長岡京以外の遺跡も数多く分布している。

調査は、昭和63(1988)年度から開始し、本年度で6年目となる。調査対象地は、工事工区の区分に従い、天王山トンネルの東から大山崎工区、下植野工区、長岡京工区、向日工区、桂川PA工区、京都工区となり、長岡京の東京極をぬけ桂川、京都南インターへと続く。

調査を開始した昭和63年度は、長岡京工区で長岡京の六条～八条までの7地点で合計4,200m²の調査を行い、その一部では、下層の調査を次年度に繰り越している^(注1)。平成元年度には、同工区で四条～六条までで15地点の3,350m²、向日工区で四条の2地点300m²、大山崎工区の試掘1,000m²を含め合計4,650m²の調査を行った^(注2)。平成2年度には、向日工区で三条～四条までの11地点で3,350m²、長岡京工区で1地点200m²、大山崎工区で百々遺跡を4地点4,050m²、さらに下植野工区では九条の7地点2,060m²の調査を新たに加え合計9,730m²の調査を行った^(注3)。平成3年度には、向日工区で二条～三条までの6地点で1,620m²、大山崎工区で4地点3,520m²、下植野工区5地点5,080m²の調査を加え合計10,220m²の調査を行った^(注4)。平成4年度には、京都工区で3地点1,887m²の上層遺構の調査、下植野工区で7地点8,250m²、大山崎工区で3地点1,970m²の合計12,107m²の調査を行った。大山崎工区での調査は、本年度をもってすべて終了し、今後本整理・報告を残す。平成5年度は、京都工区では当初、7地点4,095m²の調査を予定したが、後半に長岡京東京極についての調査がさらに必要になり、協議の結果、2地点700m²についての調査を追加することとなった。仮称桂川PA工区のうち、本線部分について調査を先行することとなり、4地点で3,100m²を、下植野工区では、3地点の1,600m²を調査した。^(注5)

付表1 調査地一覧表

工区	地区名	回数	調査記号	所在地(字名)	推定遺構(遺跡)	調査面積	開始	終了
京 都	A-1	L304	7ANVNR	南区久世東土川町 (長丸)	東四坊坊間小路	350	6/22	8/30
	A-2	L304	7ANVNR	南区久世東土川町 (長丸)	南一条第二小路 東四坊坊間小路	1,200	11/4	3/4
	B-1	L286	7ANWSA-2	伏見区久我本町 (三ノ坪)	南一条間大路 東四坊第二小路	550	4/7	6/28
	B-2	L286	7ANWSA-2	伏見区久我本町 (三ノ坪)	南一条間大路 東四坊第二小路	800	4/7	8/2
	C-1	L313	7ANWSA-3	伏見区久我本町 (三ノ坪)	南一条第一小路	500	7/26	12/24
	C-2	L286	7ANWSA-2	伏見区久我本町 (三ノ坪)	東四坊大路	650	4/7	11/26
	E-1	L317	7ANWSG	伏見区久我本町 (サイギ)	東四坊大路	460	10/25	2/25
	E-2	L317	7ANWSG	伏見区久我本町 (サイギ)	東四坊大路	240	12/10	2/25
	E-3	L317	7ANWSG	伏見区久我本町 (サイギ)	東四坊大路	45	1/24	2/18
	小計					4,795	m ²	
工区	地区名	回数	調査記号	所在地(字名)	推定遺構(遺跡)	調査面積	開始	終了
桂 川 P A	B-1 a	L303	7ANVKN	南区久世東土川町 (金井田)	東四坊第一小路 東土川遺跡	1,200	5/6	2/4
	B-1 b	L303	7ANVKN	南区久世東土川町 (金井田)	左京南一条四坊四町 東土川遺跡	500	11/22	2/25
	B-2 a	L315	7ANWST	伏見区久我西出町 (正登)	南一条大路、東三坊 大路、東土川遺跡	1,000	9/6	2/25
	D-2 a	L314	7ANWSS-4	伏見区久我西出町 (下り長)	左京二条三坊十五町 東土川遺跡	400	8/2	10/28
	小計					3,100	m ²	
工区	地区名	回数	調査記号	所在地(字名)	推定遺構(遺跡)	調査面積	開始	終了
下 植 野	C-4 c	R428	7ANTTD-4	大山崎町下植野 (寺門)	右京九条二坊 下植野南遺跡	500	10/18	1/19
	C-5 a	R428	7ANTGT-4	大山崎町下植野 (五条本)	右京九条二坊 下植野南遺跡	600	4/7	6/29
	C-5 b	R428	7ANTGT-4	大山崎町下植野 (五条本)	右京九条二坊 下植野南遺跡	500	12/6	3/4
小計					1,600	m ²		
合計					9,495	m ²		



第1図 調査地区位置図(長岡京全体図)

今年度の調査対象地は、長岡京の条坊復原によると、左京では、二条三坊十五町、同四坊一町、南一条四坊四～六・十・十一・十五町にあたり、右京では、九条二坊三～五町が想定される地点である。

このうち、京都工区は、長岡京跡左京第286・304・313・317次調査、桂川PA工区は、長岡京跡左京第303・314・315次調査として、また下植野工区は、右京第428次調査として調査を実施した。

検出した遺構の番号は、各地区ごとの連番とした。現地の発掘調査は、平成5年4月7日～平成6年3月4日を要し、調査面積は、延べ約9,495㎡となった。本年度については、次年度以降の新規調査地における試掘調査や次年度への繰り越し調査を行わなかったため、全体としての調査面積は10,000㎡以内に留まった。本調査にかかわる経費は、日本道路公団大阪建設局が負担した。

調査には、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第4係長平良泰久、同主任調査員戸原和人、同調査員竹井治雄・石尾政信・岩松保・中川和哉・鍋田勇、後半の調査で、調査第3係調査員岸岡貴英をあてた。本書の執筆については、1. 京都工区を竹井・石尾・鍋田・岸岡・小島、2. PA工区を竹井・中川、3. 下植野工区を戸原・岩松が担当した。

調査を実施するにあたっては、日本道路公団、大山崎町教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、向日市教育委員会、(財)向日市埋蔵文化財センター、(財)京都市埋蔵文化財研究所などの関係各機関をはじめ、各大学の学生諸氏の協力を^(注6)得た。

(戸原和人)

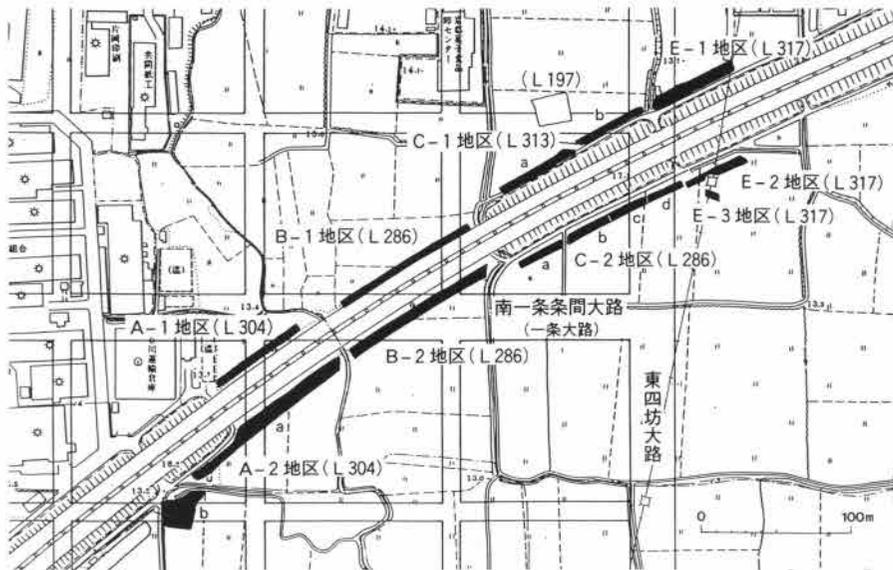
(1) 長岡京跡左京第286・304・313・317次 京都工区
(7ANWSA-2・3、VNR、WSG地区)

1. はじめに

京都工区での調査は、2年目にあたり本年度で全調査を終了した。調査地は、京都市南区久世東土川町長丸と同伏見区久我本町三ノ坪及びサイギに所在する名神高速道路の拡幅予定地内である。長岡京の条坊復原によれば、左京南一条四坊五・六・十・十一・十五町(平城京型復原による)に推定され、南北道路では、東四坊坊間小路と東四坊第二小路、東四坊大路にあたる。条坊の東西道路では、南一条第一・第二小路と南一条条間大路などの条坊が想定される地点である。また、縄文時代から奈良時代にかけての東土川遺跡が調査地の西寄りまで広がっており、関連遺構の検出が予想された。

調査は、用地の買い上げや調査地内の残土処分、周辺農地への水利問題などで当初の予定より遅れることとなったが、条坊側溝の検出や縄文時代後期初頭の一括資料、弥生時代中期の一括資料の出土など、数多くの成果を収めることができた。これらの縄文・弥生時代の遺跡は、旧羽束師川左岸地域では初出であり、今後この地では新規の遺跡として周知しなければならないと考える。

(戸原和人)



第2図 京都工区 調査トレンチ配置図

2. 調査概要

①A-1地区(第3図、図版第1)

(1)調査概要

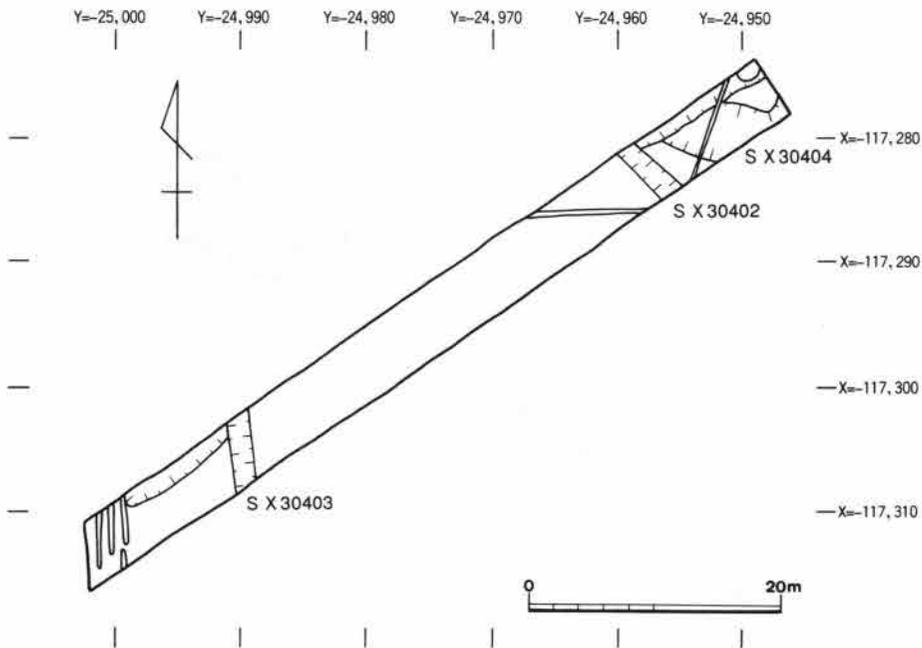
A-1地区は、東四坊坊間小路の検出を目的とした調査区である。

図示したS X 30402・30403は近世・現代の溝である。S X 30404は、流路の最上層のよどみの跡である。全体が流路跡である。

トレンチ全域の流路の堆積状況は大きく4層に分かれる。層序は、①灰褐色粘質土、②青灰色粘質土、③黄灰色砂礫の順である。①は、厚さ0.4m、瓦器が含まれる。泥土化しているものの、砂質が含まれていることから水田より畑地と考えられる。②は、厚さ0.2~0.3m、瓦器が含まれる。土質は粘性が強く自然堆積に近く、陸化しているが水田が営まれた形跡はない。③は、厚さ0.6m以上、瓦器・須恵器・土師器・弥生土器などが含まれる。上位は砂質、下位は砂礫がラミナ状を呈し、氾濫による自然堆積と考えられる。礫の長軸方向は、おおむね南北方向である。

(2)小結

調査地全域が流路内であることから、流路幅を見出せなかった。流路の最終的な埋没時期は中世に求められるが、平安時代頃の砂礫の堆積後はしばらく湿地の様相を呈し、水田、畑地は営まれず、中世にいたって初めて農地として利用された。特筆できる遺物としては、



第3図 A-1地区 遺構平面図

弥生時代の銅剣形磨製石剣の一部が出土している。この遺物は、PA工区B-1a地区でも出土しており、この地周辺に弥生時代遺跡の存在をうかがわせる。

(竹井治雄)

②A-2a地区

(1)調査の経過と基本層序

調査は、地表下約1mまでを機械掘削し、その後は人力による掘削を行い、上層遺構面を検出した。その後、トレンチの北西と南東両端の断ち割り溝から奈良時代から平安時代にかけての遺物が多数出土したため、東西方向に幅約50cmの試掘断ち割り溝を設定し、層の厚さを確認した。さらに、約50~60cmを機械掘削したのち、人力による掘削を行い、下層遺構面を検出した。最後に機械掘削と人力掘削により、長岡京期の遺物を含む旧河道の堆積層の底面まで掘り下げ調査を終了した。

基本層序は、大きく8層に分けられる。第1層は、盛り土層と、灰色粘砂質土層で鉄分の集積が多く見られる近世~現代の水田土壌からなる。第2層は、中世以降の包含層である。これらは、ほぼ水平に堆積しており、かつラミナ状を呈する間層などを含まない点から考えて、湿地状の堆積を呈していたと考えられる。この第2層中から上層遺構群を検出した。第3層は、SR304103・304104の堆積層である。第4層以降は、A-2a地区全体が旧羽東師川の埋没旧河道にあたる。第4層は、SR304105の堆積層である。出土遺物から鎌倉時代から室町時代頃の堆積と考えられる。第5層は、遺物を含まない拳大礫の堆積層である。時期は不明である。ただ、礫層自体は比較的固く締まっていたため、堆積時期は古くなる可能性が高い。第6層は、SR304106の堆積層である。奈良時代から鎌倉時代頃の堆積と考えられる。第7層は、SR304107の堆積層である。弥生時代中期から古墳時代後期頃の堆積と考えられる。第8層は、弥生時代前期以前の堆積と考えられる。

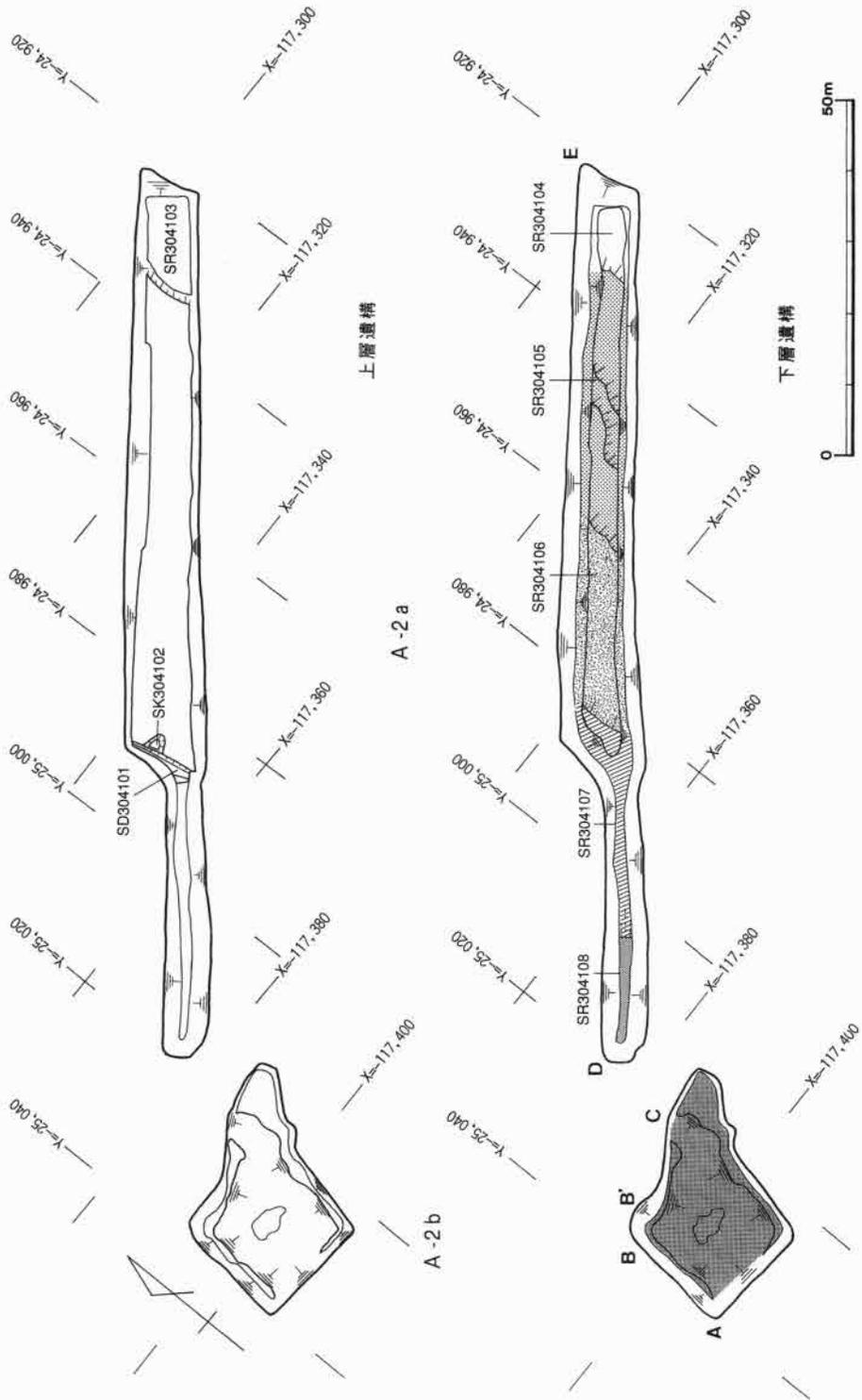
(2)検出遺構

a. 近世 上層遺構面において、旧河道、土坑、溝を検出した。

溝SD304101 南北方向の溝である。東肩のみ検出した。底面は船底状を呈する。深さは約10cm、検出長は約10mを測る。遺物が出土していないため不明であるが、近世以降のものと思われる。

土坑SK304102 東西に方位をとる楕円形の土坑である。西側がSD304101に切られている。規模は、2.5m×2.5m(検出長)・深さ約10cmを測る。底面は皿状を呈する。遺物が出土していないため不明であるが、近世以降のものと思われる。

旧河道SR304103 A-2a地区の東端で自然流路の西肩部を検出した。この肩部に沿



第4図 京都工区 A-2地区遺構平面図

うかたちで杭列を検出したことから、なんらかの簡便な護岸施設があったと考えられる。埋土中(第5図3 a)からは瓦器片が数点出土している。出土遺物から13世紀末から14世紀初頭頃に埋没時期が想定される。

b. 弥生～中世 下層遺構面において、旧羽束師川水系の旧河道を調査区全面から検出した。調査区内の各地点により、堆積層の状況及び時期に差がある。

旧河道 S R304104 A-2 a 地区の東端で検出した旧河道の堆積層である。河道の西肩部のみを検出した。堆積層(第5図3 b)は、粗砂と礫の互層状態からなる。堆積土中からは、弥生土器に加えて、12世紀の瓦器碗の破片が出土しており、埋没した時期をそこに想定することができる。

旧河道 S R304105 A-2 a 地区の東半分に広がる旧河道の堆積層である。堆積土は、大きく3層に分けられるが、基本的に砂、礫、シルトの互層状態からなる。出土遺物には、弥生土器・瓦器片などがみられる。

旧河道 S R304106 A-2 a 地区の中央部分に広がる旧河道の堆積層である。埋土は、大きく7層に分けられるが、基本的に礫、砂、シルトの互層状態からなる。出土遺物には、石器(石庖丁、環状石斧)、弥生土器、土師器、須恵器(墨書土器を含む)、黒色土器、灰釉陶器など、弥生時代から鎌倉時代のはじめまでの多種多様な遺物が含まれる。中でも、長岡京期の祭祀関係の遺物(土馬、ミニチュアカマド、墨書人面土器、木製人形)が多くみられる。

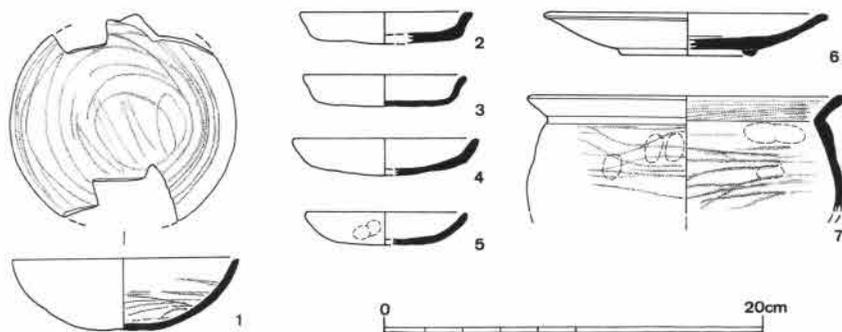
旧河道 S R304107 A-2 a 地区の西半分に広がる旧河道の堆積層である。堆積層は5層に分かれる。下層は、拳大の礫が主体で、上層になるほど砂・シルトが主体となる。出土遺物は、弥生時代中期の土器から古墳時代後期の須恵器・土師器が見られる。

旧河道 S R304108 A-2 a 地区西端からA-2 b 地区全面に広がる旧河道の堆積層である。出土遺物はないが、層位関係から弥生時代前期以前の堆積と考えられる。

(3) 出土遺物

出土した遺物は、コンテナ計50箱になる。最も多く出土した堆積層はS R304106であり、中でも長岡京期の遺物群が最も多い。以下、主な遺物のみを抽出し図化した。

1は、底面にわずかに形骸化した高台をもつ瓦器碗である。口径12cm・器高3.6cmを測る。口縁部内面には粗いヘラミガキが見られる。2～5は、土師器小皿である。2は、口径9.2cm・器高1.6cmを測るやや厚手のものである。口縁部には強いヨコナデが見られる。色調は淡燈灰色を呈する。3は、口径8.6cm・器高1.6cmを測るやや薄手のものである。口縁部には強いヨコナデが見られる。色調は淡褐色を呈する。4は、口径10.0cm・器高2.0cmを測る。色調は淡灰色を呈する。5は、口径8.4cm・器高2.0cmを測る。色調は淡灰

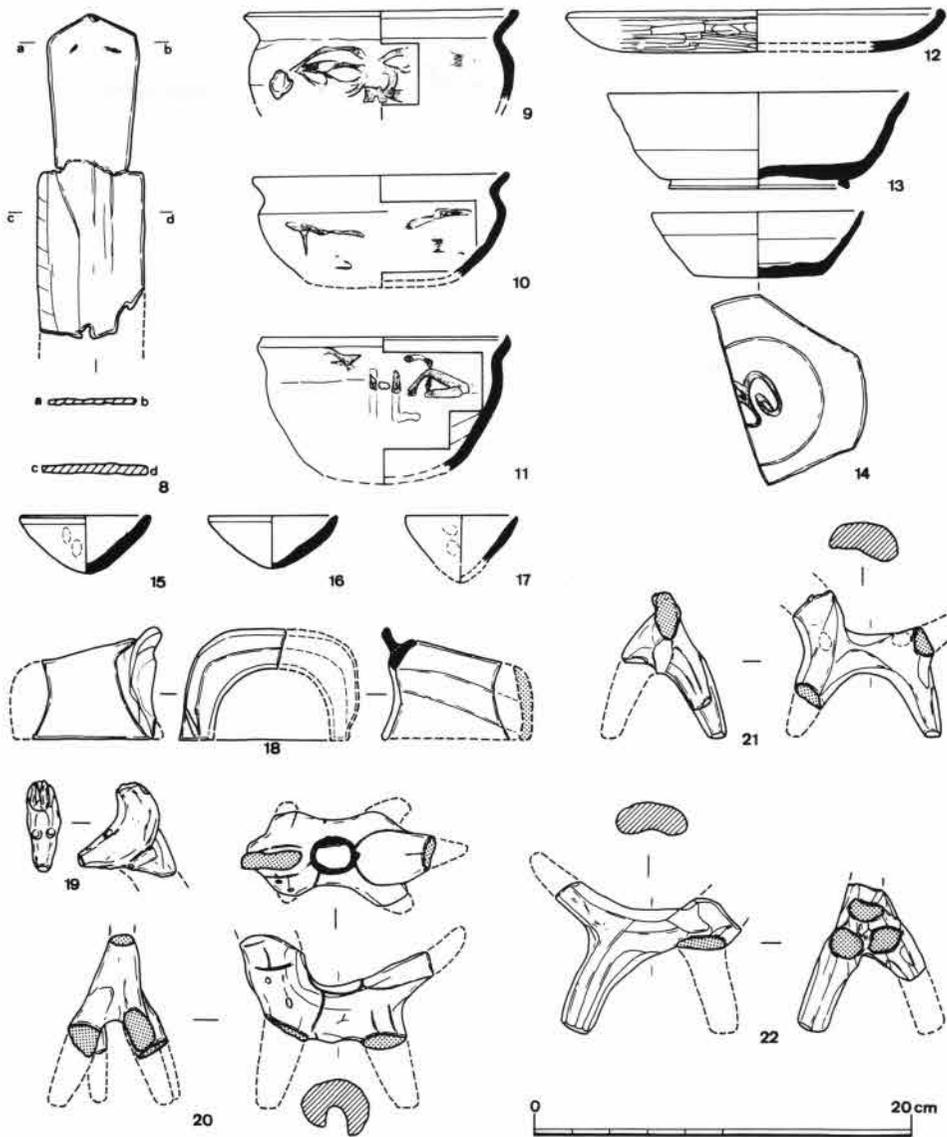


第6図 京都工区A-2地区 出土遺物実測図(1)
1. S R304103 2~4・7. S R304106 5・6. S R104105

色を呈する。6は、灰釉陶器の皿である。内面にのみ釉がみられる。7は、黒色土器の甕で、内外面とも黒色化している。口縁部は体部上端から「く」の字状に外上方に折れ曲がり短く開き、端部は尖り気味に収める。内外面とも横方向の粗いミガキが見られる。

8は、祭祀具(人形)である。下半部を欠損している。9~11は、墨書人面土師器壺Bである。どれも破片資料であるため、人面的一部分しかみることはできない。色調は、10・11が淡灰褐色、9が淡褐色を呈する。胎土は密で、ほとんど砂粒が目立つことはない。焼成は良好である。12は、土師器皿Aである。口径19.6cm・器高2.0cmを測る。体部外面下半にまで、c手法が及ぶ。胎土は密で、雲母や赤色粒などが含まれる。焼成は良好で、内外面とも褐色を呈する。13は、須恵器杯Bである。口径15.5cm・器高5.2cmを測る。高台は外端面で設置する。14は、口径12.3cm・器高3.9cmを測る須恵器杯Aである。底部外面には墨書が見られる。15~18は、ミニチュアカマドである。いずれも完形ではない。15~17は、鍋形態のものである。15・17は、外面に指頭圧痕を残す。19~22は、土馬である。すべて欠損しており、完形の資料ではない。20は、墨書で馬具を描いた資料である。墨線によって、鞍、面繫、胸繫、尻繫などを表したと思われる。

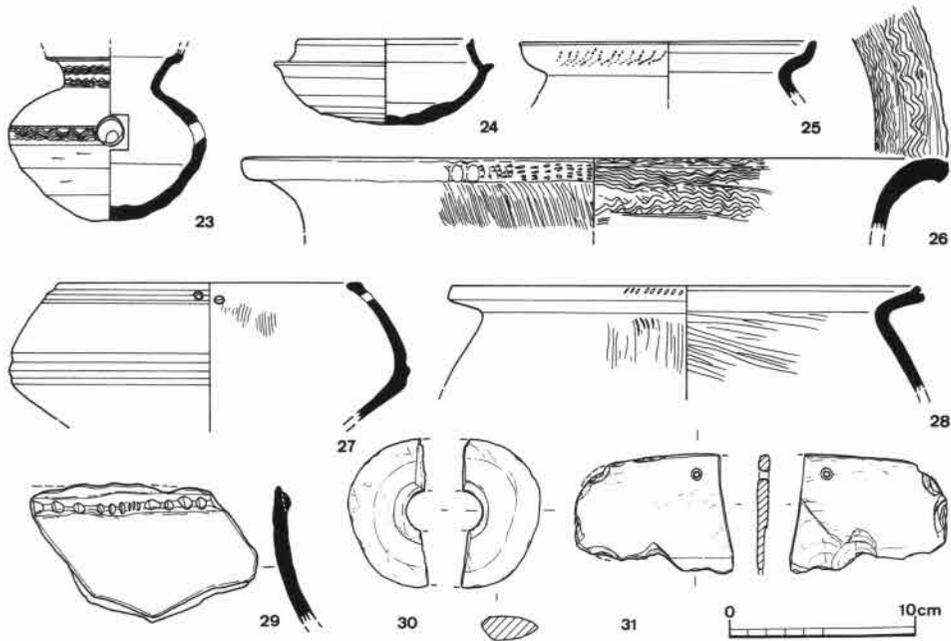
23は、須恵器甕である。頸部と体部中央に見られる波状文は、ともに削りやナデにより失われている。陶邑編年のTK23~TK47に併行すると思われる。24は、須恵器の杯身である。口径は9.0cm、器高は4.6cmを測る。口縁端部には、内傾する段を持つ。陶邑編年のMT15に併行する土器と思われる。25~28は、弥生土器である。25は、受け口状を呈する口縁部を持つ甕である。端部は内傾しシャープに仕上げている。口縁部外面には列点文を施す。26は、如意形口縁を持つ甕である。口縁端部外面に刻みをもち、内面には櫛描き直線文と櫛描き波状文を交互に施している。外面調整には、斜め方向の粗いハケが見られる。外面は茶褐色、内面は暗灰色の色調を呈する。27は、口縁端部をやや内側に拡張させる無



第7図 京都工区A-2地区 出土遺物実測図(2) (すべてSR304106出土)

頸壺である。口縁部付近と体部中央にやや広い2条の凹線文を施す。石英、長石、雲母などの砂粒が目立つ土器である。28は、「く」の字状口縁を呈する甕である。口縁端部は強いヨコナデによりつまみ上げられている。体部は内外面とも「ハケ」調整を施す。29は、口縁部外面にヘラによる刻目突帯文を持つ縄文土器の深鉢である。外面は淡灰褐色、内面は暗灰色を呈し、1~2mm大の石英・長石などの砂粒を多く含む土器である。滋賀里IV式から口酒井期に相当すると思われる。

30は、閃緑~ハンレイ岩製の環状石斧である。刃部には使用によると考えられる剝離痕



第8図 京都工区A-2地区 出土遺物実測図(3) (すべてS R304107出土)

が見られる。31は、頁岩製の石庖丁である。刃部の欠損が激しい。

(4)まとめ

長岡京域の条坊を従来の平城京型で復原した場合、推定東四坊坊間小路にあたる調査区であった。調査の結果、旧羽東師川の埋没旧河道が検出され、小路にかかわる遺構は検出されなかった。この旧河道は、西から東にかけて堆積時期が新しくなるため、弥生時代から鎌倉時代にかけて、漸移的に河道が移行していったことがうかがえる。その後、A-2 a地区全体が沼地化し、河道の本流はさらに東に移ったと想定できる。この沼地化した時期については、S R304103肩部出土の(第6図1)の瓦器椀から、室町時代の初頭に上限を求めることができる。室町時代以降は、わずかに溝や土坑がつくられ、その後は水田化したと思われる。

また、奈良時代から鎌倉時代まで機能していたと考えられるS R304106からは、長岡京期の祭祀遺物が多数出土しており、人面土器祭祀、土馬祭祀、カマド祭祀などの多くの祭祀がこの場所で行われたことが想定される。このような状況は、長岡京左京七条二・三坊跡で検出された自然河川でも見られ、祭祀関係遺物の量的な比較を、今後の整理・検討課題としたい。

③A-2b地区

(1)調査の経過と基本層序

調査は、遺構の状況をみながら、地表下約4.5mの地点まで重機による掘り下げを行った。途中、大きな流木を数本検出したが、顕著な遺構遺物などは検出されなかった。その後、土層の状況を確認して調査を終了した。

基本層序は、大きく2層に分かれる。第1層(第5図第1層)は、近世以降の耕土層である。この層からは陶磁器片がわずかに出土している。第2層(第5図第8層)は、拳大の礫層が主体で砂層やシルト層を間層にもつ堆積層である。これは、厚さ3m以上に達する。

(2)小結

長岡京域の条坊を従来の平城京型復原で復原した場合、推定南一条第二小路が検出できる調査区であった。しかし、調査区全体が旧羽東師川水系の埋没旧河道にあたり、小路にかかわる遺構は検出されなかった。この旧河道は、A-2a地区の状況から考えて、弥生時代前期以前の堆積層と考えられる。

(岸岡貴英)

④B-1地区

(1)はじめに

調査地は、長岡京跡南一条四坊十町に推定され、東四坊第二小路と南一条条間大路の検出が想定された。また、東土川遺跡にあたる。検出された遺構は、溝・柵列・土坑・流路などがあり、縄文時代から中世の複合遺跡である。

(2)調査概要

素掘り溝群 幅0.2~0.4m・深さ0.3mを測る。断面は「U」字形を呈し、堆積土は淡灰色粘質土である。2~4本が重複し、S D28603付近は3本の溝によって東四坊第二小路が潰されている。最も古い溝は平安時代のもので、溝の間隔は5.4mを測る。

溝S D28603 前述の素掘り溝群によって破壊された第二小路の残欠が淡灰色粘質土層としてわずかに残る。ここに長岡京期の須恵器・土師器の破片が遺存していた。

柵列跡S A28601 2間以上の南北方向の柵列跡である。柱間寸法は1.8m(6尺)等間である。柱掘形は、方形を呈し一辺0.4mである。直径10cmの柱痕があった。

溝S D28601 幅1.2m・深さ0.5mを測る北西から南東方向に流れる溝である。断面は「U」字形を呈し、堆積土層は茶褐色粘質土、下層では青灰色粘質土である。出土遺物は須恵器と混じって縄文土器がある。

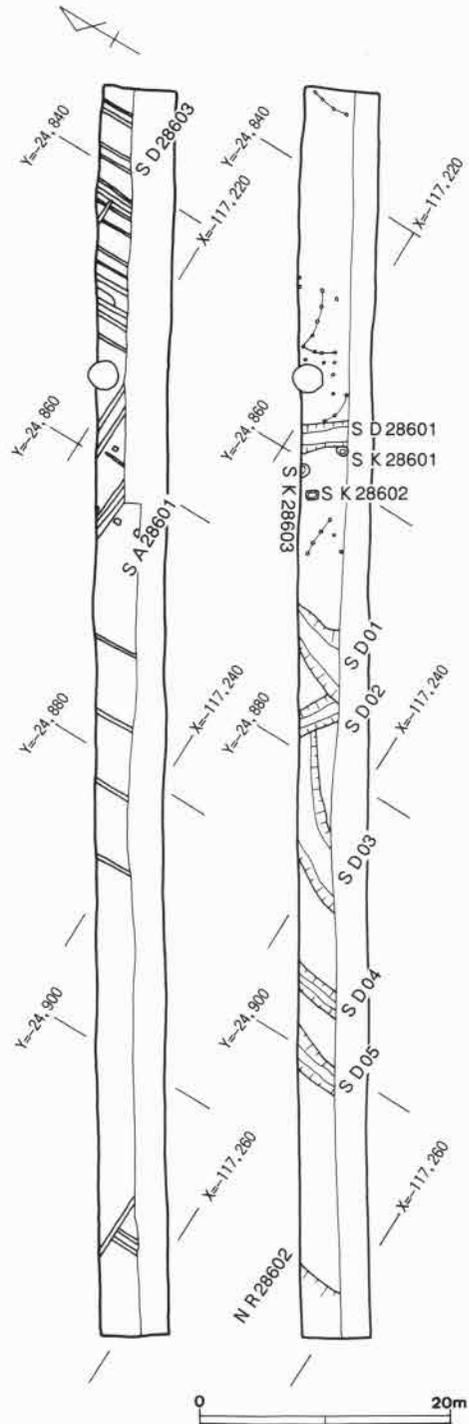
流路N R28602 トレンチ西端で西へ落ち込む流路跡である。堆積土は、灰色砂質、粘

土が互層をなし、植物遺体が多く含まれる。

流路跡 S D01とS D05との間は幅約30m・深さ0.8~1.2mの流路跡である。堆積土は、上層では灰褐色粘質土、中層では暗灰褐色粘質土、下層は黒褐色粘質土である。上層は、流路が埋没する最終段階のもので湿地から陸化が進み、さらに水田が営まれた。下層は、全くの湿地を呈している。S D01~S D05は、この流路の河床を示すものであるが、古墳・弥生時代において渇水期には独立して流れていた。S D01は、灰色粘質土、砂層などが堆積しており、北から南方向へ流れる。S D02は、S D01に直交しており、堰によって01と連結する。堰は、幅0.3m・長さ約2mの板材を多数の杭でS D01に平行して設置している。その付近はよどんでいたらしく、植物遺体が密集していた。S D03~S D05は、幅1.2~2.0m・深さ0.4mを測り、ほぼ北から南方向を示し、流路全体の方向と一致する。出土遺物には、S D01・S D02では弥生土器が、またS D03では古墳時代の土師器がある。

縄文時代の遺構 検出された遺構は、土坑S K 28601・02・03、焼土痕、小ピット列などがある。これらはトレンチ東半部の微高地上に位置し、縄文土器を含む黄褐色土及び茶褐色土を除去した暗茶褐色土(無遺物層)上面から検出されたものである。

土坑S K 28601 全体は不明であるが、



第9図 京都工区B-1地区 遺構平面図

方形であると思われる。断面は逆台形を呈し、深さ0.3mを測る。堆積土は焼土、炭化物が混在した茶褐色土である。基底には薄い暗褐色土がある。遺物は、縄文時代後期の深鉢の一部が出土した。

土坑S K 28602 方形を呈し、長辺1m・短辺0.8m・深さ0.4mを測る。断面は方形を呈し、底部は平坦である。堆積土は淡黄褐色土(焼土・炭化物混じり)、基底部では青灰色粘質土である。遺物は、土器の細片が少量出土した。

土坑S K 28603 トレンチ北壁付近にあって全体は不明であるが、隅丸方形を呈している。断面は袋状に広がり、底部はほぼ平坦である。堆積土はS K 02に似ており、茶褐色土も混じる。遺物は、縄文土器片が少量出土した。

焼土痕は赤褐色を呈し、厚さ1～3cmを測る。火を受けた痕跡がある。S D 01以東の微高上に7か所点在し、前述の土坑付近にもあるため、セット関係でとらえることができる。

小ピット列は4～5個の小柱穴が「コ」字状に列をなしている。ピットの大きさは10～15cm・深さ10cmを測り、埋土は焼土・炭化物を含む黄褐色である。

縄文土器の分布は、S X 28601の両側に集中しており、ほぼ同一レベルで土器片の内面を上方に向けて人為的な集積遺構があった。

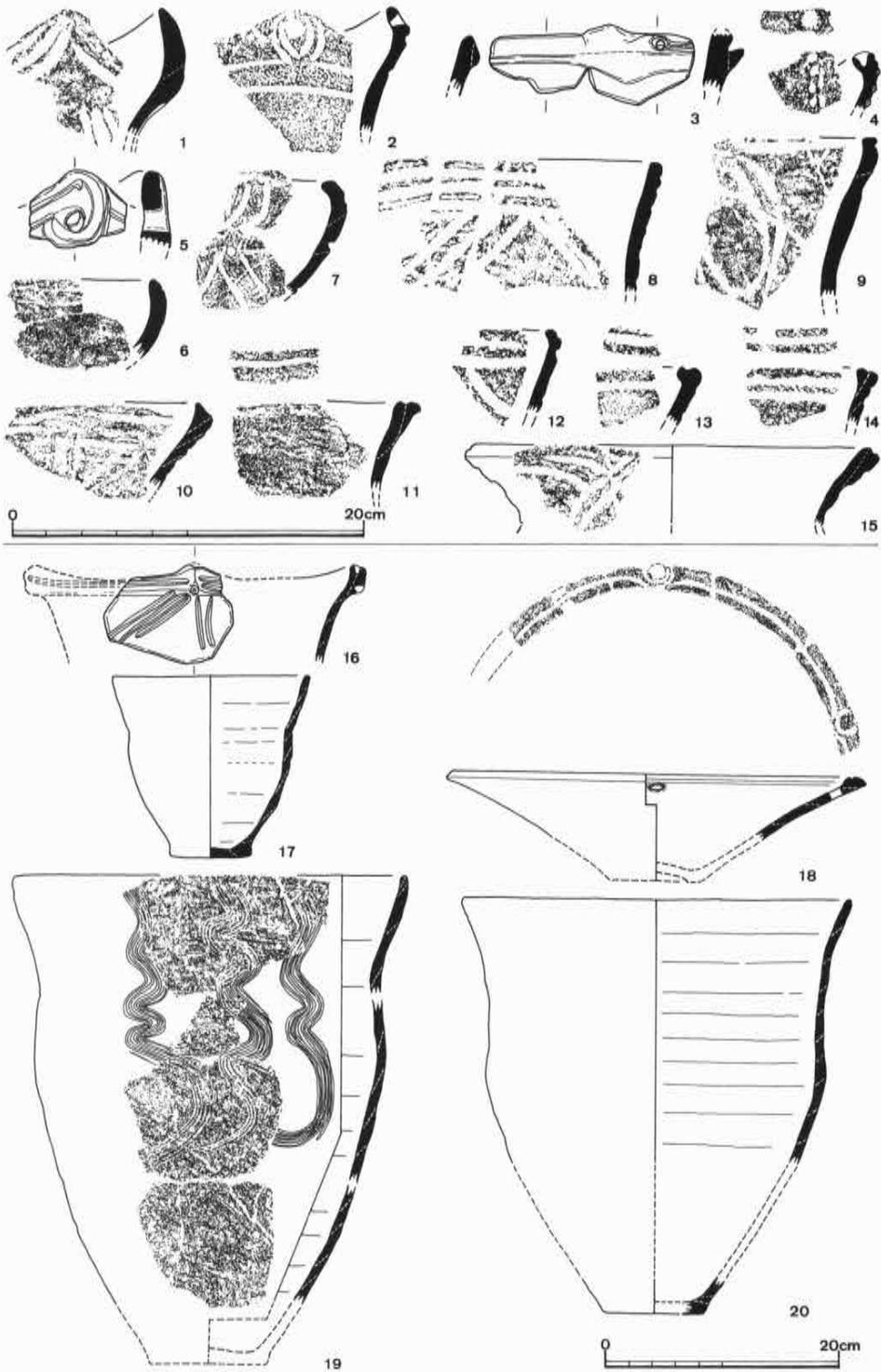
(竹井治雄)

(3)出土遺物

縄文土器 土坑S K 28601・S K 28602・S K 28603及び包含層から、縄文時代後期前半の土器群がコンテナ20箱ほど出土した。中津Ⅱ式から「四ツ池式」にわたる比較的まとまった資料である。今回は、そのうちの整理が終わったものの一部について述べる。なお、これらの資料は一様に器面の磨滅・剝離が激しく、調整をはっきりと確認できないものが多いことを断っておく。^(注7)

①波状口縁の口縁波頂部であり、明褐色を呈する。くびれ部から、やや内傾気味に立ち上がる。口縁に沿って3条の幅約4mmの沈線が、突出部の下に数条の幅約3mmの沈線が引かれる。ナデによる調整が、器面の内面・外面ともに見られる。胎土には、石英・長石・角閃石・金雲母の砂粒が見られ、長石粒には径3mm程度の比較的大きいものも見られる。生駒山西麓産のものと思われる。

②波状口縁の口縁波頂部であり、淡黄色と黒色を呈するものが各1点出土している。くびれ部から、外傾して立ち上がり、端部は内傾する。波頂部には貫通孔がみられ、そのまわりを二重に幅約3mmの沈線が囲む。口縁に沿って二条の沈線に区画された磨消縄文帯が一本あるが、器面の磨滅が激しく、縄文ははっきりと観察できない。胎土には、チャートなどの砂粒がみられる。



第10図 京都工区B-1地区 出土遺物実測図

③口縁部片で淡黄色を呈する。波状口縁の波頂部は、粘土帯の接合面ではがれて欠けており、わからない。粘土の張り付けにより肥厚部が作られ、波頂部の直下と推定されるところに穴があげられている。また、そこから横方向に沈線が引かれている。石英・長石などの砂粒が多く見られる。

④口縁部片で黒褐色を呈する。内傾しながら立ち上がり、端部は先細りとなる。波頂部には縦方向の穴が見られ、また外面には波頂部から縦方向に張り付けられた隆帯に、楕円形の刺突が約1cm間隔で並ぶ。焼成はややあまい。胎土には、長石粒が含まれている。

⑤口縁部片で明茶色を呈する。長径約1.2cmの卵形の穴が波頂部の中心にあり、その周りを囲むように「J」字形の隆帯が張り付けられている。また、口縁に平行に2条の幅約3mmの沈線がひかれている。胎土には、石英・長石粒が多く含まれている。

⑥濃灰色を呈する口縁部片であり、内湾している。口縁に平行に、幅約1.5mmの細い沈線が3条引かれている。胎土には、石英・長石などの砂粒が見られる。

⑦褐色を呈する口縁部片であり、内湾している。平行する2本の沈線間には、縄文が施文されていたと考えられるが、はっきりと観察できない。また、その区画内に2つの刺突があるが、貫通はしていない。胎土には、径1～3mm程度の長石粒が多く含まれている。

⑧深鉢の口縁部片で、濃灰色を呈する。外湾ぎみに立ち上がり、端部には面が作られている。外面には、幅約4mmの沈線が口縁に平行に3条引かれ、その最も下のものから再び同様の3条の沈線が斜め方向に引かれる。内面には、横方向のナデ調整が観察できる。

⑨深鉢の口縁部片で、淡黄色を呈する。外傾して立ち上がり、端部はほぼ垂直となる。その端部には間隔を置いてケズリ込みが入り、その直下には1条の沈線が引かれる。また、器面には2条のほぼ平行する沈線が、弧を描いて施文される。胎土には、砂粒はあまり観察できないが、比較的長石が多い。

⑩口縁部片で、褐色を呈する。かなり外傾して立ち上がり、内側へ先細りの端部がつく。外面には、3～4条の幅約3mmの沈線が口縁に平行に描かれている。胎土には、石英・長石・雲母などの砂粒を多く含む。

⑪口縁部片で、褐色を呈する。外傾して立ち上がり、幅広の端部には幅約4mmの沈線が1条引かれる。文様は他にはないが、内・外面ともに横方向の調整が観察できる。胎土には、細かい砂粒が多数含まれている。

⑫口縁部片で、明茶色を呈する。外傾して立ち上がり、端部は内側に向けて作られている。端部に1条とその直下に1条、幅約4mmの沈線が引かれ、その他に斜め方向の沈線も引かれている。焼成はあまい。胎土には、長石粒が多く含まれる。

⑬口縁部片で、淡灰色を呈する。端部に1条、口縁直下に1条、それぞれ幅約5mmの沈

線がひかれる。胎土には、石英・チャート粒が多く観察できる。

⑭口縁部片で、外面は明茶色、内面は黒灰色を呈する。端部には縄文を施文した後、幅約3mmの沈線をその中央に引いている。口縁直下には2条の平行沈線に区画された磨消縄文が観察され、また内面にはケズリによる調整が見られる。胎土には、長石粒などが多少観察できる程度である。

⑮深鉢の口縁であり、端部における径は約22cmと推定される。赤褐色を呈する。2条の沈線を組み合わせた文様が描かれている。端部面には不明瞭ではあるが、1条の沈線が観察できる。外面には部分的に横方向のナデ調整が見られる。

⑯深鉢の波状口縁であり、明茶色を呈する。球形の胴部が一旦くびれた後、大きく広がる器形をとると思われる。波頂部には縦方向及び横方向の穴があげられるが、貫通はしていない。また、口縁に沿って幅約4mmの沈線が引かれる。器面には縦方向に2条、斜めに3条の沈線が描かれている。

以上のうち、1・2・4～7は中津Ⅱ式～福田KⅡ式に、それ以外は福田KⅡ式に比定できよう。

⑰小型の粗製深鉢であり、全体の3分の1あたりで一旦くびれている。40%ほど残存しているが、底部から口縁部まで残っており、器高は約20cm、最大径は口縁で約17cmとなる。内面にはくびれ部の上下7cmぐらいに、帯状に炭化物が付着しているのを観察することができる。焼成はややあまい。胎土には石英・長石・角閃石などを含み、褐色を呈した色調からも、生駒西麓産のものと考えられる。

⑱淡灰色を呈する浅鉢である。残存率は約20%であり、推定される器高は約10cm、口径は36cmである。文様は口縁部内面に見られる沈線文だけであり、途中4～5つの円が描かれる。また、肥厚部下に1か所、直径1.5cmの穴があげられている。内面には1部ケズリによる調整がみられる。胎土には、長石などの細かい砂粒を多く含んでいる。「四ツ池式」の所産と思われる。

⑲半粗製深鉢であり、残存率は約20%である。つなぎ合わせて推定復原したところ、器高は約42cm、最大径は口縁部で約34cmとなる。底部より30cm程度でくびれた後、外傾して広がる器形となる。端部には内側への折り返しが見られる。色調は、外面が褐色、内面が淡黄灰色を呈する。器面は、比較的状态よく残っている。口縁部から5～7条の櫛描き状平行沈線が、縦方向に弧を描きながら施文されている。また、外面では、口縁部付近で横方向の、胴部中央から下部で右下がり斜め方向の調整が、内面では横方向のナデ調整がみられる。胎土には、石英・長石・雲母などの砂粒が多く観察できる。

⑳粗製深鉢であり、残存率は約20%であるが、底部の一部が残っているため、ほぼ全形

を推定できる。器高は約36cm、口縁部下約8cmで一旦くびれ、大きく開いた口縁で最大径約34cmを測る。内面では横方向のナデ調整がみられる。胎土には径4mm程度の比較的大きな砂粒を含む。

以上の20点の資料のうち、1・3・7・13はS K28601土坑から、その他は包含層から出土している。このほかに、縄文時代の遺物として、偏平な礫石錘が5点出土している。

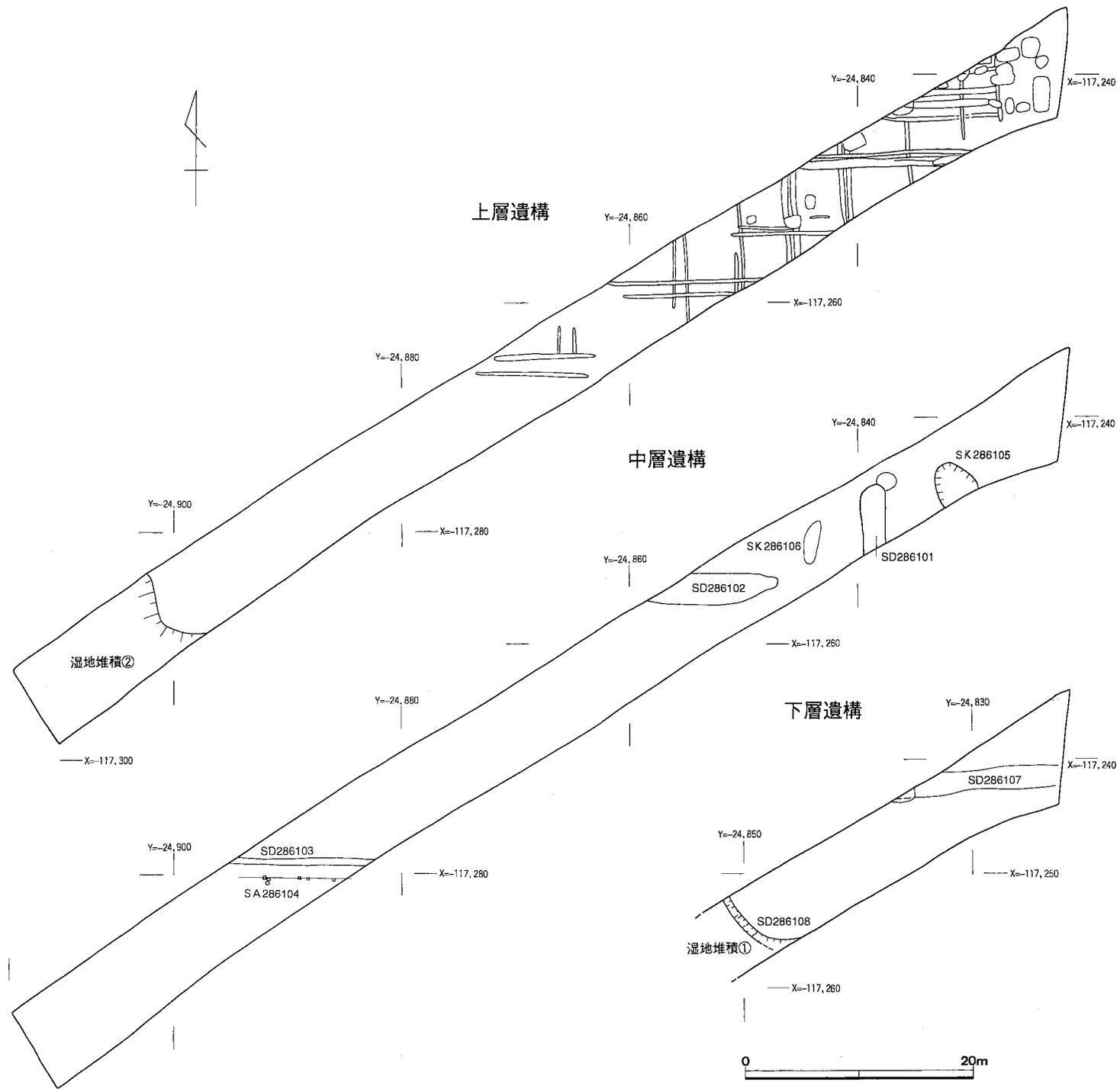
(小島孝修)

(4)小結

東四坊第二小路は、素掘り溝群にみられる長岡京以後の水田の営みによって破壊され、わずかにその残欠が検出されたにすぎない。

トレンチ内において、微高地と流路(湿地)の二つの異なった地理的環境は、さまざまな遺構が包蔵されるよい条件であった。標高11m前後の微高地では、縄文時代後期前半の遺物・遺構が存在し、石錘の出土などは漁撈を想起させるのは充分である。一方、西半の流路跡は、弥生時代には灌漑施設を造るなど、用水路として利用された。

(竹井治雄)



第11図 京都工区B-2地区 遺構平面図

⑤B-2地区(第11図 図版第11~13)

東四坊第二小路と南一条条間大路(新呼称では東四坊坊間東小路、一条大路)の検出を目的とした調査区である。

(1)調査概要

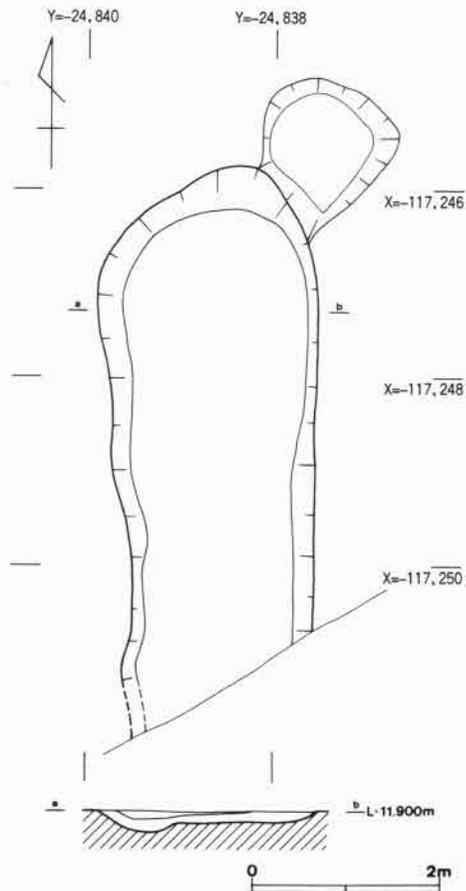
耕作土・床土の下に中世土器などを包含する淡灰褐色土・灰色土・黄灰色土があり、その下が黄褐色土・淡燈褐色土となる(北東部)。上層遺構として、中央より東方では、黄褐色土層を掘り込んだ素掘り溝群、溝より新しい土坑群が検出された。土坑は、方形・長方形・長円形で、最も深いものは約60cmあるが、20~30cmの深さのものが多い。土坑は、埋土が淡黄灰色~暗灰色土で、わずかに土師器細片が出土するが、埋没時期がわかるものではない。素掘り溝群は、東西方向の溝が南北方向の溝より新しい。これらの溝は幅20~70cmを測り、深さ10~20cmのものが多い。溝は、東端の一部を除いて2条が一对となり、ほぼ4m前後に並んでいる。溝からは土師器・瓦器が出土することから、中世以降の水田耕作に関わるものと考えられる。溝群は、標高約12.1~11.8mで検出される。トレンチ西端では瓦器片を含む灰色~暗灰色土層が厚く堆積し、その中に植物遺体と考えられる有機物を含むので、中世頃まで湿地であったと推測される(湿地堆積②)。

中層遺構としては、長岡京期の土器が出土する南北溝(S D286101)、東西溝(S D286102・286103)、溝とほぼ平行する柵列(S A286104)や、溝S D286101と似た埋土の土坑(S K286105)、炭を含んだ土坑(S K286106)が検出された。

下層遺構では、古墳時代後期の土器が出土する南北方向の溝(S D286107)、弥生土器片が出土する溝(S D286108)が検出された。以下、主要な遺構・遺物を記述する。

(2)検出遺構(第12・13図)

溝S D286101 溝の幅は1.9~2.3m、検出面からの深さ10~20cmを測る南北方向の



第12図 京都工区B-2地区
溝S D286101実測図

素掘り溝である。溝の北端は削平されたようにゆるやかな傾斜で消滅しており、長さ約5mにわたって検出した。溝の埋土は淡燈褐色・燈灰色土で、一部に炭が混入していた。溝の中心座標は、 $X = -117,250.0$ のとき $Y = -24,838.6$ となる。

溝 S D 286102 溝の幅は約2.8m、検出面からの深さ10cm前後を測る東西方向の素掘り溝である。溝の東端は、削平されたようすで、細くなり消滅している。長さ約11mにわたって検出した。溝は、灰色土で埋まり、長岡京期の土器・土馬片がわずかに出土した。溝の中心座標は、 $Y = -24,853.0$ のとき $X = -117,255.1$ となる。南肩は $X = -117,256.5$ となる。南一条条間大路(一条大路)の北側溝と推定される。

溝 S D 286103 溝の幅は0.5~0.7m、検出面からの深さ約10cmを測る東西方向の素掘り溝である。溝の埋土は、暗青灰・暗灰色土で、長岡京期の土器が少量出土した。溝の中心座標は、 $Y = -24,880.0$ のとき $X = -117,278.85$ となる。南一条条間大路(一条大路)の南側溝と推定される。

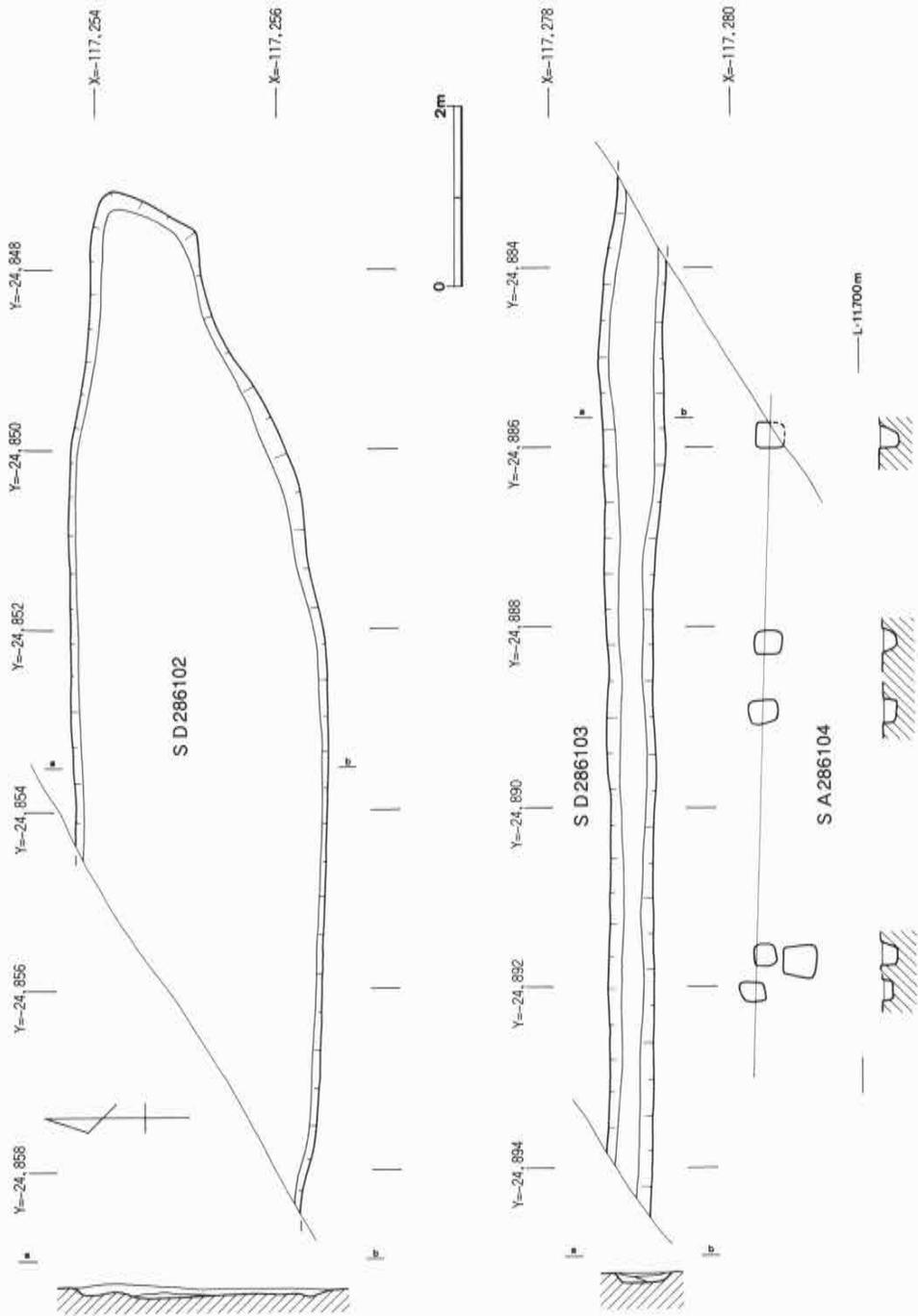
柵列跡 S A 286104 溝 S D 286104にはほぼ平行する柱穴が検出され、このうち柱間が約3mを測るものがあるので、これを柵列跡と推定した。柱穴は一辺20~30cmの隅丸方形で、暗青灰色土の埋土である。ここからは、土器が出土しなかった。

土坑 S K 286105 溝 S D 286101から東方約5mの地点で検出した直径約3.5m、中心部の深さ約15cmを測る半円形の土坑である。土坑から土器は出土していないが、S D 286101と似た燈灰色土の埋土であることから、長岡京廃都直後に埋まった可能性が高い。

土坑 S K 286106 溝 S D 286101の西方約4mの地点で検出した長さ約2.8m・幅約1.3mを測る長円形の土坑である。灰色・黄灰色の埋土に炭が多く混入していたが、土器は出土していない。埋まった時期は不明である。

溝 S D 286107 溝の幅1.6~1.8m、検出面からの深さ40cm前後を測る東西方向の素掘り溝である。溝の埋土は、上層が黄褐色土が混じる暗青灰色土、下層が青灰色土である。溝の底はゆるやかに東から西に傾斜しているが、砂などの堆積が認められず水路としての機能はなく、区画する溝と考えられる。溝からは、古墳時代後期の須恵器片などが出土した。

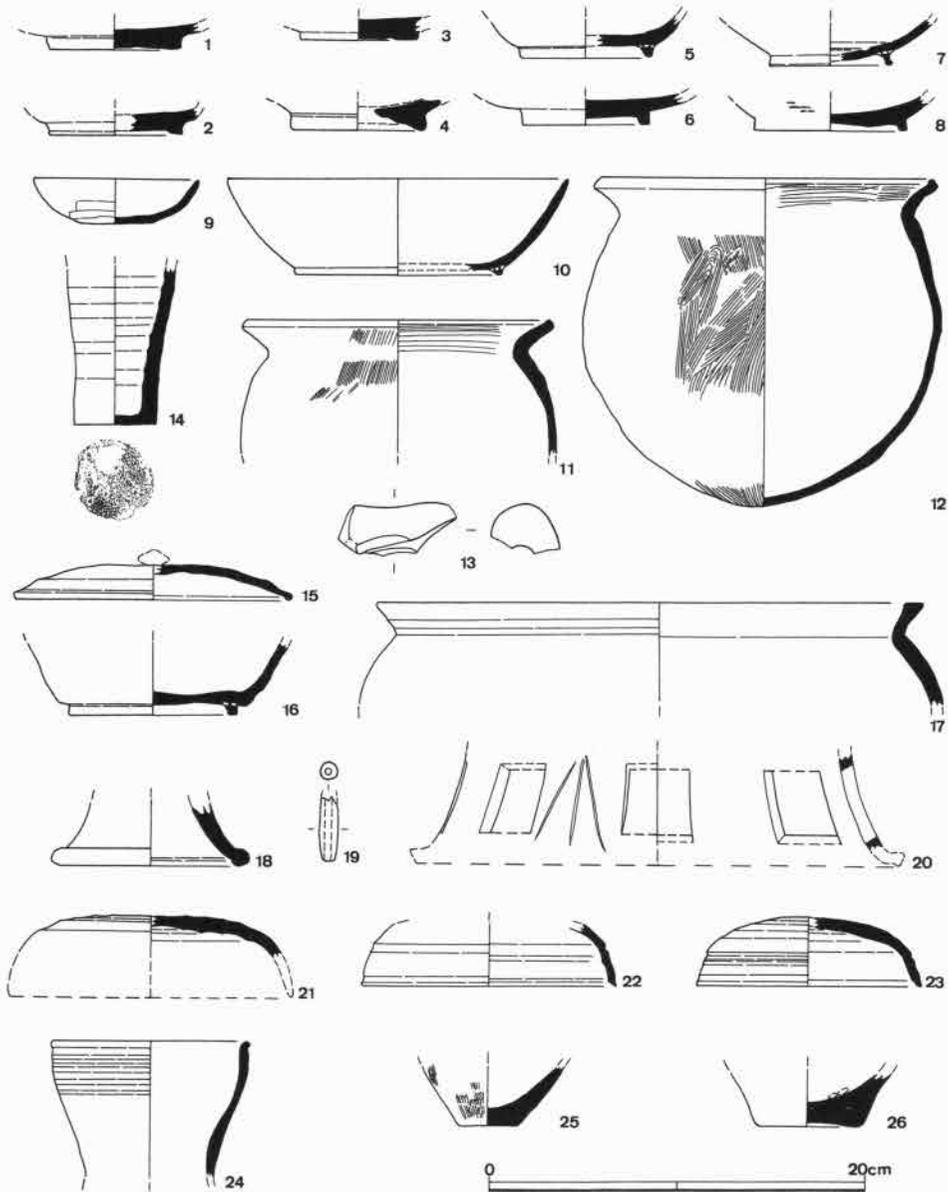
溝 S D 286108 溝 S D 286102の下層で検出した円弧状に曲がる素掘り溝である。溝の幅約50cm、検出面からの深さ10cm前後を測る。淡い褐色がかかった暗灰色土の埋土から、弥生土器片が1点出土した。溝から東側は、黄褐色・橙褐色土層で、微高地の先端部にあたり、この境界線に沿って溝が掘られている。そこから西側には、暗緑灰粘質土などが西下がり堆積し、S D 286103付近は1m前後の堆積があり、シルト層・砂層との互層となり流木もみられ、この堆積土層(湿地堆積①)にも弥生土器が混じる。こうしたことから、堆積土層は弥生時代以降に流路-湿地へと変遷したものと考えられる。



第13図 京都工区B-2地区 溝 S D 286102・S D 286103・欄列跡 S A 286104実測図

(3) 出土遺物(第14図)

前述した遺構・堆積層から出土した遺物のほかに、中世の溝々から瓦器・土師器など、包含層から瓦器・土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦片・古銭(腐蝕が進み、銭文が明瞭でないが元符通宝と推測できる)など、弥生時代～中世まで各時代の遺物が出土している。出土量が少なく、実測できた主なものは以下のとおりである。



第14図 京都工区B-2地区 出土遺物実測図

1～5・7・8は、中央より東方の包含層から出土した緑釉陶器である。5・7は、張り付け高台でほかは削り出し高台である。1は、底部内面にミガキが認められ、砂質の胎土は焼成がよく淡い黄灰色を呈し、内外面とも淡い黄緑色に発色した釉がかかる。底径は7cmを測る。2は、磨滅して外面に黄緑色の釉がわずかに残る。3は、内面にミガキが施され、焼成がよく淡灰色の胎土で内外面とも淡い黄緑色の釉がかかる。4は、剥離が著しく不明な点が多いが、淡灰色の精良な胎土で、内外面に淡緑茶色の釉がかかる。5は、精良な淡い橙灰色の軟質な胎土で、暗黄緑色の釉がかかる。7は、底部内面に凹線がめぐり、濃緑色の釉がかかる。淡灰色の精良な胎土で、口縁部外面はヘラケズリで、高台畳付以外の外面に淡緑色の釉がかかる。内面に焼き台を使用した痕跡をとどめる。8は、堅質で灰色の胎土で外面に暗緑色の釉がかかる。6は、堅質で青灰色の胎土の緑釉陶器素地である。削り出しの輪高台で底径6.6cmを測る。これらの陶器は、9世紀中～10世紀の所産であろう。7は、底部の特徴・濃緑色の釉からみて近江産、ほかは京都近郊のものと推定される。

9～17は、長岡京期の遺構から出土した遺物である。9・13～17はS D286101から、16はS D286102から、10～12はS D286103から出土した。9は、土師器の椀Aで外面にヘラケズリを行い、内面及び口縁上端はヨコナデする。復原口径8.7cm・器高2.4cmを測る。10は、土師器の杯Bで口縁外面のヘラミガキは磨滅して明瞭でない。11・12は、土師器の甕である。12は、ほぼ完形に復原できるもので、口縁端部を上につまみ上げ、口径18.3cm・器高17.5cmを測り、底部先端を除く外面と底部内面にススが付着している。13は、土馬の下半身で後脚を欠損する。14は、須恵器の壺Gの体部で、底径4.3cmを測る。15は須恵器の蓋、16は同杯B、17は同鉢Dである。

18～20・23は、包含層から出土した遺物である。18は、古墳時代後期の須恵器の高杯脚部で、外面が黒灰色、内面が灰色を呈する。19は、土師質の土錘である。20は、須恵器の円面硯脚部で、脚外面の中央上方から下方に向かって三条の線刻がある。焼成はよく、内外面とも灰色を呈し、胎土には石英などの砂粒を含む。23は、古墳時代後期の須恵器の蓋で、口縁端部は内傾しわずかに凹む。外面は黒灰色・内面は灰色を呈し、胎土に石英などの砂粒を含む。このほかに、長岡京期の土馬、弥生時代の石錘が出土している。

21・22は、溝S D286107から出土した須恵器の蓋である。22の口縁端部は、内傾しわずかに凹み、胎土に石英・黒色粒を含み、焼成はよく内外面とも灰色を呈する。須恵器編年(田辺氏)のTK10・MT85に併行するものであろう。

24・25は、溝S D286108から西側に堆積した粘質土・シルト層から出土した。26は、その上面で包含層から出土した。24は、口縁部に浅い五条の凹線をめぐらせた水差形土器で、復原口径10.4cmを測る。胎土に径4mmのチャート、石英や赤褐色粒などを含み、内外面と

も淡灰褐色を呈する。25は、底部外面にケズリの後ヘラミガキが施され、ススが付着するので甕と推定できる。胎土に石英、チャート、長石や黒色・褐色粒子を含む。26は、多量の石英、チャートなど2～4mmの砂粒を含む。底径5.6cmを測る壺の底部と推定できる。これらは、弥生時代中期(畿内第Ⅳ様式)のものであろう。

(4)小結

①北方約40mのB-1トレンチでは縄文土器がまとまって出土しているが、ここでは発見されなかった。B-2トレンチは東側が微高地となり、西にゆるやかに傾斜する地形で弥生時代には調査地の約3分の2に湿地堆積①が形成されたことが判明した。その湿地と微高地の境界に溝S D28108が造られ、集落などとの区画がなされたのであろう。東土川遺跡に関連するものと推定される。

②長岡京期には、湿地堆積①の上に南一条大路(新呼称一条大路)が造られた。今回の調査で遺存状況のよくない大路の両側溝を検出した。南北両側溝の溝心間は23.75mを測り、大路幅を有していた。左京第118次調査で検出された南北両側溝の国土座標と比較すると、北側溝S D286102が北へ約2m、南側溝S D286103が北へ約1mずれていることが判明した。左京第118次調査地との距離からみてほぼ正確に大路が施工されていたことがわかる。

溝S D286101は、左京第174次調査で検出された東四坊坊間小路西側溝(新呼称東四坊坊間東小路)S D102、東側溝S D103と比較すると、西側溝の可能性があり、S D286101の中心から約9mの位置が南一条大路(新呼称一条大路)の北側溝S D286102が途切れたところにあたり、そこに西側溝が想定されることや、推定条坊計画線から考えると東側溝の可能性がより高い。一方の側溝しか検出されていないので断定はできないが、今は東側溝と考えている。

③長岡京廃都後では、平安時代の緑釉陶器などの遺物が良好な状態で出土するので、同時代の明瞭な遺構は検出されていないものの、周辺に平安時代の遺跡があったと推測できる。中世には湿地堆積②に流路、それ以外は耕作地となっていたことがわかる。耕作に伴う小溝が整然と並んで検出された。

(石尾政信)

⑥C-1地区(7ANWSA-3地区)

(1)調査経過と基本層位

C-1地区は、南一条第一小路(新条坊名=一条条間南小路)及び左京南一条四坊十五町(同一条四坊十三町)にあたり、長岡京跡左京第197次調査地^(注8)の南側に近接した位置にある。

今回の調査では、調査地区の中央を東西に流れる用水路を挟んで西側をaトレンチ、東側をbトレンチとした。bトレンチは、北側のマンションと南側の用水路の間に位置するため、安全対策と調査面積確保のためトレンチの周囲全面にシートパイルを打ち込み調査を実施した。調査は、第3層までを機械掘削し、その後人力による掘削を行った。aトレンチは、bトレンチよりも遅れて調査を開始した。ここは、現代の攪乱・盛り土が著しく、第3層と一部第4層まで機械掘削を行った。

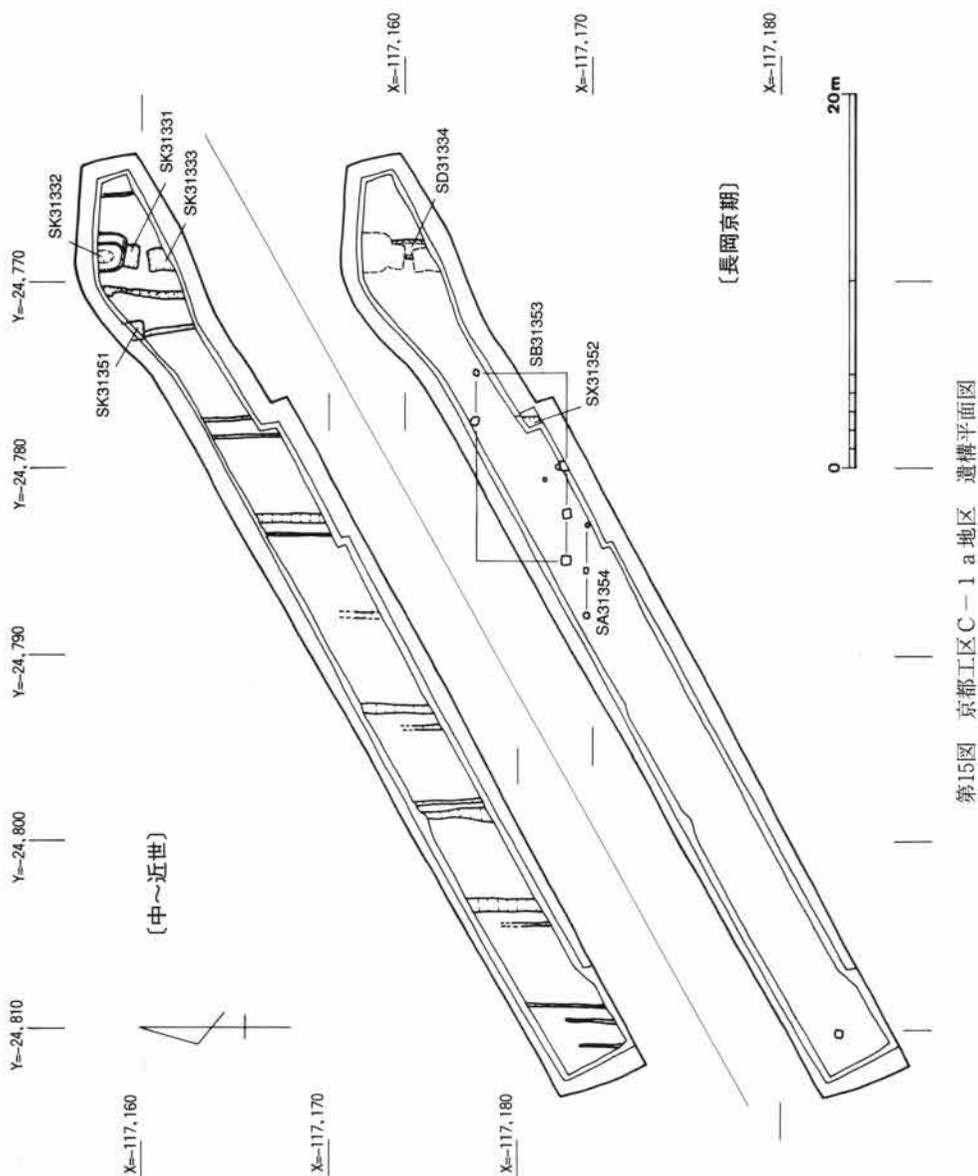
基本層位は、上層から第1層；盛り土、第2層；耕作土、第3層；灰色粘質土(明橙褐色粘質土混じり)、第4層；明灰褐色～灰黄褐色粘質土、第5層；黄褐色粘質土である。第3層には、古墳時代～中世の遺物が包含されており、検出した遺構の大部分は第4層上面から掘り込まれている。なお、部分的に第5層上面で遺構の検出作業を行ったが、明確に遺構と判断できるものは確認できなかった。また、第4層は遺物を包含しないため、第4層以下をいわゆる地山と考える。地山面のレベルは、aトレンチ西端で約11.9m、bトレンチ東端で約12.2mを測る。

(2)検出遺構(第15・16図)

a. 縄文時代～古墳時代 流路・土坑などを検出した。

流路S X 31316 bトレンチの北東隅で検出した流路跡である。トレンチ内では、西側の肩部のみ検出した。東側のE-1地区では、わずかに対応する肩部と思われる落ち込みを確認した。検出部分で幅約12m、推定では約20mを測る。最深部では検出面から約1.6mを掘削したが、底は未確認である。埋土は、シルトを主体として細砂を含むが、礫は堆積していない。8・10層には植物の腐植した状況がみられ、流水の少ないよどみ状であったと考えられる。遺物の出土量は少ないが、掘削できた最下層まで含まれている。9・10層では縄文土器(第19図1・2・3)が、7層では弥生土器(同4)が、4層では須恵器(同5)が出土した。第3層は中世の遺物を包含する。

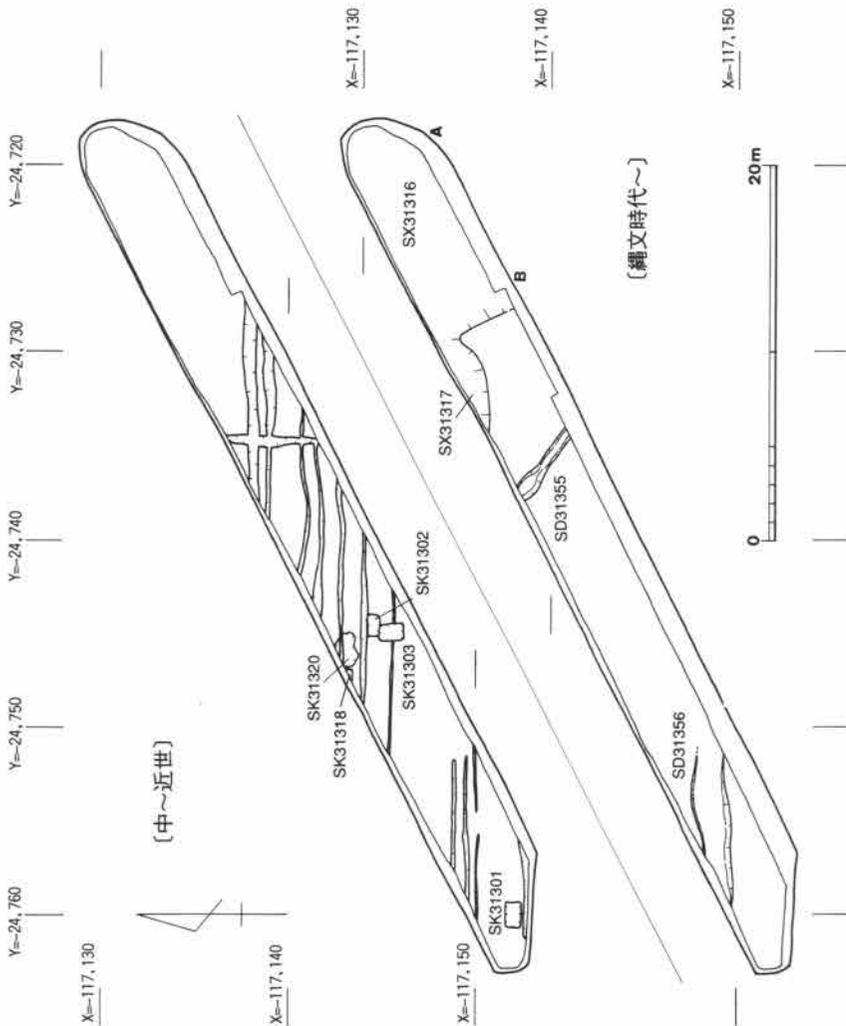
この流路では地震による液状化現象が確認できた。特に、ここでは通常にみられる砂ではなく、シルトが液状化して吹き上がったもので、注目される事例である。6層が4'層を貫き、一部は4層に及んでいる。4'層上面では平面でも明瞭に観察できた(図版第18)。地震の時期は、層位的には4層堆積後～3層堆積以前であるが、出土した遺物との対応関係からみると、古墳時代後期から中世までと幅が広く、詳細な時期決定はできない。



第15図 京都工区C-1 a 地区 遺構平面図

土坑 S K 31320 b トレンチで検出した。不定形な平面形を呈する浅い土坑で、中世の東西溝に切られている。埋土は、灰色シルトである。出土遺物は、少量の土師器片・須恵器片のみであるが、須恵器の中には陶邑編年 T K 209 前後の杯身の小破片が含まれている。第16図では、中～近世の遺構図内に図示したが、古墳時代の土坑である可能性もある。

溝 S D 31355 b トレンチで検出した。幅約60cm・深さ約30cmを測る。埋土は、暗青灰色及び暗灰色シルトで、炭を多く含んでいる。中世の溝の下層に位置するが、遺物が出土



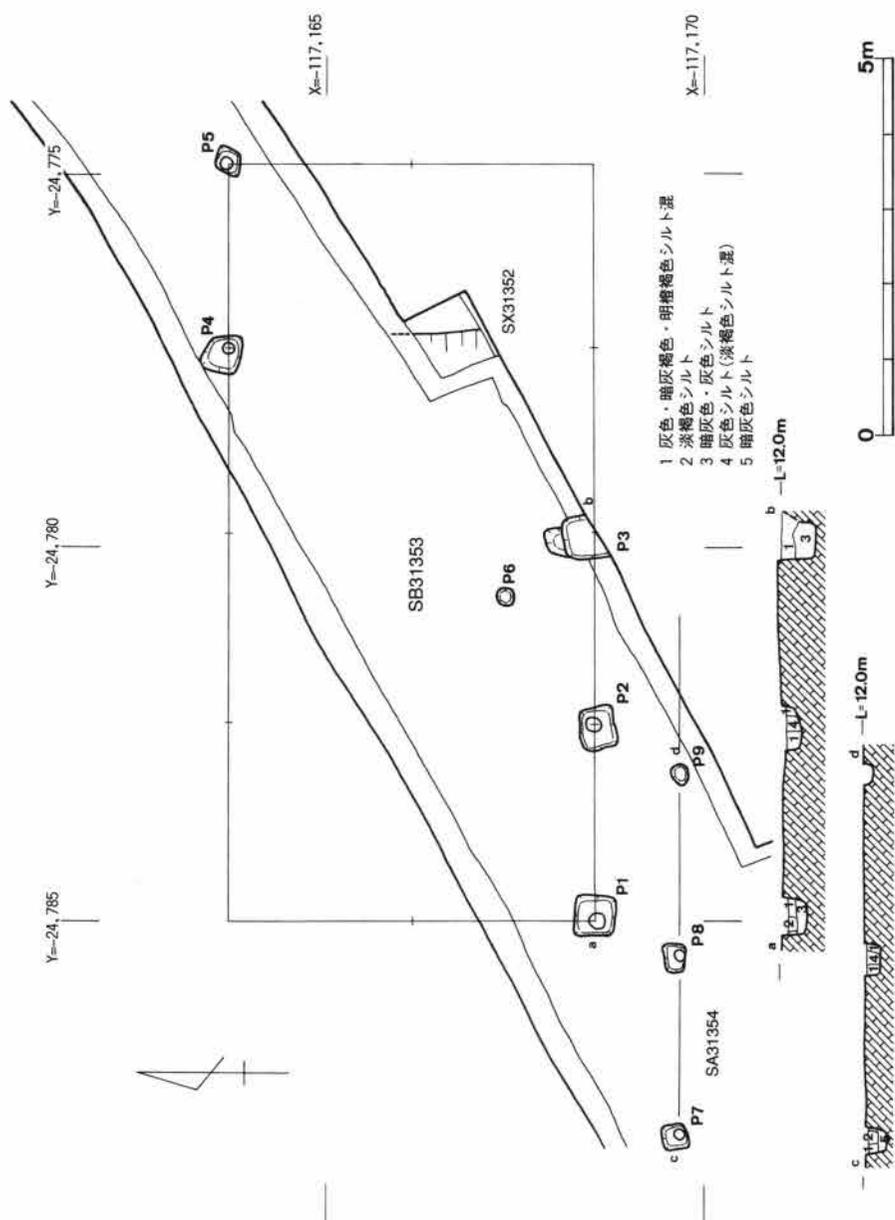
第16図 京都工区C-1-a地区 遺構平面図(A・Bは第18図に対応)

していないため時期は不明である。

溝 S D 31356 b トレンチで検出した。他の遺構とは異なり、第5層上面で検出したものである。ほぼ東西方向に延びるが、第4層が部分的に浅く窪んだ状況を呈しており、明確な遺構とは考えがたい。遺物は出土していない。

b. 長岡京期 掘立柱建物跡1棟、柵1列、溝などを検出した。

掘立柱建物跡 S B 31353(第17図) a トレンチで検出した。確認できた柱穴は5か所であるが、東西4間×南北2間の東西棟に復原した。柱の心々間距離は、東西が2.4～2.6mを測り、南北は2.4mと推定される。柱穴の掘形は、一辺50cm前後の方形状を呈しており、直径20cm前後の柱痕跡を確認した。ピット1・2・4・5から土師器細片が、ピット3か



第17図 京都工区C-1 a地区 掘立柱建物跡SB31353実測図

ら土師器杯A(第19図11)が出土している。

柵列跡SA31354(第17図) SB31353の南側に位置する東西方向の柵列跡である。SB31353の南側柱列から約1.1m離れている。柱穴間の心々距離は、約2.4mを測る。ピット7から土師器細片が出土した。

SX31352 SB31353を検出した際、ピット4の南側に柱穴の存在する可能性が考えられたため、一部トレンチの拡幅を行った。柱穴は確認できなかったが、溝状の落ち込みを

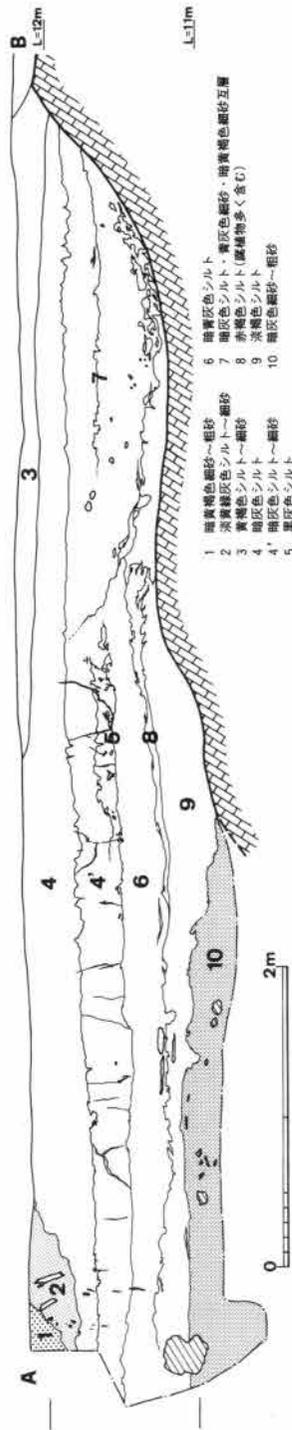
検出した。ただし、すでに掘削を行っていた部分では対応する肩部は検出できなかった。埋土は灰色シルトで、深さ約18cmを測る。浅い土坑の可能性も考えられる。平瓦・土師器・須恵器片が出土した。

溝 S D 31334 a トレンチの東端で検出した。大部分が後世の土坑により削平されている。幅約1.1m・深さ約20cmを測る。埋土は灰色シルト～粘土で、中間に暗紫色をした有機物?の層が堆積していた。土師器高杯脚部(第19図27)のほか、土師器細片が出土した。

S X 31317 b トレンチで検出した。平面的には S X 31316 に接続し、前後関係は明らかにできなかった。深さ80cm以上を測る。埋土は、上層で黄褐色・灰色シルトが混在し、下層で暗青灰色シルト～粘土となる。遺物は、上下層とも出土している。上層では瓦器細片・瓦器小皿(第19図34)・瓦質羽釜片など、中世の遺物があるが量的には少ない。下層では一部古墳時代の遺物を含むものの、長岡京期の遺物が比較的多く出土した。長岡京期の遺物に、土師器杯(同12)・須恵器杯(同13)・杯B蓋(同14・15)・壺蓋(同16)・平瓦(同30)、古墳時代の遺物に高杯脚部(同10)・杯蓋片・甕体部片がある。

c. 中～近世 多数の南北溝・東西溝、土坑を検出した。

南北溝群 a トレンチで17条の南北溝を検出した。このうち、Y=-24,770付近の溝以外は、中世のものと考えられる。これらの溝は、50～70cm幅のやや広い溝と、20～30cm幅の狭い溝とが近接した位置で一単位をなし、それぞれが東西幅約5mの間隔で配置されている状況が確認できる。溝の



第18図 京都工区C-1.a地区 S X 31316土層断面図 (A・Bは第16図に対応)

埋土は、いずれも灰色シルトである。8条の溝から瓦器・土師器・須恵器の細片が出土したが、各溝とも量は少ない。13～14世紀と考えられる。

東西溝群 bトレンチで11条の東西溝及び1条の南北溝を検出した。東西の溝は、aトレンチで確認できたような配置とは異なり、ほぼ等間隔で並ぶ部分と空地地とがみられる。南北溝は、東西の溝と接続している。トレンチの北西部では、溝の全くみられない空地地となっていること、また最も北側の東西溝と南北溝は、他の溝に比べて幅の広い溝であることから、これらの溝が耕作地の区画に関わる溝の可能性が考えられる。各溝からは、瓦器・瓦質羽釜・土師器・須恵器・白磁の細片及び石鏃(第19図6)が出土した。

土坑 S K 31332 aトレンチの北東部で検出した。一辺2.1mの隅丸形状を呈する土坑である。最深部は、やや西側に片寄り深さ約60cmを測る。埋土は、暗灰色シルト～細砂である。瓦器・土師器・須恵器細片が少量出土した。

土坑 S K 31331・31333 S K 31332の南側で検出した。それぞれ長辺1.3m×短辺0.8m、一辺1.3m×1.5m以上を測る方形の土坑である。遺物は出土していない。

土坑 S K 31351 aトレンチの北東部で検出した。一辺1.0m×1m以上の方形の土坑である。埋土は暗灰色細砂・青灰色シルトである。土師皿片が出土した。

土坑 S K 31301 bトレンチの南西部で検出した。長辺1.4m×短辺0.9mの長方形の土坑である。深さは30cmを測る。遺物は出土していないが、土坑の底には長辺の方向に小枝が一面に敷き詰められており、他の土坑とは性格が異なるのかもしれない。

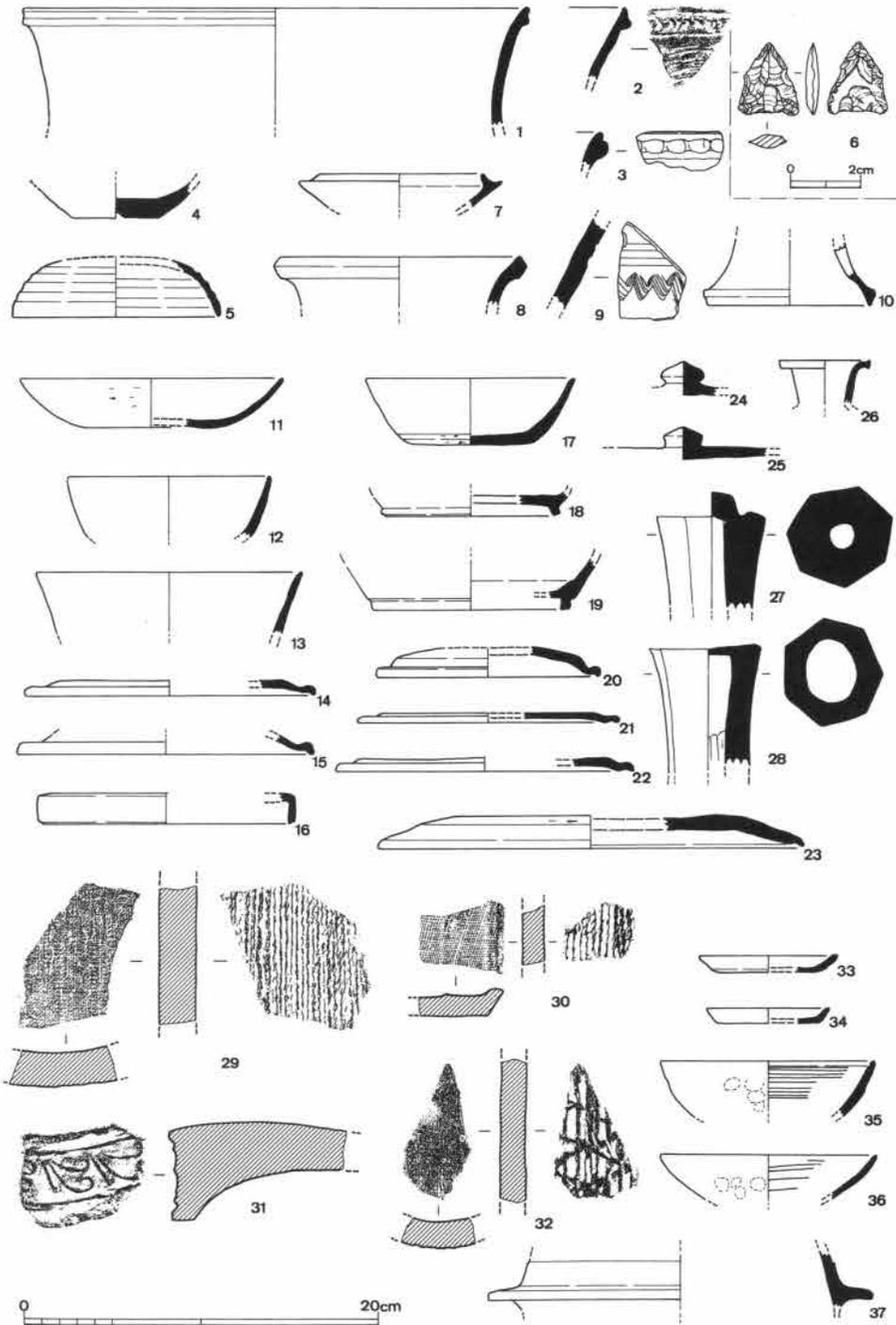
土坑 S K 31302・31303 bトレンチの中央部で検出した。S K 31302は長辺1.2m×短辺0.65m、S K 31303は長辺1.4m×短辺1.0mを測る方形の土坑である。深さはいずれも約30cmである。埋土は、暗灰色シルトに明橙褐色シルトが混在する。ともに瓦器・土師器・須恵器細片が少量出土した。S K 31303がS K 31302のあとに掘削されている。

土坑 S K 31318 bトレンチの中央部で一部を検出した。S K 31302と同規模の土坑と考えられる。土師器細片が出土した。

(3) 出土遺物(第19図)

各遺構及び包含層から出土した遺物は、縄文時代から近世まで長期間にわたるが、遺物の量は各時期を通じて少ない。

縄文土器はS X 31316から出土している。1～3は、晩期の凸帯文をもつ鉢の口縁部である。凸帯の形状はそれぞれ異なり、1は断面形が半円状を呈し、無文であるのに対し、2は刻み目、3は連続した押圧を施している。弥生土器(4)は、同じくS X 31316から甕の底部が出土したのみである。なお、中世の溝内から平基式の石鏃(6)が1点出土している。材質は、サヌキトイドである。



第19図 京都工区C-1地区 出土遺物実測図

1~5. S X31316 11. S B31353ピット3 12~16・19・30・34. S X31317 27. S D31334
6・18・33. 東西溝

古墳時代の遺物は、S X31316から須恵器杯蓋、S X31317から須恵器高杯の脚部が出土した。その他は包含層の資料である。5・7は、陶邑編年TK209前後の時期か。8は壺の口縁部、9は2条の凹線文と波状文をもつ壺の口縁部である。10はTK47前後の時期か。

長岡京期の遺物は、掘立柱建物跡の柱穴内・SD31334・S X31317及び包含層から出土した。土師器は細片が多く、図化できる資料は少ない。11はc手法による杯A、12は調整不明。28の高杯は、内面にしぼり痕がみられる。須恵器で特徴的なものは、17の杯A、23の蓋である。17は底部から体部下半にかけて、23は天井部の約1/2をヘラケズリしている。これらの土器は、京都工区C-2地区cトレンチで検出したSD286311の出土遺物と同じ形態を有する。瓦は、軒平瓦が1点出土したほかは、平瓦片が数点出土した。31は、越中国分寺出土の軒平瓦に類似した文様を持つ瓦である。軟質で全体に磨滅している。

中世の遺物は、大部分が溝及び包含層からの出土である。33は土師皿、34は瓦器小皿、36は瓦質羽釜である。瓦器碗は型式差のあるものが混在している。

(4)小結

京都工区C-1地区の調査では、縄文時代から近世まで各時期にわたる遺構・遺物を確認した。以下に調査成果を要約する。

流路SD31316は、縄文時代晩期から古墳時代後期にかけて大部分が埋没した流路である。その後、中世に完全に埋没するまでの間で地震によってシルトが液状化現象を起こし噴き上がった状況を確認することができた。

長岡京期では、掘立柱建物跡1棟・柵列跡1列・南北溝1条を検出した。C-1地区の北側で行われた左京第197次調査では、一条条間南小路は検出されず、東西小路の推定部分で掘立柱建物跡や南北溝(SD2)が検出されている。今回の調査でもこの小路は検出できなかった。したがって、ここでは二町を占有する宅地の存在した可能性がある。今回検出した建物跡も、後述するC-2地区で検出した建物跡と合わせて一連の宅地を構成すると思われる。なお、SD2の南側延長部分は、SB31353のほぼ中心ラインを通る位置関係になる。

中世には多数の南北・東西溝が掘削され耕作地となっている。a・bトレンチで溝の方向が異なることから、両トレンチ間に耕作地を北側と南側に区画する東西方向のラインが想定される。

(鍋田 勇)

⑦C-2 トレンチ(7ANWSA-3地区)

(1)調査経過と基本層位

C-2地区は、東四坊大路(東京極大路)及び左京南一条四坊十五町(新条坊=一条四坊十三町)にあたり、大路の検出を主たる目的として調査を実施した。この地区では、現在利用されている用水路や進入路が存在するため、調査地を4か所に分割してa~dトレンチとした。a・b・dトレンチは、平成4年度からの継続調査であり、おおむね中世の遺構検出もしくは掘削作業から開始した。dトレンチのみ、推定される大路東側溝が確認できなかったために、中世の遺構調査終了後、機械掘削を行い、地山面での面的調査を実施した。cトレンチは、b・dトレンチの調査終了後、一部南側の資材置き場への進入路を確保して調査を開始したが、その後この未掘削部分に溝SD286311が含まれることが判明したため、西側の調査終了後進入路を付け替えて調査を実施した。

基本層位(第22図)は、上層から第1層;盛り土、第2層;耕作土、第3・4層;暗灰褐色砂質土、第5・6層;灰色粘質土、第7層;灰色~黄褐色粘質土、第8層;黄褐色~明橙褐色粘質土(地山)である。検出した遺構の大部分は、第7層上面から掘り込まれている。

(2)検出遺構(第20・21図)

a. 弥生時代 溝を検出した。

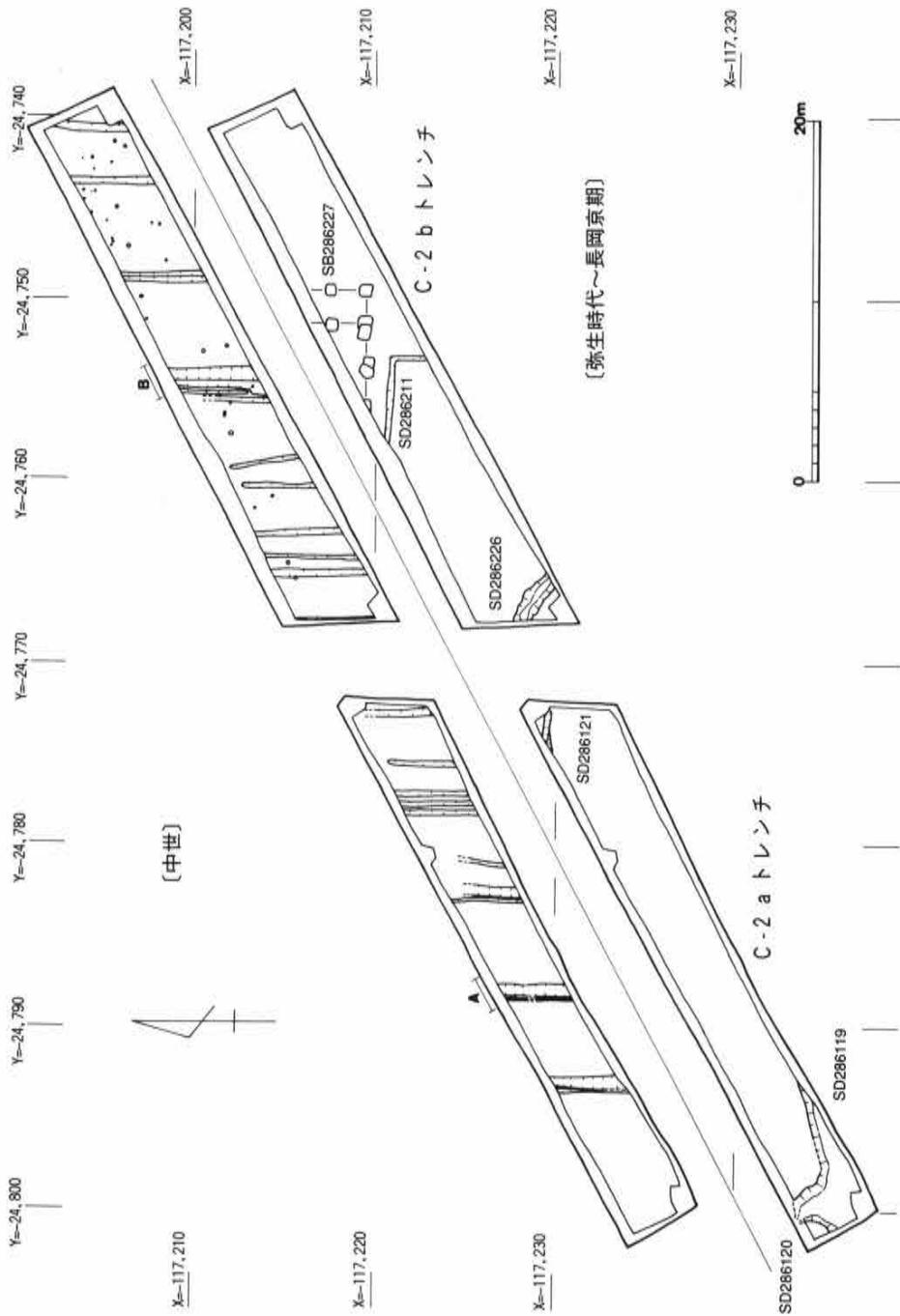
溝SD286226・286121 SD286226は、bトレンチの南西隅で検出した。幅約1.0m・深さ約30cmを測り、ゆるやかな弧を描くように掘削されている。埋土は、暗青灰色シルトである。弥生土器と思われる土器片が少量出土した。

aトレンチの北東隅で検出した溝SD286121は遺物が出土していないため時期は不明であるが、SD286226と同じ埋土であることから同時期の溝と考えておきたい。

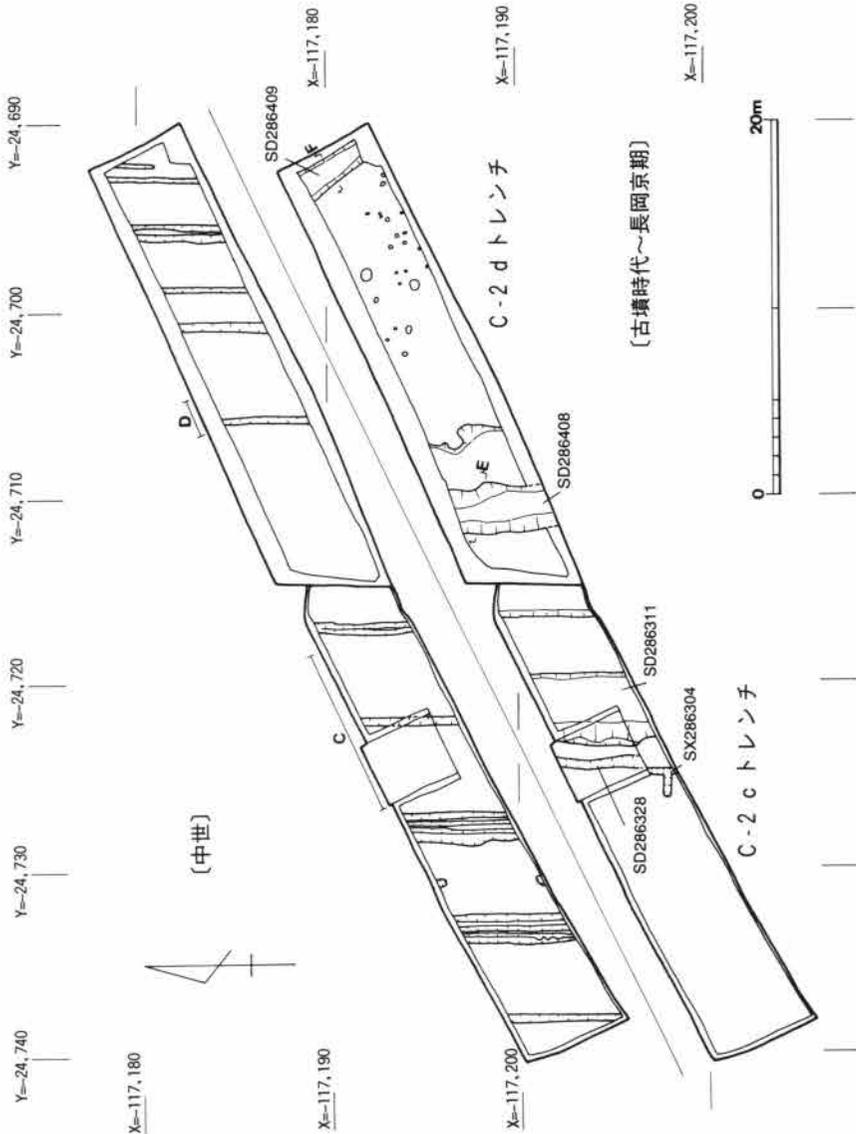
b. 古墳時代 溝を検出した。

溝SD286119・286120 aトレンチの南西隅で検出した。東西方向のSD286119に南北方向のSD286120が合流している。SD286119は北肩のみの検出であり、幅は不明である。深さは、約70cmを測る。SD286120は北側で幅がせばまる。埋土は、上層の中央部で地山と同じ黄褐色粘質土が含まれ、肩部から下層にかけては灰色シルトである。遺物は、土師器・須恵器の細片が少量出土した(第29図1・2)。

溝SD286408 dトレンチの南西部からcトレンチにかけて検出した。dトレンチでは、第7層で中世の遺構面を確認したが、南西部は全体に暗青灰色を呈しており、何らかの遺構が存在するものと思われた。しかし、第7層上面では平面的に検出できなかったため、重機によって再度掘削を行い、第8層の上面で遺構を検出した。上部は、幅が広く浅いくばみ状を呈し、中央付近ではほぼ南北方向に深くなっている。遺物は、少量の土師器・須



第20図 京都工区C-2 a・b地区 遺構平面図(A・Bは第22図に対応)

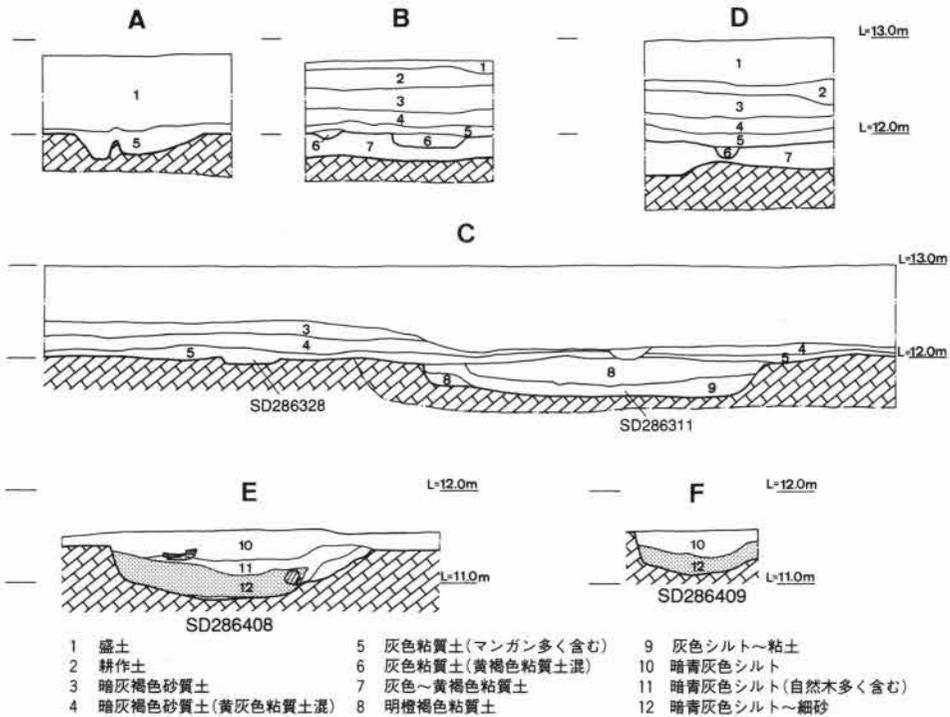


第21図 京都工区C-2 c・d地区 遺構平面図(C～Fは第22図に対応)

恵器の細片(第29図3・4)のほか、用途不明の加工木や自然木が出土した。北側のC-1地区bトレンチで検出したSX31316の延長部の可能性が考えられる。

溝SD286409 dトレンチの北東部で検出した。幅約1.5m・深さ約50cmを測る。遺物は出土していないが、SD286408と検出状況や埋土が類似するため同時期と考えられる。

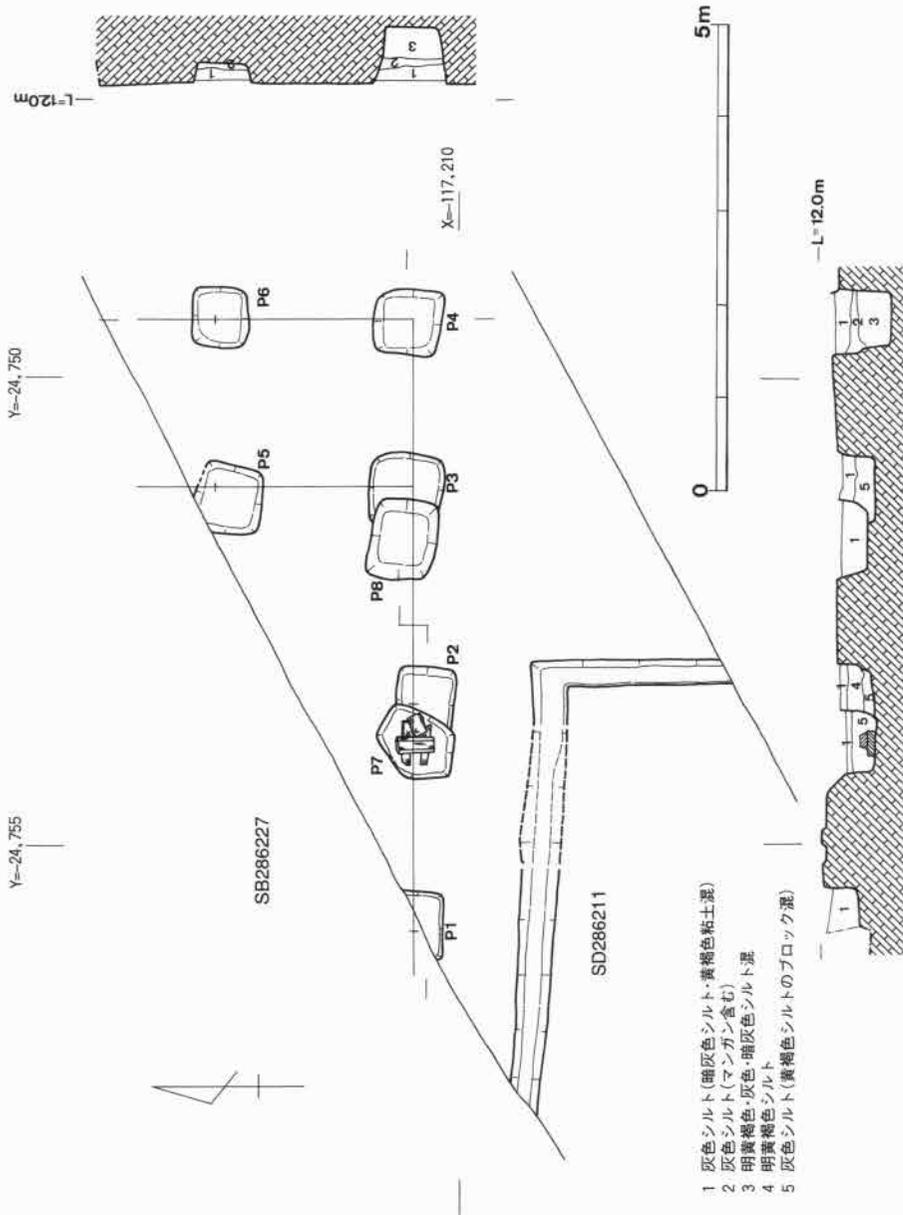
ピット群 dトレンチの東部では、第8層の上面でピット及び土坑状の土色変化を多数確認した。これらは暗青灰色シルトの埋土をもつが、遺物は全く含まれず、明確な遺構と判断するには至らなかった。



第22図 京都工区C-2地区及び溝SD286408・SD286409土層断面図
(A~Fは第20・21図に対応)

c. 長岡京期 掘立柱建物跡・溝・土坑のほか、東京極大路西側溝と考えられる南北溝を検出した。ただし、dトレンチに推定される大路東側溝は検出できなかった。

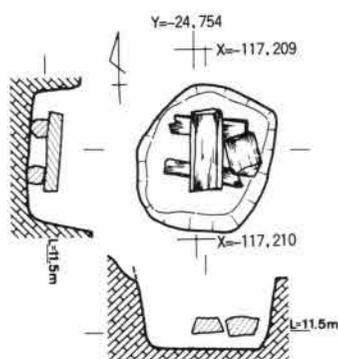
掘立柱建物跡SB286227(第23図) bトレンチの中央部で検出した。建物跡の南東部のみを検出したため、規模は不明であるが、東面もしくは両面に廂を有する南北棟の可能性(図に示した復原線)と建て替えの行われた2時期の建物跡の可能性が考えられる。前者の場合、柱の心々間距離は東西2.4m(8尺)・廂部分で1.8m(6尺)、南北2.1m(7尺)を測るが、後に掘削されたピット7・8については建物の構成が不明である。後者の場合、ピット1・2・3・5から構成される建物が後に東へずらして建て替えられたと考えることができ、この宅地の利用が長期にわたるものであったとの解釈が可能となる。この場合の柱の心々間距離は東西2.25m(7.5尺)、南北約2.1m(7尺)を測る。これらの柱穴は、いずれもほぼ方形の掘形をもち、一辺0.8~1.0mを測る。なお、後に掘削されたピット7は柱を支える礎板が使用されていた(第24図参照)。礎板は、底の部分に断面形が正方形に近い棒状の木を2本平行に置き、その上に90°角度をずらして厚みのある板をほぼ中央部に配置する。さらにその脇にはほぼ厚さの同じ短い板を一枚添えるように置いて補強していた。



第23図 京都工区C-2 b地区 掘立柱建物跡S B 286227・溝S D 286211実測図

遺物は、ピット8から土師器の高杯片が出土したのみである。

溝S D 286211 bトレンチの中央部で検出した。S B 286227の南側で「└」状に屈曲する溝である。東西部分で幅40m・深さ約15cm、南北部分で幅約30cm・深さ約20cmを測る。埋土は、灰色シルトで、明橙褐色粘質土が混ざる。埋土では中世の溝と区別がほとんどつかないが、中世溝との切り合い関係では明らかに下層に位置する。平瓦片・製塩土器細



第24図 掘立柱建物跡 S B 286227
柱穴(P7)実測図

片・土師器細片が出土した。溝心の国土座標は、東西部分が $Y=-24,755.0$ のところで $X=-117,210.8$ 、南北部分が $X=-117,212.0$ のところで $Y=-24,753.2$ である。

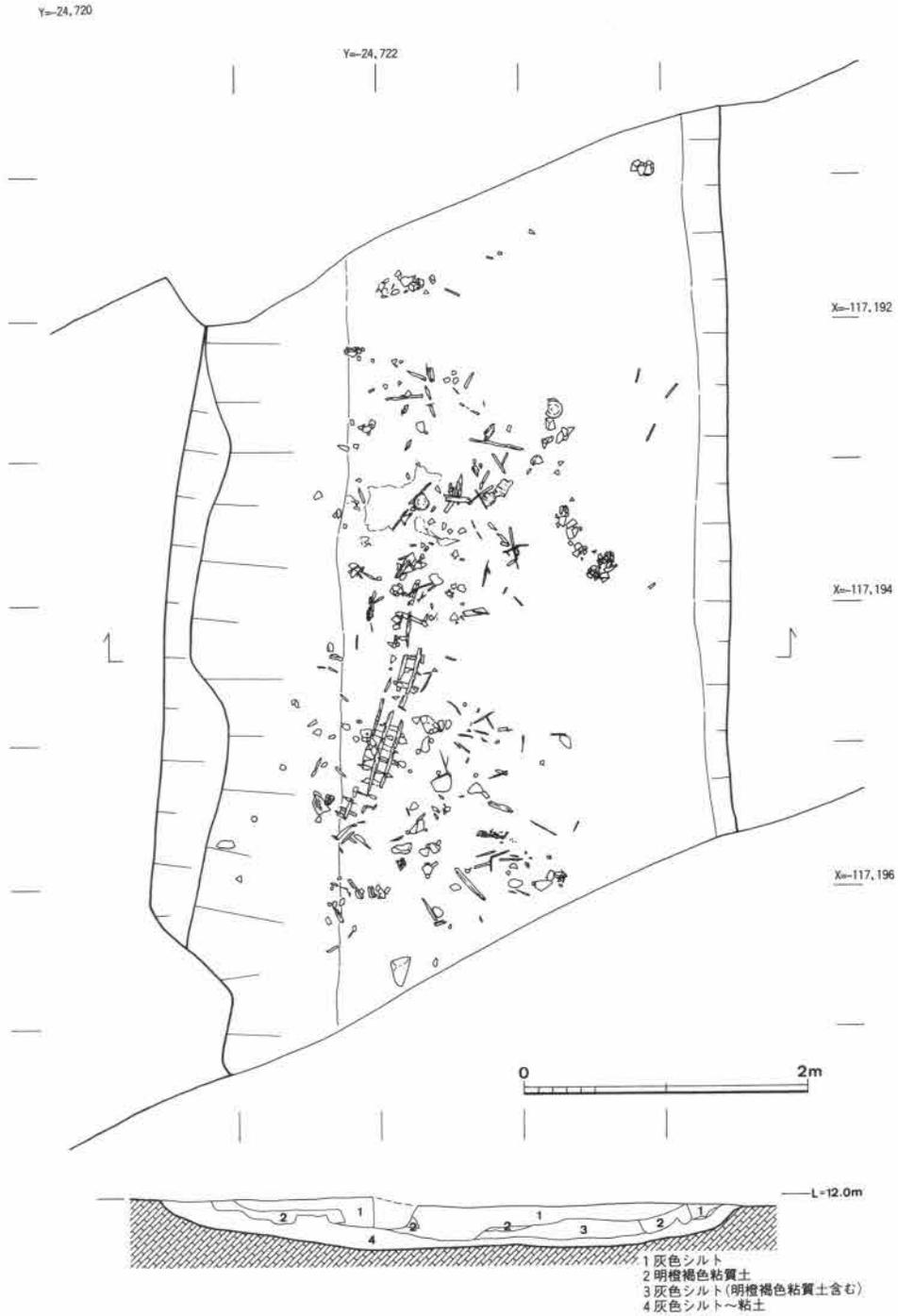
溝 S D 286311(第25図) c トレンチで検出した。幅約3.5m、検出面からの深さ0.35mを測る南北方向の溝である。東京極大路西側溝と推定される。溝の振れ角はトレンチの幅が狭く、検出できた部分が約5mにすぎないため正確には算定しにくい、ほぼ正南北とみられる。溝心の国土座標値は、 $X=-117,194.0$ のところで $Y=-24,721.5$ である。

溝の埋土は、おおむね下層では灰色シルト～粘土、上層では灰色シルトと溝のベースである明橙褐色粘質土(シルト～細砂)が混在した状況であった。

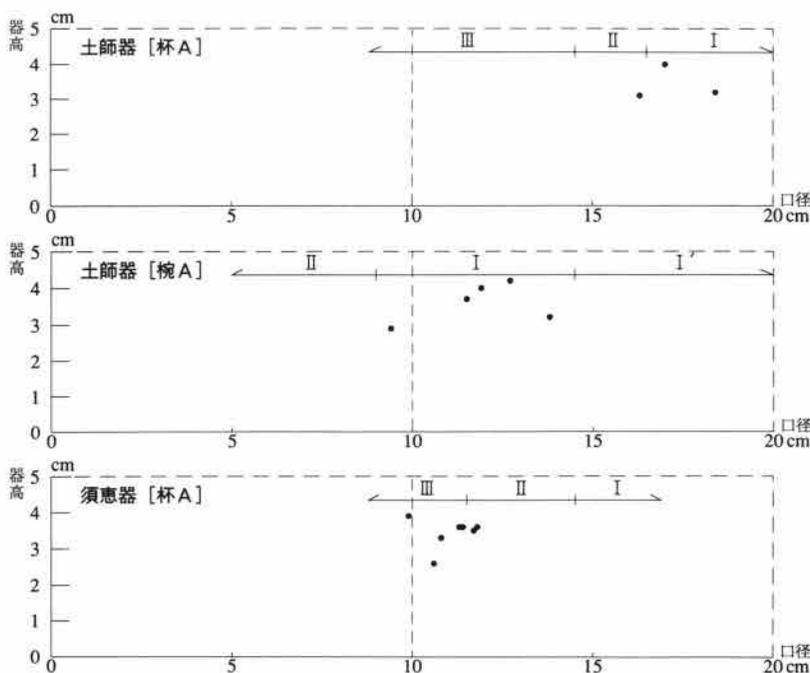
出土遺物は、土師器・須恵器・製塩土器・瓦・木製品のほか、多数の木片や植物遺体がある。これらの遺物の大部分は、下層に堆積した灰色シルト内から混在した状況で出土している。遺物は、溝内の広範囲にわたって分布するが、特に溝の中心部に沿って集中する傾向にある。なお、すべての遺物が同一面で検出されたのではなく、一部にはシルトをはさんで上下の位置関係にあるものも認められた。ただし、全域で上・下層の区別が明瞭な状況にはなく、時間的には短期間の内に廃棄されたものと判断される。

【木製品】用途不明であるが、使用時の構造をとどめたものが出土した。長短二種類の板状の木材から構成され、格子状に組み合わせた構造をもつ。完存していないため、全体の構造は不明である。ここでは、長い方を横木、短い方を縦木と呼称しておく。横木は、長さ126cm以上・幅3～4cm・厚さ約5mmを測り、5～7cmの間隔をあけて三本が平行に並んでいる。縦木は、長さ25cm以上で、幅・厚さは横木と同じである。6cm前後の間隔をあけて並んでおり、痕跡を含めて15本が確認できた。縦木は、すべて横木の下に位置するため、木材のみで組み合う状況にはなく、何らかの方法で固定されていたと考えられるが、接続の方法は不明である。この木製品には、後述する木片と異なり、炭化した部分が認められず、やや遅れて廃棄された可能性がある。

【木片】ほとんどが棒もしくは幅の狭い板状を呈する。いずれも加工痕を残す木片であるが、製品ではなく、建築部材などの加工時に伴う廃材、いわゆる木っ端と考えられる。この木片は部分的に炭化したものが多く、一部にはすべて炭化したものもみられる。溝の中心付近から出土した木片には特にこの傾向が強い。これらの木片は、他の場所で焼却された後に廃棄されたのではないかと考えられる。



第25図 京都工区C-2c地区 溝S D286311実測図



第26図 京都工区C-2 c地区 溝S D 286311出土土器法量分布図

【植物遺体】最下層のシルト～粘土に密封された状態で、広葉樹の葉が数枚確認できた。近辺の樹木から自然に入り込んだものと考えられる。

S D 286328 cトレンチの中央部、最後に追加調査した進入路部分の拡幅部で検出した南北方向の溝である。S D 286311の西側で、40～80cmの間隔をあけて並行する位置にある。幅0.5～0.8mを測るが、深さは5cm程度しかなく、南側では確認できなかった。埋土は、灰色シルトである。平瓦・土師器細片・須恵器片(甕体部)が出土した。

S X 286304 cトレンチの中央部で検出した。S D 286311の西側でS D 286328の南側延長部付近に位置する。「└」状に掘削された土坑であるが、接続部分では浅くなっているため、異なる遺構の可能性もある。東西部分では幅約40cm・深さ約50cm、南北部分では幅約40cm・深さ約30cmを測る。埋土は、ともに暗青灰色シルトである。平瓦片・須恵器片(甕体部)が出土した。

d. 中世

ピット群 bトレンチで多数検出したが、建物などの構造物としては復原できなかった。直径10～30cmを測るが、20cm前後のものが多い。埋土は、灰色ないし灰褐色シルトである。遺物は全く出土していないため、正確な時期は不明であるが、他の遺構との切り合い関係から、長岡京期以後、中世溝掘削以前と考えられる。

南北溝群 各トレンチで南北溝を検出した。全体的にみれば、C-1地区aトレンチと同じく、約5m間隔で1～3条の溝が掘削されている。溝の幅は30cm前後のものが多いが、広いものでは約80cmを測る。埋土は、灰色シルトである。遺物は、瓦器・瓦質羽釜・土師器・須恵器の各細片が少量出土しているが、西側のa・bトレンチでは特に出土量が少なく、東側ほど出土量の増える傾向にある。

(3) 出土遺物

C-2地区から出土した遺物は、弥生時代から近世まで各時期にわたるが、SD286311を除くと各時期とも少ない。

a. 弥生時代(第29図15) SD286311から石鏃が1点出土した。凹基式で、先端は欠損している。材質は、サヌキトイドである。表面は、風化して白っぽくなっている。

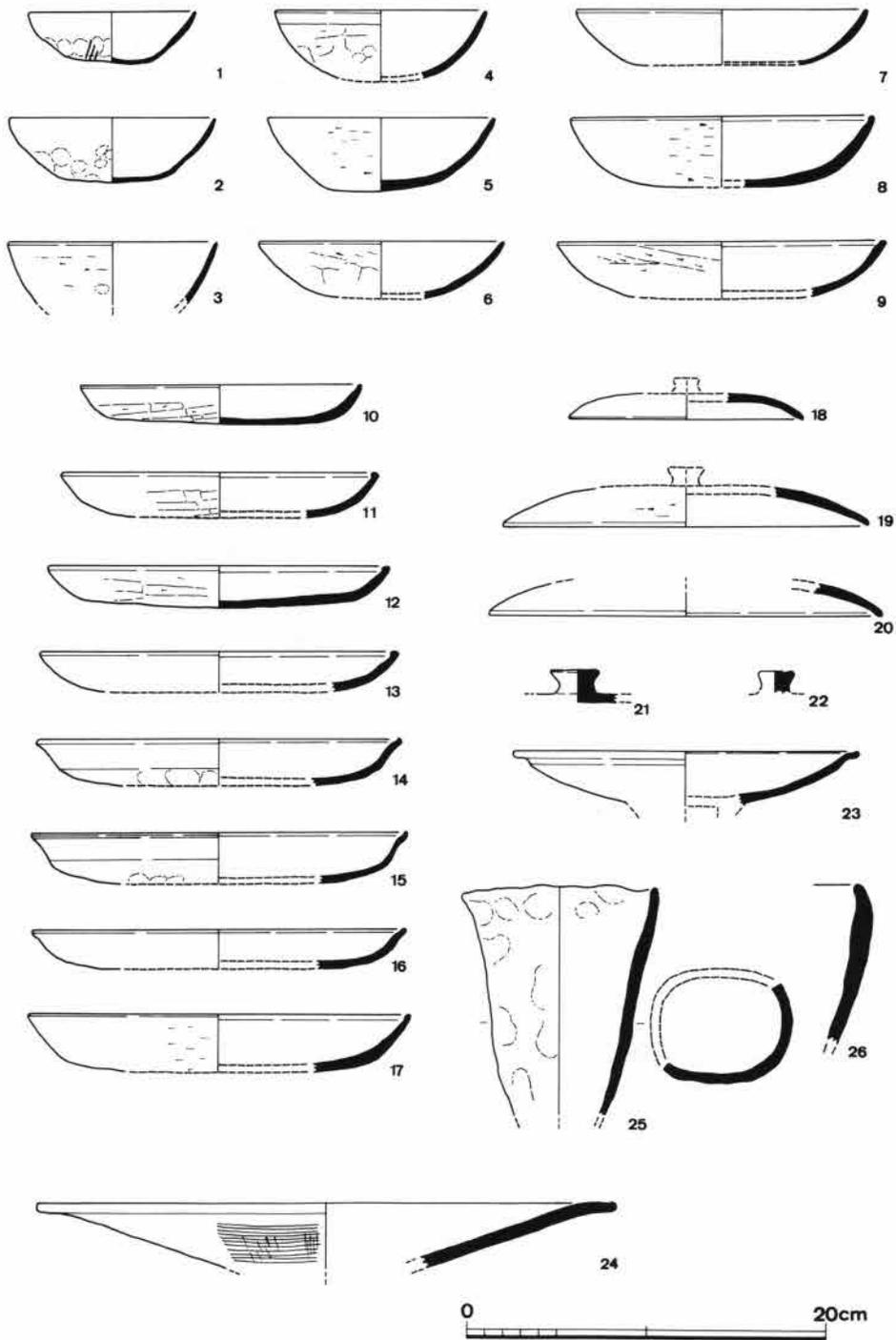
b. 古墳時代(第29図1～4) 1・2は、SD286120から出土した。1は、口径13cmを測る小型の甕で、口縁部は「く」の字に外反する。2は、杯蓋片である。天井部と口縁部の境は比較的明瞭であり、口縁端部は内傾する段を有する。陶邑編年MT15前後の時期か。3・4は、SD286408から出土した。3は、布留式の甕口縁部である。布留式中段階と考えられる。4は、陶邑編年TK10前後の杯身か。

c. 長岡京期 SD286311以外の遺構内から出土した遺物はいずれも細片であり、図化できなかった。以下では、SD286311及び包含層内出土資料を報告する。なお、土器の記載に際しては、長岡京跡左京第196次^(註10)の基準を援用する。

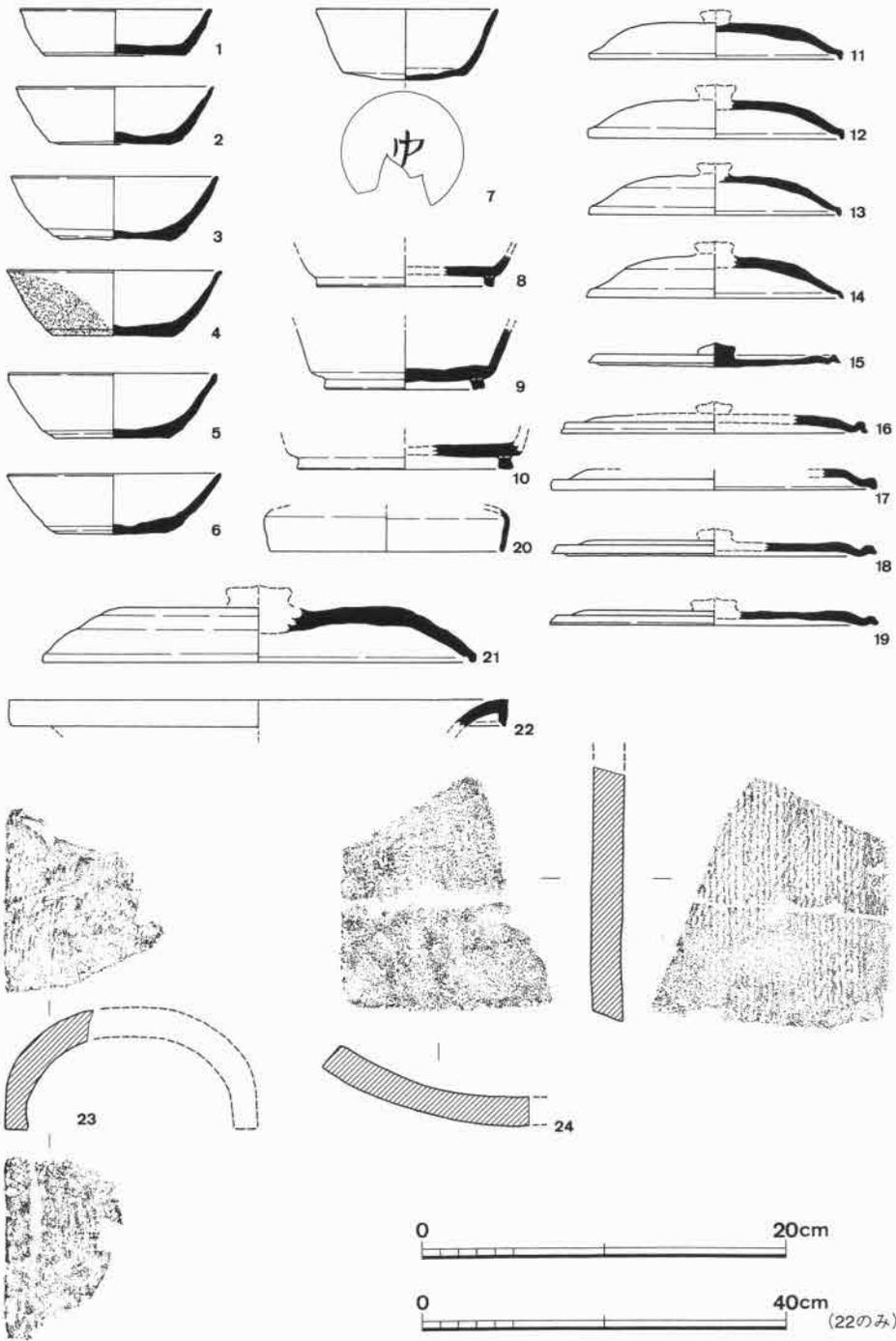
溝SD286311 土器・瓦・木製品・木片・植物遺体が出土した。ここでは土器及び瓦について報告する。

出土した土器は、土師器・須恵器・製塩土器に分類される。実測可能なもの、及び一個体として識別可能なものは55個体である。土師器と須恵器の割合は、約6：4であるが、破片の総量を勘案すれば土師器の割合がさらに多くなると思われる。

〔土師器〕(第27図1～24) 供膳形態では、杯A(7～9)・椀A(1～6)・杯B蓋(18～22)・皿A(10～17)・高杯(23・24)がある。土師器は、供膳形態が約97%を占め、煮沸形態の出土量がきわめて少ない点が特徴的である。杯Aは、法量区分で杯AⅠ(8・9)、杯AⅡ(7)に区分される。9は、口縁部の立ち上がりがゆるやかで、復原口径18.5cmを測る。外面調整は、7は磨滅により不明であるが、8・9はc手法(口縁部・底部全面ヘラケズリ)である。椀Aはいずれも椀AⅠに分類されるが、1の口径は9.3cmでⅡ類に近い法量である。外面調整は、1がe3手法(e手法後、外面ヘラケズリ)、2がe手法(口縁部上端だけヨコナデ、以下は不調整)、3・5・6がc手法、4がc'手法(口縁端部付近を一定幅ケズリ残す)である。皿Aは、法量区分で皿AⅠ(13～17)、皿AⅡ(10～12)に区分



第27図 京都工区C-2c地区 溝S D 286311出土遺物実測図(1)



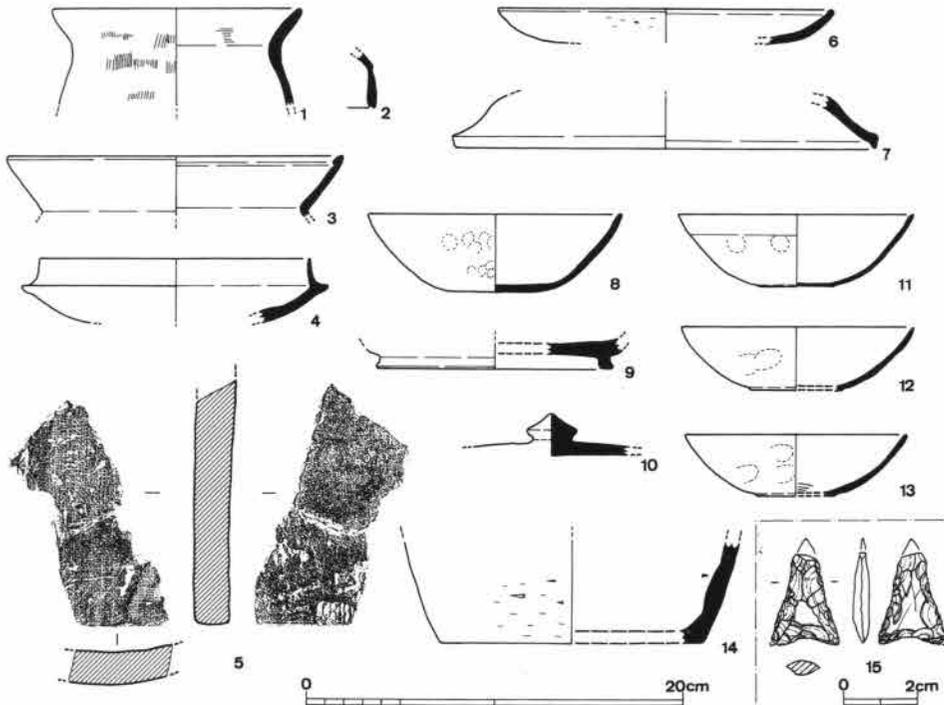
第28図 京都工区C-2c地区 溝SD286311出土遺物実測図(2)

される。前者の外表面調整には、a手法(口縁部ヨコナデ、底部不調整)及びc手法がみられる。後者は、cもしくはc'手法である。高杯は、杯部のみ出土している。24を含めた3点は、通有にみられる形態を有する。23は、外面の中心付近にわずかに脚部と思われる突出部が認められるため、高杯と判断したものである。端部付近の外面を強くナデてほぼ水平な面を作り、端部を上方へ巻き上げている。

〔須恵器〕(第28図1～22) 供膳形態では、杯A(1～7)・杯B(8～10)・杯B蓋(11～19)・皿B蓋(21)、貯蔵形態では壺A蓋(20)・甕(22)が出土した。杯Aは、法量区分で杯AⅡ(4・6)、杯AⅢ(1～3・5・7)に区分される。3～6は、形態的には椀とするべきかもしれないが、ここでは杯として記載する。杯Aの内、1～6は、従来長岡京跡ではほとんど出土例をみない一群として認識されるものである。特徴としては、底部から一部体部にかけて回転ヘラケズリする技法がみられる点、体部の立ち上がりがゆるやかで、口径に比して底径が小さい形態を有する点、口縁外面端部に重ね焼きの痕跡が残り、全体的に淡い灰色系の色調を呈する点、比較的砂粒の少ない精良な胎土を有する点をあげることができる。また、杯B蓋の内、器高が高く深みのある器形をもつ一群(11～14)及び皿B蓋(21)には胎土・焼成・色調に共通した特徴が認められる。4は、漆と思われる黒色膜が内外面の対応する位置に付着しており、勺として使用されたと思われる。7は、底部外面のほぼ中央部に「巾」と一文字が墨書されている。器壁は薄い硬質焼成で、暗青灰色の色調を呈する。杯Bは、9が底部のみほぼ完存するが、8・10は細片である。9は、灰白色の色調を呈し、やや軟質の焼成である。杯B蓋は形態から前述の11～14と、器高が低く扁平なもの(15～19)に分類される。14・15を除いていずれも内面に墨痕が残り、硯に転用されている。皿B蓋(21)は、口径24cmを測る大型の蓋である。壺A蓋(20)は、口縁部から肩部にかけての細片である。肩部の屈曲はゆるやかである。灰色系の色調で、肩部には自然釉がかかっている。甕(22)は、口径55cmを測る大型品である。

〔製塩土器〕(第27図25・26) とともに砲弾形の器形を呈する。25は、全体に器形がいびつであり、口縁端部の形状も外反ぎみに立ち上がる部分と内湾ぎみに立ち上がる部分とがある。外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。胎土は粗く、5mm前後の混和材の砂粒が多く含まれる。26は、厚手の器壁をもち、端部は内湾ぎみに立ち上がる。胎土は25と同様である。色調はともに明橙褐色を呈する。

〔瓦〕(第28図23・24) 平・丸瓦を合わせて13点が出土しているが、大部分が細片であり、器壁の磨滅しているものが多い。軒瓦は出土していない。23は、凹面にわずかに布目の痕跡が残る。凸面は縄目タタキで、灰色系の硬質焼成である。24は、凸面縄目タタキ、凹面不調整(布目痕)で、淡黄褐色系の軟質焼成である。



第29図 京都工区C-2地区出土遺物実測図

1・2. S D286120 3・4. S D286408 12・13. dトレンチ南北溝 15. S D286311

包含層内出土遺物(第29図5~10) 6はc手法の土師器皿A、8はe手法の杯A、7は須恵器蓋、9は杯B、10は宝珠つまみをもつ蓋である。14は、壺もしくは鉢の底部と考えられるが時期は不明である。体部外面下半をヘラケズリしている。

c. 中世(第29図11~13) 11は口径12.6cm・器高3.9cm、12は口径12.4cm・器高3.5cm、13は口径11.9cm・器高3.3cmを測る瓦器碗である。14世紀前半頃の所産と考えられる。

(4)小結

C-2地区では、弥生時代から中世に至る各時期の遺構・遺物を確認した。以下では、調査成果を要約し、あわせて問題点の整理を行う。

弥生及び古墳時代では、溝のみの検出であったが確実に遺構が存在することが明らかとなった。今後、周辺部での集落本体の遺構の確認が期待される。

長岡京期では、京内で最も東側に位置する掘立柱建物跡を検出したこと、及び東京極大路西側溝と考えられる溝を検出したことなど、貴重な成果があった。特に、後者については、その位置や出土遺物から大路の西側溝の可能性が高いと判断するに至ったものの、いくつかの点で不確定な要素があったり、新たな問題が生ずるなど、なお今後検討が必要である。

東京極大路の西側溝と判断するのに肯定的な点をあげると、①溝がほぼ正南北であること、②溝心の位置が、従来の平城京型復原案による東京極大路計画線(道路心)から西へ12.3m(約41.6尺)の距離にあり、ほぼ通常の大路幅の1/2となること、③出土した遺物がほぼ長岡京期と考えられること、の3点となる。①については、今回の調査では、C-2地区の北側に設定したC-1地区において、SD286311の延長部分が中世まで流路となっていたために、検出できなかった。したがって、トレンチ内の狭い範囲内でしか溝の方向を判断できないことにやや問題が残る。②については、条坊制の復原に関わる問題であり、特に慎重な検討が必要であるが、筆者は長岡京の南北の大路については平城京型の計画線を使用したとの立場をとるので、肯定的な点として扱う。^(注11)山中説では、東京極大路西側溝心は、朱雀大路心から東へ7170尺に位置する。SD286311は同様に東へ7158.4尺(2118.9m)の位置にあり、山中氏の推定位置より西へ11.6尺(3.4m)ずれている。

なお、仮にSD286311を西側溝とした場合、今回の調査では対となる東側溝が検出されなかったことが新たな問題点となる。調査時の段階では、E-1地区で検出した南北溝(SD31705)に東側溝の可能性を考えていたが、その後の検討によりこの溝については時期が異なると判断したため、C-2地区dトレンチと合わせ、2か所ともいずれの推定位置からも大路の東側溝が検出されないという結果になった。すなわち、東京極大路では東側溝が設置されていない可能性があり、京の外周がどのように整備されていたかは今後の課題といえよう。いずれにせよ、これらの点は今後の調査例の増加によってしか解決できない問題であり、現状では問題提起にとどめる。

③については、上記2点とはやや論点を異にするが、出土した遺物の年代及びこれまで長岡京でほとんど出土していない須恵器の一群の産地の問題がある。今回出土した遺物は、従来の土器の年代観では、長岡京期のものを含むものの、土師器杯Aや須恵器壺A蓋などに後出する要素がみられることから、全体として平安京I期中段階^(注13)に相当する時間幅を考えておきたい。したがって、溝の埋没時期は、平安京への遷都後やや時間を経てからと考えられる。また、特徴的な形態を有する須恵器杯Aは、少なくとも上記の年代幅の中で時期を押さえることができる。今後、産地を確定できれば消費地との対応が可能となるが、この点についてはさらに検討を続けたい。

中世では、C-2地区全域にわたって耕作地となっている。遺物の出土量は全体的に少ないものの、東側ほど量が増加する傾向にあり、後述するE-2・3地区を含め、集落に近接した位置であると考えられる。

(鍋田 勇)

⑧ E-1 地区 (7ANWSG地区)

(1) 調査経過と基本層位

E-1 地区は、長岡京条坊復原では東京極大路及び京外に位置し、大路の東側溝の検出を主な目的とした調査地である。調査は、ほぼ地山面までを機械掘削し、その後人力で掘削を行った。

基本層位(第32図上段)は、上層から第1層；盛り土、第2層；耕作土、第3層；灰褐色砂質土、第4層；灰色粘質土、第5層；黄褐色～明橙褐色粘質土(地山)である。地山は、西側では淡灰色シルト～細砂となっている。第4層には、弥生時代～中世の遺物が包含されており、検出した遺構の大部分は第5層上面から掘り込まれている。地山面のレベルは、西端で約12.1m、東端で約12.5mを測る。

(2) 検出遺構(第30図)

a. 飛鳥時代 溝を1条検出した。

溝 S D 31705 ほぼ東京極大路東側溝の推定地に位置する南北方向の溝である。中世の東西溝に切られている。溝は、肩部付近が浅く広がり、約1mの幅で最も深くなる。底はほぼ平らである。西側の肩部は、ほぼ南北方向であるが、最も深い部分では北でやや西に振れている。検出面からの深さは約20cmと浅い。埋土は、大部分が暗灰色シルト～極細砂であるが、南側では灰色シルトも含む。人為的な掘削ではなく、自然流路と考えられる。遺物は、須恵器壺(第35図1)・土師器細片・種子(桃)が出土した。出土遺物が少ないため正確な時期決定はできないが、飛鳥Ⅳ期前後と考えておきたい。

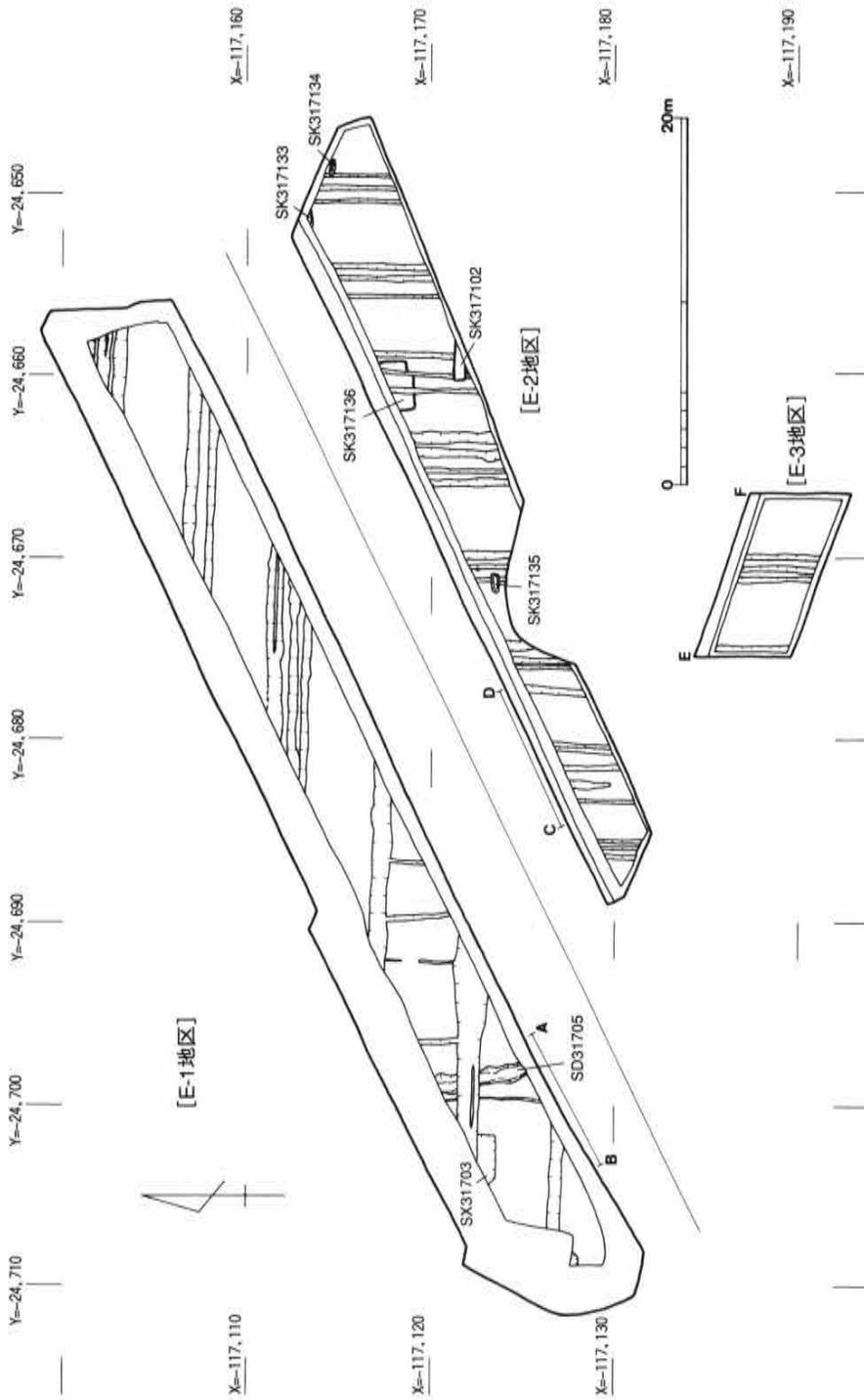
b. 中世 土坑状遺構・溝群を検出した。

S X 31703 方形の浅い土坑状の遺構である。深さ約10cmを測る。東西溝に切られている。埋土は灰色シルトで、瓦器・瓦質鍋の細片が出土した。

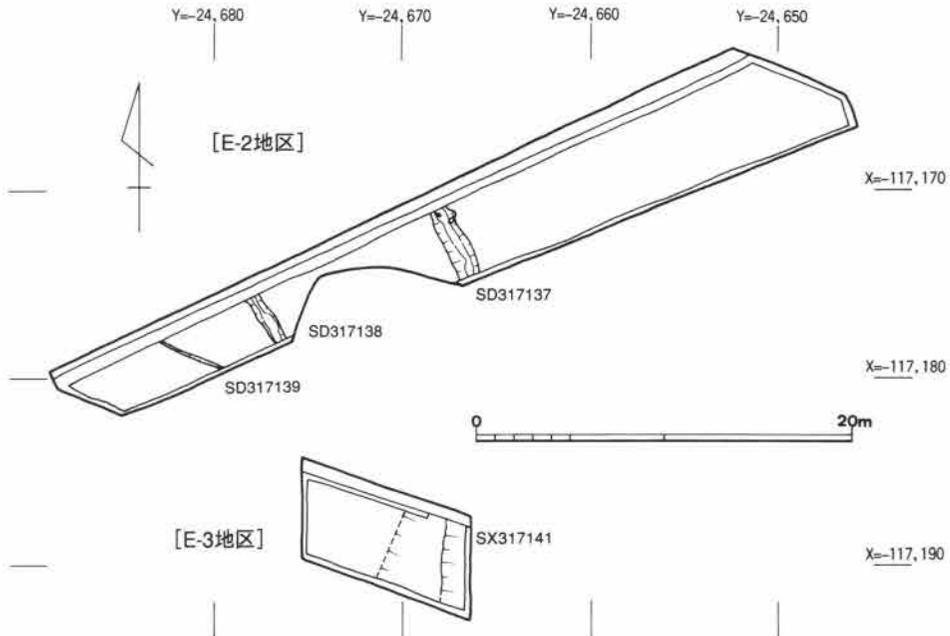
溝群 多数の東西溝と一部で南北溝を検出した。東西溝は、全体的にみれば、約5m間隔で1～3条の溝が掘削されている。方向は異なるがC-1地区aトレンチやC-2地区で検出した南北溝と掘削のパターンは同じといえる。溝の幅は50cm前後のものが多いが、広いものでは約1mを測る。埋土は、灰色シルトである。これらの溝からは少量ながら何らかの土器が出土している。土器には、瓦器・瓦質羽釜・土師器・須恵器・白磁の各細片がある。南北溝は、調査地区の東部で検出した幅の広い2条の東西溝の間で検出した。両端はそれぞれの東西溝につながり、同時期に掘削されたものと考えられる。溝間の広さは不規則である。幅は、東西の溝よりも狭く、30cm以下である。瓦器細片のみ出土した。

(3) 出土遺物(第34図4～6・第35図1～7)

第34図4～6は、包含層から出土した弥生土器である。4は、小型の広口壺と考えられ、



第30図 京都工区E-1・2・3地区 遺構平面図 [古墳時代～近世] (A～Fは第32図に対応)



第31図 京都工区E-2・3地区 遺構平面図 [弥生～古墳時代]

口縁端部には刻み目が施されている。5は、壺の頸部で凹線文B種により加飾されている。6は、口縁端部に刻み目を施した鉢である。

第35図1は、須恵器長頸壺の肩部である。SD31705から出土した。肩部には二条の沈線をめぐらす。陶邑編年TK48前後の時期か。2・3は、包含層から出土した長岡京期の土器である。2は土師器蓋のつまみ、3は須恵器杯Bである。当該期の遺物の出土量はごく少量である。4は、SX31703出土の瓦質鍋である。5～7は、東西溝から出土した。5は白磁碗、6・7は瓦器碗である。

(4)小結

E-1地区では弥生時代～中世の遺構や遺物を確認したが、目的とした東京極大路の東側溝は検出できなかった。大路側溝の推定位置に近い場所で検出した南北溝SD31705は、検出状況から判断すると条坊側溝とは考えにくく、また、出土した遺物が少ないため明確な時期設定が困難であるが、長岡京期以前の可能性が強いと考えられる。

弥生時代では、遺物を確認したにとどまるが、後述するE-2地区の成果と合わせると、凹線文段階まで中期全般にわたる集落の存在が予想される。

中世では、近接した他の地区と同様に耕作地として利用されていたことが判明した。

(鍋田 勇)

⑨ E-2 地区 (7ANWSG地区)

(1) 調査経過と基本層位

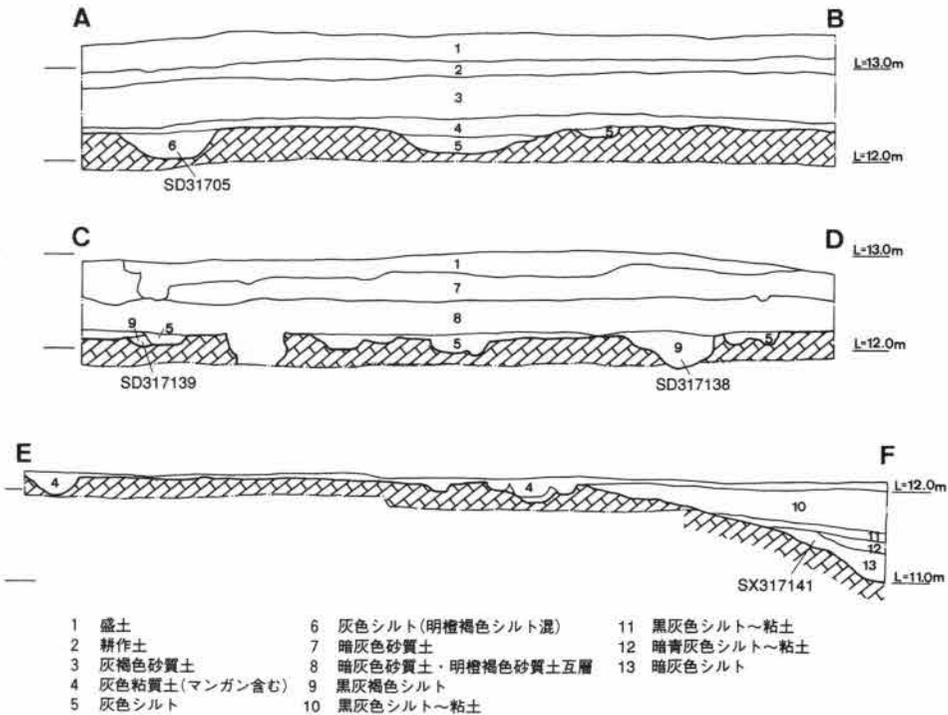
E-2 地区は、長岡京跡の範囲外に位置するが、西側のC-2 地区 d トレンチで東京極大路東側溝が検出できなかったことから範囲を広げて調査を実施したものである。調査は、全面にシートパイルを打ち込んだのち、北側に土層観察用の壁を残しながら機械による掘削をほぼ地山面まで行い、その後人力による掘削を行った。

基本層位(第32図中段)は、上層から第1層；盛り土、第2層；暗灰色砂質土、第3層；暗灰色砂質土・明橙褐色砂質土互層、第4層；灰色粘質土、第5層；黄褐色粘質土(地山)である。第4層には、中世の遺物が比較的多く包含されている。遺構はすべて地山面で検出した。地山面のレベルは、西端で約12.2m、東端で約12.1mを測る。

(2) 検出遺構(第30・31図)

a. 弥生時代 溝を3条検出した。

溝 S D317137 調査地の中央部で検出した。北西→南東方向にほぼ直線的に延びる溝である。幅約1.3m・深さ約50cmを測る。埋土は、暗褐色～黒灰褐色シルトである。溝の北側からほぼ完形の弥生土器が3点出土した。広口長頸壺(第34図2)は、単独で溝の東肩にもたれるような状態で、細頸壺(同1)と太頸壺(同3)は、長頸壺の西側にやや離れたとこ



第32図 京都工区E-1・2・3地区 土層断面図(A～Fは第30図に対応)

ろで、重なり合って出土した。1は、ほぼ完全な形を保ったまま横に倒れた状態で、3は1の周辺で細かく破損した状態であった。出土状況を詳しくみると、1は底部が欠損しており、その体部と底部との間に部分的に3の体部から口縁部片が挟まれていた。したがって、本来は1を正位で立てた後、3を逆さにして被せたのではないかと推測される。この場合3の頸部径が1の体部径よりも小さいため、すっぽりと覆い被せることはできず、1の体部途中で3の頸部が固定され、極めて不安定な状態となる。そのため早い段階で全体に横倒しとなり、3の損傷が著しかったものと思われる。

溝S D317138 調査地の西部で検出した。S D317137から西へ約9.5m離れて、ほぼ並行する位置関係になる。幅約80cm・深さ約30cmを測る。遺物は出土していないが、埋土がS D31737と同じであることや、検出状況から同時期の溝と考えられる。

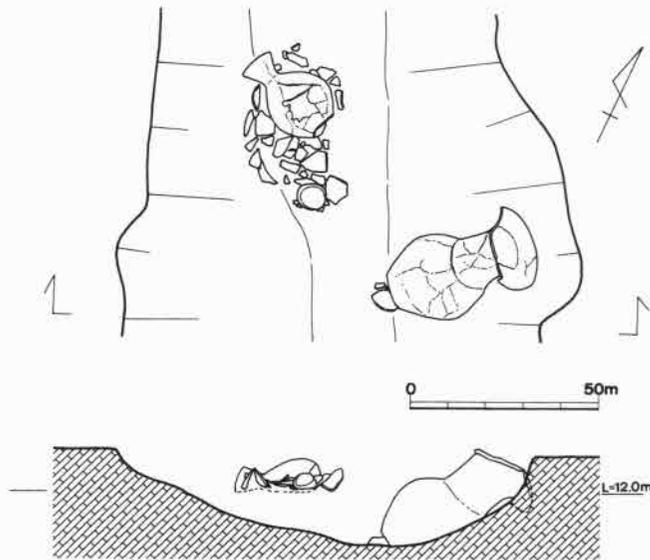
溝S D317139 調査地の西部で検出した。わずかに蛇行する弧を描きながら、全体としてはほぼ直線状に西北西→東南東の方向に延びている。幅約20cm・深さ約10cmを測る。S D317137・317138と比較すると幅が狭く、浅い溝である。遺物は出土していないが、埋土がこれらの溝と同じであることから同時期の溝と考えられる。

b. 中世 土坑・南北溝を検出した。

土坑S K317102 調査地の中央部で検出した。一辺0.7m×3.3m以上を測る長方形の土坑である。深さは45cmを測る。南北溝に切り勝つ。瓦器・土師器・須恵器・白磁細片が少量出土した。埋土は、暗灰色～赤褐色細砂である。

土坑S K317133・317134・317135 調査地の中央部から東部にかけて検出した。いずれも1m×40cm前後の小規模な長方形の土坑であり、深さは約20cmを測る。遺物は出土していない。埋土は、暗灰色シルト～細砂である。

南北溝群 多数の南北溝を検出した。全体的にみれば、約5mの間隔で3条以上の溝がまとまって掘削されている。C-1・2地区やE-1地区と比較すると、一条で一単位となる溝はなく、すべて複数の溝に



第33図 京都工区E-2地区 溝S D317137弥生土器出土状況図

よって単位が構成される点、一単位の幅が広くやや不規則になっている点にわずかながら違いが認められる。溝の幅は30cm前後のものが多く、埋土は灰色シルトである。遺物の出土量は他の地区よりも多く、ほぼすべての溝に含まれている。瓦器(第35図22)・瓦質羽釜・土師器・須恵器・白磁(同17)・青磁の細片が出土した。

(3)出土遺物(第34図1～3・第35図8～26)

第34図1～3は、S D317137から出土した弥生土器である^(註14)。1は、細頸壺で、丸く張り出した体部から細い頸部へとつながり、口縁部はやや広口状をなす。底部は突出気味である。器高25.0cm・口径9.6cm・底径6.0cmを測る。全体に器壁は磨滅が進んでいるが、底部及び頸部外面にはハケによる調整がみられ、体部の上部は一見タタキ風の粗いハケ調整が施されている。胎土は、石英・チャートほか砂粒をやや多く含む。色調は、淡黄褐色を呈する。2は、広口長頸壺で、体部の最大径は中位にあり、頸部から口縁部にかけてゆるやかな曲線でラッパ状に開く。体部最大径よりも口縁部径の方がやや大きい。器高38.3cm・口径23.0cm・底径7.0cmを測る。口縁端部の下側には刻み目が施されている。器壁は磨滅が進んでいるが、頸部から体部中位にかけて8条の櫛描き波状文がみられる。胎土は、1と同様である。色調は、淡黄褐色を呈する。3は、波状口縁をもつ近江系の太頸壺である。器高33.0cm・口径20.4cm・底径6.0cmを測る。器壁は大部分剝離し黒灰色となっているが、本来の色調は淡黄褐色を呈する。体部外面は縦方向のハケ、口縁部内面は横方向の粗いハケで調整されている。胎土は、1・2に比べてやや砂粒が多い。

第35図17・22は南北溝群から、8～16・18～21・23～26は包含層から出土した古墳時代～中世の土器である。この地区は、近接する他の地区に比べて遺物の出土量は多い。8は陶邑編年TK209前後の杯身、9は器種不明であるが須恵器口縁部、10は長岡京期の須恵器杯蓋である。11・13・14は緑釉陶器で、11・14は椀、13は香炉蓋である。12は灰釉の皿である。15は須恵器甕、16は須恵器練鉢底部である。17は白磁椀、18は青磁椀で、このほかにも細片ながら数点の白磁・青磁が出土している。19は瓦器小皿、20～23は瓦器椀、24～26は瓦質羽釜、27は羽釜脚である。

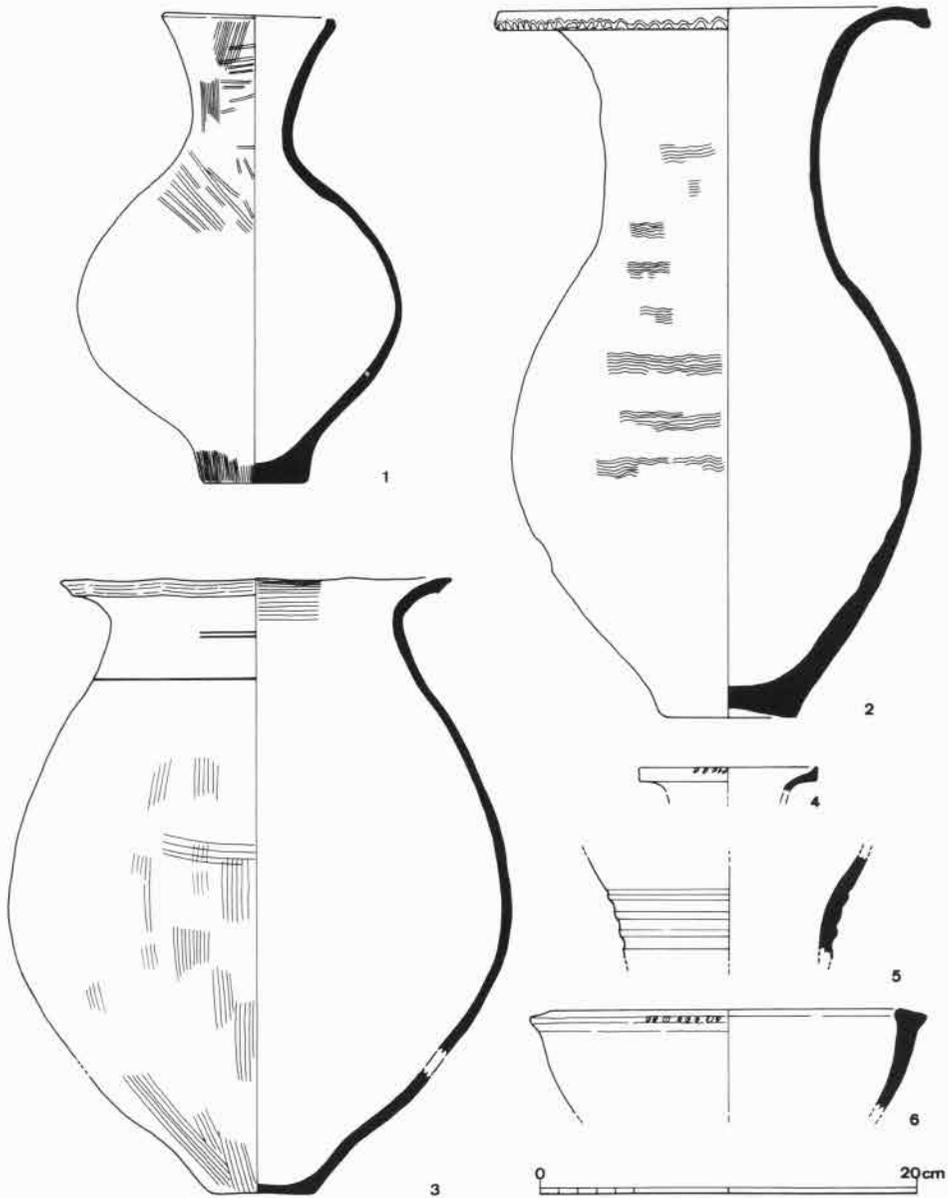
(4)小結

E-2地区は、C-2地区dトレンチで未検出であった東京極大路東側溝が推定位置より東側に存在する可能性があることから調査を実施した。しかし、長岡京期の遺構は全く検出できず、わずかに少量の遺物を確認したにすぎない。E-1地区の調査でも同様の結果を得ており、東側溝すなわち東京極大路と京外を画する溝については掘削されていない可能性が考えられ、その意味では貴重な成果を得た。ただし、東京極大路に関しては他の調査例がないため、今後の調査の結果によって判断すべきであろう。

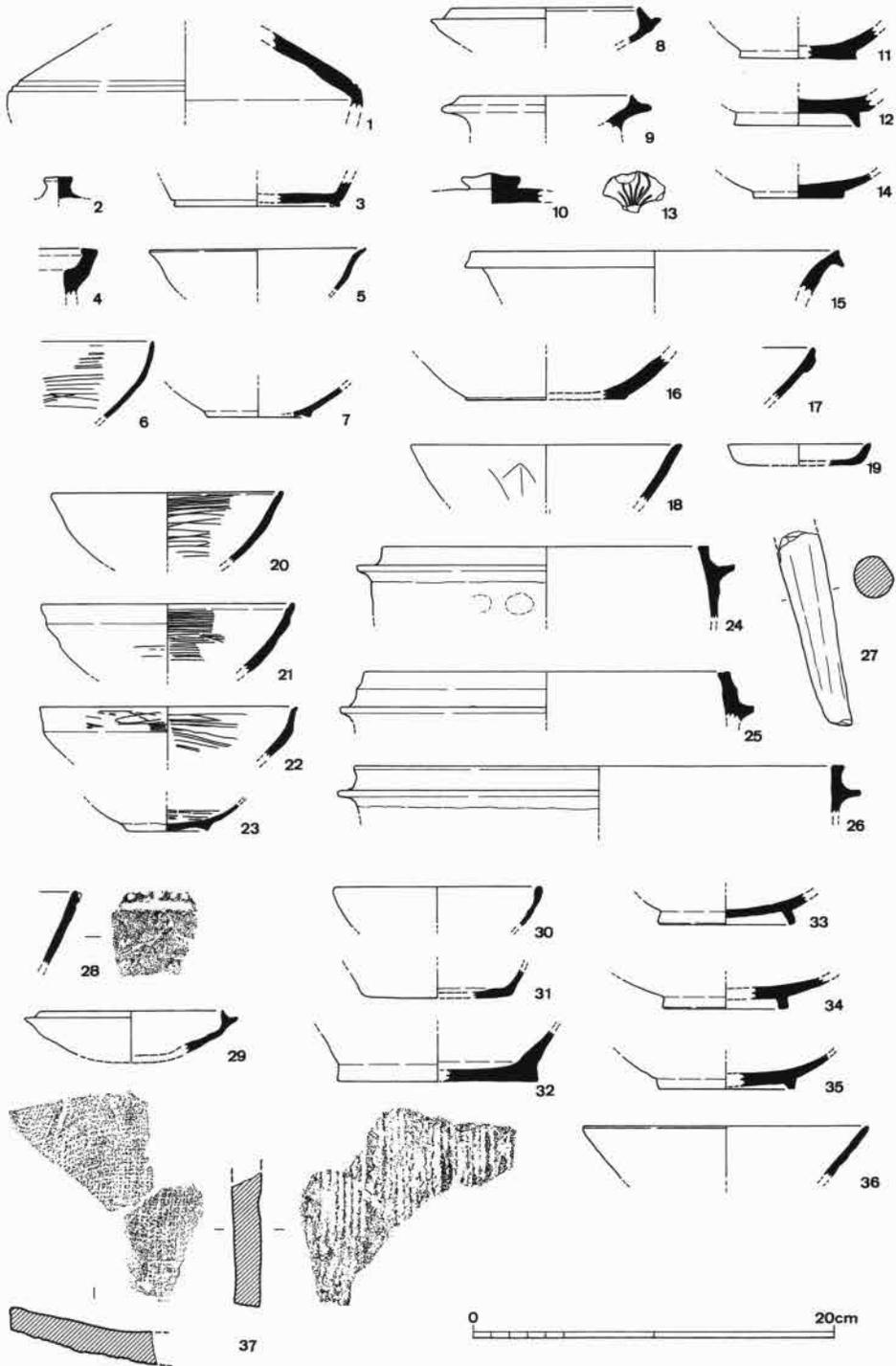
他の時期では、弥生時代・平安時代・中世の各時期で多くの成果があった。

弥生時代の溝 S D317137からは、ほぼ完形の壺3個体が出土し、その状況から意図的に溝内に置かれていたものと推測される。やや離れた位置には並行する溝 S D317138が存在するため、方形周溝墓の可能性もある。

平安時代では、遺構は未検出であるが、近接した地区でみられなかった遺物が出土し、



第34図 京都工区E-1・2地区 出土遺物実測図〔弥生土器〕
 1～3. E-2地区 S D317137 4～6. E-1地区包含層



第35図 京都工区E-1・2・3地区 出土遺物実測図

1~7. E-1地区 8~26. E-2地区 27~37. E-3地区

1. S D31705 4. S X31703 5~7. 東西溝 17・22. 南北溝 34・36. S X317141

長岡京廃都後にも近隣での活動が継続していたと推測される。

中世では、西側の地区同様耕作地となっているが、遺物の出土量は比較的豊富で、白磁・青磁・須恵器練鉢・瓦質羽釜など土器の種類も多く、より集落に近い場所であることが予想される。

(鍋田 勇)

⑩ E-3 地区(7ANWSG地区)

(1) 調査経過と基本層位

E-3 地区は、名神の拡幅に伴い移動される関西電力送電線鉄塔の建て替えに伴って調査を実施した。調査は、全面にシートパイルを打ち込み、地山面まで機械掘削を行った。基本層位(第32図下段)は、E-2 地区に準じる。

(2) 検出遺構(第30・31図) 湿地状の堆積や南北溝を検出した。

S X 317141 調査地の東側に広がる湿地跡で、西肩を検出した。トレンチの中央部からゆるやかに傾斜し、東端で最も深くなっている。北側のE-2 地区では未検出であることや埋土の堆積状況から、流路ではなく湿地と判断した。埋土(第32図E-F)は、シルト～粘土で砂の堆積はみられない。最下層には腐植した植物が含まれている。遺物は各層から出土している。縄文土器(第35図28)は、調査用排水路の掘削時に出土したものであるが、この遺構に伴うものと思われる。緑釉陶器皿(同34)、青磁椀(同36)のほか、図化できていないが、弥生土器や古墳時代の須恵器片も出土している。

南北溝群 E-2 地区で検出した南北溝の南側延長部分を検出した。S X 317341の埋没後に掘削されている。瓦器・土師器・須恵器片が出土した。

(3) 出土遺物(第35図28～37)

第35図34・36は、S X 317141から、他の遺物は包含層から出土した遺物である。

28は、口縁端部外面の下側に一条の沈線を入れて端部を凸帯状にし、刻み目を施す。29は陶邑編年TK209前後の杯身、30は須恵器椀、31は杯A、32は鉢である。33～35は緑釉陶器皿である。36は青磁椀である。37は平瓦である。

(4) 小結

E-3 地区は、調査面積が狭かったものの、湿地や南北溝を検出した。また、この地区でも縄文時代から中世まで各時期にわたる遺物が出土した。京都工区では、ほぼ全域で長岡京跡の下層遺構及び中世の遺構が広がっていることが確認されたが、この地区の東及び南側についてもさらに遺跡が存在することが予想される。

(鍋田 勇)

(2) 長岡京跡左京第303・314・315次 PA工区

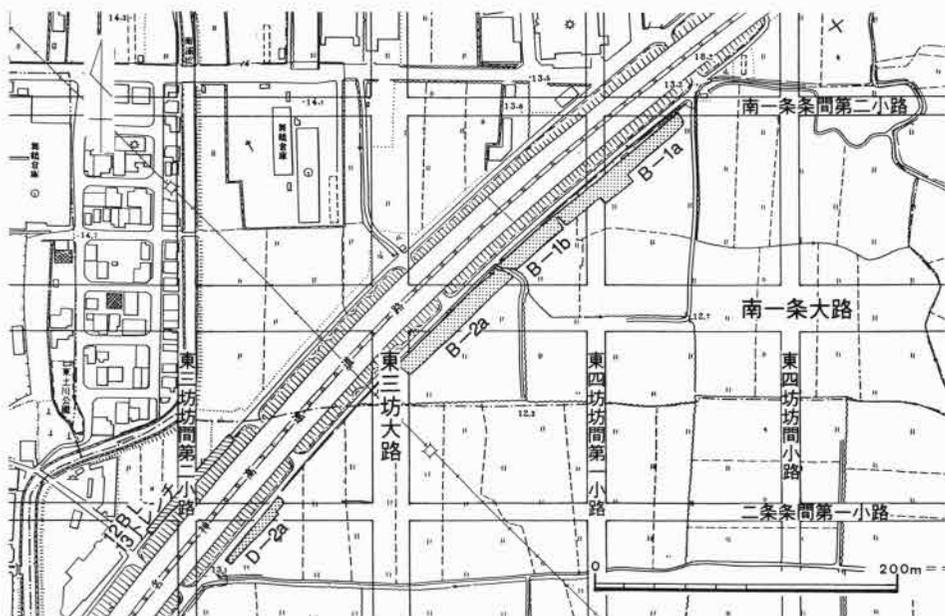
(7ANVKN・WSS-4地区)

1. はじめに

PA工区での調査は、今年度から開始した。調査地は、京都市南区久世東土川町金井田にあり、名神高速道路拡幅予定地内の仮称桂川パーキングエリア(PA)建設予定地に当たる。長岡京の条坊復原によれば、左京三坊南一条十五町及び同四坊南一条一・四・五町になる。条坊の東西道路では南一条大路が、南北道路では東三坊大路と東四坊第一小路が想定される地点である。また、縄文時代から奈良時代の東土川遺跡が広がっており、関連遺構の検出が予想された。仮称桂川パーキングエリアの建設は、56,000㎡にも及ぶ大規模開発であるが、今年度は本線の開通を優先し、調査することとなった。(戸原和人)

2. 調査概要

今回の調査では、以下に述べるように、複数の時代の遺構や遺物が確認されている。調査地周辺は、水はけがよく、人の生活に適した微高地を形成している。このことは、この場所が繰り返し利用された重要な理由の一つであったと考えられる。



第36図 PA工区 調査トレンチ配置図

①B-1 a地区

(1)基本土層

B-1 a地区は水はけのよい、人の生活に適した微高地上に位置している。このため後世の耕作による削平を受け、トレンチ中央部分は、耕作土、床土の直下で最終遺構面であるマンガンを多く含む黄褐色粘砂質土が認められた。中央部では、中世の素掘り溝が浅く検出され、本数も少なかった。近世と考えられる南北方向の竹を通した暗渠だけが一定の深さを保っていた。このことから、この微高地上の水田が現在のような平坦な景観になったのは、中世の素掘り溝が掘削された以降で、暗渠排水埋設以前と考えられる。トレンチの北東端は、長岡京期以前は湿地であった。遺構面は、近世、中世、平安時代以前の3時期に分かれる。近世の遺構面では、ほぼ全面にわたって浅い重複する南北方向の溝が認められたが、遺物がないことや、重複が余りに多く性格には記録することは不可能であったため、今回の概報では説明を割愛する。

(2)調査概要

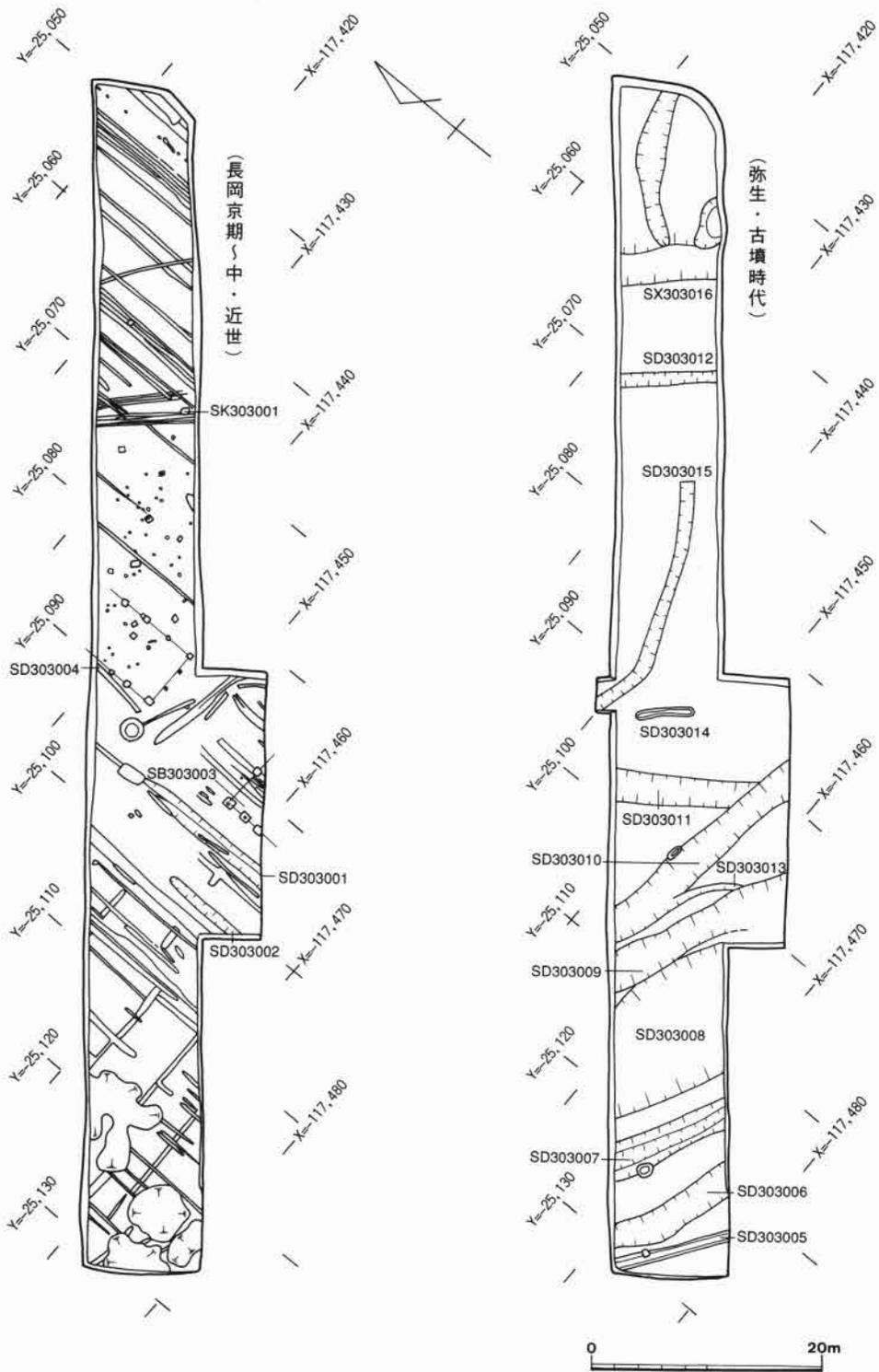
a. 中世 素掘り溝群と土坑を検出した。これらの溝は、1.南北方向の溝群、2.東西方向の溝群、3.北で西に約45°の振り角をもつ溝群の順に年代が古くなる。南北方向の溝からは瓦器が出土している。出土遺物には、白磁碗・青磁碗・瓦器碗などがある。土坑1は長径約0.9m・短径約0.7mの楕円形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。遺構内部には、拳大の角礫が数個入っていた。出土遺物(第38図1・4)には、白磁碗・瓦などがある。

b. 平安時代 南北方向の溝を数条検出した。出土遺物(第38図2・3・5~9・10~14・19・22~24)には緑釉陶器・土師器・須恵器などがある。

c. 長岡京時代 溝と掘立柱建物跡2棟を検出した。

溝S D 303001 南北方向の浅い溝である。拡張区では両肩がしっかりしていたが、本来の調査区部分では削平のため溝の続きが検出できなかった。幅約1.5m、検出面からの深さ約5cmである。平城宮式6721Gの軒平瓦をはじめ、多くの平瓦・丸瓦・須恵器・土師器を検出した(第38図15~18・20・21・28)。過去の調査で検出された、東四坊第一小路(東四坊坊間西小路)東側溝の延長線上に乗る。

溝S D 303002 拡張区で検出した南北方向の溝である。出土遺物(第38図25~27・29)には長岡京期以外のものは認められない。検出面での最大幅は約1.2m・深さ15cmを測る。この溝の位置は、東三坊大路の中心線から東三坊第二小路(東三坊坊間東小路)を折り返した位置にあり、過去のデータが正しければ、東四坊第一小路(東四坊坊間西小路)の路面に残された長岡京期の溝となることから東四坊第一小路(東四坊坊間西小路)東側溝に比定される可能性がある。X=-117,462.000でY=-25,101.200である。



第37図 PA I区B-1a地区 遺構平面図

掘立柱建物跡 S B 303003 一辺80cmの大きい方形掘形を持つ建物跡で、溝 S D 315001との関連が指摘できる。北西隅の柱掘形内には、拳大の礫が敷かれていた。南北の柱間約1.8m、東西の柱間約3.6mである。

掘立柱建物跡 S B 303004 南北3間以上、東西3間と考えられる建物跡である。後世の削平が著しく、柱穴の残り方はあまりよくない。

また、東四坊第一小路(東四坊坊間西小路)の西側溝の検出が期待されたが、今回の調査区内では検出していない。

d. 古墳時代

溝 S D 303005 断面形が逆台形を呈する。遺物は認められなかったが、埋土の特徴から、古墳時代のもものと想定できる。

溝 S D 303006 溝中央部分が一段下がる断面形を呈する。

溝 S D 303007 溝中央部分が一段下がる断面形を呈する。

溝 S D 303008 粘質土と砂層の互層の状態の埋土で充填された自然流路である。杭の密集が2か所確認できた。出土遺物には弥生時代中期のものが目立つが、最も新しい遺物には古墳時代後期の須恵器(第39図1・3・4)がある。

e. 弥生時代 集落を画していたと考えられる大規模な深い溝 S D 303009、S D 303010、S D 303011、S D 303012の4条と比較的小規模で浅い溝 S D 303013、S D 303014、S D 303015の計3条、さらに湿地状の地形 S X 315016を調査区の東北部で検出した。

S D 303009 弥生時代中期の土器(第39図15・17~19)を多く含む。砂層がラミナ状の堆積を示す部分が認められる。

S D 303010 切り合い関係から S D 303010は弥生時代後期以降のもと考えられるが、埋土中からは弥生土器(第39図2)以外のもは検出できなかった。

S D 303011 出土した弥生土器の多くは中期のものであったが、第39図の11で見られるように、弥生時代後期の器台がほぼ関係で出土している。

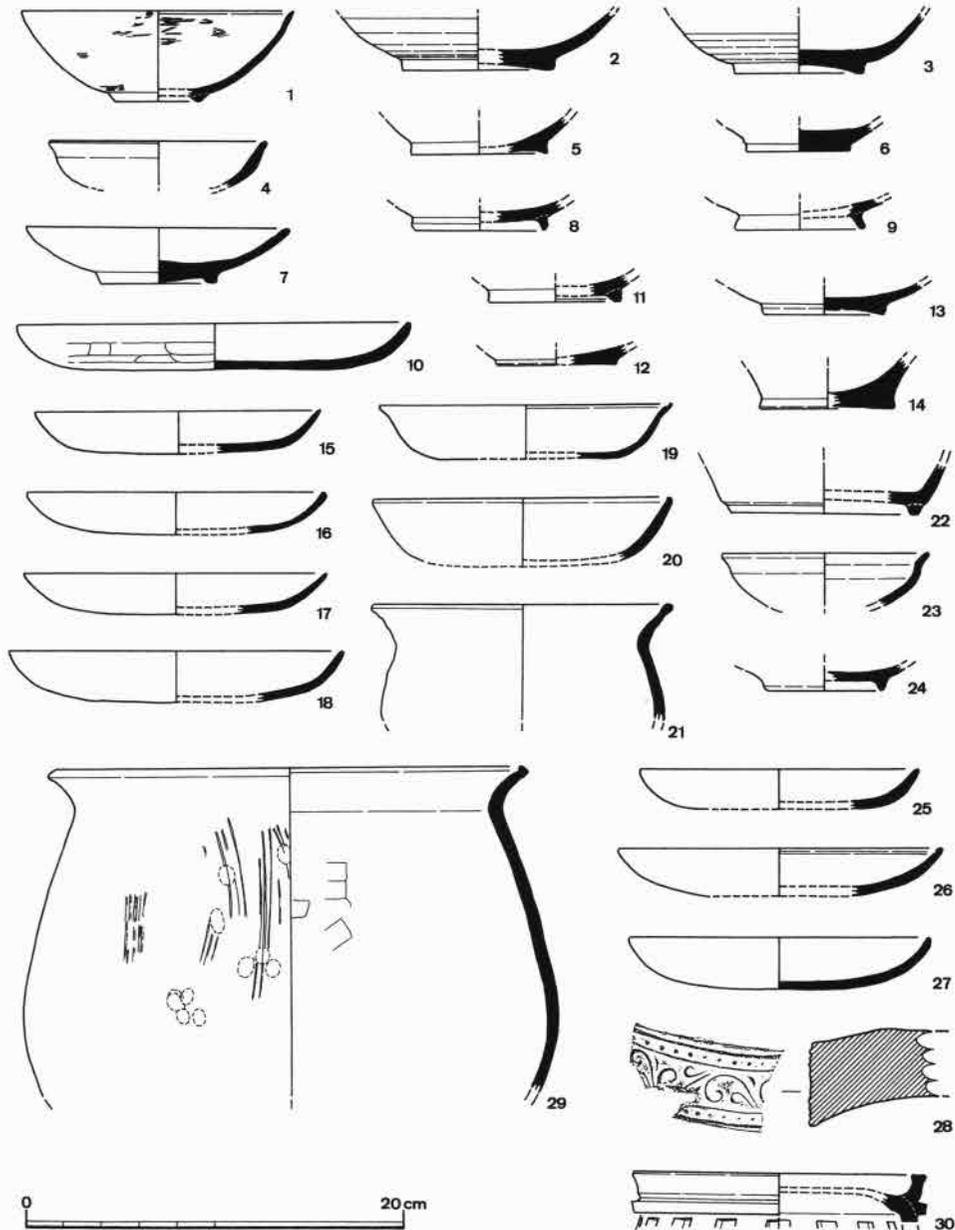
S D 303012 断面形が逆台形を呈する直線の溝である。埋土上層からは弥生時代中期の土器が出土している。

小規模な溝からは、弥生土器が多数出土した。これらの土器は、上方の部分が削られた状態で出土していることから、弥生時代の遺構面が後世、大規模に削平されていることが明かになった。

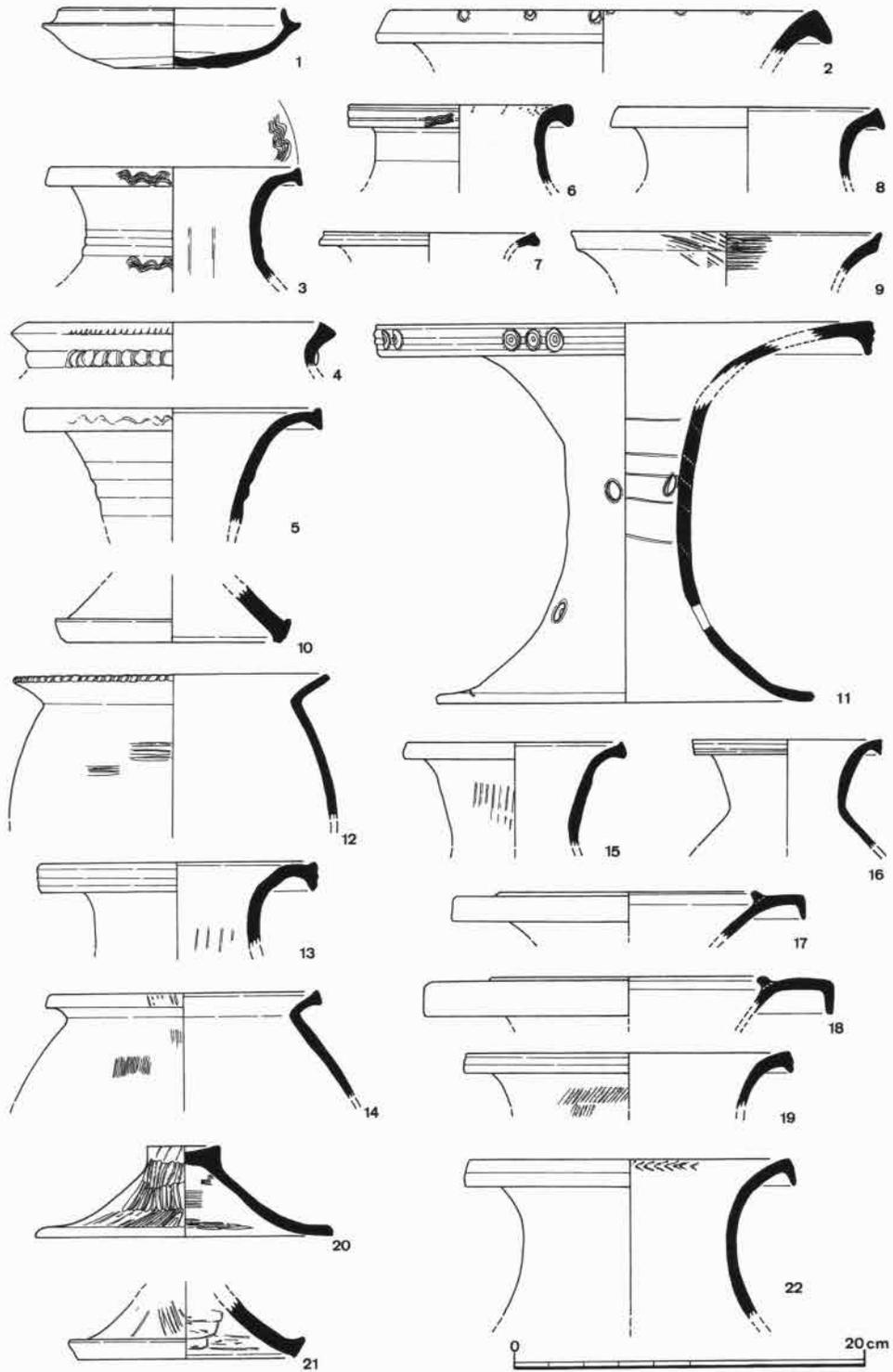
S D 303013 S D 303010、S D 303011によって切られる溝である。出土遺物から弥生時代中期のものであることがわかる。出土遺物には弥生土器(第39図7)以外に、石庖丁(第41図2)、サヌカイト製の剝片が認められる。

S D315014 断面が浅い皿状を呈し、「U」字状を呈する溝である。第40図4に見られる甕が溝底部に接地して、横向けの状態で検出できたが、上部については多くが削平によって失われていた。

S D303015 調査区内で始まり、屈曲して調査区西側に延びる断面が「U」字状を呈する溝である。屈曲部を中心に比較的多くの弥生時代中期の土器(第39図14・20~22、第40



第38図 PA工区B-1a地区 出土遺物実測図(1)



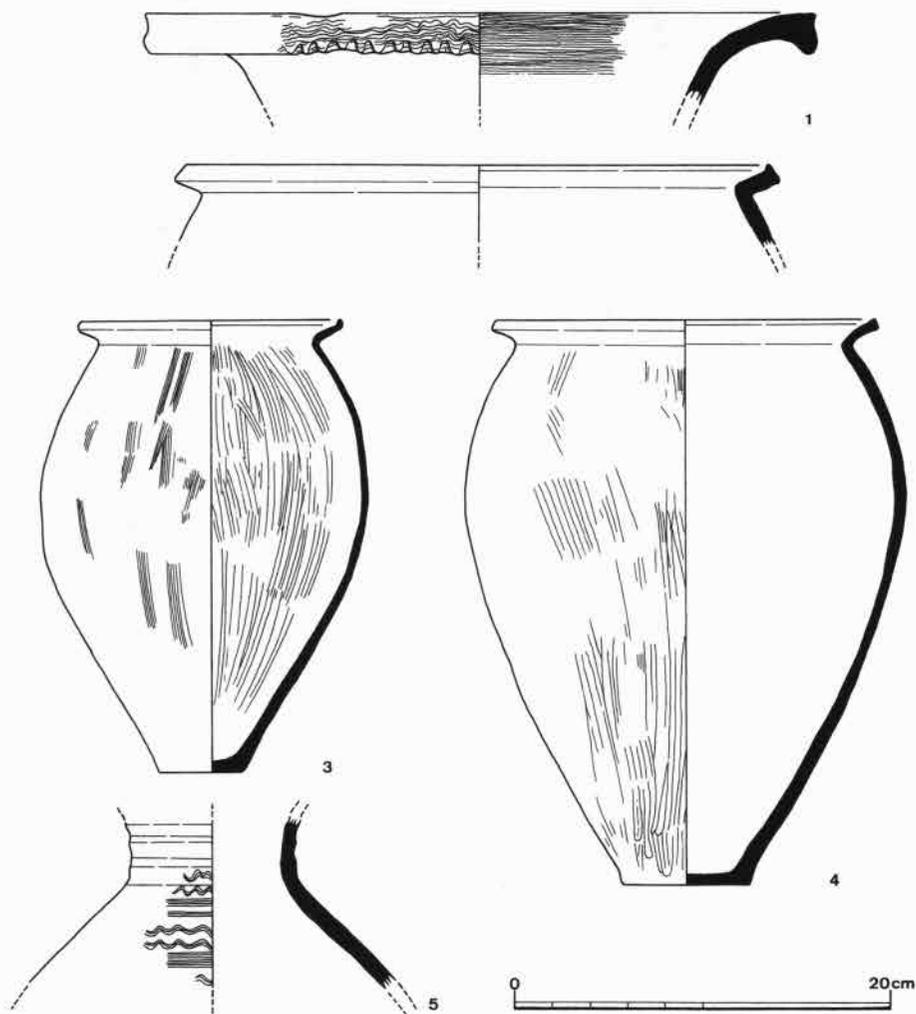
第39図 P A工区B-1 a地区 出土遺物実測図(2)

図2・3)が出土した。

S X 303016 調査区東北部の湿地状遺構である。流木と考えられる自然木が枝を付けた状態で多く出土した。遺物は極めて少ないが、年代のわかる遺物(第40図1)から、弥生時代中期のものと思定できる。

土器以外の遺物としては、木製品・打製石器・磨製石器が出土している。包含層から出土した磨製石器の中には青銅器を模した「銅剣形石剣」と呼ばれる製品があり、形式的には最も古い形態を持つものである。

(中川和哉)



第40図 PA工区B-1a地区 出土遺物実測図(3)

②B-1b地区

(1)はじめに

当調査地は長岡京左京南一条四坊四町に推定され、南一条大路の北に接し、また、町内のほぼ中心軸に位置する。検出された遺構は、溝・土坑・掘立柱建物跡などである。主要な遺構はトレンチの西側に集中する。

(2)調査概要

素掘り溝 幅0.2~0.4m・深さ0.3mを測る。断面は「U」字形を呈し、堆積土は灰褐色・灰色粘土である。溝は、東西・南北両方向あるが、おおむね南北溝が新しい。平安時代から近世に至る溝群は2~3回の繰り返しが見られ、その間隔は4~6mである。

掘立柱建物跡 S B 30301 梁間2間・桁行3間以上、東西と南面に廂を持つ東西棟の建物跡である。柱間寸法は、梁間2.4m(8尺)・桁行2.4m(8尺)等間、身舎から廂の出は、2.7m(9尺)で

ある。柱掘形は方形を呈し、身舎で一辺0.5~0.6m、廂で0.3~0.4mを測る。柱痕は、直径0.18mである。出土遺物は、土師器・須恵器がある。長岡京期に属するものである。

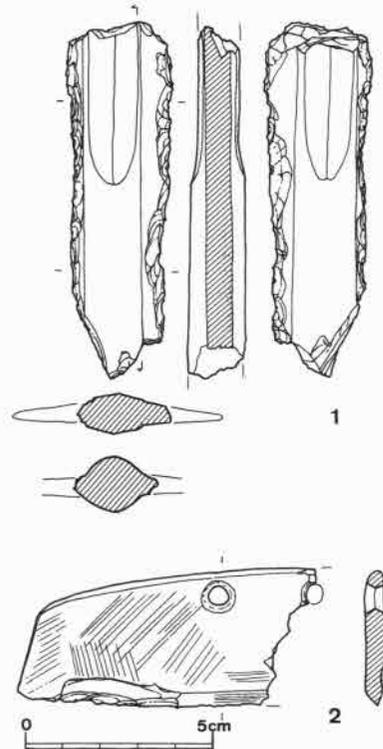
掘立柱建物跡 S B 30302 東西2間以上・南北2間以上の建物跡である。柱間寸法は、南北1.8m(6尺)・東西2.0~2.4mと不揃いであり、柱掘形も0.3~0.4mと小さいことから柵列であることが考えられる。この遺構は、重複関係からS B 01より新しい。

溝 S D 30303 幅0.8m・深さ0.3m、断面「U」字形を呈し、堆積土は、青灰色粘質土である。溝は西端、Y=-25,162.5m地点で立ち上がる。時期はS D 30304より新しい。

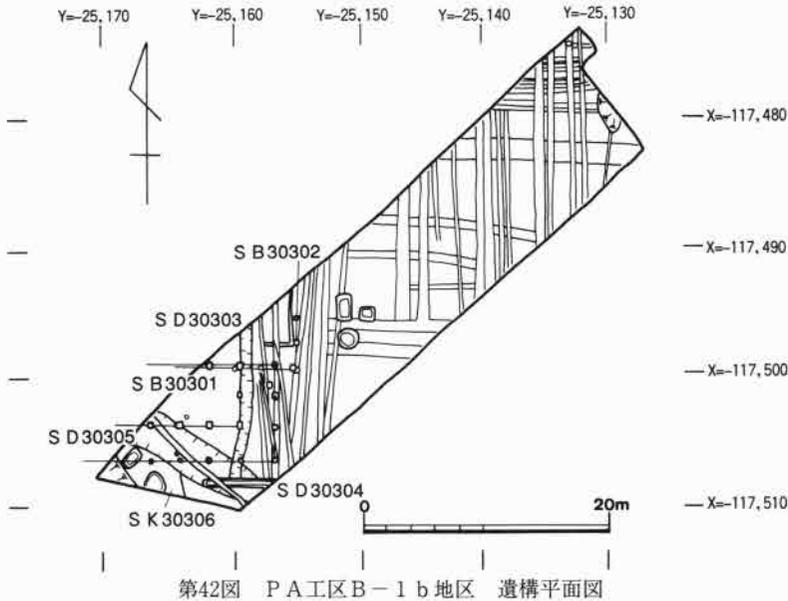
溝 S D 30304 幅1.0m・深さ0.4~0.5m、断面は逆台形を呈し、堆積土は淡灰褐色粘質土である。ほぼ南北方向の溝であるが、南半部で西南方向に曲がる。この遺構は重複関係から、S B 30301・S D 30303より古い、それほど時期差はない。

溝 S D 30305 幅3.0m・深さ0.5m、断面は皿状を呈する溝である。土層は、上位から茶灰色粘質土、暗褐色粘質土、青灰色粘砂質土の順に堆積する。溝の底部の両側には0.3~0.5m間隔の杭跡があった。

土坑 S K 30306 S D 30305、近世土坑、野井戸によって大きく潰されているため、平面



第41図 PA工区B-1a地区
出土遺物実測図(4)



形態は不明である。堆積土は、黄褐色粘質土と暗褐色粘質土が互層をなしている。底部付近の暗褐色土では、弥生土器甕が1点出土した。

(3)小結

S B 30301は、南一条大路に面し、四町の中軸線に位置している。S D 30303は、南一条大路の築地の雨落ち溝として考えられる。また、西端が途切れる地点は、二町の中軸線にのることから、町内に至る「入口」ではないかと思われる。

(竹井治雄)

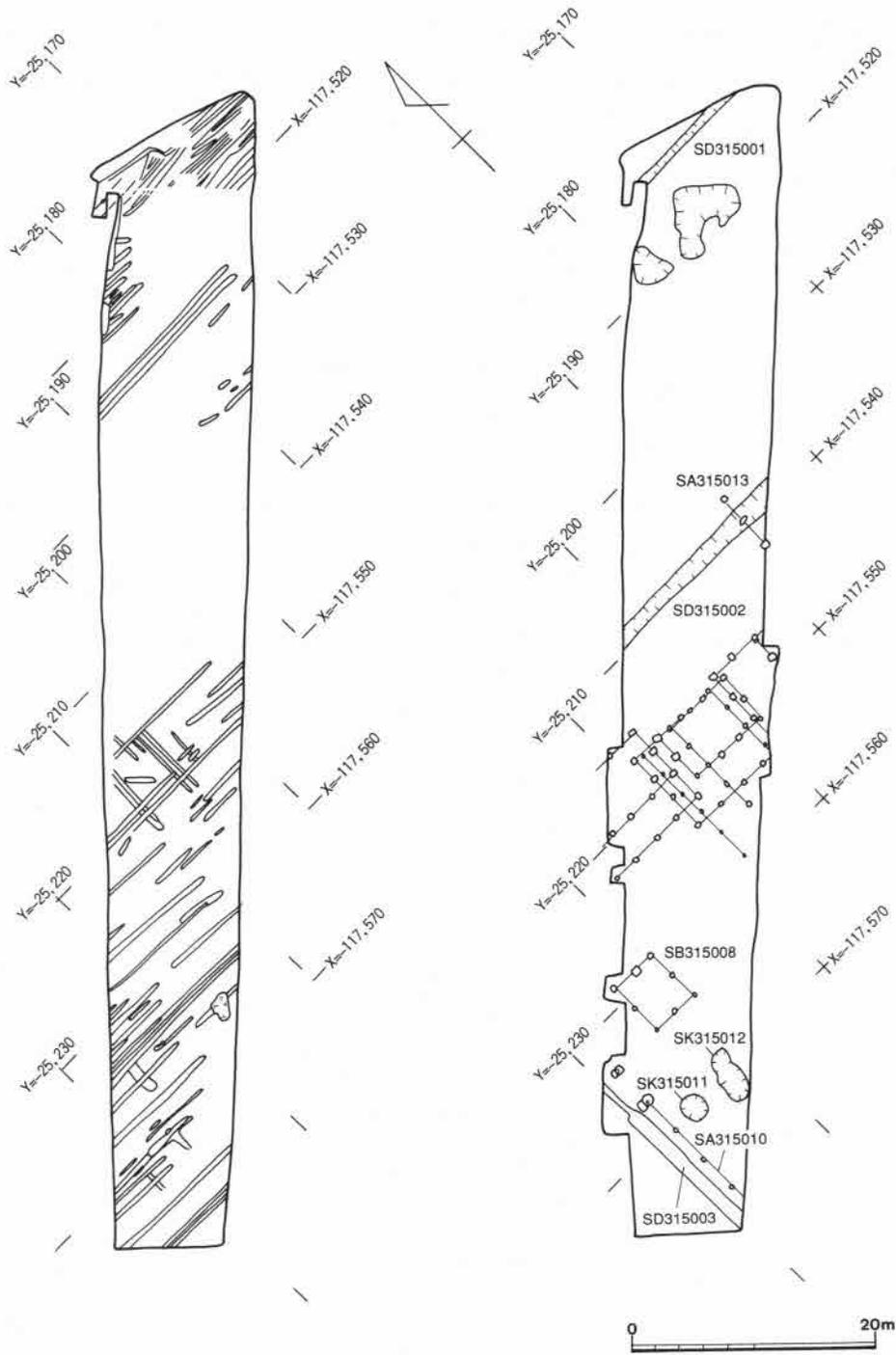
③B-2 a 地区

(1)基本土層

耕作土、床土を取り除くと大部分が遺構検出面となり、包含層と考えられる堆積は部分的にしか認められなかった。遺構検出面は、B-1トレンチと同様東北部では、暗黄褐色粘砂質土であるが、調査区中央部は礫層と変わる。この礫層は、暗黄褐色粘砂質土の下に潜るものである。

中世 南北方向を主体とした素掘り溝群を検出した。

平安時代 南一条大路(新二条条間大路)の南側溝上に柵列(S A 315013)と考えられる柱穴群が認められる。柱掘形内からは緑釉片が出土している。包含層遺物には、平安時代の緑釉陶器・土師器・須恵器などがあり、特徴的な遺物として緑釉陶器の内面に陰刻によって花柄の描かれたものが数点ある。



第43図 PA工区B-2a地区 遺構平面図

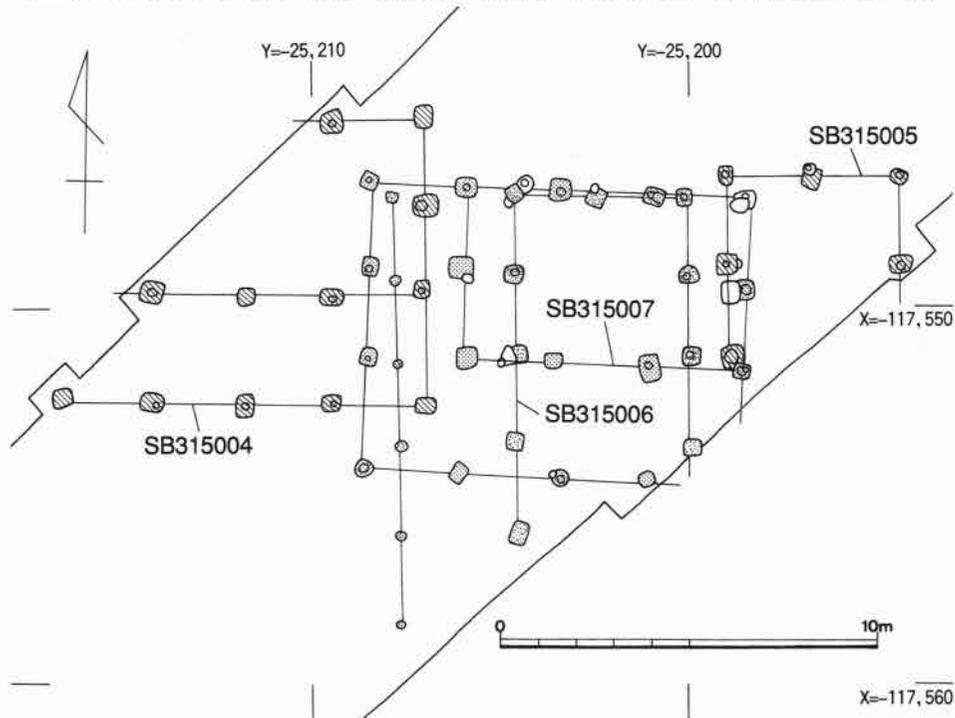
長岡京時代 南一条大路(新二条条間大路)の南北両側溝及び東三坊大路の東側溝、掘立柱建物跡5棟、柵2条、土坑2などを検出した。

二条条間大路北側溝 S D 315001 断面が逆台形を呈し、立ち上がりが急な東西方向の溝である。埋土中から長岡京期の須恵器、土師器、凝灰岩(第45図3)が出土している。検出面における幅は約11m・深さ約40cmである。溝心の座標は $Y = -25,170.000$ で $X = -11,7513.800$ である。

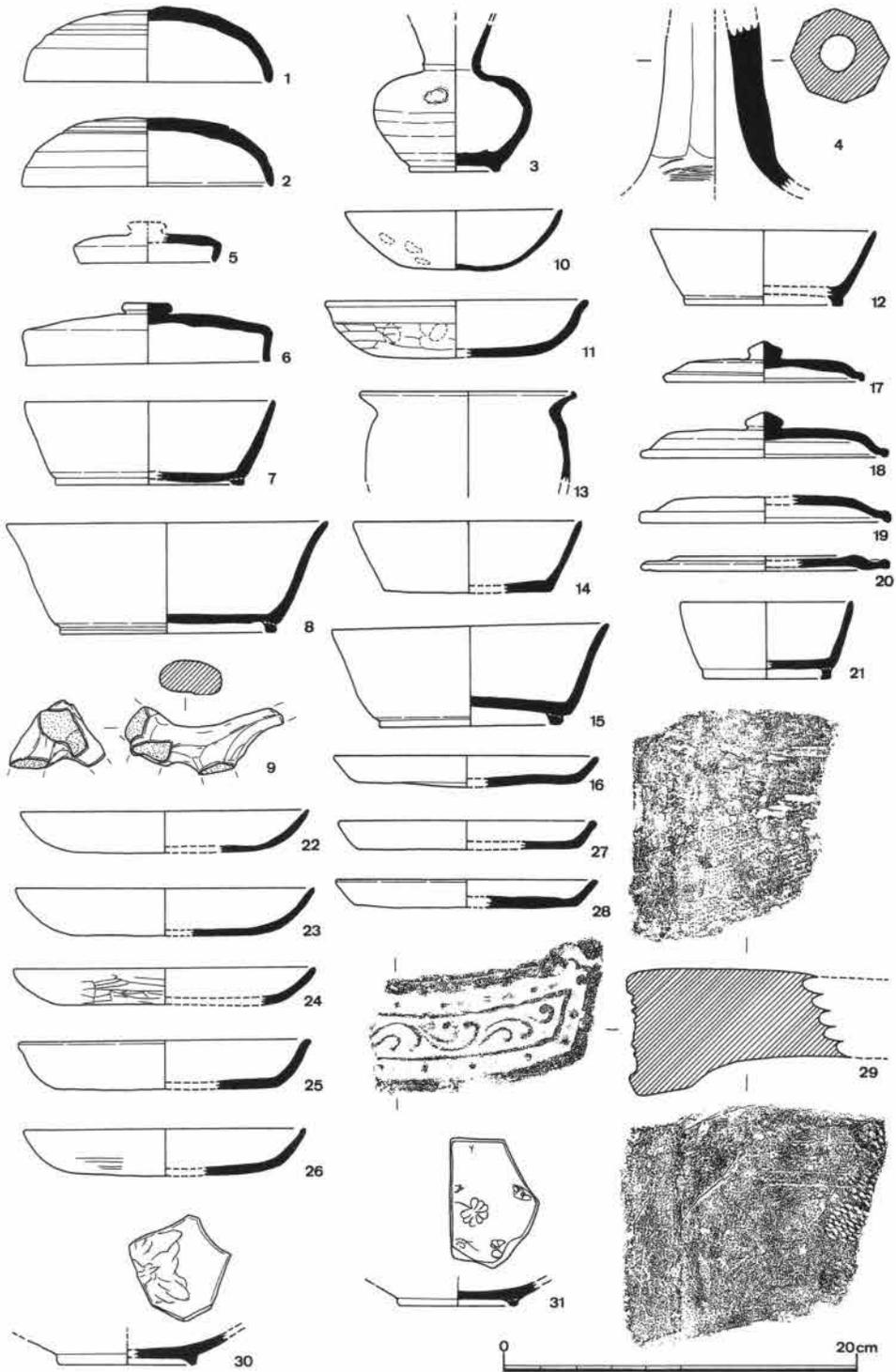
二条条間大路南側溝 S D 315002 断面が逆台形を呈した東西方向の溝である。断面から2度以上の溝の掘り直しが認められる。溝底部には木材の削りくずと考えられる木片が出土したが、木筒などは検出できなかった。出土遺物には、長岡京期の須恵器、土師器、馬と考えられる下顎骨と種名が不明の獣骨が出土した(第45図4~7)。検出面における幅は約1.3m・深さ約65cmである。溝心の座標は $Y = -25,190.000$ で $X = -117,538.600$ である。

東三坊大路東側溝 S D 315003 調査区内で北部が細くなる。この部分に橋が架けられていたものと考えられる。溝の断面形は「U」字状を呈する。埋土中から長岡京期の須恵器、土師器が出土している(第45図8~12)。検出面における幅は約1.3m・深さ約2.5cmである。溝心の座標は $X = -177,570.000$ で $Y = -25,230.100$ である。

掘立柱建物跡 S B 315004 南側に廂を持つ東西棟の建物跡である。身舎は2間×4間以



第44図 PA工区B-2a地区 掘立柱建物跡群



第45図 P A工区B-2 a地区 出土遺物実測図

上の建物跡である。柱掘形内からは、第45図29の長岡京式の軒平瓦が出土している。桁行約2.4m・廂部分約3.0m・梁間約2.4mである。

掘立柱建物跡 S B 315005 方形掘形を持つ南北棟の建物跡である。2間×3間以上の建物跡である。桁行約2.4m・梁間約2.4mである。建物跡の方位から S B 315004 と同時期のものと考えられる。

掘立柱建物跡 S B 315006 方形掘形を持つ南北棟の建物跡である。2間×4間以上の建物跡である。桁行約2.2m・梁間約2.2mである。

掘立柱建物跡 S B 315007 南と西に廂を持つ南北棟の建物跡である。身舎2間×3間の建物跡である。桁行約2.4m・梁間約2.7mである。南の廂の柱間距離は3.0mである。西の廂の柱間距離は2.7mである。

掘立柱建物跡 S B 315008 方形掘形を持つ2間×2間の建物跡である。東西方向の柱間約1.8m、南北方向の柱間約2.4mである。柱掘形内からは、凝灰岩や柱痕が出土している。

柵列跡 S A 315009 S B 315006 並行する柵列跡である。柱間も一致する。

柵列跡 S A 315010 東三坊大路東側溝 S D 315003 に並行する柵列跡である。東三坊大路東側溝 S D 315003 の幅が狭くなる部分で1対の大型の方形掘形が認められることから、門跡と考えられる。柵列の柱間は約3.3mである。

土坑 S K 315011 楕円形の土坑で焼土と炭、長岡京期の土器を多く含んでいた(第45図13~26)。検出面からの深さは約20cmである。

土坑 S K 315012 不定形の浅い土坑である。埋土内からは、長岡京期の須恵器や土師器が出土している(第45図27・28)。

調査地は、長岡京の東辺に近い場所ではあるが、凝灰岩や瓦を用いた立派な建物跡があったものと想定できる。掘立柱建物跡群と南一条大路(新二条条間大路)の南側溝の間には、ほとんど柱跡のない空間がある。この余白帯は、大路と宅地を区切る築地があった可能性を示している。

(中川和哉)

④D-2 a 地区

(1)はじめに

この調査地は、長岡京跡左京二条三坊十五町にあたり、西隣りの十町の調査では、東三坊第二小路、側溝、建物跡などが検出されている。当該地でも宅地のようなすが明らかにされることを期待した。検出された遺構は、溝・掘立柱建物跡・土坑・流路などがある。

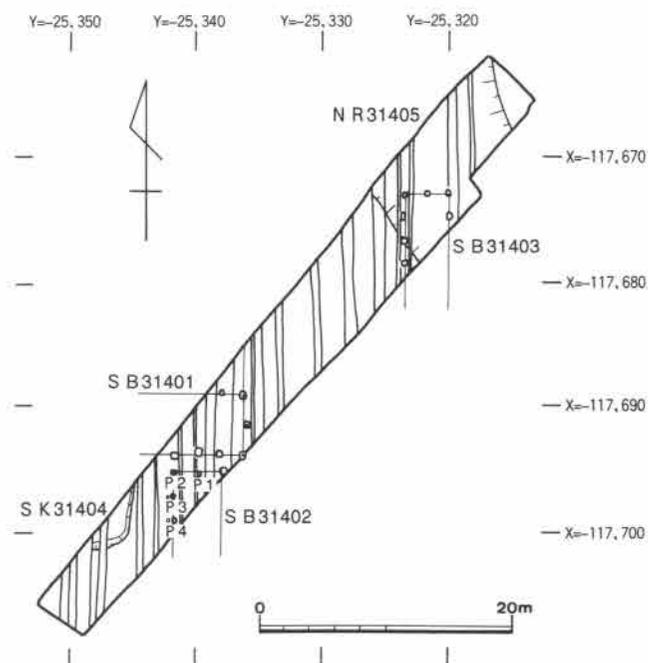
(2)調査概要

素掘り溝 幅0.2~0.3m・深さ0.2~0.3mの断面「U」字形を呈し、堆積土は淡灰褐色土である。溝は南北方向に向き、真北に近いものが多い。溝の間隔は約5.3mである。出土遺物には瓦器片などがある。

掘立柱建物跡 S B 31401 梁間2間・桁行3間以上の東西棟の建物跡である。柱間寸法は梁間2.4m(8尺)・桁行1.8m(6尺)を測る。柱掘形は、一辺0.5mの方形を呈し、埋土は暗褐色土と黄色土の混合層である。柱根は直径0.18mを測る。棟持柱は、柱通りから外へ0.3mずれていることから、屋根は切妻造りと推察される。

掘立柱建物跡 S B 31402 東西2間以上・南北2間以上の建物跡である。柱間寸法は、東西1.8m(6尺)・南北1.8m(6尺)を測る。柱掘形は、一辺0.4mの方形を呈し、S B 31401より小さい。埋土は、暗褐色土と灰色粘砂質土との混合層である。北西隅の柱穴P-2には直径15cmの柱痕があった。柱穴P-1は、柱通りの内へ入っていることから棟持柱である。したがってこの建物跡は南北棟、切妻造りである。P-3、P-4の外側1.4mの位置に一辺0.2mの小柱穴があり、これは入り口の扉、縁側の東柱、ステップの基礎部分と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 31403 梁間2間・桁行3間以上の南北棟建物跡である。柱間寸法は、梁間・桁行とも1.8m(6尺)である。柱掘



第46図 P A工区D-2 a地区 遺構平面図

形は一辺0.4～0.5mの方形であるが、不正形のものもある。埋土は暗褐色土である。

土坑 S K 31404 S B 31401の西側3.4mの位置に掘られた土坑である。平面形は不明である。深さは0.2m、断面は皿状を呈し、堆積土は暗褐色土、黄褐色の混合層で炭化物・焼土を含む。出土遺物は、須恵器・土師器・木製品などがある。

流路 N R 31405 幅10m・深さ0.8mの北西から南東方向への流路跡である。土層は、上層から暗茶褐色土、黒褐色土、灰色砂質土の順に堆積する。出土遺物は、上層では瓦・須恵器・土師器、中・下層では流木があった。

(3)小結

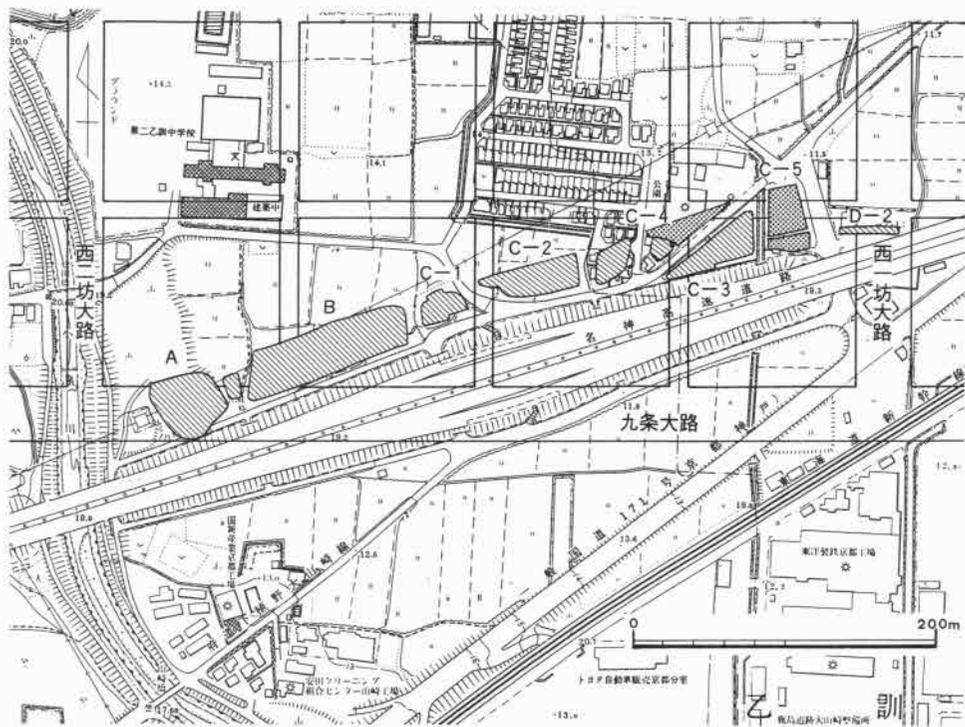
3棟の掘立柱建物跡は、梁間2間の小規模な雑舎といわれる建物跡である。建物跡の時期は、遺物の分布状況やS K 31401との関係からみて、平安時代に属するものではないかと思われる。

(竹井治雄)

(3) 長岡京跡右京第428次調査 下植野工区
(7ANTGD-4地区)

1. はじめに

名神高速道路関係遺跡の発掘調査は、昭和63年から実施しており、このうち下植野工区は平成2年度から発掘調査に着手し、今年度で4年めを迎えている。昨年度までの調査で、下植野工区の発掘調査対象地の大部分の調査が終了し、C地区の一部をわずかに残すのみである。下植野工区は、乙訓郡大山崎町の小泉川から長岡京市の小畑川にかけての名神拡幅予定地にあたり、今年度は長岡京跡右京九条二坊三・四町の推定地と、西二坊第一小路と九条第二小路推定地のC地区4cトレンチ、5a、5bトレンチを調査した。近年の名神高速道路関係の調査では、大山崎町内で条坊に関わる遺構の検出をみていない。ちなみに、山中 章氏による長岡京復原案によると、京外(九条大路より南約150m)に位置している。^(注15) また、下植野工区全体は、縄文時代から中・近世にいたる「下植野南遺跡」の範囲にも含まれている。

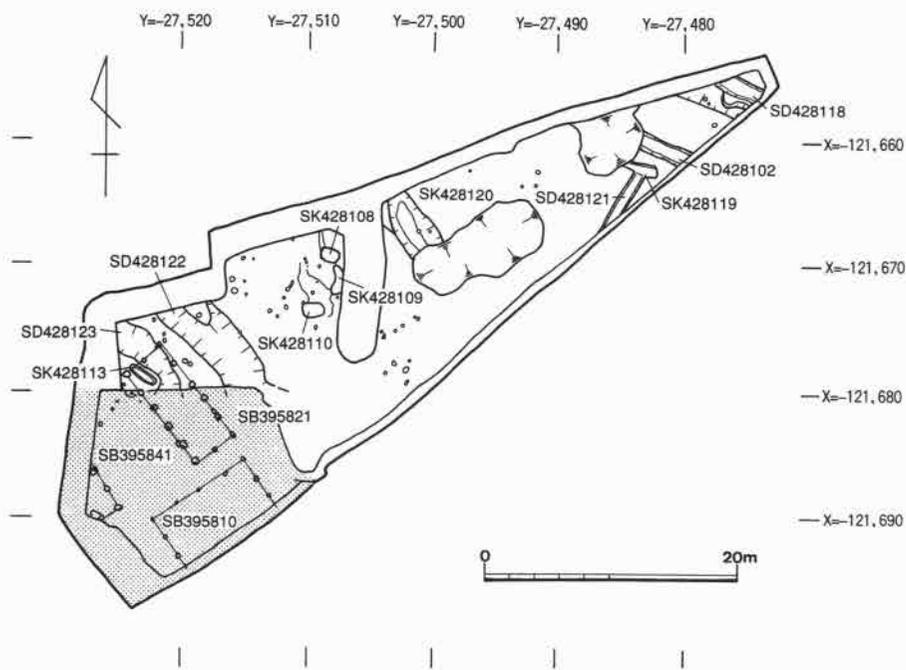


第47図 下植野工区 調査トレンチ配置図

現在までの下植野工区東半部の発掘調査地点については第52図にまとめてあるが、特に、縄文時代晩期の深鉢の検出、古墳時代中期から後期にかけての大規模な集落と古墳を検出しており、下植野工区西半部では長岡京期から平安時代前期の建物跡群の検出など、顕著な遺構群を確認している。

C-5地区は、用地確保の関係から、全面を同時に発掘調査を行うことができず、二回に分けて調査を行ったため、それぞれにa、bの枝番号を付した。C-4地区は、92年度に引き続き3回目の調査であり、cの枝番号を最後尾に付した。C-5地区は、C-3地区の東側に位置するため、古墳や古墳時代竪穴式住居跡、縄文時代の遺構の検出が期待された。発掘調査により、中世井戸跡、平安時代掘立柱建物跡、古墳時代掘立柱建物跡(?)を確認した。C-4c地区では、C-4b地区で検出した掘立柱建物跡の北半部を確認した。現地調査は、C-5a地区を岩松が担当し、C-5b地区・C-4c地区を戸原が担当し、それぞれが本文を執筆した。

(岩松 保)



第48図 下植野工区C-4c地区 遺構配置図
網部は、前年度調査

2. 調査概要

①C-4c地区

a. 中世 小形のピット群と溝を検出した。これらのピット群の中には、調査地の南を走る久我畷に並行するものもあるが、多くは建物としてもまとまるものもなく、性格の不明なものほとんどである。出土遺物には、白磁碗・青磁碗・瓦器碗などがある。

溝S D428118 調査地の北端で検出した二段に落ち込む溝である。溝上面からは明灰色の中・近世と考えられるピットが検出されたが、暗青灰色の粘質土で埋まっており、中世の水田耕作に伴う用排水路と考えられる。

b. 古墳時代 土坑や溝と掘立柱建物跡1棟を検出した。

土坑S K428108～428110 いずれも長軸1.0～1.5mを測る土坑で、暗褐色の粘質土によって埋まっており、遺物が認められない。埋土の状況から、古墳時代の周辺の遺構と同時期のものと考えられる。

土坑S K428113 平面長楕円形で長軸2.4m・短軸0.8mを測る。土坑内からは、土師器が出土した。この土坑は、旧河道S D428122・23に並行しており、この河道との関連が指摘できる。

旧河道S D428122 北西から南東に流れる旧河道である。直径2～5cmの砂礫によって埋まっており、幅2.2m・深さ0.5mを測る。

旧河道S D428123 S D428122と並行し、同様の砂礫によって埋まっている。幅1.6m・深さ0.4mを測る。これらの旧河道は、下流の方で広がりを見せ、調査地の全体を覆っている。

掘立柱建物跡S B395821 昨年度の調査右京第364次調査で検出した南北3間以上、東西2間と考えられる建物跡の北端を確認したものである。規模は南北5間・東西2間で、柱穴の掘形は一辺約40cmの平面隅丸方形を呈しており、N-37°-Wの傾きをもっている。周辺の調査で確認されている竪穴式住居跡や古墳については、今回の調査区内では検出していない。

(戸原和人)

②C-5a地区

(1)調査概要

調査地の土層は、宅地造成盛り土が約1mあり、その下が旧地表面に当たる水田耕作土(30～50cm)、床土の黄褐色砂礫混じり砂質土(約20cm)が認められた。この下面が遺構検出面で、中央部やや北より南側一帯には、時期不詳のS R428112や113の埋土である砂礫層が分布しており、この上面でS B428106をはじめとする平安時代以降の遺構を検出した。

これらの遺構を検出した高さは、標高10.3m程度である。調査地の北側1/4には、北に向けて徐々に厚くなる暗茶褐色土が最大15cm程度堆積しており、この下面で古墳時代の溝であるS D428109などを検出した。

今回の調査では、中・近世の素掘り溝、井戸状の土坑、平安時代の掘立柱建物跡、古墳時代の掘立柱建物跡(?)、古墳周溝(?)を検出している。以下、主要な遺構について述べたい。

素掘り溝群 ほぼ東西方向に検出した素掘り溝群で、座標北約10°西で北に振れる。調査地の中央部より北半で検出した。旧地表面の耕作土直下の床土とはほぼ同じ埋土が入っていた。掘形の断面は「U」字形で、検出高は5～15cmと浅く、ところどころで途切れるものもある。幅は1.5m～50cmで、不定のものもある。これらの溝群は、その他の遺構すべてに切り勝っている。これらの溝からは、数点の瓦器小片や中国製白磁片が出土しており、中世をさかのぼらないものであろう。

土坑S K 428101 検出高20cm程度の土坑で、内部から瓦器片が出土している。

土坑S K 428102 南北3.3m・東西1.6mの東半部を検出し、大半は調査地外にのびる。検出高15cm程度の浅い土坑で、検出した範囲にあっては、隅丸方形の平面形を呈している。内部からの遺物の出土はわずかで、数点の瓦器片が出土している。

土坑S X 428103 調査地中央部で検出した径5.5m・検出高1.1mの大形の土坑で、埋土は灰褐色～黄褐色砂礫である。断面形は、掘り鉢状を呈している。内部からは、須恵器片や瓦器片が出土した。後述のS R 428112内堆積の砂礫層に掘削されており、中世の野井戸的なものと考えられる。

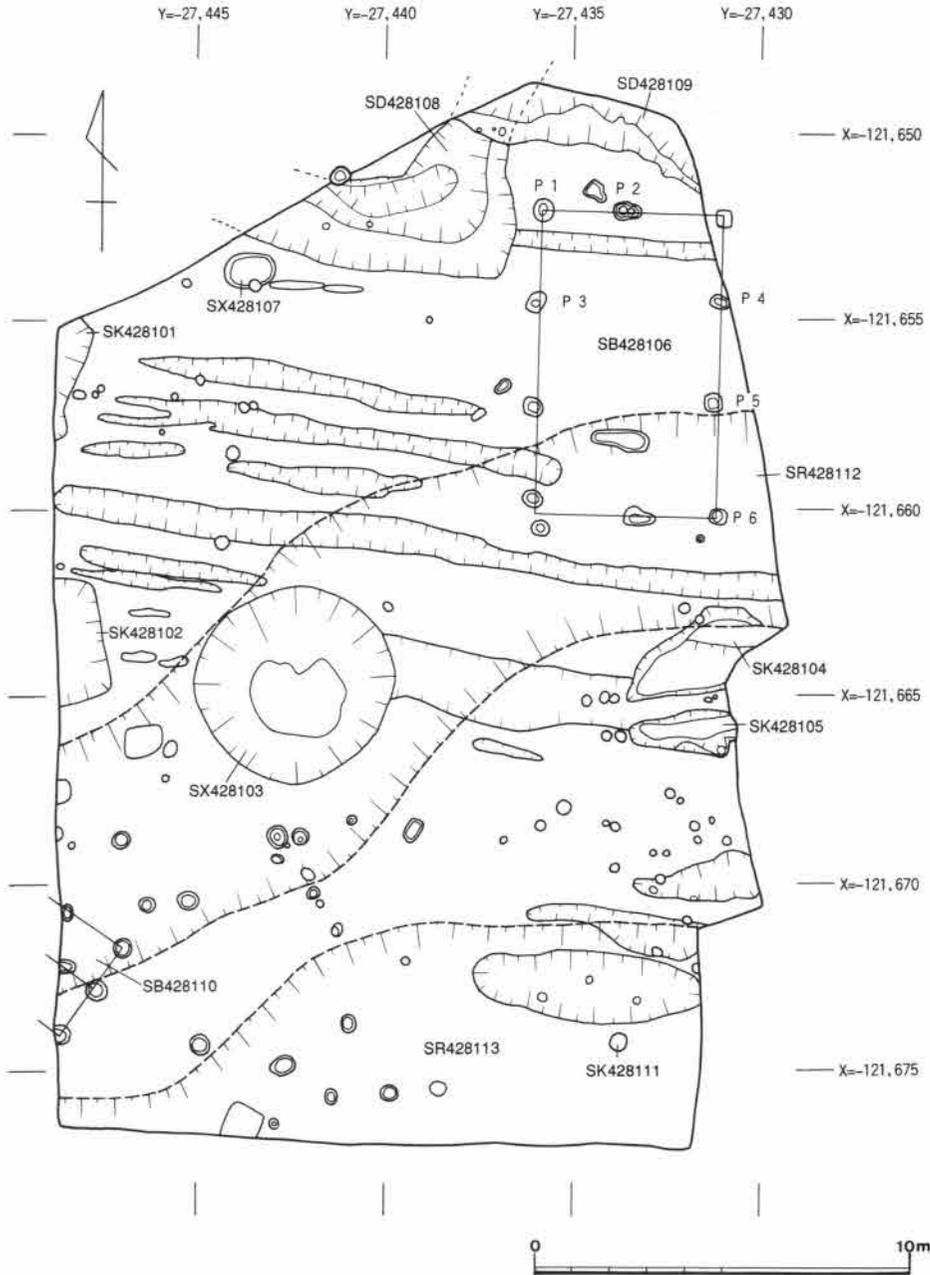
土坑S X 428104 調査地中央東側で、4.8m×1.6mにわたって検出した不定形の土坑で、検出高は約60cmである。南側のS X 428105と西端の位置がそろうこと、ともに相対する辺が直立気味に掘削されていることから、何らかの関連を有していたと推定されるが、その性格は不明である。埋土は、淡黄灰色砂礫が堆積しており、内部からは第50図2～6の土器が出土しており、これらから10世紀後半から11世紀初頭頃のものとして推定できる。

土坑S X 428105 S X 428104と何らかの関連を有していると考えられるが、その性格は不明である。検出高約60cmで、平面形が1.1m×3m以上の土坑である。埋土は、暗灰色～暗茶褐色土である。

掘立柱建物跡S B 428106 2間×3間の掘立柱建物跡で、座標北より約2°北で東に振れている。柱穴は方形である。柱抜き取り痕に石や土器を混入させている。西北隅のP1の底にはさらに土坑が掘削されており、土坑中には石とその上に壺(第50図14)が置かれていた。柱穴の土層断面の観察から、建物を建てる以前に据えられたものであり、地鎮的な

祭祀に利用されたものと推定される。平安時代初頭から前期の時期が与えられる。

土坑 S X 428107 調査地北端で検出し、東西1.3m・南北90cmの平面形が楕円形を呈する土坑である。検出高は約35cmで、内部には大きく二層の埋土があり、下層が茶褐色混黄褐色土、上層が黄褐色混茶褐色土である。内部からは、土器の出土は全くなく、時期の決



第49図 下植野工区C-5a地区 遺構平面図

め手に欠けるが、埋土は後述のS D428108・109に基本的に似ており、これらの溝と同時期のものとする。

溝S D428108 「L」字形に検出した溝で、断面形はなだらかに立ち上がる「U」字形を呈する。南辺は二段に掘削されており、コーナー部分が最も深くなっている。検出高は最大で50cmを測る。ここから北・西に向けて徐々に浅くなっている。内部からは図化し得ないが、古墳時代の後期と判断される須恵器が出土している。

溝S D428109 S D428108と重複して検出した溝で、S D428108とよく似た埋土—茶褐色土系の土があった。断面にはほぼ平行して検出したため、その幅は確認できず、また底面も検出できているかどうかの確証はない。検出した高さは最大で約30cmである。重複関係はS D428109→S D428108となっており、新→古となる。時期的にはS D428108とほぼ同じと考えている。

掘立柱建物跡S B428110 西南隅で検出した2間×2間以上の掘立柱建物跡である。これらの南半で検出した柱穴群は、柱穴内から出土した遺物に時期の決め手がない。南半部は、遺構面が灰白色の砂礫層で、柱穴内埋土は暗茶褐色系統の土質で、中・近世のものとは異なっている。また、柱の並びが南北を意識していないので、平安時代の建物跡とも全く違うと考えられる。C-3地区では、西北方向を向いた古墳時代の掘立柱建物跡が検出されている。以上のことから、S B428110を含めてこれらの柱穴群は古墳時代のものと考えたい。

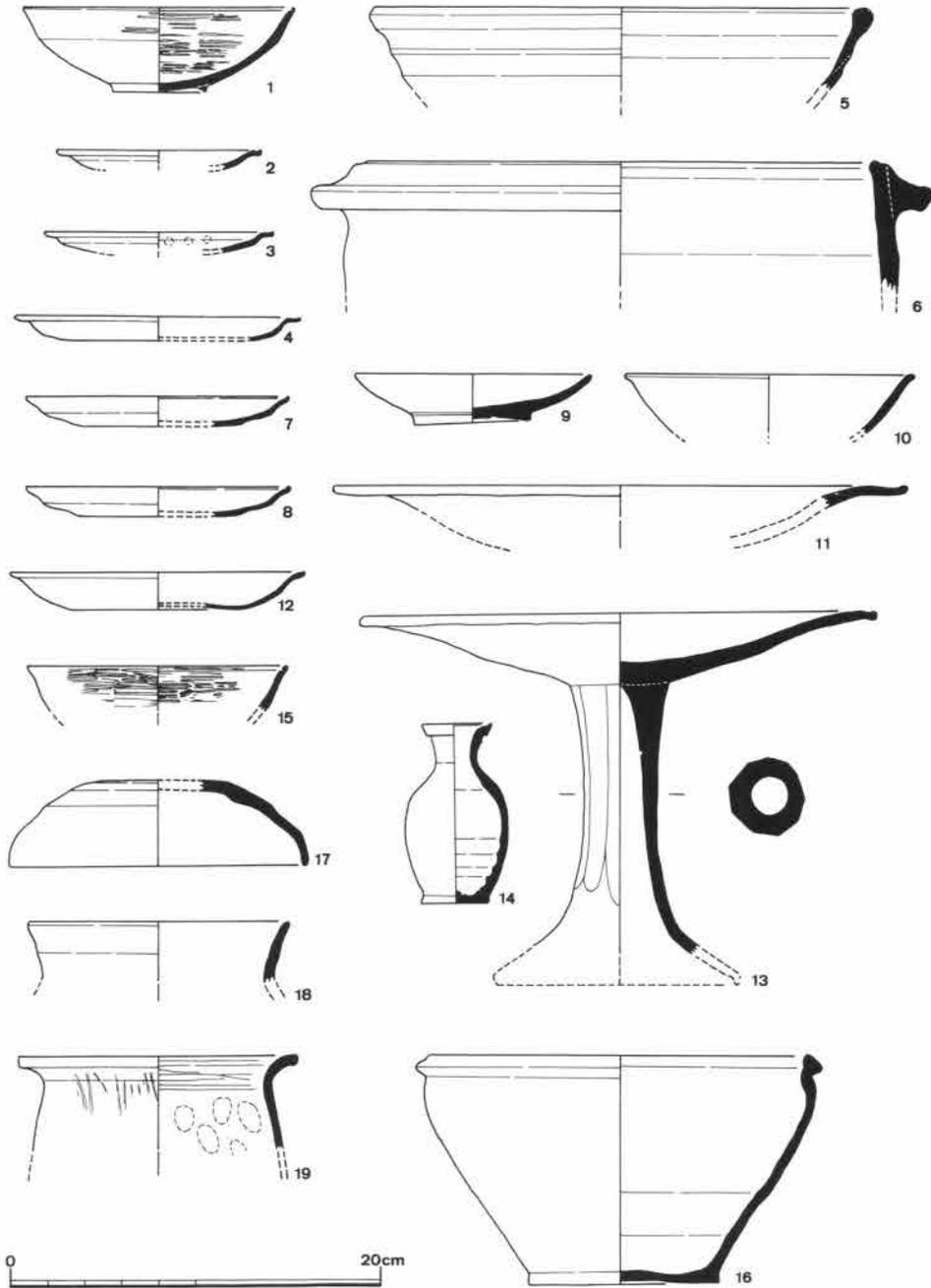
土坑S K428111 径45cm・検出高25cmの円形の土坑で、内部から縄文土器片が出土している。縄文土器片以外に、この土坑から出土した遺物はないのであるが、他の遺構から同種の土器の出土をみなかったため、この土器がこの土坑の年代を与えるかどうかはよくわからない。

旧河道S R428112・113 上述の遺構検出面には、調査地中央部から西南にかけてと、南辺部には砂礫が分布しており、上述の遺構を検出していることから、古墳時代以前の自然流路と推定できる。S R428112の断ち割りでは、70cm以上の砂礫の堆積を確認したが、底面は確認できなかった。また、調査地東南部に設定したS R428113の断ち割り内では、80cm以上の厚さで砂礫が堆積していたが、これも底面は確認できなかった。ともに、遺物の出土はなかった。

(2)出土遺物

第50図は、主として検出遺構から出土した土器の実測図である。1は瓦器碗で、S X428103から出土している。2～6は、S X428104から出土したもので、2～4が土師器皿、5が須恵器鉢、6が土師器羽釜である。7～11は、S B428106の柱穴P5から出土した土

器である。7・8が土師器皿で、9が緑釉陶器、10が無釉陶器、11は土師器高杯片である。12~14は、SB428106のP1から出土した。このうち、14は、この建物を建てる直前の祭祀に伴う土器と判断されるもので、P1の下層の土坑から出土している。15は黒色土器で、



第50図 下植野工区C-5a地区 出土遺物実測図

P 6 から出土し、16は須恵器鉢で、P 2 から出土した。17~19は、古墳時代の遺物で、17は調査地北辺の調査用の側溝を掘削した際に出土したものであるが、S D 428108、S D 428109のどちらの溝から出土したかは定かではない。18・19は、S D 428109から出土した土師器甕である。

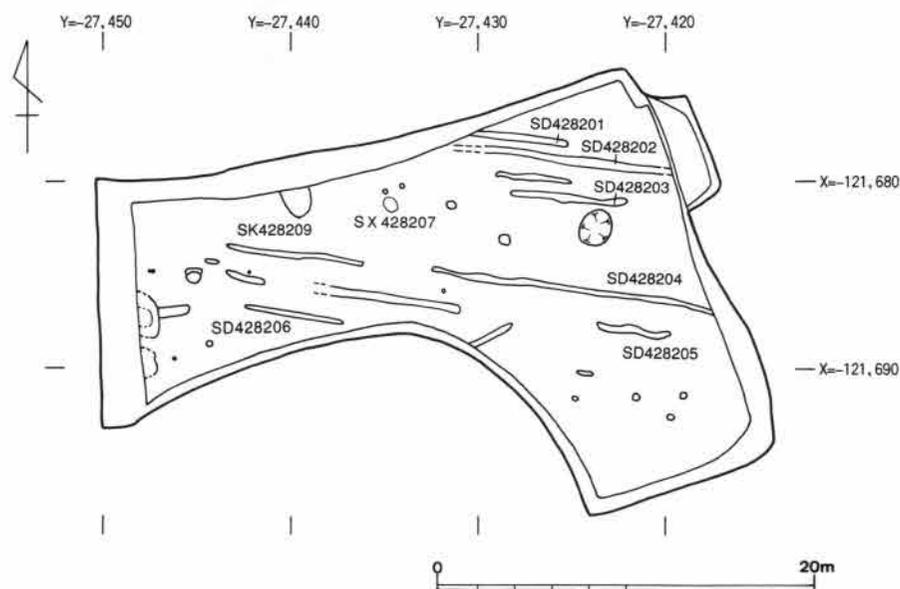
③C-5b 地区

中世 現耕作土・床土直下の上層遺構として南北方向を主体とした素掘り溝群を検出した。この約20cm下層より東西方向の素掘り溝群を検出した。

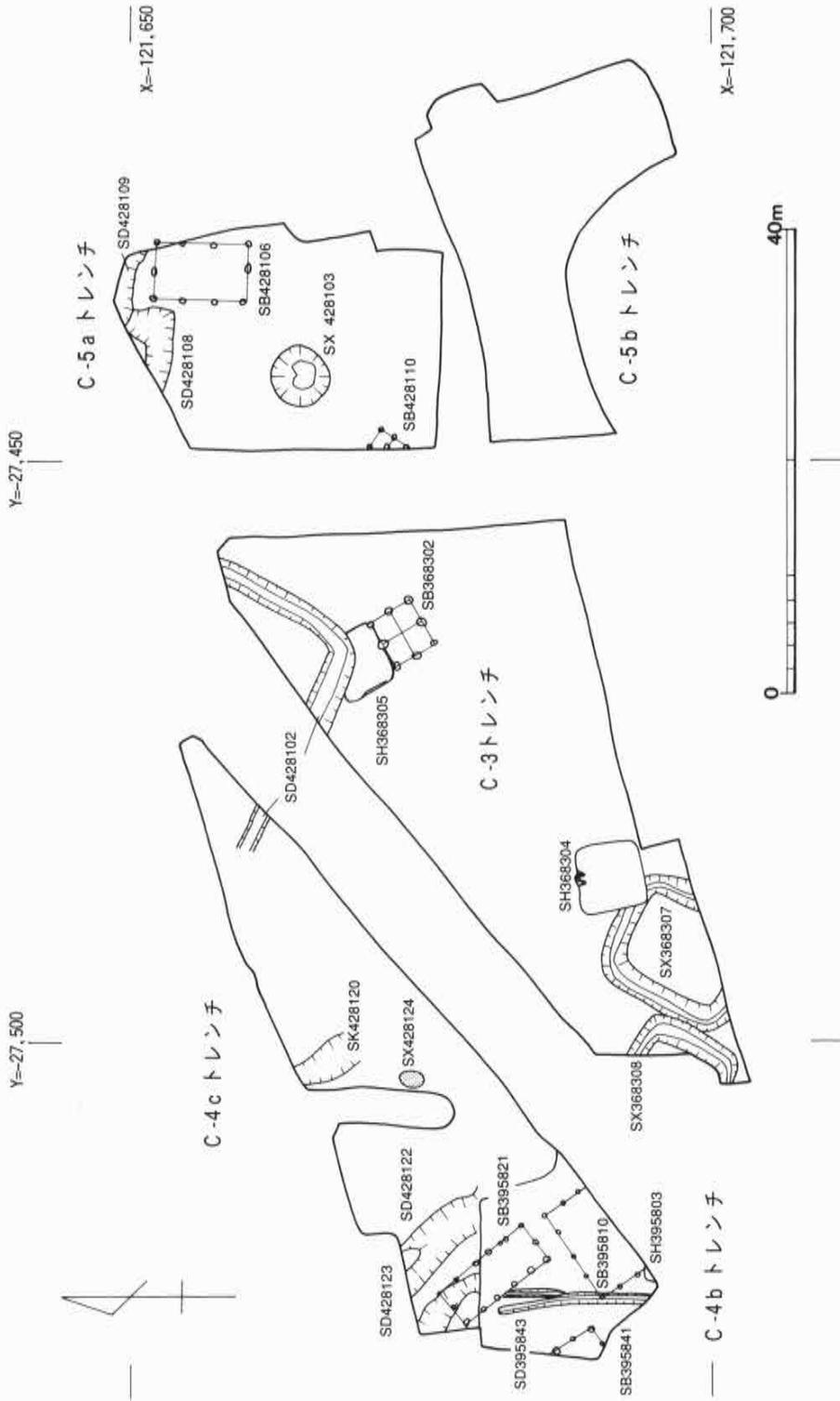
溝 S D 428201~428206 幅約20~30cmの東西溝でところどころで途切れる。N-6°-Eの傾きを持つ。これらの溝群は、C-5 b 地区北半で検出した溝群とほぼ同じ傾きを持っている。水路をはさんだC-3 地区で検出した中世溝群は、南北方向に掘られており、水田区画を別にしてしていることがわかる。これらの溝から出土した遺物はほとんどないが、数点の瓦器片が出土している。

3. まとめ

今回の調査地は、長岡京跡右京九条二坊三・四町の推定地内で、西二坊第一小路と九条第二小路の検出を目的としたが、条坊に関わる遺構の検出はできなかった。以下に簡単に調査の成果をまとめたい。



第51図 下植野工区C-5b地区 遺構平面図



第52図 下植野工区C-3・4・5地区 主要遺構図

①近年は平城京型の復原案を2町北に上げる考えが有力になっているが、下植野工区での調査でも、新案を補強する結果となった。

②C-5 a 地区で検出した掘立柱建物跡S B428106は、下植野南遺跡の最も東端で見つかった平安時代の建物跡になる。下植野南遺跡の平安時代建物跡群の広がりとその性格を考える上での一つの資料になると考えられる。また、この建物跡では建築前の祭祀を確認した。

③昨年度に行ったC-3地区の調査では、古墳と竪穴式住居跡(後期)を検出しており、C-5 a 地区で検出したS D428108とS D428109は古墳を構成する周溝の可能性もある。また、掘立柱建物跡S B428110も古墳時代と考えられ、墓と住居がセットとして捉えられるかもしれない。

④右京第395次調査のC-4 b 地区で検出した古墳時代と考えられる掘立柱建物跡(S B395821)は、2間×3間以上の規模を確認しており、N-37°-Wの傾きをもっていた。今回の調査で、その規模が南北5間・東西2間であることが判明した。柱間は、梁間・桁行とも1.85m前後を測り、ピット内から、少量の土師器・須恵器が出土した。これにより古墳時代後期の建物跡であると推定される。

⑤縄文土器片が数点出土しており、下植野南遺跡の東半部全域に縄文土器が分布しているようである。

(戸原和人・岩松 保)

おわりに

今年度で名神関係遺跡の調査は6年度目になる。昨年度から開始した京都工区での調査では、年度後半に道路公団と協議をおこないE地区の調査を追加した。これは、C地区で検出した東四坊大路の西側溝により、東側溝の検出を目的としたものである。これらの調査の結果は、東四坊大路については、西側溝と考えられる南北溝1条の検出にとどまった。この外にも、東四坊では左京第197次調査ものを合わせ掘立柱建物3棟を検出しており、左京域での宅地の広がりを示すものと考えられる。また、A・B地区で検出した北西から南東に流れる旧河道は、弥生時代中期から流れており中世段階で埋没している。長岡京期には、まとまった祭祀遺物の投棄が見られ東四坊坊間小路は認められなかった。東西道路としては、南一条条間大路の南北両側溝を一部の地点で検出したが、南一条第二小路については、今回の調査では、検出していない。京都工区での調査は、今年度をもってすべて終了した。

PA工区は、京都市の南区から伏見区にかけての「桂川パーキングエリア」予定地にあたり、今年度は車線部分を先行して調査している。

今回の調査地は、長岡京の左京南一条四坊四・五町にあたり、宮域からは東に離れているが、大規模な建物があった可能性を示す遺物が多く出土した。南一条大路は、西へ向かうと近年有名になった東院跡の南面に通じ、さらにその西が宮域となる。

このように調査地周辺は、大路を介して宮域との交通事情も良く、宅地として良い条件を持っていたと想定できる。仮にこの地が高級官僚の住む二町以上の宅地であったならば、南一条第一小路を検出できなかったことが理解できる。今回は、調査範囲が限定されているため、検出した遺構の性格を確定するまでにはいたらなかったが、今後のパーキングエリア全域での調査に期待がもたれる。

下植野工区の調査は、右京九条二坊三・四町の推定地内で、西二坊第一小路と九条第二小路の検出を目的としたが条坊に関わる遺構の検出はできなかった。近年は平城京型の復元案を2町北に上げる考えが有力になっているが、下植野工区での調査では、新案を補強する結果となった。また、下植野南遺跡では、平安時代初頭から前期の建物が、最近の調査によって検出例が増えている。

(戸原和人)

- 注1 戸原和人・三好博喜「長岡京跡左京第200次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注2 戸原和人・三好博喜ほか「長岡京跡左京第216・右京第343次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注3 戸原和人・竹井治雄ほか「長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第47冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注4 戸原和人ほか「名神高速道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注5 戸原和人ほか「名神高速道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第57冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注6 現地指導者 京都文教短期大学名誉教授 中山修一
調査参加者 現地調査に参加していただいた方々は以下のとおりである(敬称略)。
赤木 香・赤坂 希・阿部達雄・井上 綾・今井利彦・岩崎香織・上田 勉・上田正彦・江口正孝・大倉英士・岡崎昌宏・奥井 愛・尾関眞二・尾田洋子・河合弥生・木戸久美子・小島孝修・小谷加奈子・小原 香・小牧朝子・小牧 勲・小村美香・坂本真弓・重松康希・高田豊彰・首藤有里・白河豊基・杉本厚典・高浜知子・武生幸子・田中満太郎・飛田浩一・永井正勝・永見真知子・長友朋子・広瀬時習・藤原登紀雄・掘 ヨウ子・松本健一郎・三阪優子・水谷美智

代・溝口博士・宮本純二・武藤さやか・森岡かおり・八津谷 都・矢野裕介・吉田泰士・脇村有美・明日礼子・荒川仁佳子・奥村美紗代・小澤和子・倉辻万里子・佐藤卓子・高山英美・竹内千賀子・竹内友美・田村重野・内藤チエ・長尾美恵子・西村敏子・長谷川マチ子・久平喜美子・村上優美子。

注7 土器型式の決定については以下の文献を参考にした。

泉 拓良・玉田芳英「文様系統論—緑帯文土器—」 『季刊考古学』17 1986

玉田芳英「中津・福田KⅡ式土器様式」(『縄文土器大観』4 小学館) 1989

千葉 豊「緑帯文系土器群の成立と展開—西日本縄文後期前半期の地域相—」 『史林』72-6 1989

本遺跡出土の縄文土器を整理するに当たって以下の方々の指導助言をいただいた。

家根祥多 立命館大学文学部助教授

千葉 豊 京都大学埋蔵文化財研究センター助手

西田泰民 古代学協会研究員

橋本久和 高槻市教育委員会

注8 『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報 昭和63年度』 京都市文化観光局 1988

注9 液状化現象については、中塚 良・寒川 旭両氏から現地にてご教示いただいた。記して感謝したい。

注10 「長岡京跡左京第196・214次(7ANEGZ-1・2地区)発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第34集 (財)向日市埋蔵文化財センター 向日市教育委員会) 1992

なお、SD286311出土遺物については、山中 章・國下多美樹・木村泰彦・小森俊寛・平尾政幸各氏からご教示を受けた。特に、國下・木村両氏からは多岐にわたりご指導を受けた。記して厚く感謝したい。

注11 鍋田 勇「長岡京条坊制地割計画の再検討(上・下)」(『京都府埋蔵文化財情報』第48・49号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注12 山中 章「古代条坊制論」 『考古学研究』第38巻第4号 1992

注13 『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』 古代の土器研究会編 1993

注14 SD317137出土遺物については、当センター職員の田代 弘・石崎善久から教示を得た。

注15 注12に同じ。

2. 京都南道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要

はじめに

京都南道路関係遺跡は、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて、一般国道1号バイパス(京都南道路)建設に伴い調査を行う遺跡の総称である。国道1号バイパスは、京都盆地と大阪平野にかけて淀川沿いに帯状に広がる京阪地域を通り、京都都市圏(京都市伏見区)と大阪都市圏(門真市)を結ぶ総延長約30kmの幹線道路である。また、路線帯内には、京都側の京滋バイパスと大阪側の近畿自動車道を結ぶ第二京阪自動車道路(日本道路公団)も同時に建設され、京阪間の広域幹線ネットワークが形成されることになった。京都府域約8.8km間(京都南道路)では、昭和63年度より八幡市の木津川左岸から綴喜郡田辺町(府境)約5.5km間の路線帯内で発掘調査を行っており、その成果は当調査研究センターが刊行している発掘調査概報で報告しているところである^(注1)。

今年度に発掘調査を実施したのは、八幡市域では継続調査中の内里八丁遺跡B地区、田辺町域で荒坂横穴群と松井古墳状隆起1か所の3遺跡である。

内里八丁遺跡は、八幡市内里小字八丁・日向堂に所在する。内里八丁遺跡の調査は、昭和63年度の試掘調査に始まり、遺構の検出をみた遺跡の南部地区(A地区)で平成元年度から本格的な調査を開始している。内里八丁遺跡は、木津川左岸沖積地に存在する埋没自然堤防上に営まれた、弥生時代後期末～鎌倉時代の複合遺跡であることがこれまでの調査成果によって明らかとなった。これまでに調査を終えたA地区では、下層の旧自然堤防の後背湿地部から弥生時代後期末の水田跡2面を検出している。また、上層部では古墳時代前期と飛鳥・奈良時代を中心とする遺構・遺物を検出している。今年度の調査は、試掘調査段階で多量の出土遺物をみた自然堤防上に位置するB地区の調査である。B地区ではこれまでに飛鳥・奈良～平安時代の調査を終えており、下層部には水田遺構・竪穴式住居跡など、弥生時代後期末～古墳時代の遺構の検出が予想された。内里八丁遺跡の発掘調査は、平成5年5月20日から平成6年2月10日の期間で、B地区約1,300m²を対象として実施した。

荒坂横穴群は、男山丘陵の南に連なる美濃山丘陵東端部に位置し、八幡市美濃山小字荒坂～綴喜郡田辺町松井地先に所在する。調査対象地は八幡市と田辺町に分かれるが、今年度は田辺町域が対象となった。荒坂横穴群の調査は、平成5年7月19日から同年11月2日の期間で丘陵斜面約1,000m²(うち試掘500m²)を対象として実施した。

松井古墳状隆起は、路線帯内の樹木伐採で新たに認められた尾根上の隆起部であり、過去に調査を終えた口仲谷古墳群の南に位置する。調査は、平成5年8月9日から平成5年9月14日の期間で、約600m²を対象として実施した。

今年度の発掘調査は、調査第2課調査第3係長小山雅人、同調査員竹原一彦・森島康雄が担当し、多くの補助員・整理員の協力を得た。調査に際しては、八幡市教育委員会・田辺町教育委員会・京都府教育委員会・京都府山城教育局などの諸機関から多大な協力をいただいた。

なお、調査に係る経費は、建設省近畿地方建設局が負担した。本書は、各遺跡の担当者が執筆し、文末に名を記した。

(竹原一彦)

位置と環境

京都府の南部には、桂川・鴨川・宇治川・木津川によって開かれた広大な山城盆地が形成されている。これらの河川は、京都と大阪の府境に接する男山丘陵と天王山に挟まれた狭隘部で合流した後、淀川となって大阪湾に注いでいる。盆地の中央部、京都市伏見区・宇治市・久世郡久御山町にまたがる一帯には昭和初期まで巨椋池が存在し、古くは伏見区淀付近に桂川・宇治川・木津川の合流部があったと推定されている。

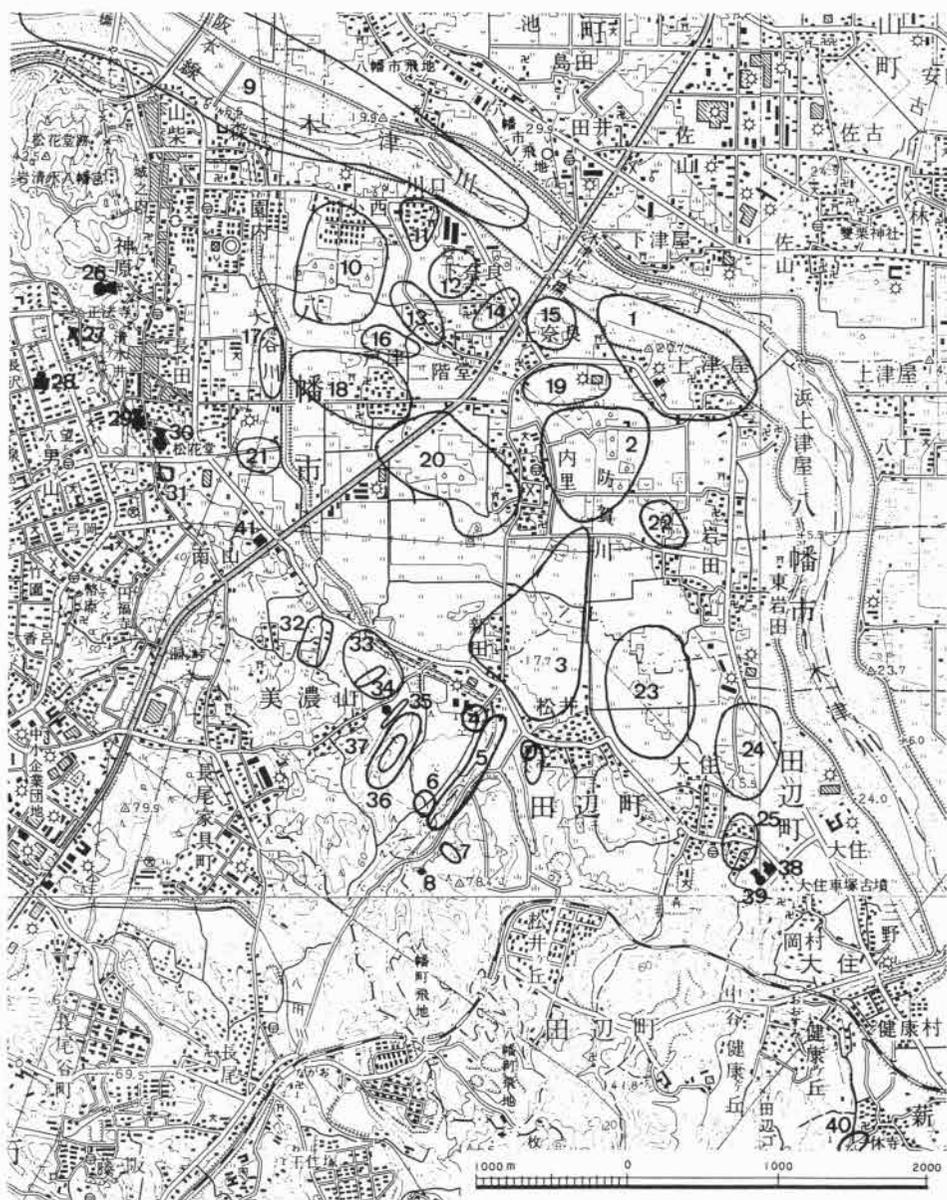
今年度に調査を実施した内里八丁遺跡・荒坂横穴群・松井古墳状隆起が所在する八幡市と綴喜郡田辺町は、京都・大阪の府境に面して所在する。両市町は、山城盆地の南縁部に位置するところから、地形の上で当地域は北の木津川沖積地と南の丘陵部に分かれる。

これまでの調査は、丘陵及び台地部での調査が先行し、沖積地での調査例は少ないが、以下、今年度に調査を実施した遺跡周辺地域で、代表遺跡を中心に時代を追って概観する。

旧石器時代の遺跡は少なく、八幡市では荒坂遺跡からナイフ形石器、田辺町では高ヶ峯遺跡で石核が採集されている。また、近隣では大阪府枚方市楠葉東遺跡で有舌尖頭器・ナイフ形石器が出土している。これらの遺跡は、すべて丘陵部に所在する遺跡である。

縄文時代では明確な遺跡が判明していないが、八幡市のヒル塚古墳から前期後半の土器片、金右衛門垣内遺跡から後期の切目石錘が出土している。田辺町では山崎遺跡から縄文後期の石棒・異形石器が出土しているほか、飯岡の木津川河川敷きから縄文土器が出土している。

弥生時代に入ると遺跡数も増加する。前期の遺跡は、まだ発見されていないが、中期以降丘陵部に高地性集落が認められる。八幡市では金右衛門垣内遺跡(中期前半～後期)・井の元南遺跡(中期中葉)に代表され、後期には幣原遺跡・美濃山廃寺下層遺跡・南山遺跡で



第53図 調査地周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|---------------|--------------|------------|------------|------------|
| 1. 上津屋遺跡 | 2. 内里八丁遺跡 | 3. 新田遺跡 | 4. 女谷横穴群 | 5. 荒坂横穴群 |
| 6. 荒坂遺跡 | 7. 口仲谷古墳群 | 8. 松井古墳状隆起 | 9. 木津川河床遺跡 | 10. 川口扇遺跡 |
| 11. 川口環濠集落 | 12. 下奈良遺跡 | 13. 今里遺跡 | 14. 出垣内遺跡 | 15. 上奈良北遺跡 |
| 16. 奥戸津遺跡 | 17. 舞台遺跡 | 18. 戸津遺跡 | 19. 上奈良遺跡 | 20. 内里五丁遺跡 |
| 21. 一ノ坪遺跡 | 22. 西岩田遺跡 | 23. 魚田遺跡 | 24. 散布地 | 25. 東林遺跡 |
| 26. 石不動古墳 | 27. 式部谷遺跡 | 28. 茶臼山古墳 | 29. 西車塚古墳 | 30. 東車塚古墳 |
| 31. 志水廃寺 | 32. 金右衛門垣内遺跡 | 33. 狐谷遺跡 | 34. 狐谷横穴群 | 35. 美濃山横穴群 |
| 36. 美濃山廃寺下層遺跡 | 37. 美濃山廃寺 | 38. 大住車塚古墳 | 39. 大住南塚古墳 | 40. 堀切横穴群 |
| 41. ヒル塚古墳 | | | | |

竪穴式住居跡が検出されている。田辺町における高地性集落では、中期に開始される狼谷遺跡があり、後期にはいと天神山遺跡・飯岡遺跡から住居跡群の検出をみている。平野部でみると、八幡市では木津川下床遺跡で竪穴式住居跡が検出されたほか、内里八丁遺跡では後期の水田跡・方形周溝墓が検出されている。

古墳時代に入ると、丘陵上及びその周辺に集中して古墳が築造される。八幡市男山丘陵周辺には古墳時代前期後半以降、天皇ノ杜古墳・寺戸大塚に代表される桂川右岸の向日町丘陵グループ、椿井大塚山古墳に代表される山城グループと、それに続く久津川古墳群に匹敵する古墳群が築かれる。

この地域における前期古墳としては、八幡市域で石不動古墳・茶臼山古墳・西車塚古墳・東車塚古墳、田辺町では飯岡車塚古墳など、50～100m前後の大規模な前方後円墳が存在する。中でも茶臼山古墳は、九州阿蘇石製の舟形石棺を持つことで注目される。中期では八幡市で美濃山大塚古墳・東二子塚古墳・西二子塚古墳など、首長墳とみられる大型円墳が築かれる。一方、田辺町では前方後方墳の大住車塚古墳・大住南塚古墳、大型円墳のゴロゴロ山古墳・十塚古墳などの首長墳が築かれる。後期に入ると、顕著な首長墳の築造がなくなるとともに、小規模な群集墳の築造がみられるようになる。このような状況から、南山城一帯は中期後半以降、車塚古墳に代表される久津川古墳群を生みだしたグループが覇権を確立したものと考えられる。

また、この地域は古墳時代後期以降、横穴群が多数造営される。横穴群の多くは丘陵東斜面に築かれており、八幡市域では狐谷横穴群・美濃山横穴群・女谷横穴群・荒坂横穴群、田辺町では松井横穴群・堀切横穴群・飯岡横穴群が周知されている。これらの横穴群は、九州から移住させられた隼人の居住圏と重複することから、隼人との関連性が指摘されているところである。

古墳造営に係わる集団の居住及び生産基盤は平地部に求められるが、平地部での調査例が少ないことからその実態に関してはまだ明らかでない部分が多い。古墳時代の集落跡の調査例としては、わずかに木津川河床遺跡・新田遺跡で後期の竪穴式住居跡が検出されている程度である。そのほか、田辺町興戸遺跡では水田跡が検出されている。

飛鳥・奈良時代では、仏教伝来にともなって、八幡市西山廃寺・志水廃寺・美濃山廃寺、田辺町興戸廃寺などが丘陵部に建立されている。また、男山丘陵部には四天王寺創建瓦を供給した平野山瓦窯とともに志水窯跡・松井窯跡などが知られる。平地部の調査は進んでいないが、これまでに八幡市の内里八丁遺跡・上奈良遺跡で掘立柱建物跡群が検出されている。また、田辺町では興戸遺跡・古屋敷遺跡が知られる。古屋敷遺跡は、山陽道山本駅と推定されている遺跡であり、官衙色の強い建物跡群が検出されている。

平安時代以降は、男山丘陵上に石清水八幡宮が創建される。同八幡宮は、平安・中世を通じて多数の荘園を所有し、第一級の神社としての地位を確立した。平地部では、「条里地割」の整備が進み、「六の坪・八の坪・三十」などの小字名や水田畦畔の位置関係にその痕跡をみることができる。中世に入ると、南北朝の戦乱に関連した山城が築かれるほか、多くの伝承や旧跡の存在は、この地での戦闘が激しかったことを物語るものであろう。

以上、調査地周辺の歴史環境を略述してきたが、これまでの調査は丘陵部とその周辺に集中し、平地部の調査は近年ようやく開始されたばかりである。大規模古墳を築造した集団やその生産基盤に関する問題、古代における交通の要衝としての八幡・田辺地域の位置づけなどを明らかにしていく上で、今後の平地部での調査が期待されるところである。

(1) 内里八丁遺跡

1. 調査概要

内里八丁遺跡B地区は、平成3年度の後半から調査を開始している。これまでに検出した主な遺構としては以下のとおりである。

- a. 第1遺構面(平安～中世) 掘立柱建物跡5棟・井戸5基・溝
- b. 第2遺構面(飛鳥・奈良時代) 掘立柱建物跡11棟・井戸1基・溝

B地区は、試掘調査の段階で内里八丁遺跡の中心部と想定された地区であったが、飛鳥・奈良～平安時代にかけての建物跡群・井戸など検出した遺構・遺物の内容は、それを裏付けるものであった。

今年度は、第2遺構面の下層で調査を実施し、古墳時代前期と後期の竪穴式住居跡を検出したほか、さらに下層から古墳時代初頭の水田跡・埋葬主体部などを検出した。遺物としては庄内併行期の古式土師器が多量に出土した。

c. 第3遺構面(古墳時代)

第2遺構面下30cm(海拔約11.5m)で検出した。昨年度の調査で一部の遺構を検出していたが、今年度の調査で全体像が明らかになった。

①検出遺構

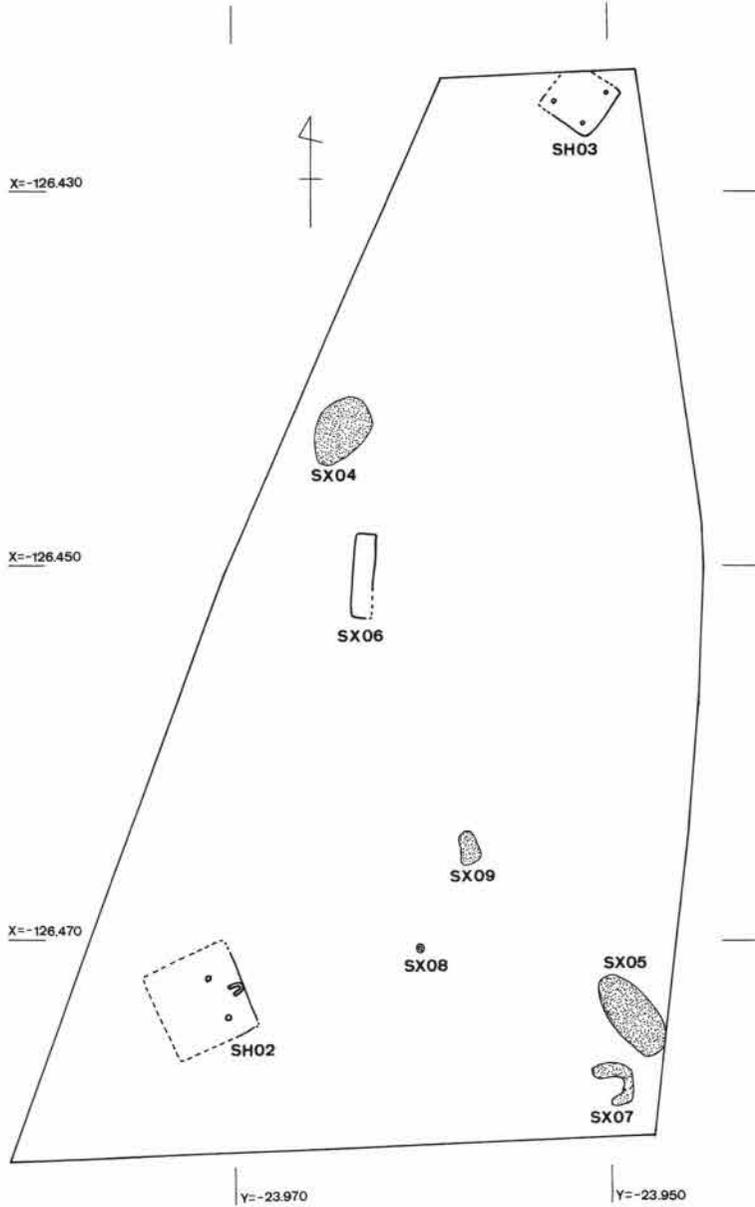
竪穴式住居跡SH02 調査区南西部で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居跡自体は近世溝SD41・43により大規模に削平されていたが、東側コーナー部とその周壁の一部がかかるうじて検出できた。さらに、昨年度報告で焼土坑SX03とした遺構は、住居跡の東



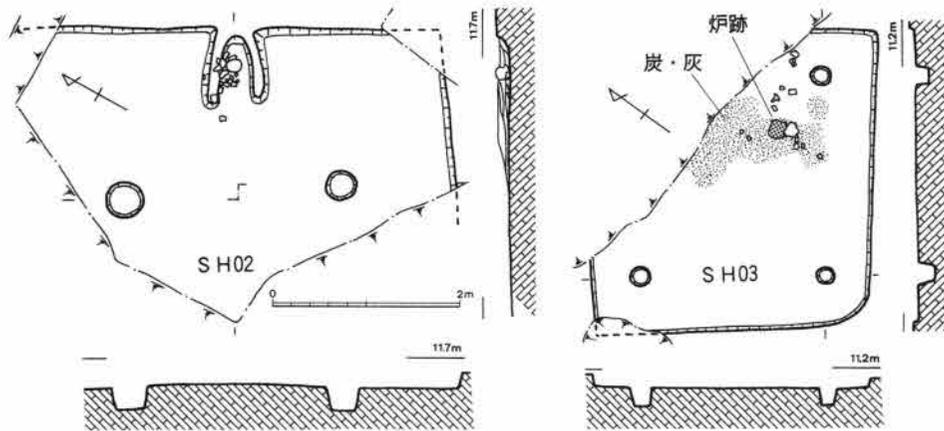
第54図 内里八丁遺跡調査区配置図

北側壁の中央部に築かれた竈であることが判明した。竈から住居跡の東コーナーまで約2.2mを測る。竈が東壁の中央に位置するとみれば、住居跡は一辺約4.5mの規模と推定される。検出した周壁高は竈付近で約20cmを測る。住居跡の床面では、直径・深さがともに約30cmの円形の掘形を持つ柱穴を2か所で検出した。竈は上部が削平されていたが、馬蹄形を呈する下部が良好に遺存している。20cmほどの立ち上がりを残す竈の内壁面は焼土化し、焚き口付近の底面は特に焼け締まっている。竈内には、土師質丸底壺の完形品が口縁部を下に向けた逆転状態で出土したほか、土師質甕の破片が多数認められた。

竪穴式住居跡 S H03 調査区北端部で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居跡の北西コーナーは後世の攪乱によって失われている。住居跡は一辺約3.0m、周壁高は床面から約20cmを測る。S H02にみられた竈は存在せず、住居跡床面の中央やや東寄りに小規模な焼土が認められた。また、焼土の周辺では、炭・灰の薄い堆積が認められた。床面では直径約30cm・深さ約20cmを測る柱穴跡3か所を検出した。出土遺物は乏しいが、床面の



第55図 第3遺構面平面図



第56図 B地区竪穴式住居跡実測図

炭・灰層上から布留式併行期の高杯・甕体部の破片が出土している。

埋葬主体部 S X 06 調査区中央西部で検出した、埋葬主体部とみられる土坑である。掘形の主軸は、ほぼ真南北方向である。長方形を呈する掘形は長径約4.7m×短径約1m×深さ約20cmを測る。掘形底面は平坦である。掘形埋土には木棺の存在を示す土色変化が認められた。長方形を呈する木棺の規模は長径約4.2m×短径約0.7mであった。掘形内から土師器の小片が少量出土したが、年代を確定するには至らない。

土器溜まり S X 04・05・07～09 S X 04・05に関しては、前年度報告分と重複することから、今回の報告では割愛した。以下、今年度検出の S X 07～09について概略を報告する。調査区南部において、下層の水田上に堆積した洪水砂中(海拔約11.2m付近)から一括性のある土器群が出土した。出土した土器はすべて古式土師器であり、完形品もしくは大型破片が目につく。土器群の周辺で遺構検出に努めたが、堆積土に大きな変質は認められなかった。

S X 07(図版第50-(2)) 調査地東南端付近で検出した。一辺約2m規模で「コ」字形を呈する範囲から土器群が出土した。土器群は高杯1点・器台2点・鉢2点・壺1点・甕6点(口縁数)で構成されている。「コ」字形に囲まれた内側には、後世の井戸による攪乱が存在するが、当初から中央部にはほとんど遺物が存在しなかったと推定される。

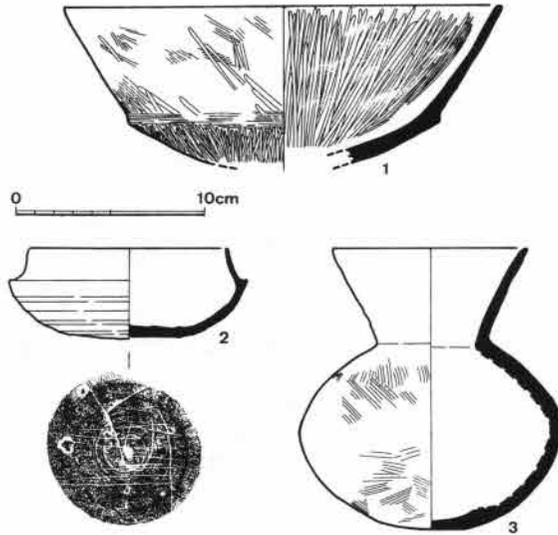
S X 08(図版第50-(1)) S X 07の北西約11mに位置する。焼成後の円孔をもつ壺・台付き鉢・有孔鉢を含む鉢4点が、およそ50cmの範囲から集中して出土した。

S X 09 S X 08の北東約5mに位置し、約2mの範囲内から甕5点・壺底部1点が出土した。

②出土遺物

今年度の調査では、土師器・須恵器・布目瓦・石製品などの遺物が整理コンテナ26箱分ほど出土している。出土遺物の大半は古式土師器が占めている。今回は包含層遺物を除き、遺構などに伴う遺物を中心に、代表的なものを図化した。

竪穴式住居跡出土遺物(第57図) 1は、SH03の床面出土の土師器高杯である。口径23.3cmを測る。深く丸みの強い杯部の外面中程にアクセントをもつ。器表面はていねいなヘラ



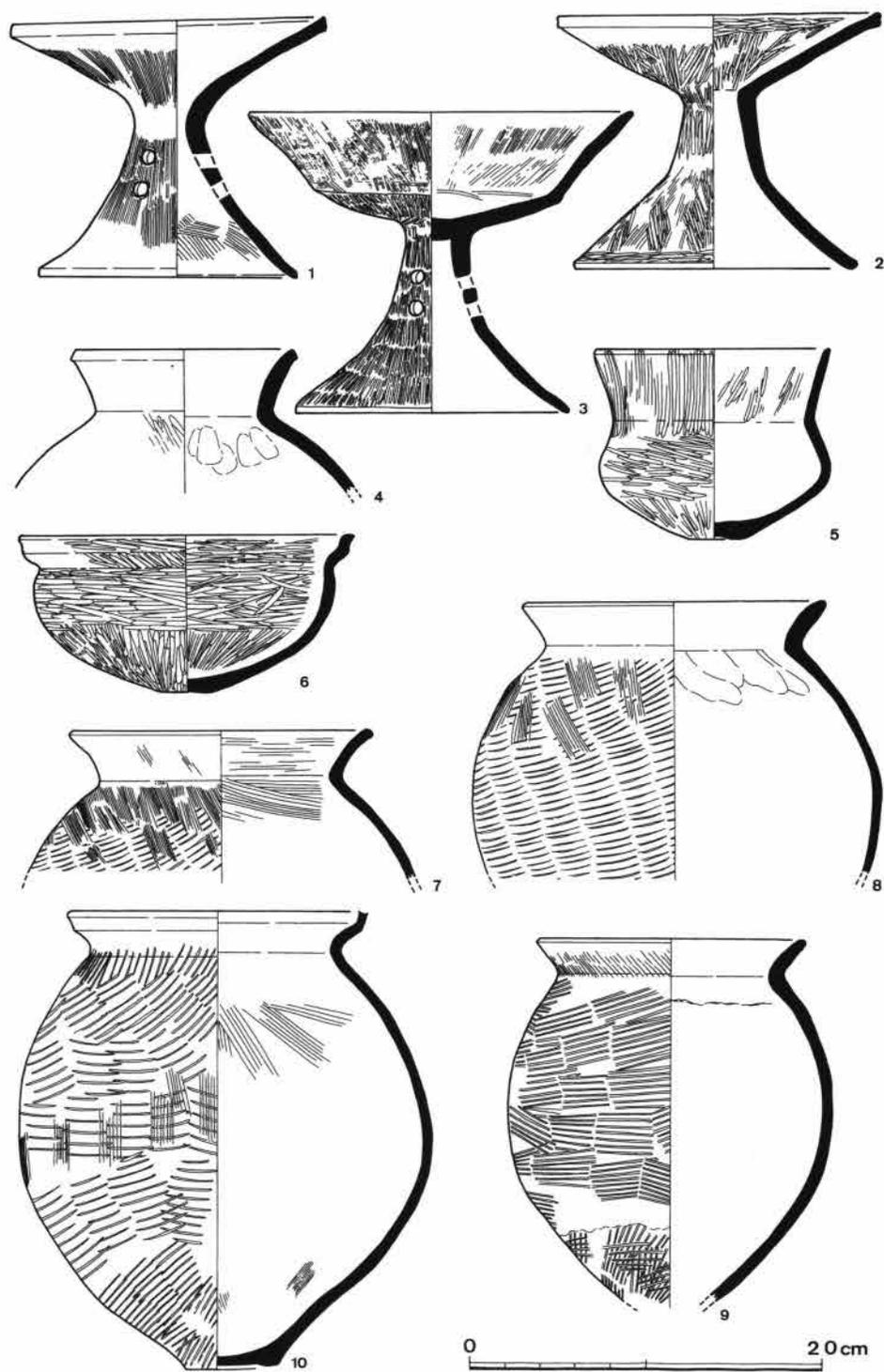
第57図 竪穴式住居跡出土遺物実測図

1. SH02 2・3. SH03

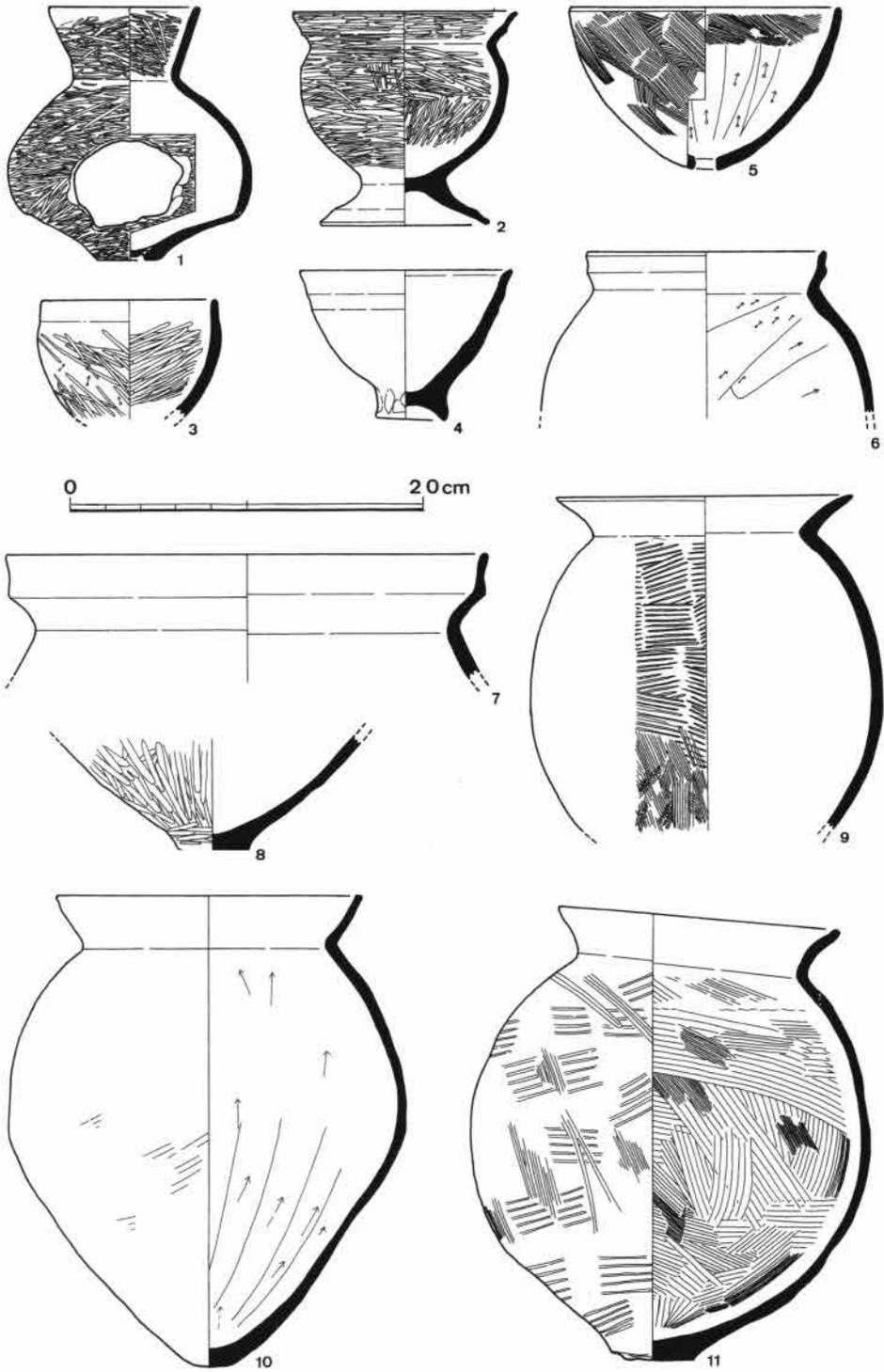
ミガキを施す。2は、SH02の埋土中から出土した須恵器の杯身であり、MT15型式に属するものとみられる。口径10.5cm・器高4.8cmを測る。底部外面に線刻(焼成前)する。3は、SH02の竈内の支柱として使用されていた土師器壺である。口径10.4cm・器高15cmを測る。やや胴の張った球形の体部と外上方に直線的に立ち上がる口縁をもつ。体部外面はハケメ調整する。

土器溜まり出土遺物

SX07(第58図) 庄内併行期の古式土師器である。1・2は、器台である。口縁は器台部から直線的に外上方にのび、端部に面をつくる。「ハ」の字に大きく開く2の脚部には、上下に2個の小円孔を3方に配置する。外面の調整は、ハケメ(1)とヘラミガキ(2)に分かれる。口径は18cm・器高は14.5cm前後を測る。3の高杯は、杯部と口縁部の境にやや不明瞭なアクセントをもち、口縁は外上方に立ち上がる。脚部は、器台(1・2)と同一である。口径は12.3cmを測る。壺4は、「く」の字に外反する口縁が短く立ち上がり、端部は丸みをもった面をもつ。口径21.8cm・器高17.1cmを測る。5・6は、鉢である。5は、胴の張ったやや扁平な体部をもち、底部は中央部が窪む輪台である。口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口径13.2cm・器高10.9cmを測る。6は、丸みが強く浅い体部をもつ。口縁は複合口縁であり、底部は小さな平底である。胎土は精良であり、内外面とも緻密なヘラミガキを施す。口径18.9cm・器高8.9cmを測る。7～10は、外面をタタキ調整する甕で



第58図 S X 07出土遺物実測図



第59図 S X08・09出土遺物実測図(1~5. S X08 6~11. S X09)

ある。10のみが複合口縁であり、他は単純口縁である。10は口径16.9cm・器高26.2cmを測り、7・8もほぼ同一サイズとみられる。9は、やや小型の甕である。口径は15.1cmを測り、底部を欠くが器高は22cm前後とみられる。

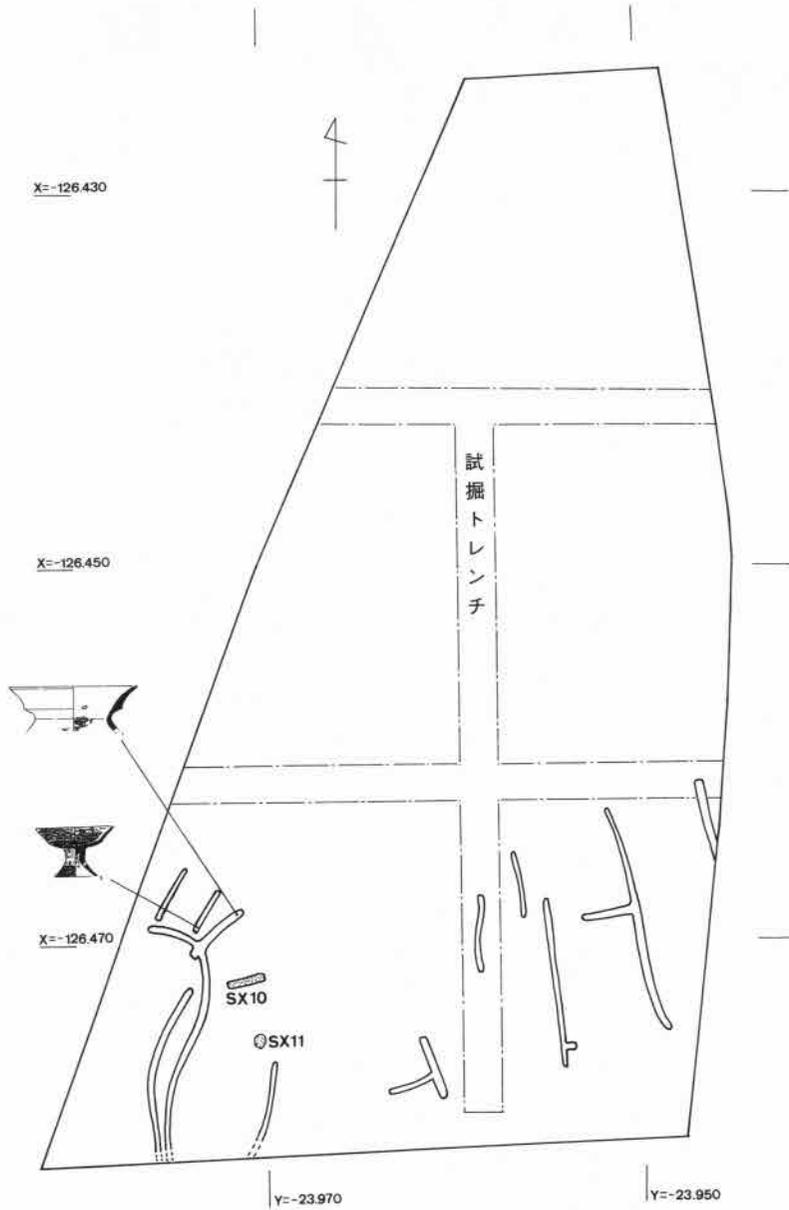
S X08(第59図1~4) 1は、扁平な無花果形の体部をもつ壺である。体部の中央下部に最大径をもつ。体部下半に直径5~6cmの円孔を、焼成後に穿っている。外面は幅の狭い工具によるヘラミガキを密に施す。口径8.5cm・器高14.3cmを測る。2~4は、鉢である。2は、「ハ」の字に強く開く脚台をもつ鉢である。体部は丸みが強く、複合口縁をもつ。内外面ともていねいなヘラミガキを施す。口径12.7cm・器高12.1cmを測る。3は、身が深く口縁部は内湾ぎみに終わる。口径は10.0cmを測る。4は、低脚をもつ深身の鉢である。脚部の外面には強い指オサエが残る。口径12.0cm・器高13.4cmを測る。

S X09(第59図5~11) 5は、有孔鉢である。体部は丸みが強く、底部中央に直径1cmほどの円孔を焼成前に穿っている。内面はヘラケズリの後、口縁部をハケメ調整する。外面はハケメ調整である。口径15.4cm・器高9.1cmを測る。6・7・9~11は、甕である。6・7は、複合口縁である。他は単純口縁である。単純口縁甕は体部外面にタタキを施した後、部分的にハケメ調整する。11のみ内面をハケメ調整するが、他はヘラケズリする。10は口径15.2cm・器高26.6cm、11は口径16.0cm・器高25.7cmを測る。複合口縁甕は大小に分かれ、7は口径27.1cm、9は口径13.4cmを測る。

d. 第4遺構面

土器溜まり(S X07~09) 検出面下約40cm(海拔10.8m)付近で遺構面を検出した。遺構面は暗灰色のシルト系微砂であり、調査区南部から洪水砂(淡黄灰色細砂)の堆積によって埋没した水田畦畔を検出した。洪水砂は、畦畔を検出した調査区南部に厚く堆積していたが、中央以北では明らかな洪水砂の堆積は認められなかった。遺構面も南から北方向にゆるやかに上がることから、調査区中央以北は水田化されなかった微高地域とみられる。調査区南部の水田域では畦畔の遺存状況が悪く、部分的な検出であったことから、個々の水田区画を認識することができなかった。わずかな畦畔の検出であったが、主畦畔とみる長軸をもつ畦畔が南北方向であることから、水田自体も南北に細長い形態であったと推測される。東部で検出した畦畔は直線的であるが、西部の畦畔は大きな弧を描いている。微高地の縁辺部に位置し、地形的制約を受けたことから、弧状の主畦畔が作られたとみられる。

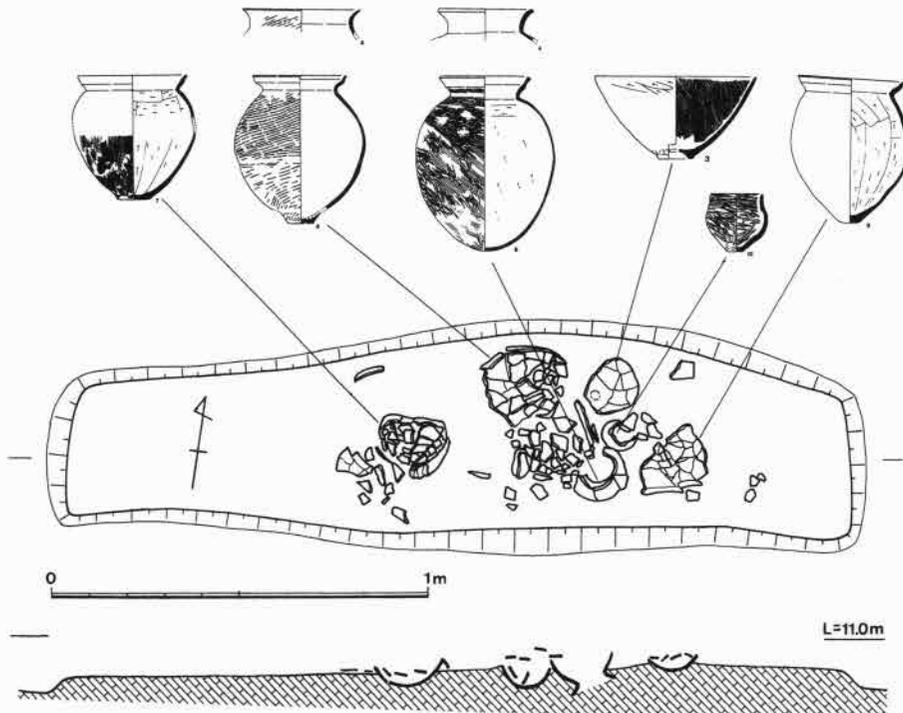
水田面には稲株痕跡とみる輪花形(平面形)の小穴が存在した。稲株痕跡の分布密度は1m²-10数株程度であり、A地区検出の水田跡に比べて格段に薄い密度であった。また、稲株痕跡は畦畔検出範囲全域に分布することはなく、小規模範囲で数か所に存在する程度であった。個々の稲株痕跡は直径5cm・深さ4cm前後であり、A地区検出の稲株痕跡と大き



第60図 第4遺構面平面図

な変化は認められない。

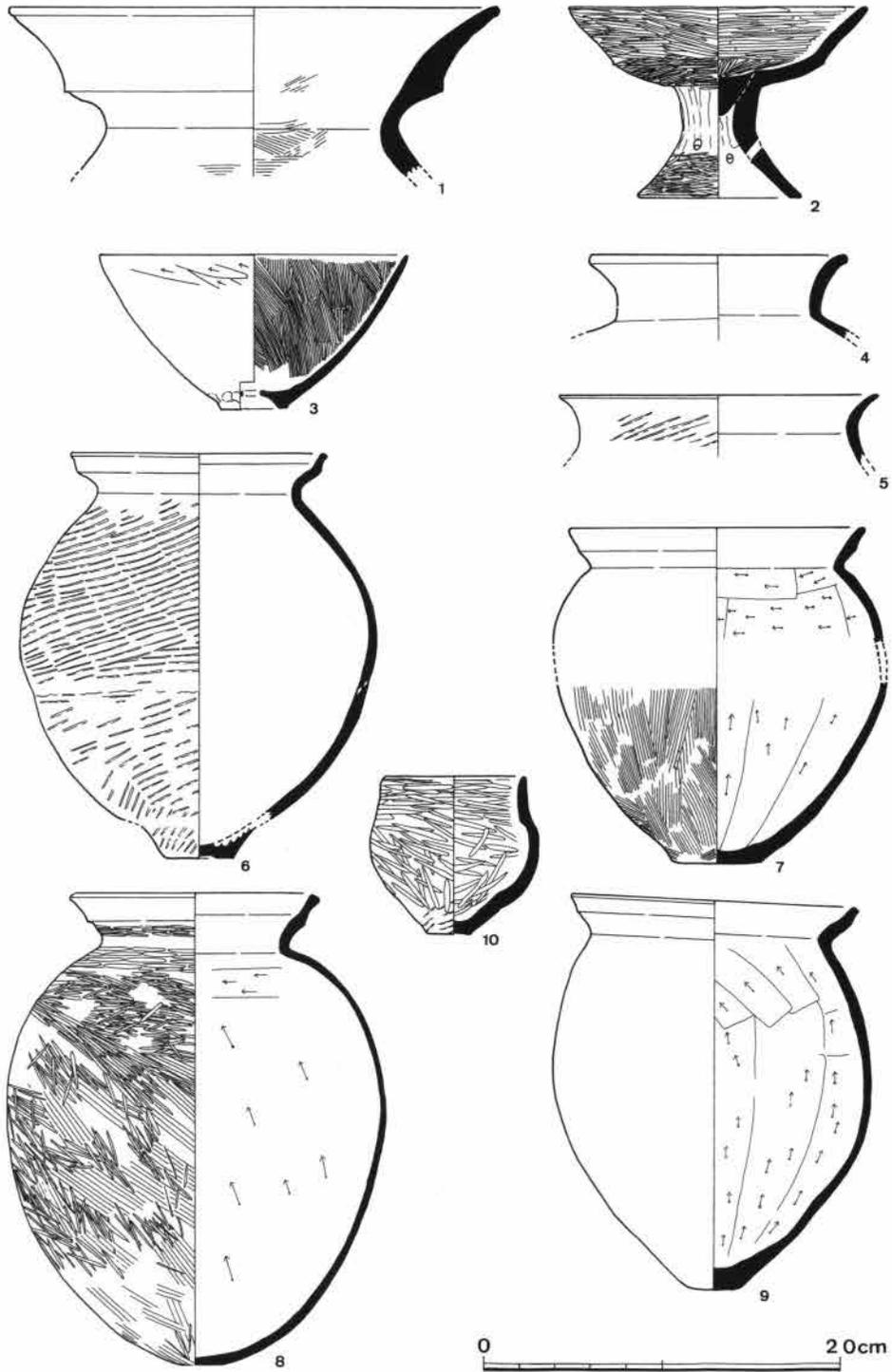
特殊畦畔 S X 10(第61図) 南西部で検出した畦畔内からまとまった古式土師器(第62図 3~10)が出土した。出土した土器は甕6点・無頸壺1点・有孔鉢1点である。畦畔内か



第61図 S X 10実測図

ら甕が上下に重なった状態で出土したが、土器埋納の掘形は確認できなかった。畦畔は、東西方向に軸線を取り、全長2.15m・高さ5～7cmを測る。多くの畦畔は30cm前後の幅であるのに対し、このS X 10畦畔は60cmと約2倍の規模を測る。

出土した遺物のうち、第62図3は有孔鉢である。口縁部と体部はやや内湾ぎみに立ち上がり、外底面は輪高台様に窪む。底部を焼成前に穿孔する。内面はハケメ調整。口縁部外面をヘラケズリする。口径17.3cm・器高8.8cmを測る。4・5・7は、単純口縁の甕である。5の口縁は、タタキ出しによりゆるやかに外反する。4は口径14.3cm、5は口径17.9cmを測る。7は、口縁外面の上半部を強くヨコナデし、複合口縁様のアクセントをつける。口径16.5cm・推定器高18.8cmを測る。6・8・9は複合口縁の甕で、底部は平底である。6は、球形化した体部と大きく突出する底部をもつ。体部外面は連続平行タタキを行う。口径14.3cm・推定器高22.6cmを測る。8は、倒卵形の体部をもち、底部は平底様の平坦面を残す。外面は、ハケメ原体をミガキ的に使用し、器壁に光沢をもたしている。体部内面はヘラケズリ。口径14.0cm・器高26.5cmを測る。9は、体部が無花果形を呈し、底部は小さな平底である。口径16.1cm・器高21.9cmを測る。10は、小型の無頸壺である。体部は胴の張った無花果形を呈する。口縁部はやや内湾した後、上方に立ち上がる。底部外



第62図 水田跡遺物実測図

面にはタタキを残し、内外面とも粗いヘラミガキを行う。口径7.7cm・器高8.9cmを測る。

また、他の畦畔においても単品の土器が出土した(第62図)。S X10と同様に、畦畔内に埋められていたと考えられる。第62図1は壺の口縁である。強く外反する複合口縁である。口縁部内面はなだらかであるが、外面は鋭い稜をもって2段に強く外反する。体部内面はハケメ調整。口径27.5cmを測る。2は高杯である。杯部は屈曲して外上方に立ち上がり、脚部も屈曲して広がる。杯・脚部の屈曲はゆるやかである。杯・脚の接合部は円板を充填する。口径16.8cm・推定器高10.7cmを測る。

土器溜まりS X11 特殊畦畔S X10の南約3m付近の水田面から、古式土師器甕の破片が集中して出土した。甕は、大小に破片化しており、半個体分がおよそ60~70cmの範囲に認められた。S X10にみる祭祀との関連性は低いとみられる。

下層試掘トレンチ 第4遺構面の調査を終えた段階で、下層確認の調査を実施した。調査に当たっては、調査区中央部に幅2mのトレンチを設定した。第4遺構面下30~40cmでA地区の第4遺構面(下層水田跡)に対応する暗灰色シルト層を確認した。掘削に伴って、庄内併行期の甕の破片が少量出土したが、畦畔・稲株痕跡などの水田跡の存在を示す痕跡は確認できなかった。

2. 小 結

前年度は、飛鳥・奈良~平安時代の建物跡群・井戸群を検出し、B地区をこの遺跡の中心部とみた推測を裏付ける成果を得ている。今年度は、前年度からの継続した調査であり、B地区の最終調査となった。

今年度は、内里八丁遺跡の初期段階である古墳時代の調査となり、集落位置を特定する竪穴式住居跡を検出する成果が得られた。

①弥生時代末~古墳時代初頭

A地区第3遺構面に対応する庄内併行期の水田跡を検出した。今回の調査では、水田域と集落が存在するとみられる微高地の境界部が、B地区中央付近にあることが明らかとなり、当該期の集落はB地区の北に位置する可能性が高い。

今回検出した水田跡で注目されるのは、多くの完形個体の土器が出土した特殊畦畔S X10である。遺物の内容は、小型の無頸壺・有孔鉢・甕であり、出土状況からみて、水田耕作に伴う祭祀遺構と考えられる。A地区の水田跡では、北部で検出した畦畔内と水口付近から完形個体の土器が出土している。B地区ではS X10以外に2か所で土器の出土をみている。このような状況から、水田域の各所で祭祀が実施されていたとみられる。また、現時点での傾向として、祭祀は集落に近い水田の畦畔で行われた可能性が高い。出土した土

器には外来系(丹後・丹波系)土器も多く認められる。

A地区第4遺構面(下層水田跡)に対応する水田跡の確認のため、試掘調査を実施したが、B地区では下層水田跡を検出できなかった。トレンチ調査ではあったが、A地区下層水田跡にみられた稲株痕跡が存在しないことから、下層水田跡の範囲はB地区に及んでいないと判断される。

洪水により砂が厚く堆積し放棄された水田跡は、その後、短期間内に墓域に変化する。SX06の埋葬主体部は、規模・形状から集落内の指導者クラスの墓と考えられる。A地区において方形周溝墓を検出していることから、SX06も方形周溝が伴っていた可能性が高い。また、土器溜まりSX07～09は、多様な器種構成・多くの完形個体・穿孔された土器の存在・出土状況などからみて、墓に関連する祭祀遺物と考えられる。土器溜まりから出土した土器には、北近江地域との交流を示すものも多数認められた。

②古墳時代前期・後期

これまでの調査では、この時期の遺構としてA地区で溝を検出している。今回、B地区の調査により竪穴式住居跡を検出したことから、古墳時代の集落位置を特定する成果が得られた。B地区の北端から布留式併行期の住居跡、南部から後期初頭の住居跡を検出することができた。集落が存在する微高地は、各時期を通じて同一範囲・規模において固定的でなく、時期が下がるにつれて微高地域が南に広がるのがこれまでの調査で明らかとなっている。今回検出の住居跡も集落域の変遷過程を裏付ける資料となった。今後、B地区東部のD地区、北部のC地区で調査を進めることにより、内里八丁遺跡の集落変遷過程がさらに詳細に判明していくものと期待される場所である。

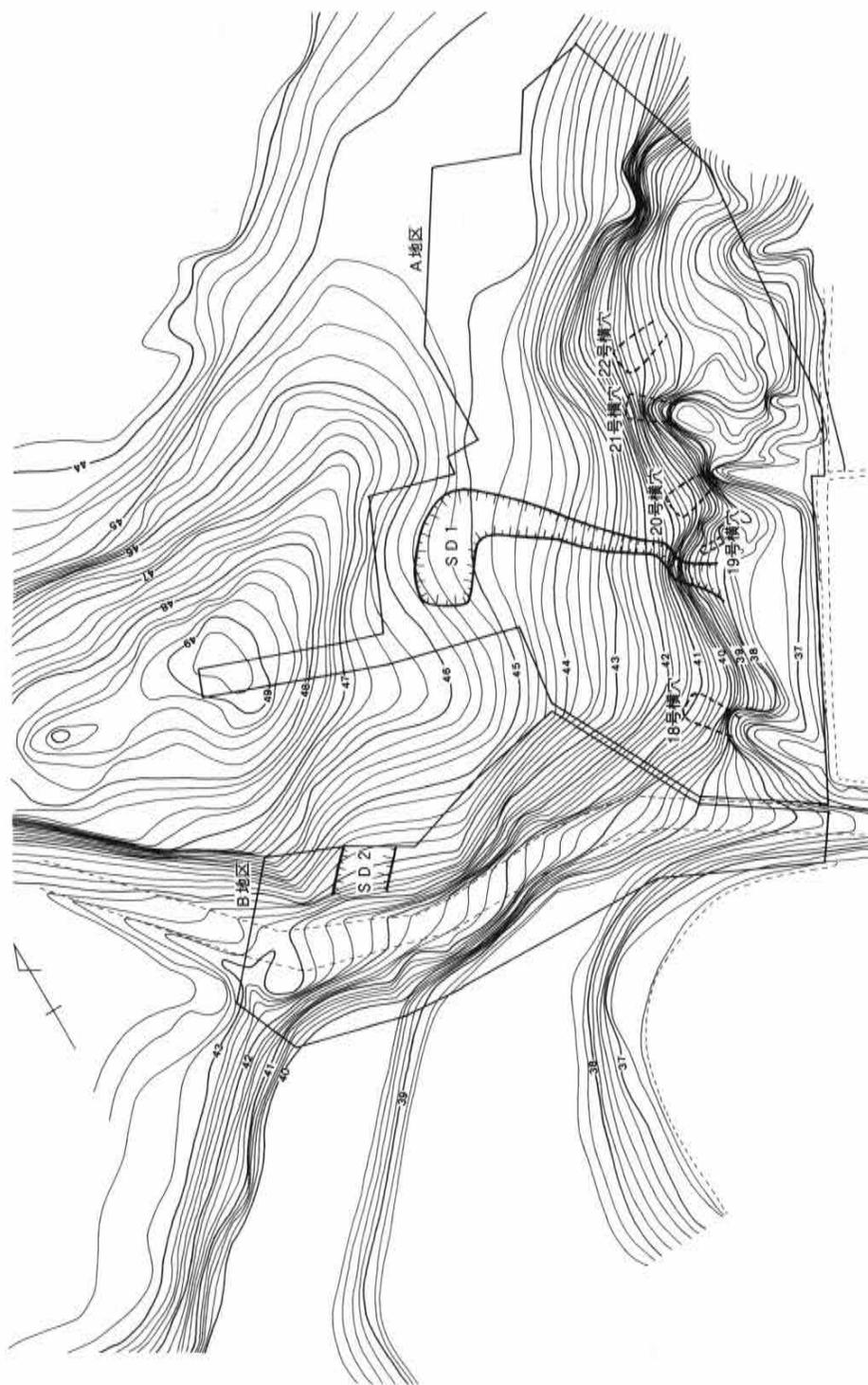
(竹原一彦)

(2) 荒坂横穴群

1. はじめに

荒坂横穴群は、八幡市と綴喜郡田辺町の境界である美濃山丘陵の東辺部に位置し、丘陵東斜面に横穴が点在している。これまでに丘陵北部の八幡市域で17基の横穴の存在が周知されていた。今回、京都南道路建設に伴う樹木伐採により、南部の田辺町域でも横穴とみられる墓道状の落ち込みを丘陵斜面の数か所で新たに確認することができた。

今年度は、路線帯北部の横穴分布域(A地区)で丘陵斜面の面掘調査を実施した。また、



第63図 荒坂横穴群調査地形測量図(調査前) SD1・SD2は完掘後の位置を示す。

現況では横穴の分布が確認できない林道以南の斜面(B地区)で、横穴の有無の確認を目的に試掘調査を実施した。調査対象面積は、当初は丘陵斜面1,000m²を対象としたが、A地区丘陵上で溝の存在を確認したことから、丘陵上でも試掘を行い、調査総面積は約1,450m²となった。

2. 調査概要

a. A地区

北部の丘陵斜面には、大規模な土砂の崩落に伴う崖面が上部に存在した。樹木伐採後の地形測量段階では、崖面下部に3か所の窪地が存在した。また、南端部の尾根筋下で玄室が一部開口した横穴1基が認められた。丘陵裾部には崩落した土砂が多量に堆積していることから、斜面表土・崩落土の除去には重機を使用し、その後の調査は人力による遺構検出を行った。丘陵斜面の精査によって、当初4基とみられた横穴は1基増え、5基の横穴を検出することができた。また、尾根上から東斜面に下る溝(SD1)を検出した。検出した5基の横穴は、南から北へ順に18・19・20・21・22号横穴とし、周知の横穴に続く番号を便宜上与えた。

横穴が存在する丘陵を構成する土層は、いわゆる大阪層群と呼ばれるものであり、軟弱な砂礫・砂質土・粘土が互層に堆積している。5基の横穴の玄室は、一部で崩落が進行しているが、ほぼ完存していた。各横穴は、丘陵中位にある厚さ約80cmと最も厚い粘土層を玄室天井としている。当初の調査は、墓道部(前庭部)から崩落土を除去し、玄室部が開口するとともに玄室内の調査を進めた。玄室内の調査を開始直後から天井部の崩落が激しくなり、安全な調査の継続が不可能との判断から、床面の検出に至らない段階で玄室内の調査を中断した。これまでに判明した玄室部の内容は以下の通りである。

玄室規模は、19号横穴が全長約2m×幅約0.5mの長方形であり、5基中で最も小規模である。他の4基の横穴の玄室はほぼ同規模であり、全長約3m×幅約1.3m前後を測る。21号横穴は玄門部天井が崩落し、5基中で最も崩落が進行している。他の横穴の玄門部は、玄室に比して幅・高さが小規模であり、玄門から玄室にかけて天井がゆるやかに高まっている。19号横穴を除く横穴の天井部はアーチ状を呈する。天井部と奥壁の境は明瞭でなく丸み強いが、これは崩落の進行に伴うものと判断される。玄室内の調査では、調査中断までの間に遺物の出土はみられない。

玄室内の調査を中断後、墓道部分については継続して調査を進めた。

墓道の調査では、19号横穴にみる墓道は逆台形を呈し、全長約1.3m×底部幅約0.6mを測る。墓道の軸は玄室軸線からやや南に振っている。19号横穴を除く他の4基の横穴で

は、墓道面を大きく掘り下げた後世の攪乱溝を検出し、溝内には節を除いた竹・土管などによる暗渠が存在した。この暗渠は、丘陵裾部前面の耕作地に水を引いた近代の施設と判断される。攪乱によって横穴に伴う墓道面は大きく破壊されているが、21号横穴では墓道壁に接して一部がかるうじて検出できた。21号横穴では、北壁に接して幅約10cmほどの墓道床面が検出できたが、全体を推測することも不可能な内容である。墓道床面は海拔約35.9m付近にある。丘陵裾部の調査では、海拔約35m付近で地山面を検出している。約1mの比高差があることから、横穴自体は丘陵裾からいくらか上部となる位置に築かれていたと判断される。横穴の築造時期を示す遺物の出土は認められない。

A地区の丘陵上では、斜面部の掘削とともに試掘調査を併せて実施した。尾根筋の高所からゆるやかな平地にかけて設定した試掘坑から、溝(SD1)を検出した。

溝(SD1)は、18号横穴の上部に位置する丘陵緩斜面を「L」字状に囲むものである。長軸である東西溝の東部は丘陵斜面を下り、下端は19号横穴を迂回するように南に屈曲して裾に至る。溝幅は各所で異なるが、丘陵上の東西溝では、幅約2m×深さ約60cmを測る。溝の断面形は浅い「U」字形を呈している。丘陵上の溝は、屈曲部から南約5m付近で途切れる。溝の埋土中から土師器と判明する程度の微細片が出土している。

b. B地区

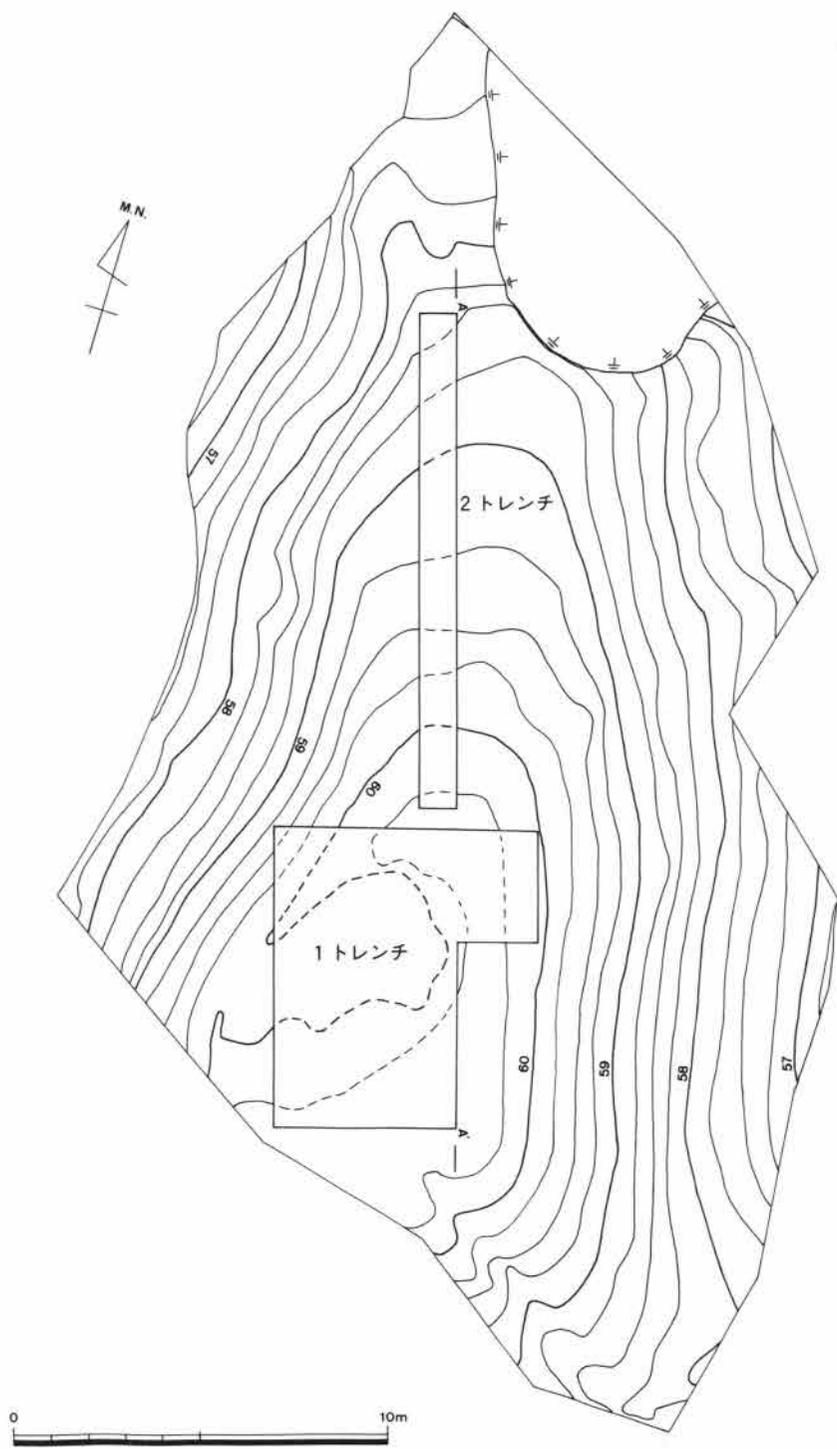
試掘調査の結果、横穴の存在は確認されなかった。斜面上部において、A地区検出のSD1に関連するとみられる溝SD2をトレンチの断面で検出している。

3. ま と め

今回の調査は、調査対象地内の5基の横穴状遺構を完掘せず、調査半ばで今年度の調査を終了した。調査自体は、調査対象地内の横穴数の確定と墓道部分の調査に留まった。今回の報告は、今年度を実施した範囲内での中間報告である。調査中断に至った経緯は、各横穴の玄室において、周壁の地盤がゆるみ崩落が調査中も進行したことから、玄室床面に調査が達しない段階で危険と判断されたことによる。

横穴は、各玄室における規模・形態・主軸方向に同一性が認められる。18号・20号・21号・22号横穴では、玄室天井が玄門に比べて高く、玄室断面もアーチ形を呈する。20号横穴は近隣の狐谷横穴群と同様な平面プランにあり、玄門から奥壁方向に扇状に広がる平面形を呈している。玄室主軸には2方向の指向性が認められ、18号・21号横穴と19号・20号・22号横穴に大別できる。

墓道部の調査では、墓道部が後世の攪乱で大きく破壊されていることが明らかになった。埋設された導水管と玄室の主軸方向は同一でなく、導水管の多くは前面の耕作地に向けら



第64図 松井古墳状隆起地形測量図(1/200)

れている。このような事例から、後世の攪乱は玄室の全域には及んでいないと判断される。

今回の調査で検出した5基の横穴は、玄室内の調査の安全面を重視した結果、主たる目的とした玄室内の調査を完了することができなかった。また、墓道部では大規模な攪乱を受けていたことから床面の遺存状況が悪く、横穴に伴う遺物の出土もみていない。今年度の調査においては、検出した5基の横穴を横穴墓と確定するにいたってはいない。18～22号横穴に関しては、後年度に実施予定の玄室部分の調査を終了した段階をもって最終的な判断を行いたい。

(竹原一彦)

(3) 松井古墳状隆起

1. はじめに

調査地は、北西方向にのびる尾根の先端部近くに位置する。尾根の頂部に直径約5mほどの凹地が認められ、古墳の可能性が考えられた。

2. 調査概要

調査は、尾根頂部の凹地に1トレンチ、1トレンチから尾根の稜線に沿って先端に向かって2トレンチを設定して行った。1トレンチでは、隅丸長方形の攪乱を2基検出したのみで、遺構はみられなかった。2トレンチでも遺構は検出されなかった。また、両トレンチともに、遺物も出土しなかった。

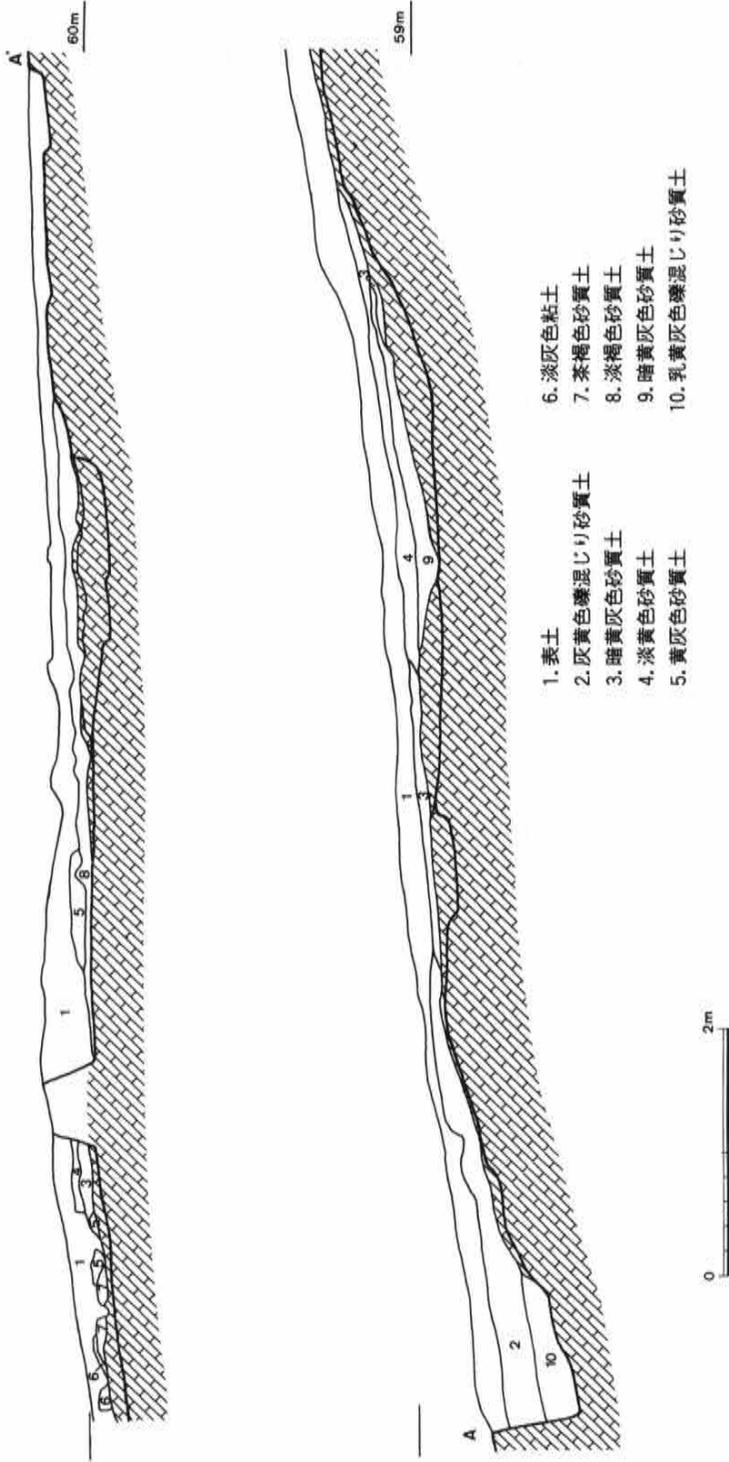
3. まとめ

以上の結果、調査地は遺跡でないことが判明した。

(森島康雄)

注1 ①三好博喜・荒川 史「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡)昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

②荒川 史・竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第41冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991



第65図 土層断面図(1/60)

③竹原一彦「①内里八丁遺跡－第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

④竹原一彦「内里八丁遺跡－第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

⑤筒井崇史「内里八丁遺跡－京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注2 調査参加者(順不同)

平松久和・秦村昌樹・古谷哲也・山内基弘・坂東哲也・眞弓拓也・永澤拓志・有働一哉・豊田拓也・山端紀明・前田 穰・菅谷友一・古城悟志・中前幸子・高島明日香・永濱寛子・中村幸子・由水ゆう子・福嶋美保・羽生夕紀子・吉田 幸・中村幸子・富安容子・伊東こず江・谷本和歌子・与十田麗子・与十田節子・栃木道代・福田玲子・森田千代子・奥平廣子・平井眞由美・辻井和子

注3 「八幡市遺跡地図」 八幡市教育委員会 1990

3. 木津地区所在遺跡平成5年度発掘調査概要

はじめに

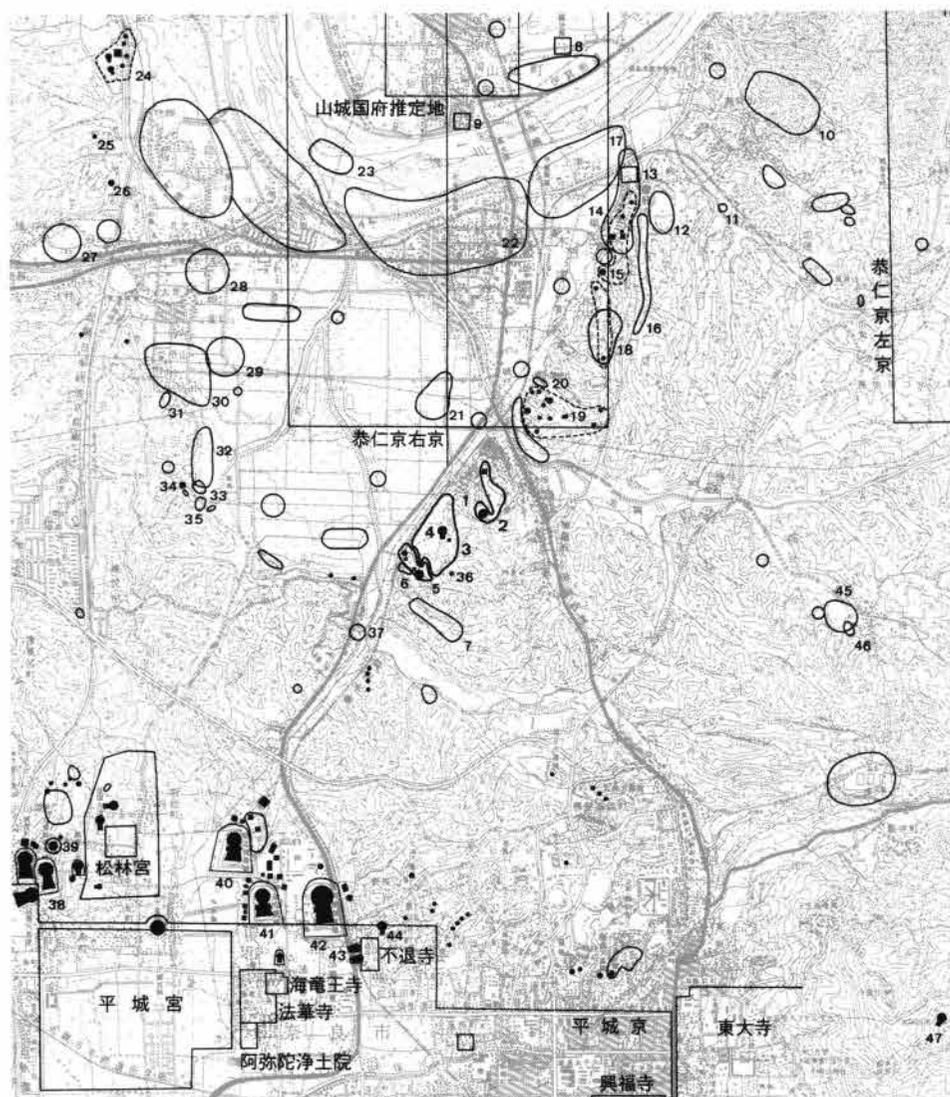
この調査は、住宅・都市整備公団の依頼を受け、関西文化学術研究都市の開発区域に所在する遺跡群の調査である。平成5年度は、京都府相楽郡木津町大字市坂にある瓦谷遺跡(第7次調査)・上人ヶ平埴輪窯(第2次調査)・市坂瓦窯、同町大字梅谷にある梅谷瓦窯・中ノ島遺跡の試掘及び発掘調査を実施した(第66図)。

瓦谷遺跡は、今年度で7次目となる。昨年度(第6次調査)は、瓦谷1号墳の前方部を明らかにするとともに、方墳8基・円墳1基・埴輪棺25基を検出した。今年度は、昨年度の調査地とは谷部を挟んで南側に位置する西側にのびる丘陵端部での試掘調査を実施した。試掘調査(約500㎡)の結果、埴輪棺1基を確認したため、第6次調査のように埴輪棺が点在する可能性を考え、調査地を広げたところ(調査面積約3,500㎡)新たに埴輪窯3基、奈良時代の土坑、中世の溝状遺構などを検出した。

上人ヶ平埴輪窯(第2次調査)は、瓦谷埴輪窯とは北へ約150mと近接した位置にある埴輪窯である。今回の調査は、昭和63年度の試掘調査でみつかった^(注2)2・3号埴輪窯の実態を明らかにするとともに、埴輪窯が新たにみつかる可能性を考え、発掘調査(調査面積約550㎡)を実施した。その結果、2・3号窯のほかには埴輪窯はなく、上人ヶ平埴輪窯が3基の窯で構成されていることが明らかとなった。また、埴輪窯の灰原の排棄には、古墳時代前期に機能していたが、埴輪窯の操業時には埋滅していた旧流路の凹地を利用していたことが明らかとなった(第67図)。

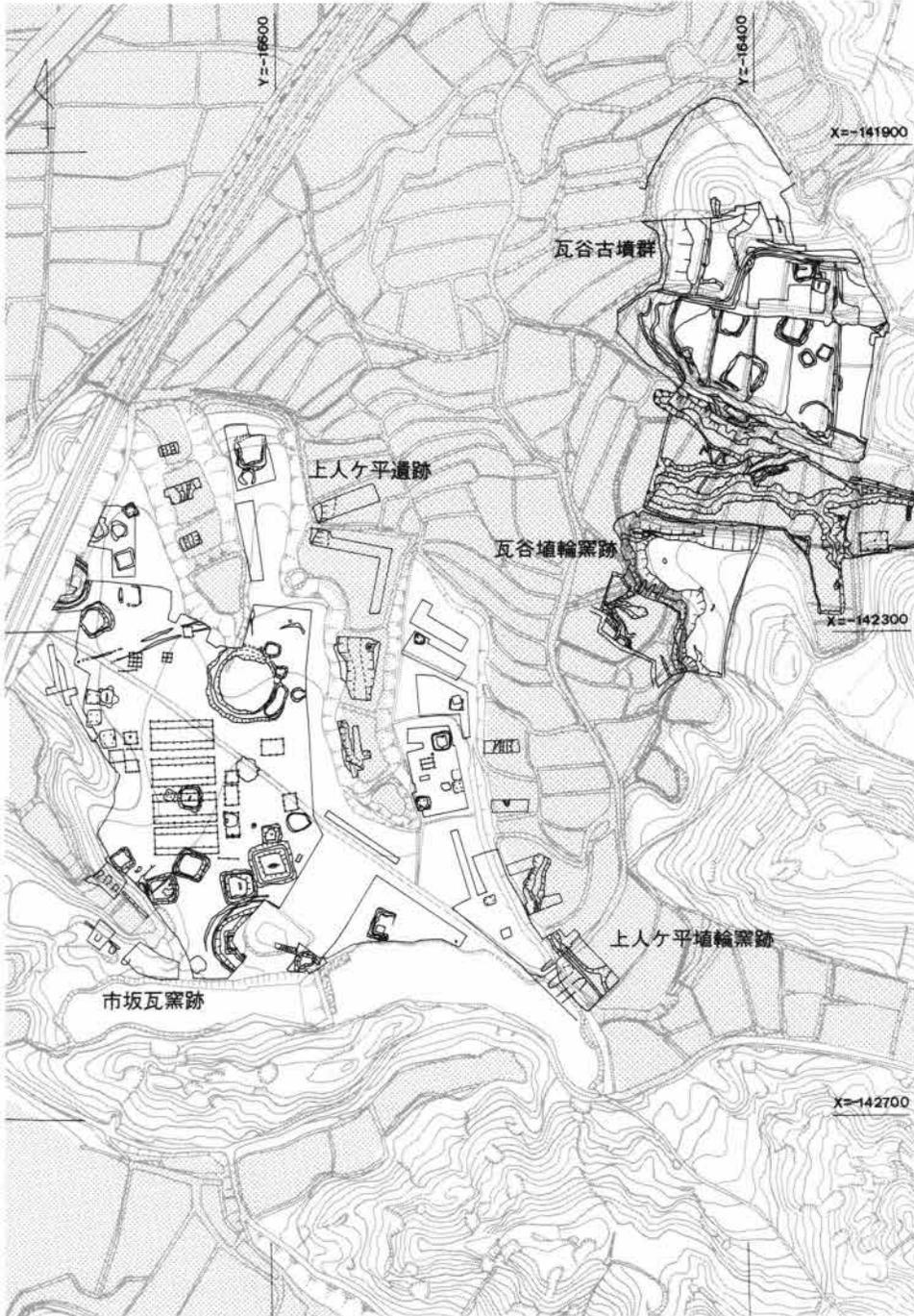
梅谷瓦窯は、1981年(昭和56年)の京都府教育委員会による分布調査で興福寺式軒平瓦を含む瓦類が採集されており、この周辺に瓦窯があると推定されていた地点である。また中ノ島遺跡は、梅谷瓦窯が立地する丘陵下位の田畑地点であり、東西約200m・南北約200mの範囲が想定される遺物散布地である。中ノ島遺跡の試掘調査は、昭和60年度に実施され、丘陵上部にある梅谷瓦窯に関連した灰原と多数の瓦及び須恵器を検出している^(注4)。

今年度は、丘陵上部にある梅谷瓦窯跡に試掘トレンチを設定し、窯の有無とその広がり
を明らかにするとともに、丘陵下位にある中ノ島遺跡の範囲をより限定するため試掘調査を行った。その結果、梅谷瓦窯では、後述するように7基の窯を検出し、そのうち窯体構造の異なる1・2号窯(窖窯)と7号窯(平窯)の一部掘削作業を行った。中ノ島遺跡では、



第66図 調査地位置図(1/50,000)

- | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|---------------|-------------|
| 1 : 西山塚古墳 | 2 : 西山遺跡 | 3 : 瓦谷遺跡 | 4 : 瓦谷古墳群 | 5 : 上人ヶ平遺跡 |
| 6 : 市坂瓦窯跡 | 7 : 瀬後谷遺跡 | 8 : 高麗寺跡 | 9 : 泉橋寺跡 | 10 : 鹿背山城跡 |
| 11 : 鹿背山瓦窯跡 | 12 : 赤ヶ平遺跡 | 13 : 燈籠寺廃寺跡 | 14 : 燈籠寺遺跡 | 15 : 内田山古墳群 |
| 16 : 釜ヶ谷遺跡 | 17 : 上津遺跡 | 18 : 木津城跡 | 19 : 天神山古墳群 | 20 : 大谷窯跡 |
| 21 : 八後遺跡 | 22 : 木津遺跡 | 23 : 木津北遺跡 | 24 : 土師七ツ塚古墳群 | 25 : 坊谷古墳 |
| 26 : 白山古墳 | 27 : 樋ノ口遺跡 | 28 : 相楽遺跡 | 29 : 八ヶ坪遺跡 | 30 : 曾根山遺跡 |
| 31 : 大仙堂遺跡 | 32 : 大畠遺跡 | 33 : 音如ヶ谷瓦窯跡 | 34 : 音乗谷古墳 | 35 : 歌姫西瓦窯跡 |
| 36 : 幣羅坂古墳 | 37 : 歌姫瓦窯跡 | 38 : 佐紀陵山古墳 | 39 : マエ塚古墳 | 40 : ヒシアゲ古墳 |
| 41 : コナベ古墳 | 42 : ウワナベ古墳 | 43 : 平塚1・2号墳 | 44 : 不還寺裏山古墳 | |
| 45 : 中ノ島遺跡 | 46 : 梅谷瓦窯跡 | 47 : 鶯塚古墳 | | |



第67図 上人ヶ平遺跡・瓦谷遺跡周辺遺構配置図(1/3,000)

A～Fトレンチで梅谷瓦窯に関連した灰原を検出したほか、A・E・G・Jトレンチで上面幅50mほどの谷地形を検出した。

市坂瓦窯は、大規模な瓦生産工房である上人ヶ平遺跡の南側で、北西に開く小さな谷地形に立地する瓦窯である。上人ヶ平遺跡の調査に際してこの谷部に瓦窯を想定していたし、『木津町史』にも6基以上の瓦窯が存在すると指摘されていた遺跡であるが、その実態が明らかでなかった。今回は、市坂瓦窯の実態を明らかにするため、試掘調査(面積約800㎡)を実施した。その結果、後述するように谷部の北東側斜面に5基、南西側斜面に3基の平窯を確認した。

以上の4遺跡について、その概要報告を行うが、梅谷瓦窯・市坂瓦窯は、次年度以降も調査を実施する予定であり、その詳細については次年度の調査結果を待って詳述したい。また、瓦谷遺跡・上人ヶ平埴輪窯については現在遺物の整理作業中であり、主に検出遺構について詳述し、出土遺物についてはその代表的なものの一部を提示するにとどめたい。

調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人・同主任調査員石井清司・同調査員森正哲次・森島康雄・有井広幸が担当し、多くの調査補助員、整理員の協力を得た。^(註5)また、調査期間中、京都府教育委員会をはじめ、木津町教育委員会・奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会などの関係機関のほか、下記の方々から協力及び有益な助言をいただいた。

西村 康・山崎信二・毛利光利彦・上原真人・森 郁夫・高橋美久二・和田晴吾・笠井敏光・松本秀人・中井 公・中島和彦・和田 萃・菱田哲郎・藪中五百樹・山本清一・宮崎正裕・藤原 学・吉川修作・大川 清・渡辺正氣(敬称略)

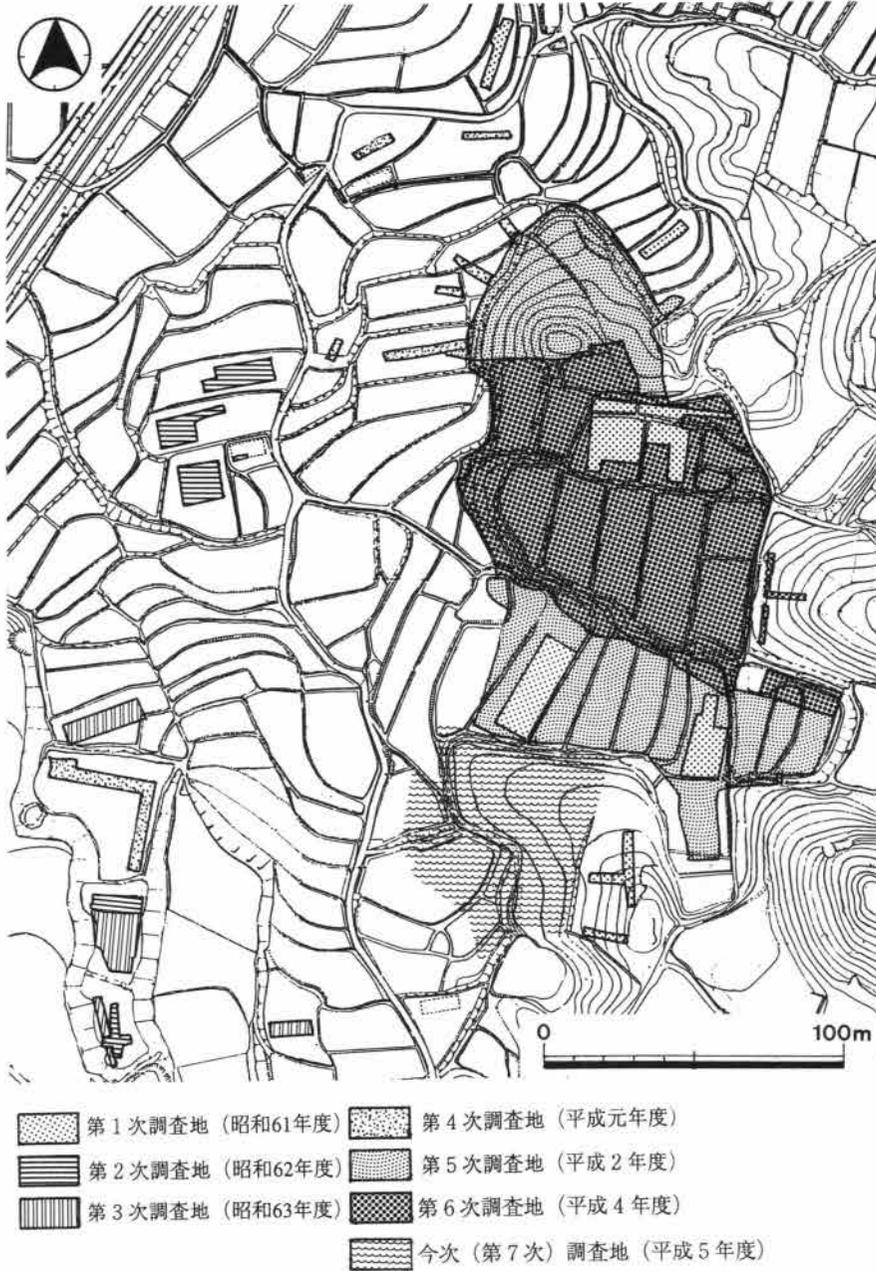
なお、本調査に係わる経費は、住宅・都市整備公団(関西文化学術研究都市整備局)が負担した。

(石井清司)

(1) 瓦谷遺跡第7次

1. 調査の経過(第68・69図)

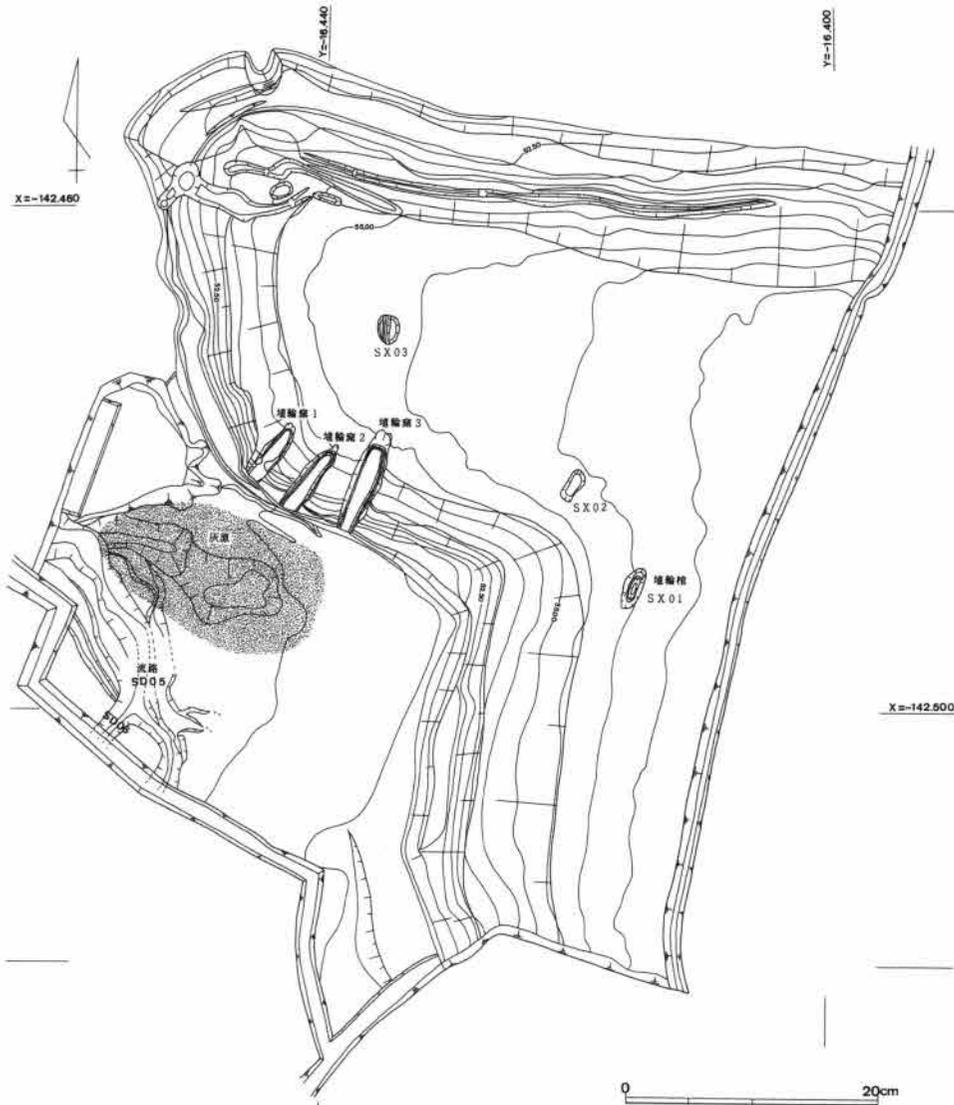
瓦谷遺跡の試掘及び発掘調査は、昭和61年度から始まり、今年度で第7次調査となる。昨年度(平成4年度)の第6次調査では、瓦谷1号墳(=旧瓦谷古墳)^(註6)で前方部を検出し、当初円墳と考えられていた瓦谷1号墳が、全長約48mを測る前方後円墳であることが明らか



第68図 瓦谷遺跡トレンチ配置図(1/2,500)

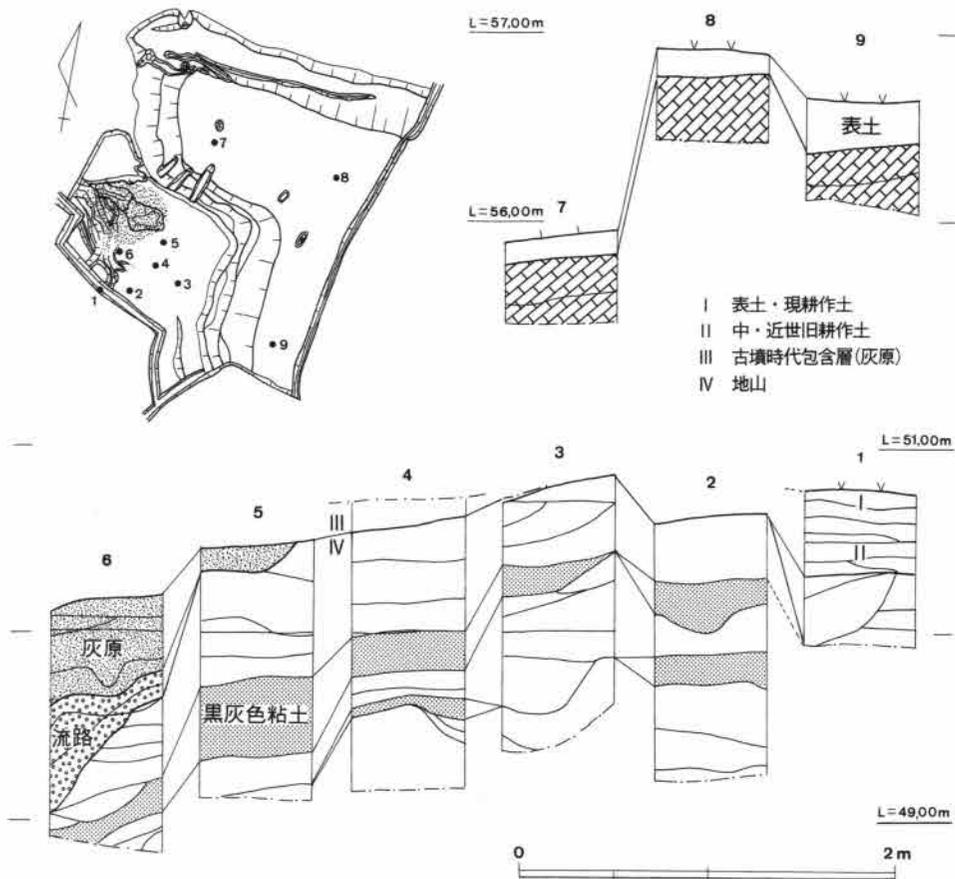
になるとともに、第1次調査(昭和61年度)でみつかった方墳(2号墳)と同様の方墳7基のほか、円墳1基、埴輪棺25基(第6次調査ではそのうち18基)を検出し、西山塚古墳・西山遺跡・幣羅坂古墳とともに瓦谷遺跡周辺では丘陵先端部分に遺跡が点在することが明らかとなった。第6次調査での遺跡の立地条件の結果を踏まえ、第7次調査では、第6次調査の地点から第1・4次調査で検出した谷地形を挟んで、南へ約50mで第6次調査の古墳群と同様の地形があるため試掘調査を実施した。

試掘調査ではまず、丘陵上部に東西南北の両トレンチを設定(試掘面積約500m²)し掘削



第69図 瓦谷遺跡遺構配置図(1/600)

作業を進めたところ、後述するように埴輪棺1基(SX01)を検出した。この試掘結果を踏まえ、住宅・都市整備公団、京都府教育委員会と協議した結果、丘陵端部全域にわたって今年度事業として発掘調査を実施することとなった。発掘調査では第6次調査と同様、周辺で埴輪棺あるいは方墳などを予想して調査を進めたが、丘陵上部では奈良時代の墓壙(SX02)を含む土坑2基を検出するのみにとどまった。ところが丘陵上部での発掘調査の最終段階で、丘陵南部の斜面に下る位置で焼土を埋土とするピット状の遺構を検出し、その部分を拡張した。その結果、焼土を埋土とするピット状のものが、埴輪窯の煙出し部であることが明らかとなった。そして、丘陵斜面を調査対象として拡張し、さらに埴輪窯に伴う灰原や建物跡を検出するため、丘陵南側の谷部にもトレンチを設定した。最終調査面積は試掘調査500㎡を含めて約3,500㎡となり、調査期間は平成5年8月5日から平成6年3月4日までの約7か月を要した。



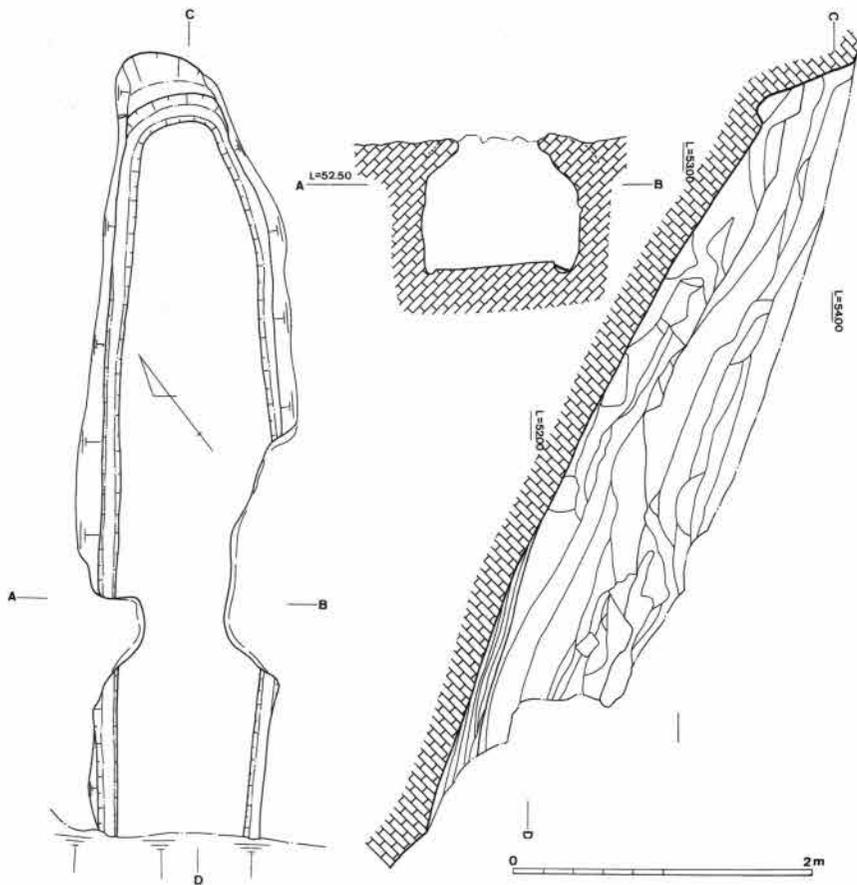
第70図 瓦谷遺跡土層断面柱状図

2. 調査の概要

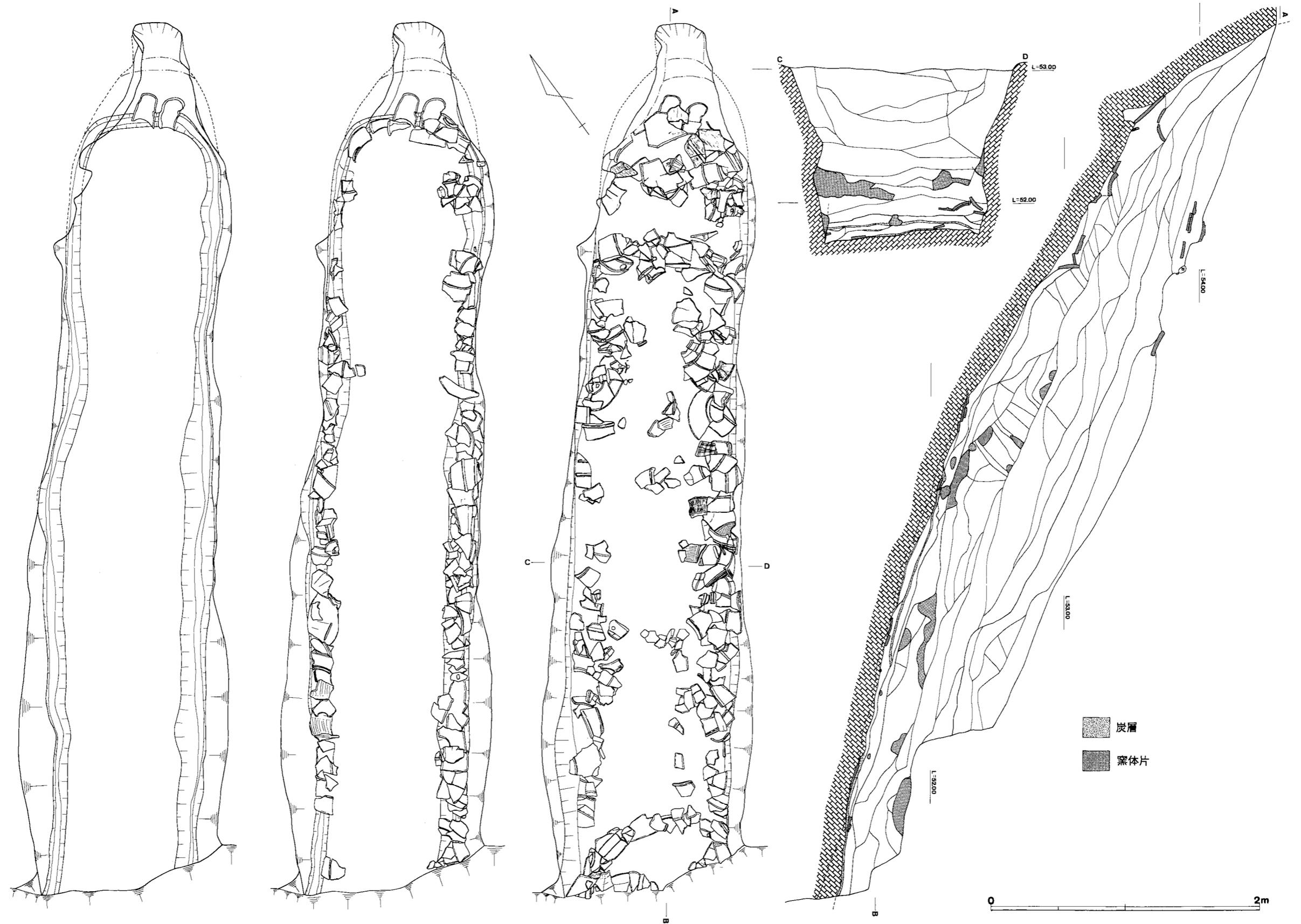
a. 基本層序(第70図)

丘陵頂部の標高は56~57mあり、現況は竹林である。基本層序は、表土直下で主要部分は地山となり、斜面部では竹林造成の影響と考えられる整地土が厚さ約0.7m堆積している。丘陵部出土遺物の大半は、この整地土内から出土している。地山は、黄褐色シルト~砂礫からなり、斜面では水平堆積が観察でき、大阪層群の一部と考えている。遺構は、地山を掘り込んだ状況で検出した。

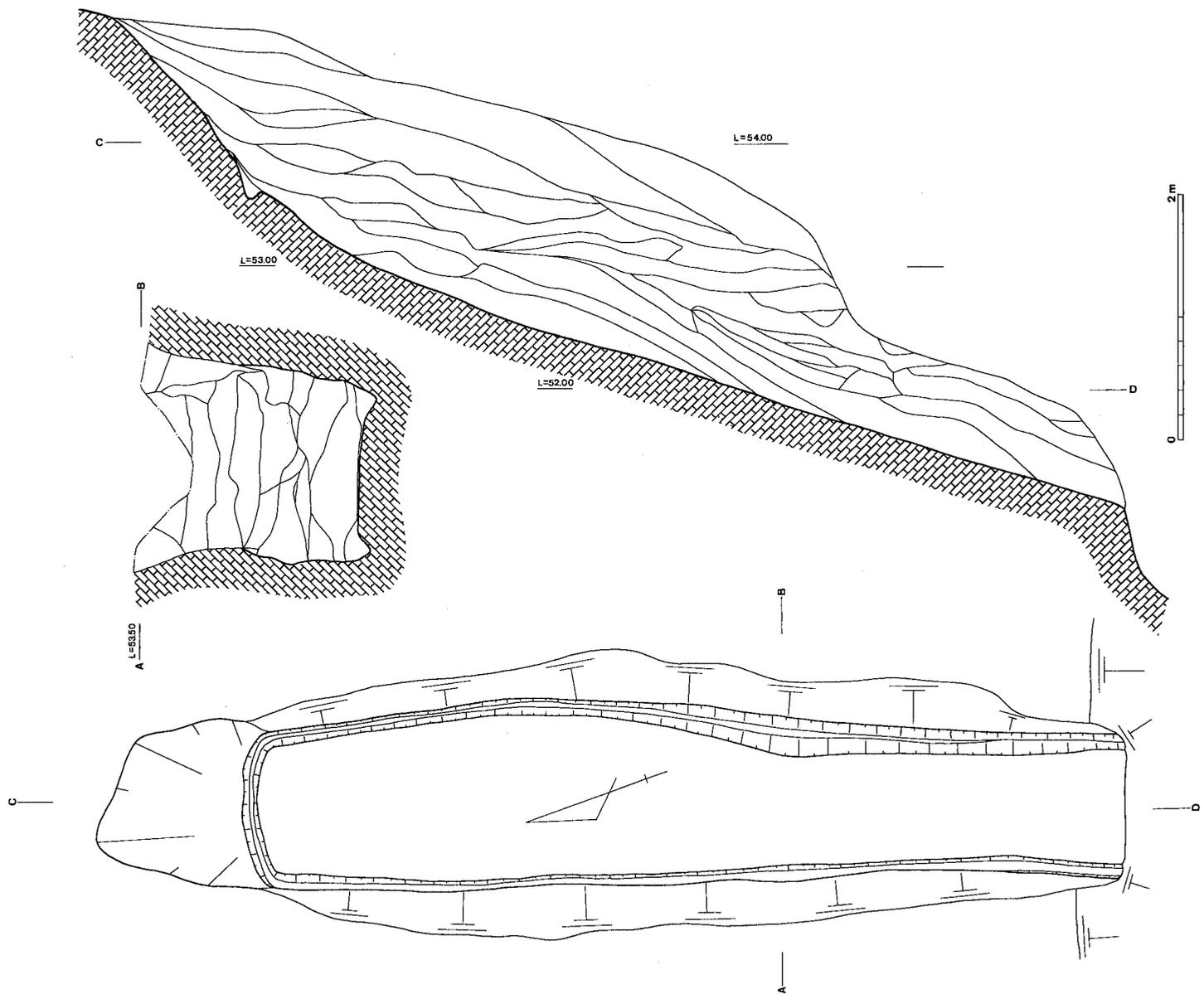
谷部の基本層序は、Ⅰ.現耕作土、Ⅱ.中・近世旧耕作土(暗灰色系細砂質土)、Ⅲ.古墳時代包含層(灰原)、Ⅳ.古墳時代以前水性堆積層(地山)の順で堆積している。現地標高51~52mで棚状に広がる水田耕作土(厚さ約0.2m)を除去すると、中・近世耕作土が約0.2mの厚さで堆積している。この層は、鉄分の沈着が著しく、古墳時代の埴輪窯に関連する灰原などを削平しているため、埴輪片を多く含んでいる。その他、須恵器片・瓦器椀片や、



第71図 瓦谷遺跡1号埴輪窯実測図(1/50)



第72図 瓦谷遺跡2号埴輪窯実測図(1/30)



第73图 瓦谷遺跡3号埴輪窯実測図(1/30)

寛永通寶1点もこの層から出土している。地山は、青灰色シルト～灰白色砂層の互層の間に2層に分かれた黒灰色粘土層が調査地全体に広がっている。2層の黒灰色粘土層は、ともにゆるやかに南東～北西に向かって傾斜しており、谷が埋没する過程で滞水した時期に堆積したと考えるが、出土遺物がなく時期不明である。

b. 検出遺構

第7次調査では、丘陵上部で埴輪棺1基(SX01)・土坑2基を、丘陵斜面南側で埴輪窯3基、同北側で中世以降の溝状遺構、南側谷部で埴輪窯に伴う灰原と灰原の下層で流路を検出した。

埴輪窯群(第71～73図) 丘陵南側斜面に並ぶ3基の埴輪窯で、西側から1号窯・2号窯・3号窯として報告する。

1号埴輪窯 1号埴輪窯は、燃焼部の一部と前庭部にかけて後世に削り取られていた。そのため、その全長は明らかでないが、検出全長約5.5m(斜距離)・床面最大幅約1.3m・床面傾斜角約20～25度を測り、窯体内の崩落した埋土あるいは一部残存する天井部の状況から地下式構造の窖窯と思われる。焼成部は、明瞭なかさ上げの痕跡がなく床面は1面であったが、燃焼部は焼土を含む黄褐色土を間に挟んで炭層と床面と思われる堅緻な層が3層確認でき、燃焼部のみ3回にわたって、床面のかさ上げがあったものと思われる。燃焼部及び焼成部床面で、側壁との傾斜変換点付近に逆「U」字形の円弧を描くように上面幅約10cm・深さ約5cmの溝が穿たれており、排水施設と思われる。この排水施設である溝の上面にはわずかながらも埴輪片が出土していた。煙出し部は、焼成部から急角度で床面が傾斜しており、煙出し部先端では幅20cmと狭まっている。

なお、焼成部と燃焼部の境付近では、側壁から天井部へ向かって窯壁が比較的良好な状態で残っており、その傾斜角度からみると1号埴輪窯の天井部の高さは1m前後であったと推定できる。燃焼部及び焼成部床面からはわずかの埴輪片が出土した。

2号埴輪窯 2号埴輪窯は、1号埴輪窯の東約2mと近接した位置にある。2号埴輪窯は、1号埴輪窯と同様、燃焼部の一部と前庭部は削り取られており、その全長は明らかでないが、検出全長約6.5m(斜距離)・床面最大幅約1.2m・床面傾斜角南20度を測る地下式構造の窖窯である。燃焼部及び焼成部床面には多量に埴輪片があり、その観察では2回にわたってかさ上げが行われている。

築窯当初の床面(第1次床面)は、丘陵をトンネル状に削り貫いたのち、床面に厚さ5～10cmにわたり黄褐色土で積み上げ、その後その上面から排水用と思われる溝を上面幅15cm・深さ5cmにわたって掘っている。溝の上面には破碎した埴輪片が敷き並べられていた。

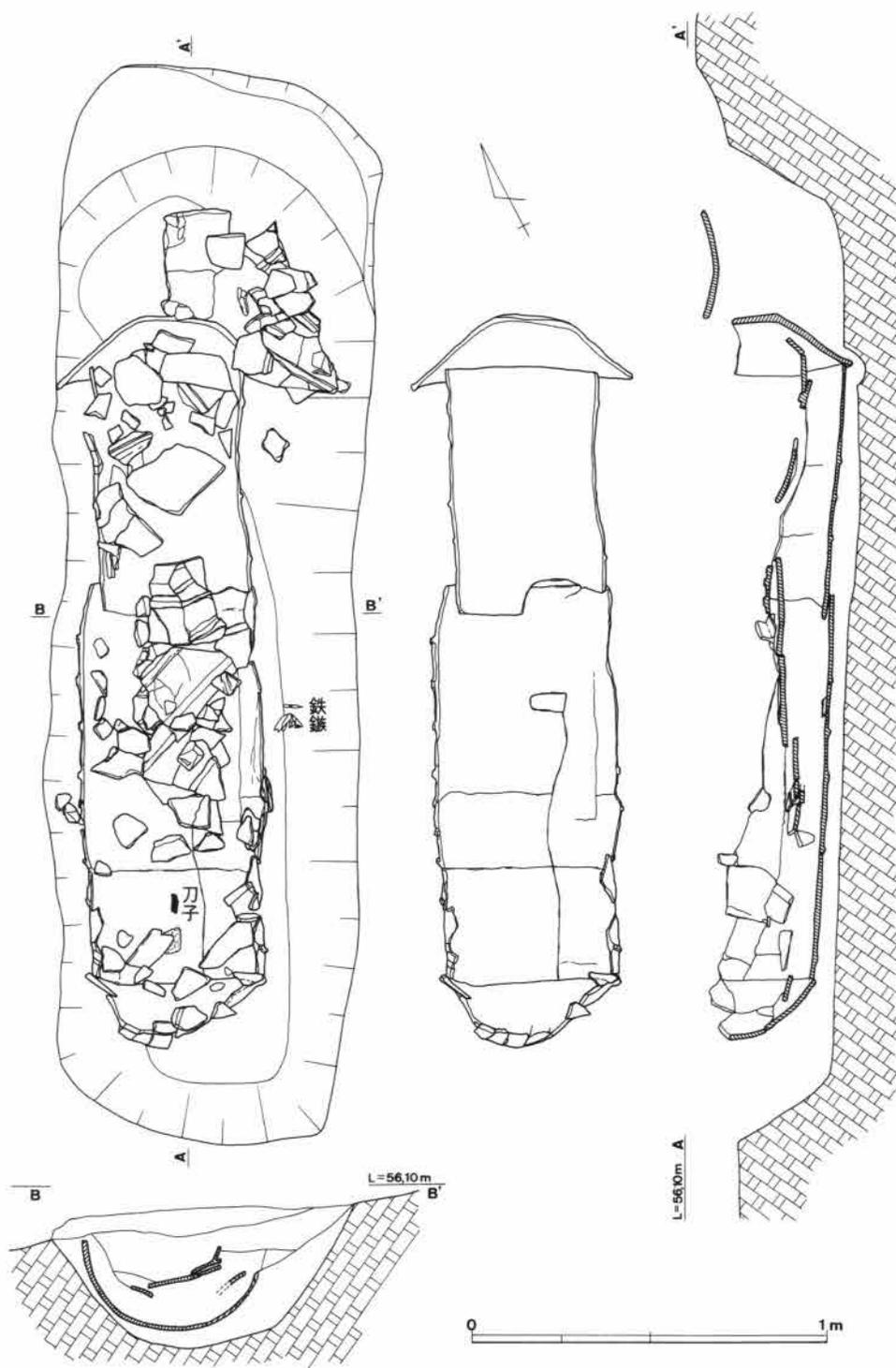
第2次床面は、第1次床面の埴輪を取り除くことなくその上面に焼土あるいは黄褐色土

を厚さ5～10cm積み上げて床面としたもので、第2次床面の西側壁の補修に際しては、下層の埴輪に粘土を塗り込めたかのような状態で補修粘土も貼られている。そのため、第2次床面の幅は第1次床面の幅よりもわずかながらも狭くなっている。第2次床面の焼成部では第1次床面と同様、両側壁に沿う形で、円筒あるいは形象埴輪(家・盾・馬・甲冑)を破碎して敷き並べている。特に、煙出し部近くの焼成部上面では鞍形埴輪1個体分(第77図4)が長軸に対して直交する形で比較的まとまって置かれており、意図的に破碎して床面に敷き並べたことが考えられる。なお、これらの埴輪は復原作業の段階でその多くが接合でき、製品としてできた埴輪を埴輪焼成時の焼き台として使用した可能性が考えられる。煙出し部は1号埴輪窯と同様、焼成部から急角度で床面が傾斜しており、煙出し部先端では幅が狭くなる。また、煙出し部床面ではタガを有しない直径約17cm・高さ約24cmの円筒埴輪状の特製埴輪(第78図9)を半截したのち、内径部分を天井部へ向けて立てかけており、煙出し部の補助的施設として使っている。

3号埴輪窯 3号埴輪窯は、2号埴輪窯の東約3mにあり、検出全長約9.5m・床面最大幅1.6m・床面傾斜角約15度を測る。3号埴輪窯は、遺構検出面から推定床面までは深さ1.8mを測り、1・2号窯と同様、両側壁と推定煙出し部の傾斜変換点付近に、上面幅10～30cm・深さ約10cmの溝が掘られている。ただ、床面には焼土や埴輪はなく、その窯体内の埋没土の観察から、丘陵斜面をトンネル状に刳り貫いたのち、早い段階で焼成することなく窯の廃棄あるいは天井部が崩落したものと思われる。なお、その要因として窯の規模を大きくしたため天井部がもちこたえられず、焼成(操業)する前に天井部が崩落した可能性も考えられる。3号埴輪窯の窯体内では、遺構検出面から深さ40cmにかけ、円筒埴輪片が出土していたが、これらの埴輪片が2号窯の第2次床面の焼き台に使用していた円筒埴輪の一部であることが整理作業の結果明らかとなった。

灰原 1・2号埴輪窯に伴う灰原は、丘陵南側の谷部で東西約18m・南北約6mにわたって広がり、埴輪片の集中出土地点が大きく東西2か所に分かれることが明らかとなった。ただ、埴輪窯の前庭部及び灰原の上面は後世の水田開発により削られていたため、1・2号埴輪窯のいずれに帰属する灰原であるかは断定できない。また、灰原の前後関係についても堆積土が薄く確認するには至らなかった。

1号埴輪窯に関連すると考えられる西側の灰原は、西に向かって溝状に下がり、窯の中軸線からはかなり西側に振れた状況で広がる。黒色炭層は溝内の最も厚い部分で約0.5mを測る。灰原の南側は、SD05の北東肩周辺にも薄く広がり、付近には人の足跡状の窪みが多数観察できた。これらは、埴輪窯操業時の作業痕跡の可能性がある。2号埴輪窯に関連すると考えている東側の灰原は、黒色炭層が最も厚いところで約0.2mで、西に向かっ



第74図 瓦谷遺跡埴輪棺S X01実測図

て薄くなる。なお、窯体の一部と思われる焼土塊が長さ約1.8m・幅約0.6m・厚さ約0.1mの規模で、灰原のほぼ中心付近で出土した。1・2号埴輪窯の灰原から出土した遺物は、若干の土師器片のほか、ほとんどが埴輪片である。埴輪片は、普通円筒埴輪や蓋形埴輪の立ち飾りの基部、家形・盾形(線鋸歯文)・馬形などの形象埴輪が出土している。

灰原の下層には東西方向の浅い溝があり、東から西に向かってゆるやかに傾斜している。埋土は、灰黒色粗砂で若干の炭が混じる。出土遺物には土師器の甕片などがあり、この溝と古墳時代中期の流路とが合流する付近では、長さ約1.8m・幅約0.3mの大きさで、樋状に幹中央部が窪んだ木材が横たわっていた。木材には顕著な加工痕は観察できず、この場所に人為的に置かれたと考えるが、利用目的は判然としない。

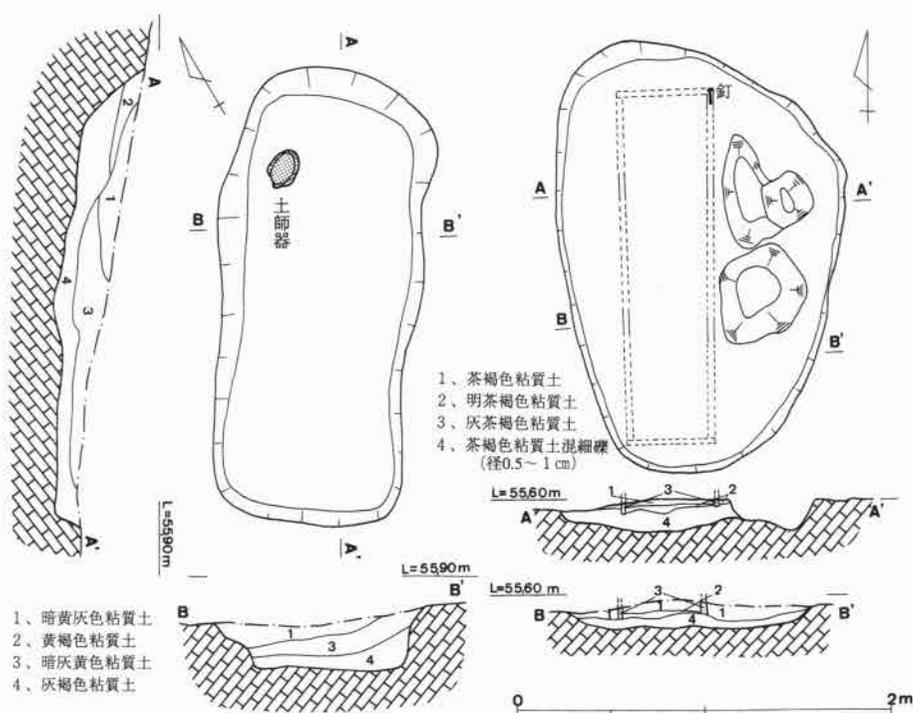
S D05・S D06 調査地谷部南端で南東～北西に流れる古墳時代中期の流路S D05を検出した。この流路は、幅約2m・深さ1～1.5mの規模で、流れ下るに連れてゆるやかに深くなる。流路内の埋土は、上層の暗灰色系粘質土と、下層の灰白色砂礫土の2層に大別できる。上層と下層の間には、薄い炭の堆積が観察できた。遺物は、上層から土師器甕・高杯、円筒埴輪などが各個体ごとにまとまって出土したが、下層から遺物は出土していない。灰原付近から下流の下層には多量の木片が含まれていた。灰原付近の上層には、炭の流入が顕著に見え、上層の堆積と同時期に灰原の形成が行われたと考える。

この流路は、南端付近で他の小流路と交錯するが、ほぼ同時期のものである。特に、S D06は遺物の出土状況も同様である。ただ、S D06は幅約0.8m・深さ約0.5mと、S D05に比べ規模は小さくかつ浅く、砂礫の堆積も多くないため、水の流量は少なかったと考える。

埴輪棺(S X01)(第74図) 埴輪棺は、丘陵頂部南側で1基単独で出土した。墓壇は南北方向に長軸をもち、南北約3.0m・東西約0.9m・検出面からの深さ約0.5mを測り、墓壇内のやや西側に片寄って全長約2.1m・幅約0.5mの埴輪棺を設置している。埴輪棺に使用された埴輪は、棺本体を円筒埴輪状に製作した特製埴輪2個を組み合わせた複棺構造のもので、両小口部にもキャップ形の特製埴輪を使用している。

なお、同様の特製埴輪片が2号窯から出土しており、埴輪棺に使用された特製埴輪もこの窯跡群内で焼成されたものと考えている。棺内の南側棺底で鉄製刀子1点、また棺外の墓壇内で棺中央部付近、墓壇底から約20cm上位で、鉄鏃4点が重なった状態で出土した。鉄鏃の多くは先端を北に向けていた。棺内には、第6次調査でみられたような石あるいは埴輪片を転用した枕の施設がなく頭位は不明である。

土坑S X02(第75図左) S X02は丘陵上部で、埴輪棺S X01から北西方向に約8mの位置で検出した。長さ約2.4m・幅0.9m、検出面からの深さ約0.3mを測る隅丸方形の土坑である。土坑内埋土は、暗灰黄色粘質土・灰褐色粘質土で、土坑内北西端で、土坑底から



第75図 瓦谷遺跡 S X 02・03実測図

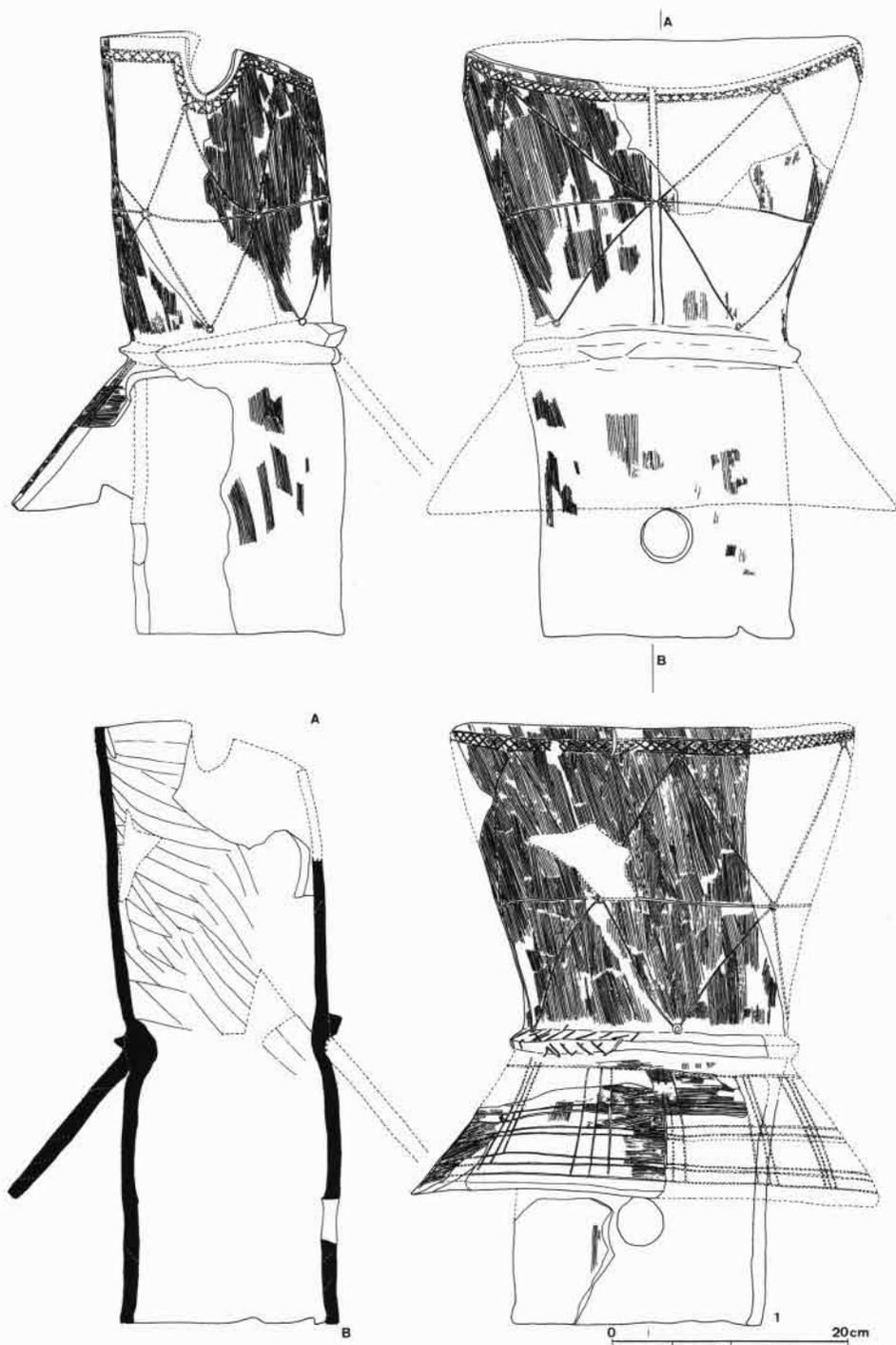
約20cm上の位置ではほぼ完形の土師器皿1点(第81図27)が斜めに落ち込んだ状況で出土した。この土坑は、土師器皿の形態から奈良時代のものと思われる。

土坑 S X 03(第75図右) 丘陵上部で S X 02の西北約18mの位置で検出した長さ約2.3m・幅約1.5m、検出面からの深さ0.15mを測る隅丸方形の土坑である。土坑内埋土は暗茶褐色粘質土で、埋土内から鉄釘2点が出土した。鉄釘は、2本とも先端を土坑中央方向に向け水平に出土しており、その出土状況から木棺直葬墓の可能性はある。なお、S X 03は鉄釘のほかには出土遺物はなく、時期不明である。

溝状遺構 丘陵北斜面の中腹で、丘陵端部をめぐるかのように幅約0.5m、検出面からの深さ約0.1mを測る溝状遺構である。この溝状遺構は、西あるいは南斜面にもあった可能性があるが、後世に削平された可能性が考えられる。この溝状遺構からは少量の埴輪片と中世土師器羽釜片などが出土した。なお、北側の谷部を挟んだ第6次調査地点の丘陵部でもこの溝状遺構の同様の溝を検出している。

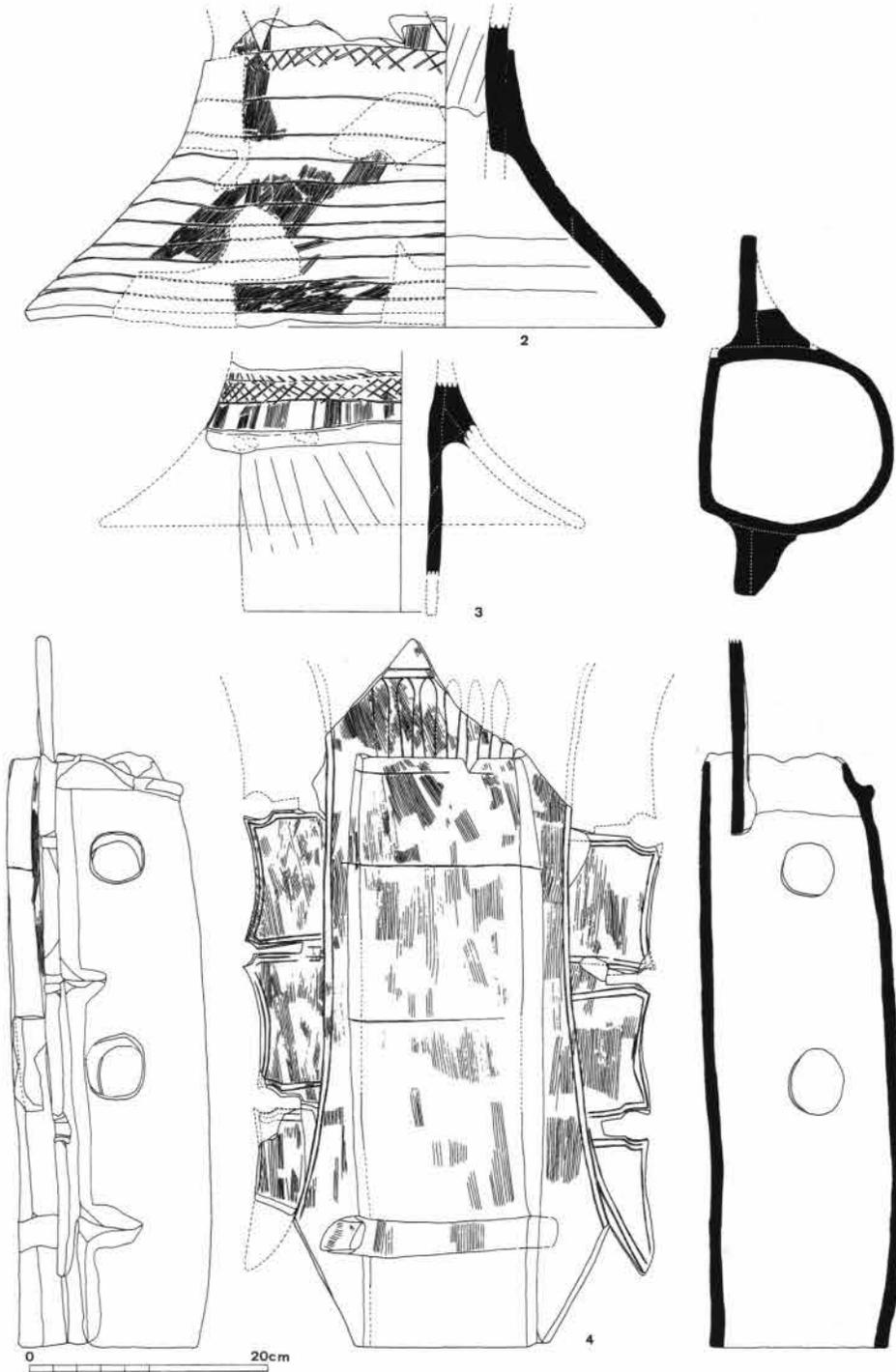
3. 出土遺物(第76~81図)

瓦谷遺跡第7次調査で出土した遺物は、コンテナバットで80箱程度を数え、そのうち、



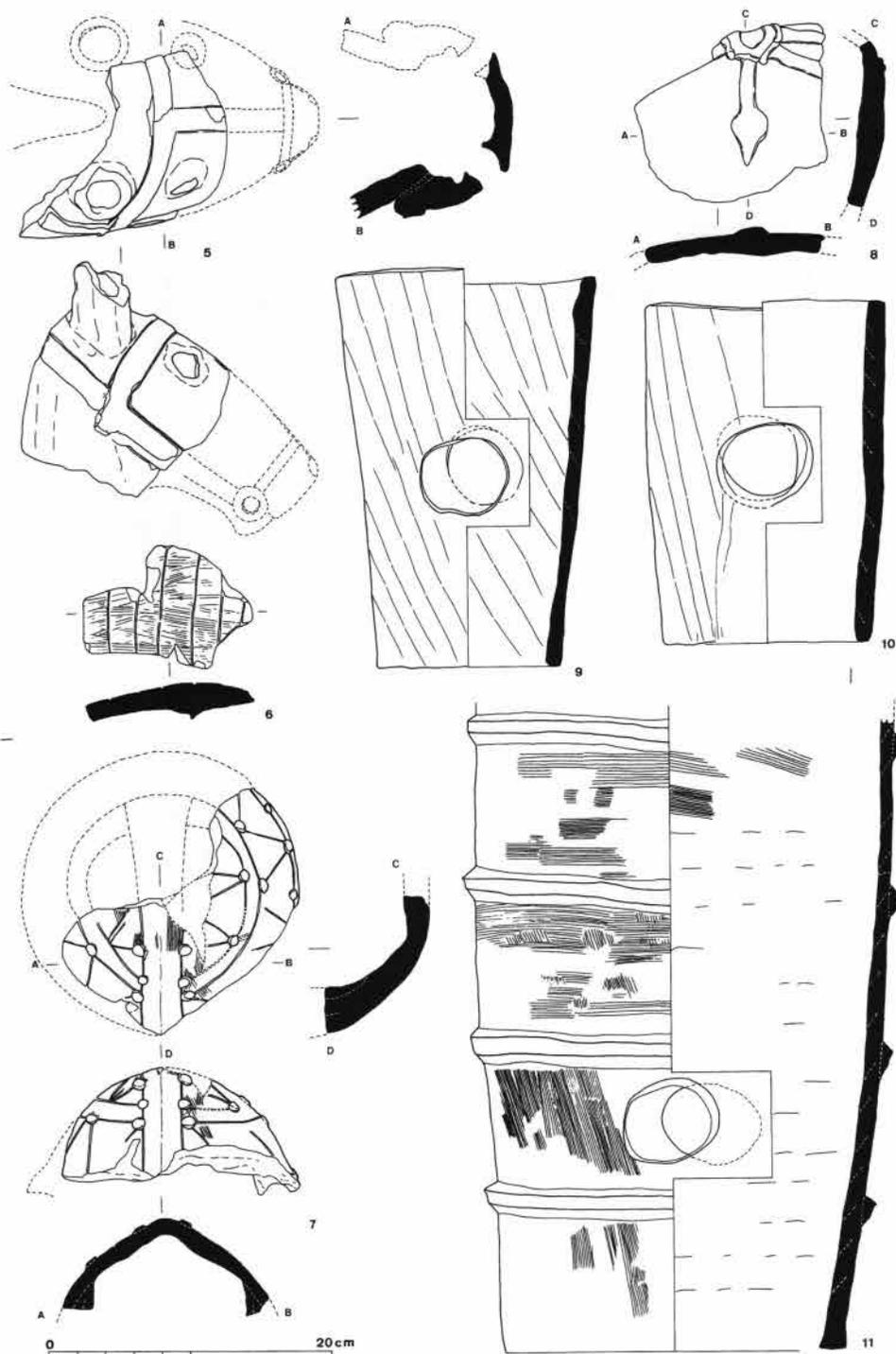
第76図 瓦谷遺跡埴輪窯出土遺物実測図(1) (1/6)

1. 2号埴輪窯



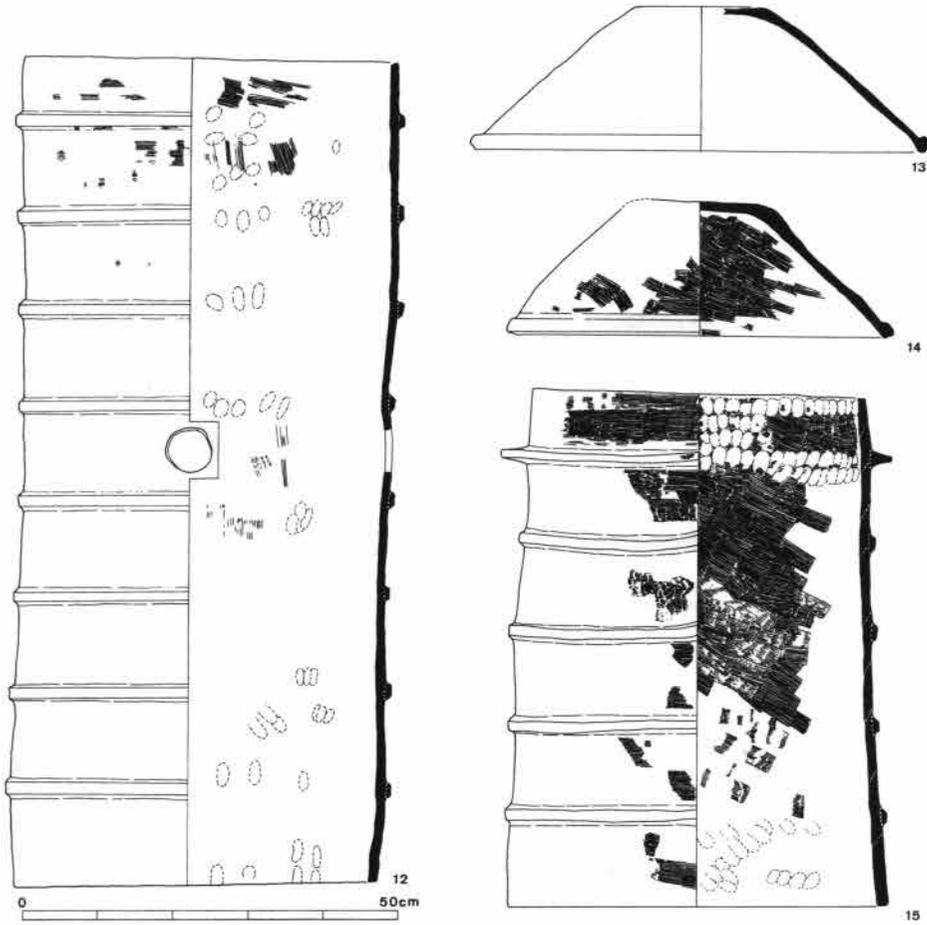
第77図 瓦谷遺跡埴輪窯出土遺物実測図(2) (1/6)

2~4. 2号埴輪窯



第78図 瓦谷遺跡埴輪窯出土遺物実測図(3) (1/5)

5・6・8～11. 2号埴輪窯 7. 灰原



第79図 瓦谷遺跡埴輪棺S X01出土遺物実測図(1/10)

2号埴輪窯からの遺物(埴輪)が80%以上を占める。

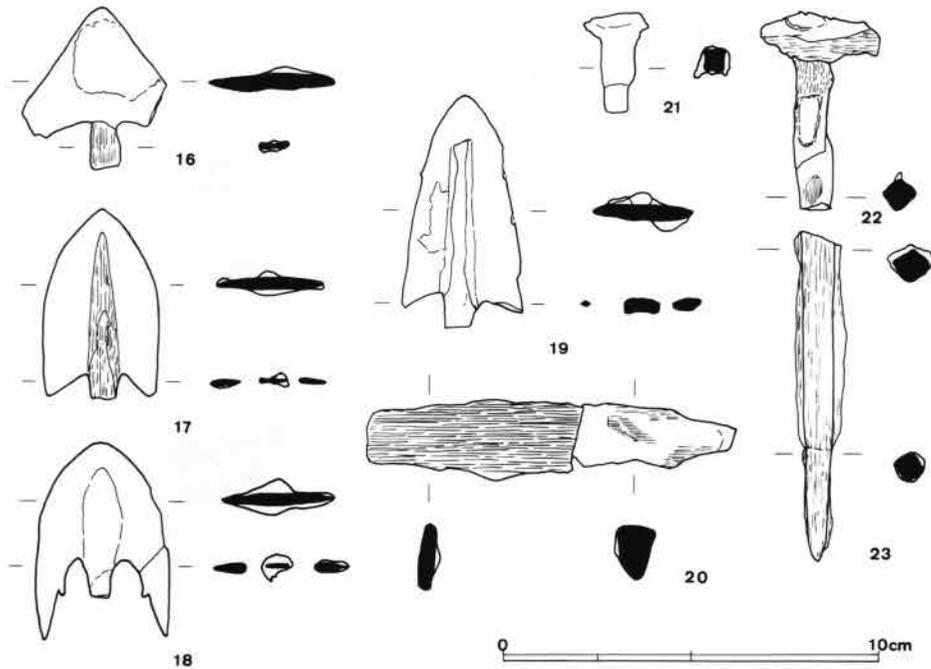
2号埴輪窯の遺物は現在整理中であり、図化できたものうちその一部を提示するにとどめ、その詳細については後日報告する。ここでは整理が進んだ埴輪窯以外の遺物についてその概要を詳述する。

1～11は、2号埴輪窯から出土したものである。1～3・6は、短甲及び草摺、4は靴、5・8は馬、7は冑を模した形象埴輪である。

9・10は、煙出し部で出土した特製埴輪、11は普通円筒埴輪である。

12～15は、埴輪棺S X01に使用されたもので、いずれも特製埴輪である。

16～19は、埴輪棺の東側の棺外から出土した鉄鏃である。16は、残存長4.4cm・残存幅4.0cmである。全体の形は三角形、先端から直線的な刃部が両側に開くが、両端の逆刺部分を欠き、頸部の一部に木質が残る。17は、残存長5.01cm・幅3.2cmである。幅に対して



第80図 瓦谷遺跡出土遺物実測図(1) (1/2)

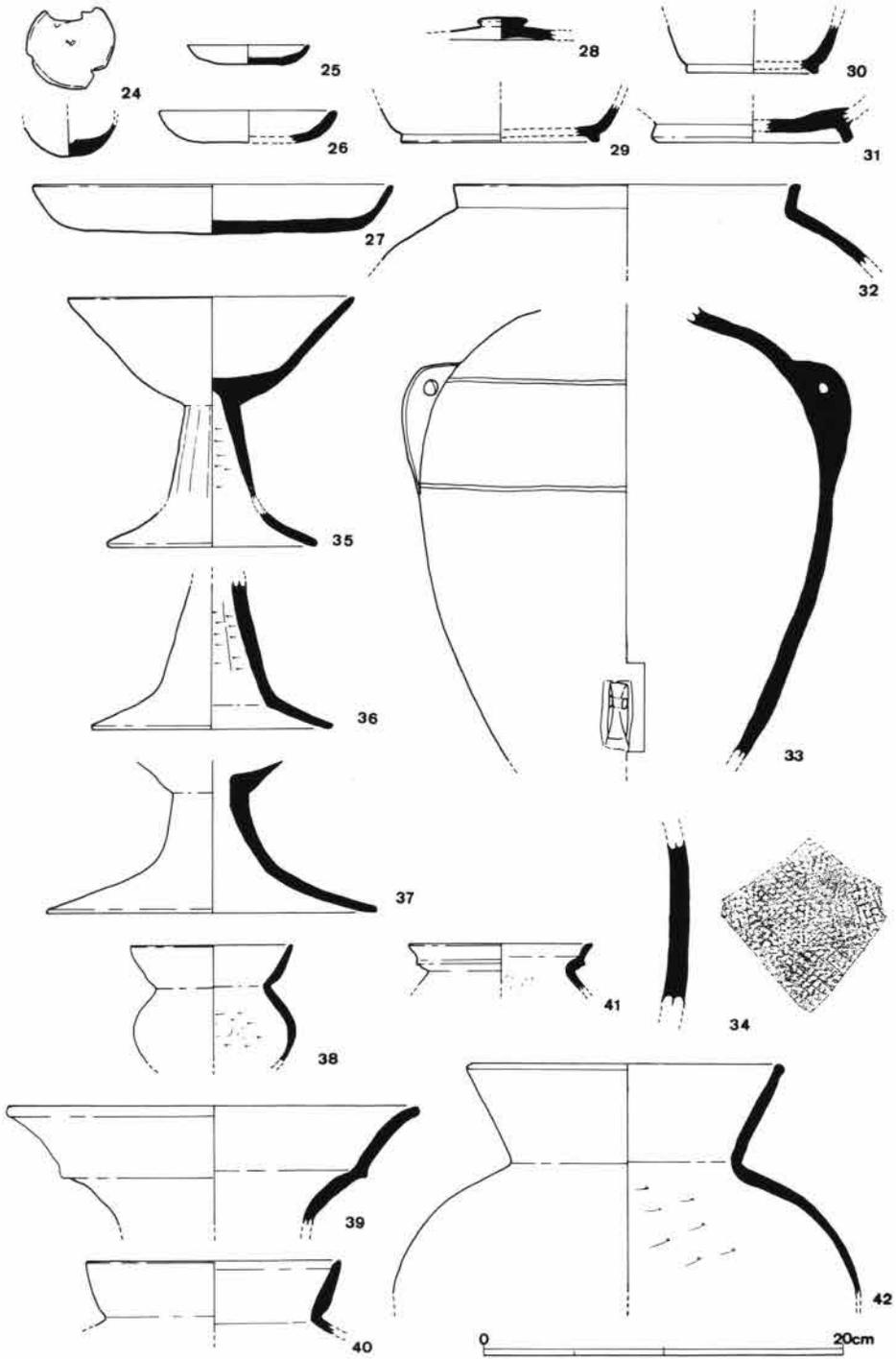
16~20. S X01 21~23. S X03

全長が長く、刃部がゆるやかに弧を描き、逆刺が短い形をしている。中心部分には鏑を固定した木質が残る。18は、残存長5.25cm・幅3.6cmである。逆刺が長く、その間にさらにもう一段の逆刺がある。19は、残存長6.25cm・幅3.2cmである。今回出土した鉄鏃の中では一番大きく、幅に対して全長の長い三角形をしている。

20は、埴輪棺の棺底南側中央付近から出土した刀子と考えている鉄製品である。残存長9.8cm・最大幅約2cmである。一部に木質が残る。

21~23は、S X03から出土した鉄釘である。全体に錆による傷みが激しいが、22の頭部には、木質が残る。

24~27は土師器で、24~26は谷部の包含層から出土している。24は、小型の鉢状の器の底部の破片で、内面底部にへら状の器具によると思われる浅い刺突痕がある。27は、S X02の内部から出土している。色調は灰色で、口縁部の一部を除いてほぼ完存しているが、器壁の残りは悪く、細かい調整は不明である。28~34は、須恵器でいずれも包含層出土遺物である。33は、双耳壺の頸部から上と、底部を欠くが、他はほとんど残っている。丘陵の南側斜面の中央付近の整地土中から出土している。底部近くの外面に、肩部にある把手よりやや小振りの把手が1つだけ付いている。肩部と胴部には2条の浅い沈線が巡り、全



第81図 瓦谷遺跡出土遺物実測図(2) (1/4)

体に暗灰色に堅く焼けている。34は、甕の胴部の破片である。暗青灰色に堅く焼き締められ、外面に格子タタキがはっきりと浮き上がり、埴輪窯が稼働していた頃に近い時期の須恵器であろう。35～42は、流路内や同肩付近から出土した土師器である。器壁の摩滅はほとんど進んでおらず、破片もまとまって出土しており、付近で使われた土器が捨てられた状況がうかがえる。なお、灰原及び流路内からは、須恵器の出土は確認できなかった。

4. まとめ

瓦谷遺跡の発掘調査も今年度の第7次調査をもってほぼ終了した。

今年度の発掘調査は、試掘調査でみつかった埴輪棺S X01の検出をもとに丘陵先端の全域を発掘調査し、第6次調査で検出したような小規模古墳や埴輪棺が数多く検出できることを期待したが、試掘調査でみつかった埴輪棺1基のみであった。その反面、丘陵先端を広い範囲で調査したため予想もしなかった埴輪窯を検出した。

埴輪窯は、丘陵北側斜面に3基がほぼ平行して並んでおり、その窯体構造は瓦谷埴輪窯から北へ約150mと近接した位置にある上人ヶ平埴輪窯と同様の地下式構造の窯である。

3基の窯では、1号埴輪窯の天井部が比較的良好な状態で残っていること、3号埴輪窯が窯の構築後に操業されることなく廃棄されたことが明らかになったほか、3基の窯とも床面に排水施設と思われる溝がめぐっていた。窯体内の遺存状態が良好であった2号埴輪窯では、溝の上面に破碎した埴輪片を敷き並べて焼成部第1次床面として使用している。第2次床面の埴輪片は、第1次床面の埴輪片のように排水施設を意図したものとみても焼成時の焼き台としての機能が考えられる。床面に溝をめぐらした埴輪窯は、瓦谷埴輪窯のほか、上人ヶ平埴輪窯・福岡県立山山窯^(注7)がある。

瓦谷埴輪窯出土の埴輪については現在整理中であり、その詳細については後日報告するが、円筒埴輪や甲冑形埴輪の特徴から瓦谷埴輪窯に近接した上人ヶ平埴輪窯よりわずかに古い様相がみうけられる。ただ、瓦谷埴輪窯の製品も上人ヶ平埴輪窯の製品と同様、その多くが上人ヶ平古墳の古い一群の古墳に供給されたものと思われる。

埴輪窯に近接した位置にある埴輪棺S X01の棺に使用された埴輪は、第6次調査でみつかったような黒斑をもたず、また出土した鉄鍬からも瓦谷埴輪窯と前後する時期のものと思われる。この埴輪窯と埴輪棺の被葬者を考える上でも参考となる遺跡と考えられる。

奈良時代の墓塚及び土坑や中世の丘陵斜面をめぐり溝は、第6次調査でも検出しており、奈良時代以降の瓦谷遺跡を考える上でも有効な調査であったと考えられる。

(石井清司・森正哲次・有井広幸)

(2) 上人ヶ平埴輪窯第2次

1. 調査の経過

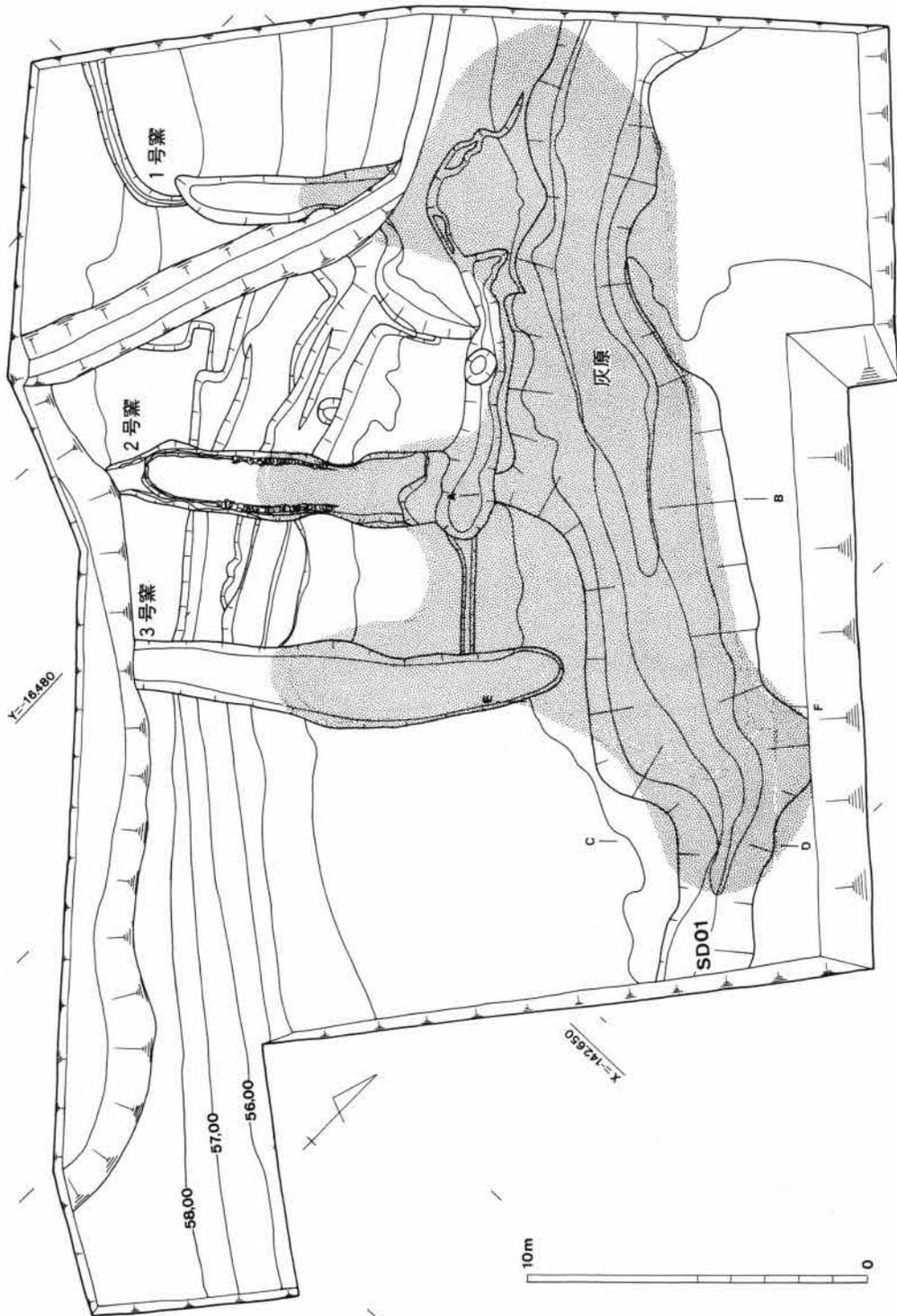
上人ヶ平埴輪窯の調査は、昭和63年度に始まる(第1次調査^(注8))。第1次調査では、埴輪窯の西端にある1号埴輪窯の調査を行った。1号埴輪窯は、全長約8.0m・床面最大幅1.45mの地下式窖窯で、床面が3回にわたって修復(かさ上げ)していることが明らかとなった。この調査では、1号窯の窯体解明とともに、さらに数基の窯があることを予想し、周辺部に試掘トレンチを設定して調査したところ、1号窯の西側で窯体の一部と思われる焼土を2か所(2・3号埴輪窯)と、その南側(下位)で灰原の一部を検出し、上人ヶ平埴輪窯が3基以上の窯で構成されていることが明らかとなった。ただ、2・3号埴輪窯の大半が現在使用されている農道の下にあるため、農道の迂回路工事の完成を待って再度調査を実施する方針となった。本年度は、第1次調査で保留となっていた迂回路工事が完成したため、2・3号窯の窯体構造を明らかにするとともに、周辺に調査地を広げ新たに窯があるかどうかを確認するため、調査地(調査面積約550m²)を設定した。

調査は、まず、農道のノリ面を削り、窯の検出作業を進めたところ、昭和63年度(第1次調査)の試掘調査で確認した2・3号埴輪窯のほか、新たに見つかった埴輪窯はなく、上人ヶ平埴輪窯が3基の窯で構成されていることが明らかとなった。窯の基数が明らかとなったため、窯体内を掘削するとともに、灰原の範囲を確認するため、調査地を北東方面に掘り進めたところ、灰原とともに灰原の下層で古墳時代前期には機能していたと思われる旧流路も確認した。灰原の調査では、1・2・3号窯の埴輪窯は遺構の切り合いがなく、その操業の前後関係を知り得ないため、灰原の堆積状況から窯の操業順位が考えることもできる。以下、検出した遺構及び出土遺物の一部についてその概要を説明する。

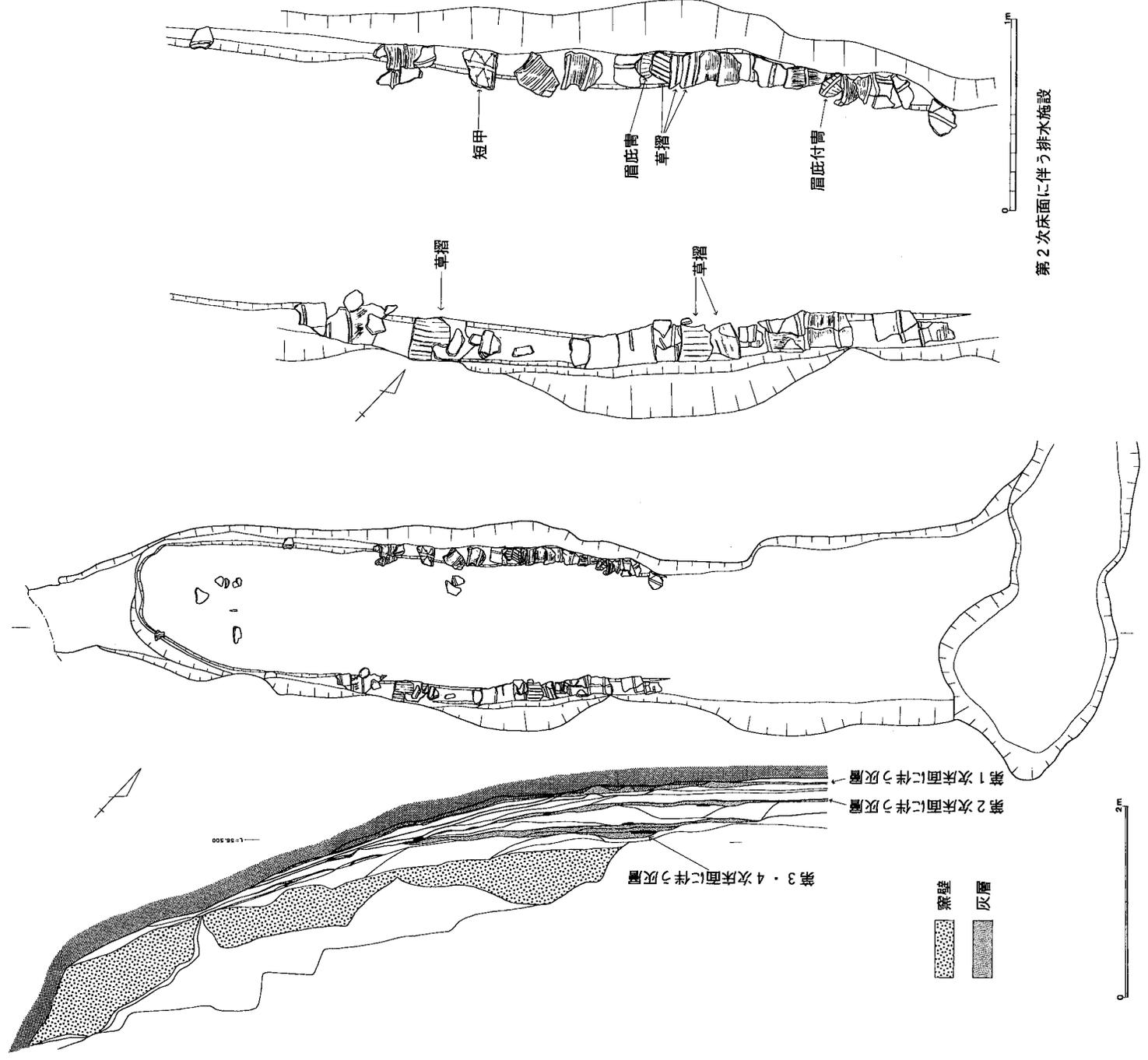
2. 検出遺構(第82～85図)

今回の調査では、埴輪窯2基(2・3号埴輪窯)と旧流路跡(S D01)を検出した。

2号埴輪窯 2号埴輪窯は、昭和63年度の第1次調査で検出していた1号埴輪窯の南東方向約7mの位置にあり、検出全長約7.6m(斜距離)・床面最大幅約1.65mを測る窖窯である。窯体内に崩落した堆積土をみると、天井部と思われる焼土層の上層に地山土と近似した土があること、天井部と思われる窯壁にスサが混入しないことから、2号埴輪窯は1号埴輪窯と同様、地下式窖窯と思われる。窯体内の崩落土を順次除去したところ、検出面

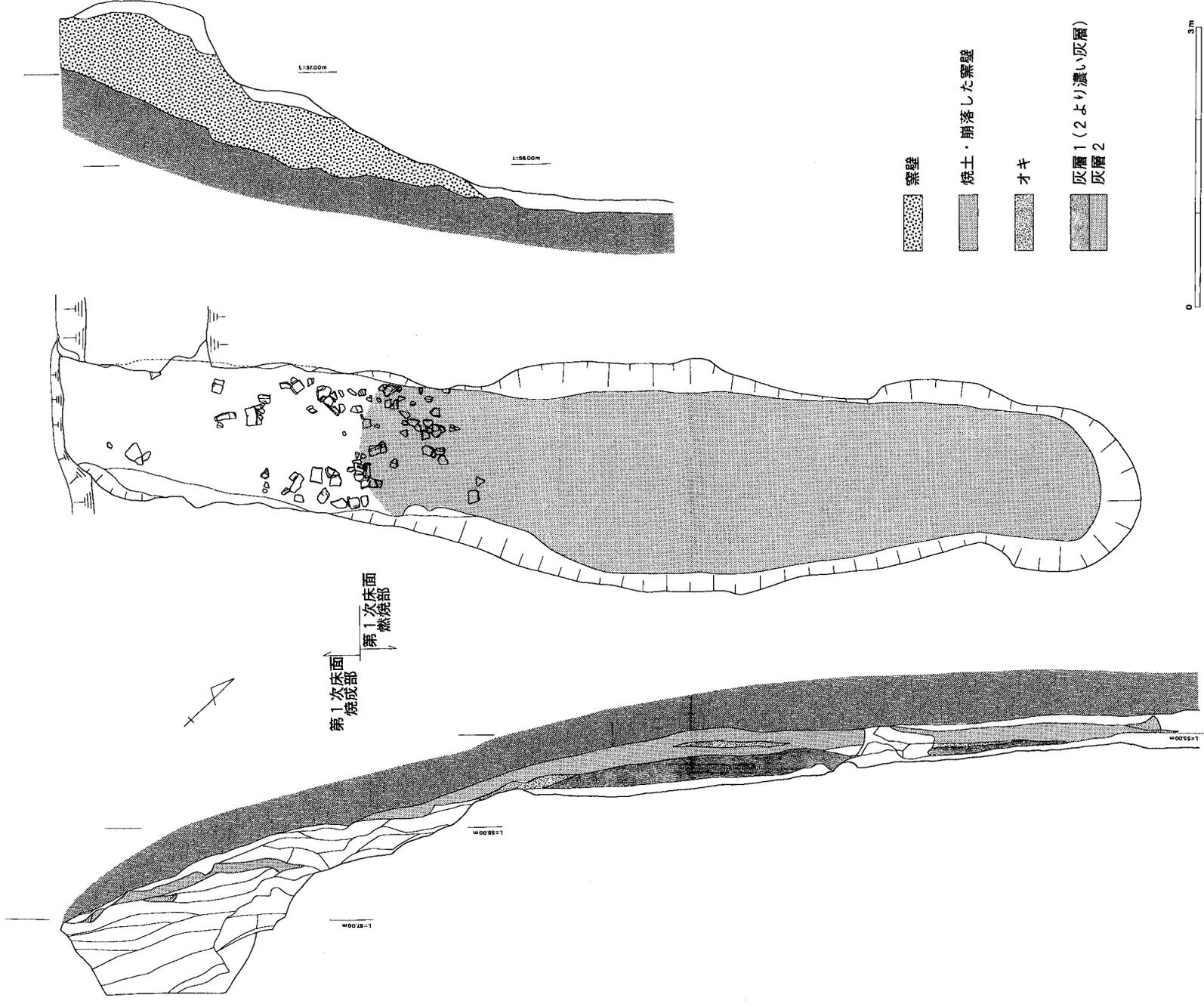


第82図 上人ヶ平埴輪窯遺構配置図



第2次床面に伴う排水施設

第83図 上人ヶケ平2号埴輪窯実測図



第84図 上人ヶ平3号埴輪窯実測図

から約70～90cmで最終操業床面(第4次床面)を検出した。第4次床面は後述する第1次床面(築窯当初の床面)から、焼成部では約20cm、燃焼部では約50cmかさ上げた状態であり、床面傾斜角も第1次床面に比べてゆるい。第4次床面の下層は、厚さ約10cmの焼土層を間に挟んでその下に第3次床面の焼成部がある。第3次床面の燃焼部に堆積した灰層は、薄い焼土層を挟んでその上層に第4次床面の灰層と重なっている。第2次床面の焼成部は、第3次床面の焼成部と重複しており、燃焼部のみが第3次床面の下約20cmで検出でき、第2次床面での操業後、第3次床面では燃焼部のみかさ上げたことがうかがえる。築窯当初の燃焼部の床面(第1次床面)は、第2次床面よりさらに約10cm、焼成部は約5～10cm下方にある。第2・3・4次床面では排水施設はなかったが、築窯当初の床面である第1次床面では排水施設を検出した。排水施設は、床面と側壁との傾斜変換点付近に、焼成部をほぼめぐるように、上面幅約10cm・深さ約5cmの断面「U」字形の溝が穿たれており、焼成部の下方(燃焼部側)の約2/3程度では、円筒埴輪・形象埴輪(短甲部分・草摺部分・眉庇付青)を意図的に破砕して、素掘り溝の上面に整然と並べられていた。前庭部は、後述する3号埴輪窯と同様、窯体とほぼ同様の幅で掘り凹められており、灰原をかき出しやすいようにしたものと思われる。

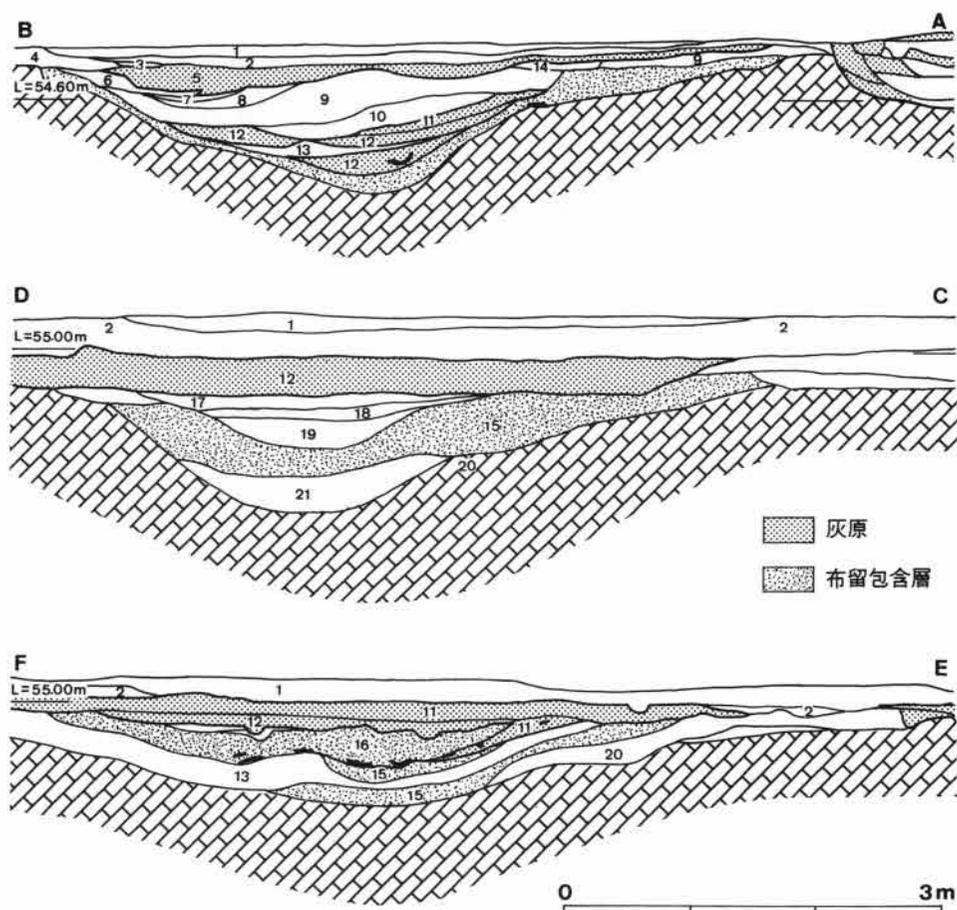
第1次床面の排水溝に利用された埴輪片を除いて、各床面での埴輪の出土量は少なく、円筒埴輪・形象埴輪(蓋・盾など)の細片を含むのみであった。

3号埴輪窯 3号埴輪窯は、2号埴輪窯の南東約4mに位置しており、検出全長約6.0m(斜距離)・床面最大幅約1.55mを測り、煙出し部近くは、現ふんどし池の造成により削り取られていた。3号窯は、窯体内の崩落土の状態から1・2号埴輪窯と同様、地下式窯と思われる。燃焼部及び焼成部での床面の明瞭なかさ上げ状況はない。

灰原は、自然地形を利用して傾斜面にそのまま排棄するのではなく、2号埴輪窯と同様、窯体の幅とほぼ同じ規模で燃焼部側から、長さ4mにわたって断面「U」字形で深さ約40cmの溝を掘り、その溝内に灰原を排棄していた。床面では円筒埴輪片が出土したがその量は少ない。

S D01 S D01は、1～3号埴輪窯の燃焼部から北東方向に約4mで、南西方向から北東方向に流れる溝である。S D01は、上面最大幅約5.0m・下面最大幅約2.3mで、検出面からの深さ50～70cmを測り、2・3号埴輪窯の前庭部付近が特に幅が広く深いため、埴輪窯の操業時に灰原を排棄しやすくするため、溝を掘り広げた可能性も考えられる。

溝の堆積土は、溝検出面から下1mまでは、2・3号窯に関連した灰原及び焼土層が堆積しており、最下層の灰色粘質土層に土師器壺・甕・高杯などが出土した。

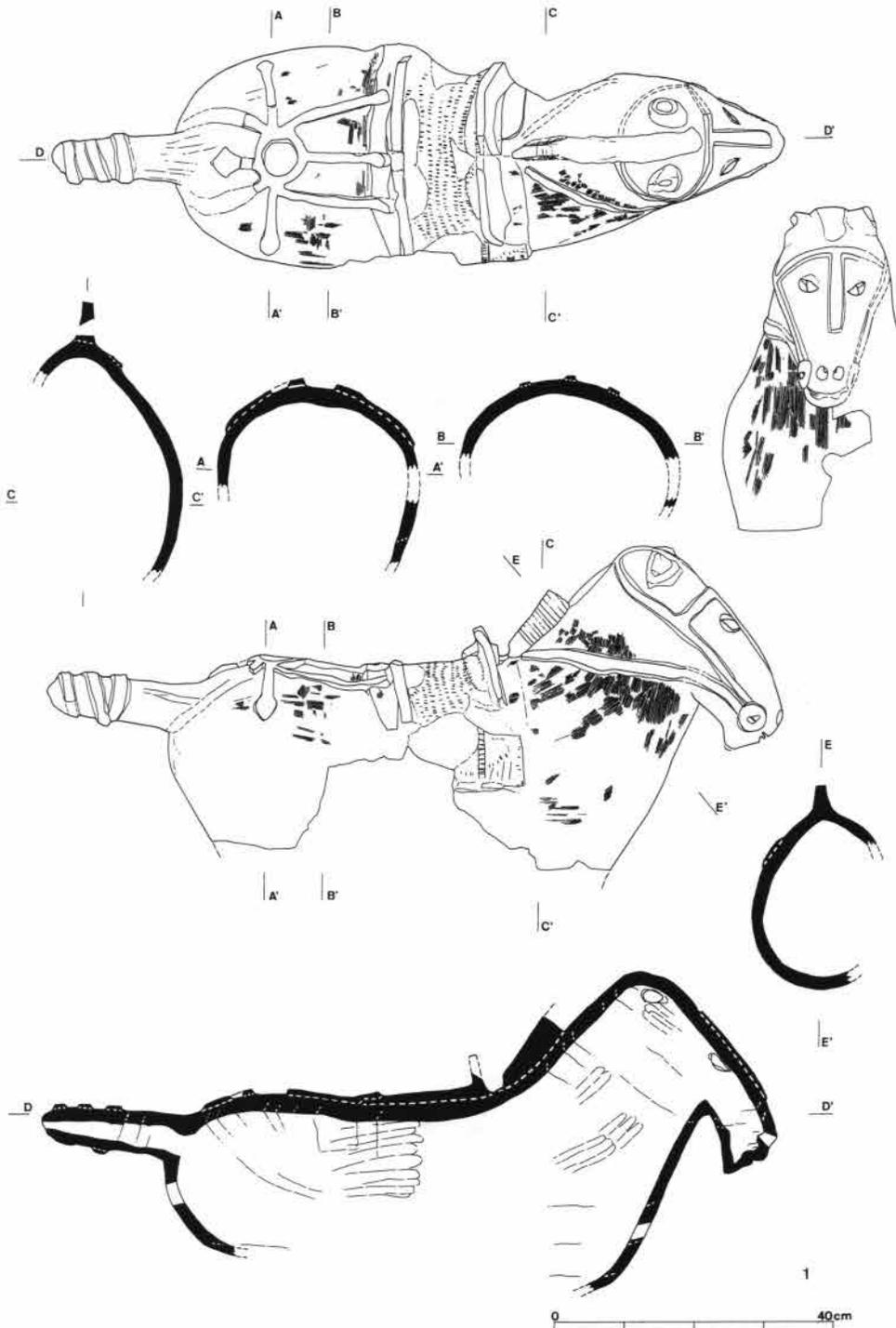


- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 1. 灰白(5Y7/2)色粘質土 | 11. 灰(7.5Y5/1)色土；灰原(推定3号窯?) |
| 2. 灰(5Y6/1)色土(砂を多く含む) | 12. 黒(5Y2/1)色土；灰原(推定3号窯?) |
| 3. 灰(5Y6/1)色粘質土(炭を含む) | 13. 明青灰(5BG7/4)色砂質土(わずかに炭を含む) |
| 4. 灰(5Y5/1)色粘質土(炭を含む) | 14. 灰白(5Y7/1)色砂質土 |
| 5. 黒(7.5YR1.7/1)色土；灰原(推定2号窯) | 15. 灰(5Y5/1)色粘質土(布留式土器を含む) |
| 6. 褐灰(7.5YR5/1)色粘質土(炭を含む) | 16. 灰白(5Y5/1)色粘質土 |
| 7. 灰白(5Y8/2)色粘土 | 17. 灰黄(2.5Y7/2)色砂質土 |
| 8. 灰(2.5Y4/1)色砂礫土 | 18. 黄灰(2.5Y4/1)色シルト |
| 9. 灰黄(2.5Y7/2)色砂質土 | 19. 黒褐(2.5Y3/1)色砂質土(灰を含む) |
| 10. 黄灰(2.5Y6/1)色シルト | 20. 灰白(2.5Y7/1)色砂質土 |

第85図 S D01土層断面図

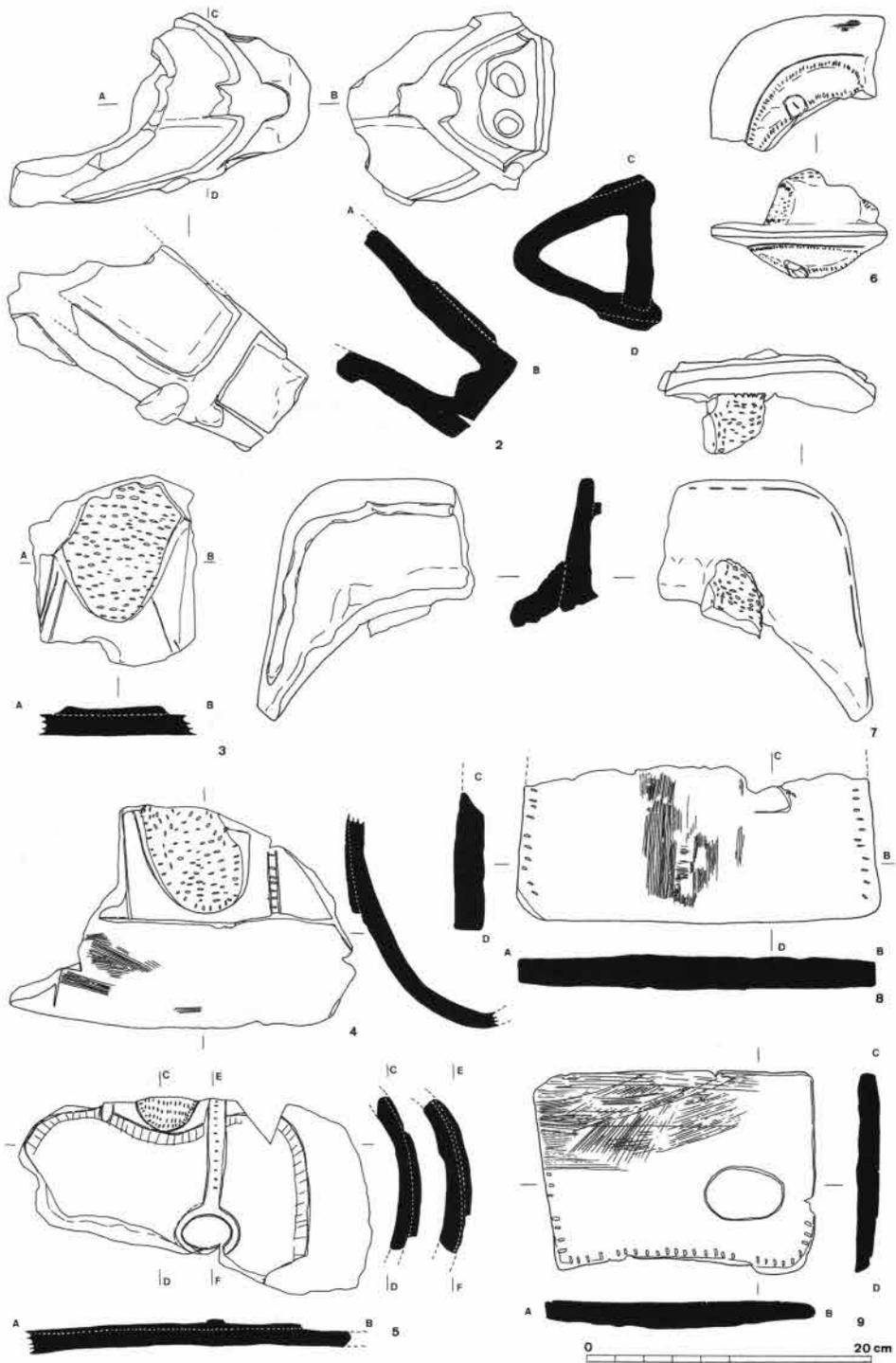
3. 出土遺物(第86~88図)

昭和63年度に発掘調査を実施した1号埴輪窯では、窯体内に比較的まとまって埴輪が出土したが、今回の2・3号埴輪窯では、2号窯の排水施設に使用された埴輪片を除き、窯体内からの埴輪の出土量は少なかった。一方灰原、特にS D01の上層に堆積した灰原内か

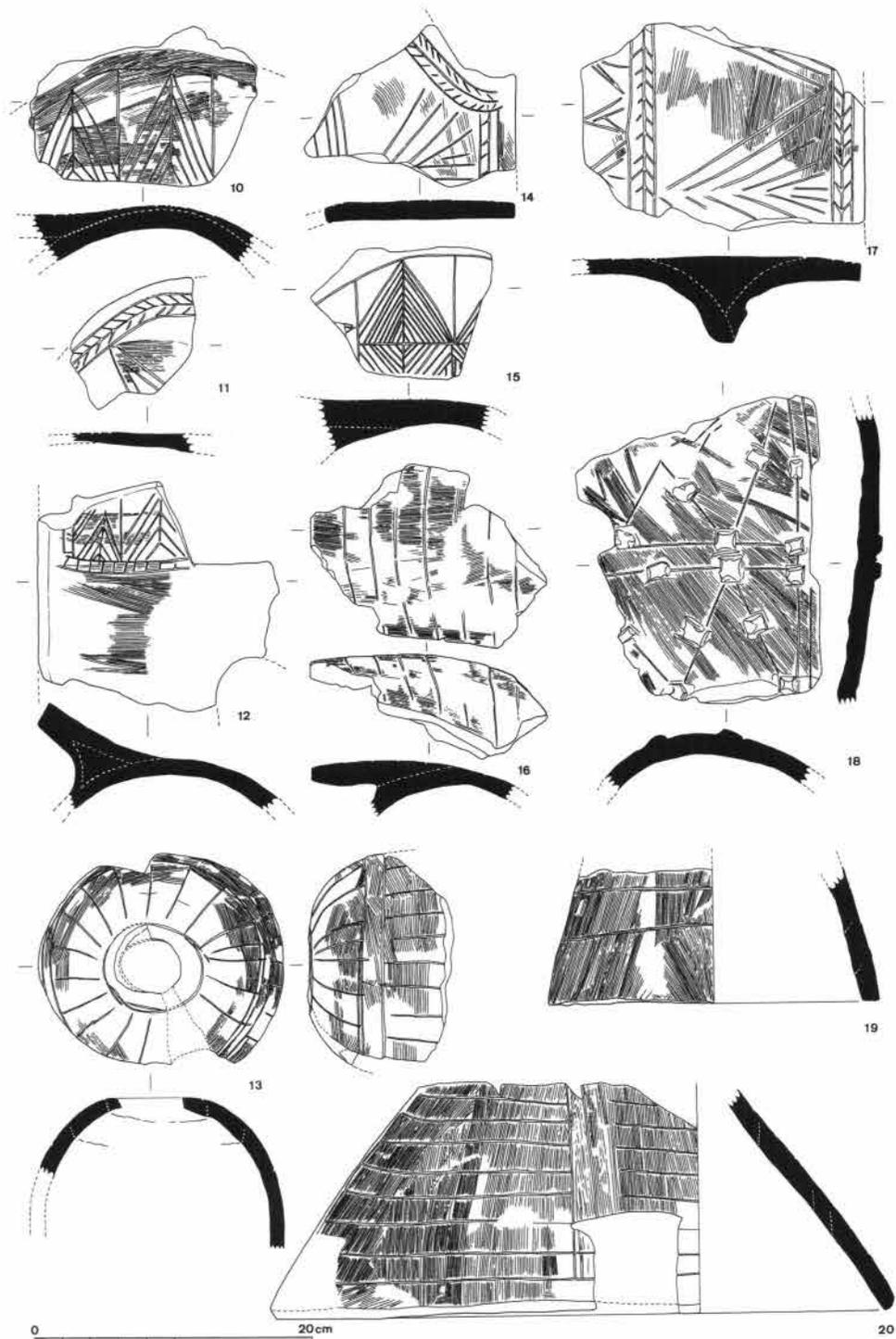


第86図 上人ヶ平埴輪窯出土遺物実測図(1) (1/10)

1. S D01上面灰原



第87図 上人ヶ平埴輪窯出土遺物実測図(2) (1/5)
 3・8. 2号窯窯体内 2・4~7・9. S D01上面灰原



第88図 上人ヶ平埴輪窯出土遺物実測図(3) (1/5)

13・14・16~20. 2号窯窯体内 10・15. 3号窯窯体内 11. S D01上面灰原

らは比較的まとまって出土しており、コンテナバットにして約50箱程度の量で埴輪が出土した。今回の調査で出土した埴輪には、普通の円筒埴輪・朝顔形埴輪のほか、盾形・蓋形・甲冑形・家形・鶏形・馬形の形象埴輪がある。

上人ヶ平埴輪窯から出土した遺物については、現在、整理作業の途中であり、今回はその一部を提示することにとどめ、今後整理作業がまとまった段階で新たに報告する予定である。

4. まとめ

上人ヶ平遺跡埴輪窯の調査は、昭和63年度の第1次調査と今回の第2次調査によって遺構の全容がほぼ明らかとなった。すなわち、上人ヶ平埴輪窯は全長約8m前後・床面最大幅約1.6m前後の規模で、丘陵斜面をトンネル状に削り貫いた地下式窖窯であること、各窯の操業は灰原の堆積状況や窯体内などから出土した埴輪の特徴から、3号埴輪窯の操業の後、2号埴輪窯、そして1号埴輪窯へと変遷していることが考えられる。2号埴輪窯では築窯当初の床面で、床面と側壁の傾斜変換点付近に逆「U」字形の溝を掘り、さらにその上面に埴輪を意図的に破碎して並べているという特徴がある。このような排水施設は、上人ヶ平埴輪窯から南へ約150mの位置に築かれた瓦谷埴輪窯でもある。上人ヶ平埴輪窯の埴輪と瓦谷埴輪窯の埴輪を比較すると、若干瓦谷埴輪窯の埴輪が古い傾向にあり、瓦谷埴輪窯の操業ののち、上人ヶ平埴輪窯へ移行した可能性が考えられる。上人ヶ平埴輪窯の製品は、第1次調査の概要で明記したように、その大半が上人ヶ平埴輪窯から、西約100mに立地する上人ヶ平古墳群へ供給されたものと考えられる。

(石井清司)

(3) 梅谷瓦窯・中ノ島遺跡

1. 調査経過(第89図)

梅谷瓦窯跡は、京都府と奈良県の境界である平城山丘陵の東部から北に向かって分岐する丘陵の先端にあたり、木津町南東部の山間地に位置する。梅谷瓦窯跡及び隣接の中ノ島遺跡は、昭和56年度に京都府教育委員会が行った分布調査によって軒平瓦や布目を持つ丸瓦・平瓦が採取され、奈良興福寺所用瓦を焼いた窯が付近にあることが推定された^(注9)。その後、昭和60年度の試掘調査において、梅谷瓦窯跡の位置する丘陵の裾付近で、奈良時代の遺構として瓦窯関連の灰原とテラス状の地形及び溝状の落ち込みなどが、須恵器・土師器及び多量の瓦片とともに確認され、また、近世以降の新田開発による水田面を検出している^(注10)(第89図29bt・47bt)。平成5年度調査は、昭和60年度調査の成果を受けて、梅谷瓦窯



第89図 梅谷瓦窯・中ノ島遺跡トレンチ配置図(1/2,000)

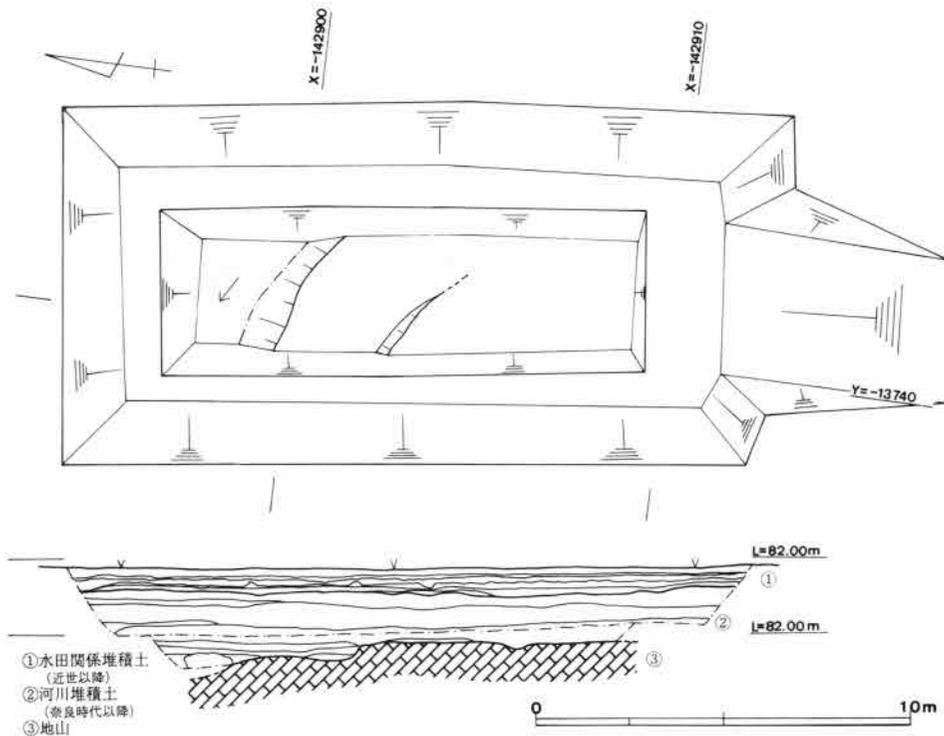
跡の窯の位置とその基数及び関連施設の確認を目的に試掘調査を行った。総調査面積は、約3,000m²である。

2. 調査概要

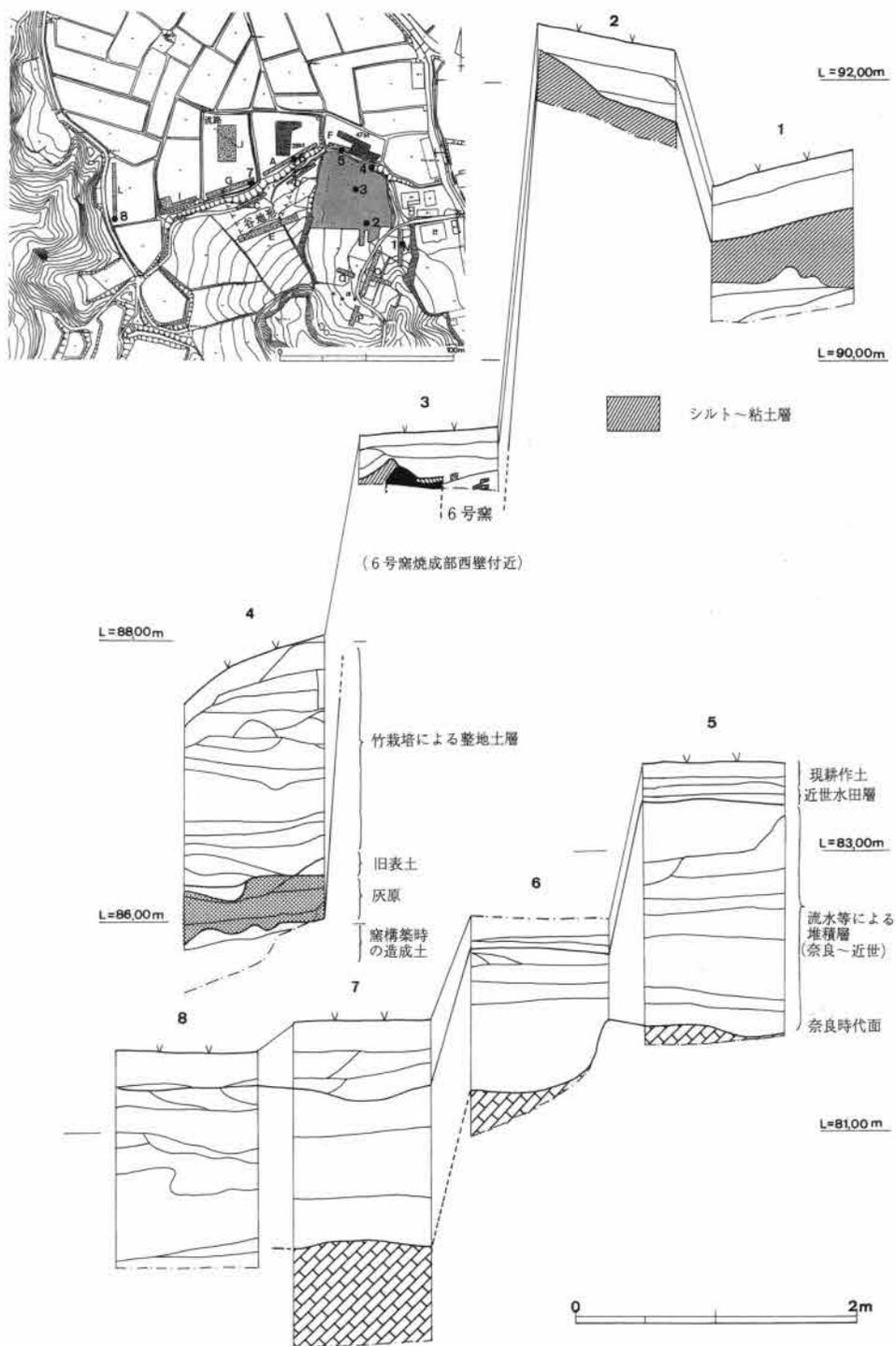
a. 各トレンチの状況及び層序(第89～91図)

中ノ島遺跡内に配置したトレンチ(A・F・G・I・J・L)は、総面積で約500m²となる。総じて現耕作土下層で近世耕作土を確認し、さらに下層の砂礫土を深さ数mまで掘削したが、一部を除き顕著な遺構は検出されなかった。また、遺物の出土量も少なく、瓦を除くと少量の磁器片が出土した程度である。瓦窯付近から離れるほど遺物が希薄になる傾向がある。しかし、A・Fトレンチでは瓦が多く出土し、窯から投棄された状況が確認できている。

中ノ島遺跡は、全体の層序として、①現耕作土～近世水田耕作土、②奈良時代以後の自然堆積砂礫土、③地山となっており、一部を除いて2層以下では遺物は出土していない。①層は、現耕作土・床土層を含んだ厚さで約0.3mを測る。旧耕作土は、検出部分によって厚みに約0.1～0.4mと変化があり、水田の拡張のようすがうかがえる。遺物は、若干の



第90図 Jトレンチ平・断面図(1/200)



第91図 調査地土層断面柱状図

陶磁器片が出土しており、上梅谷が新田開発された近世中期以降に形成された層であろう。②層は、水性堆積によって形成されたと考えている層で、奈良時代の瓦を含む堆積層は窯に近いほど遺物の量が増え、周辺部は極めて希薄になる。③層も水性堆積であることは同様である。井関川流域の梅谷周辺は、古木津川によって形成された数m以上にも及ぶ、砂礫の厚い堆積が広く分布していることが知られており、今回、地山と判断した層がこの地層に符合すると考える。前記の2種類の水性堆積層は、ともに黄灰色系砂礫層で、土の堅さや堆積の乱れなどによって区別しなければならないほど似通っている。Jトレンチで検出した流路はその例で、トレンチ北端部で現地表から約1.8m下で、軒平瓦ほかを含む流路を検出した。

梅谷瓦窯が造られている丘陵は、調査地付近では大部分が砂質の水平堆積土からなっている。しかし、標高約89m付近より上層では、部分的に粘土～シルト質の堆積があり、窯はこの層を中心に構築されている。瓦の原料となる粘土の堆積も、現在のところこの付近でしか確認できないため、窯周辺の粘土を利用して瓦を焼いていた可能性が高い。

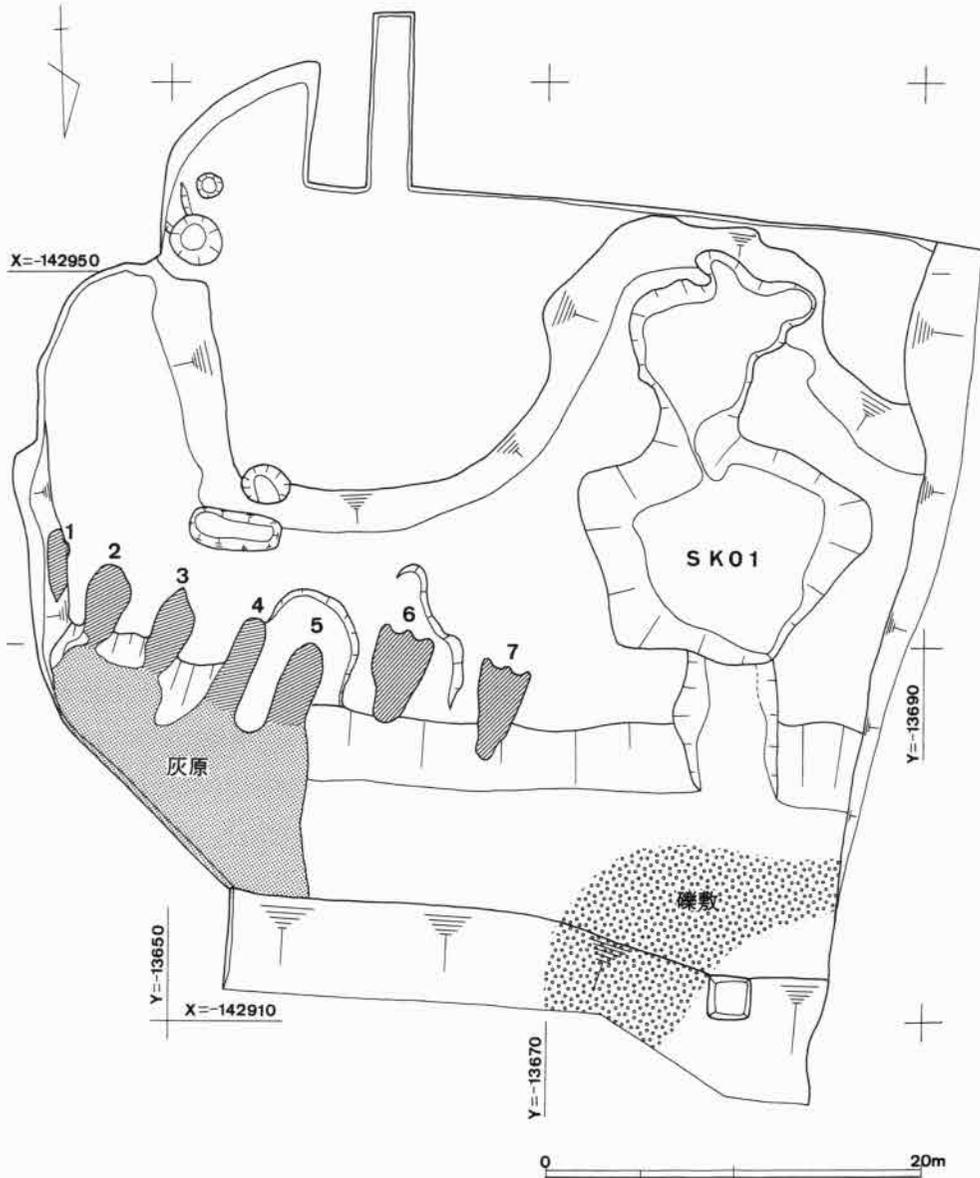
丘陵部に設定したトレンチのうち、西側のC・D・Eでは、最近の造成土の下に開析谷が南北方向に刻まれていることを確認した。南側のO・P・Qでは、南西から北東方向の開析谷があり、N付近では再び丘陵地になっていることがわかった。こうした結果、窯群を検出した北向き斜面を中心とした地域から東に遺構が広がる傾向が明らかになった。

b. 検出遺構(第92図)

梅谷瓦窯跡では、興福寺創建瓦に関連する7基の瓦窯(窖窯5基、平窯2基)、土採り跡と考えられる大きな土坑(SK01)などを検出した。北向き斜面の中腹に造られた7基の窯は、東から西にかけて、ほぼ整然と計画的に配置されている。報告の便宜として東から順に番号で窯の状況を述べる。

1号窯 窯群の東端で検出した窖窯と考えている瓦窯である。すぐ東に宅地を控えており、現地地形では高さ約4mの急激な段になっている。後世の削平により窯本体の約1/4が残る程度である。残っている部分は、煙出し部の大部分と焼成部の西端程度である。窯の平面形は、2号窯とよく似ているが、焼成部の床面は、瓦や粘土を使って傾斜した床を造っている2号窯と異なり、地山がほぼ水平に切り込まれた状態で、焼けた床面が検出できたのみである。焼成部西壁は若干内傾しながら、高さ0.9mを測る。壁面は、地山が堅く焼け絞まっている。表面には、2号窯に見られるような床面を造った痕跡は見えない。窯構築時の形態は掘り上がりの状況と同じと考えられる。ただ、2号窯でも述べるが、2号窯が造られた当初の床構造が1号窯と同型になる可能性があり、現状では2号窯と同様

の窖窯構造の床があったと考えておきたい。煙出し部は床面から垂直に立ち上がった後わずかに外傾する。壁面は、焼成部と同様に、粘土が堅く焼き絞まっておき煤の付着がある。燃焼部及び焚き口は削平により消失している。



第92図 梅谷瓦窯遺構配置図(1/400)

2号窯 1号窯の西約1mに位置し、今回、窯の構造を調査するために掘り下げた窖窯である。2号窯は、窯の全長約4.2m・最大幅2.3m、煙出し部(直径0.9m)・焼成部(長さ1.75m)・燃焼部(長さ1.55m)からなる窖窯で、丘陵斜面を一部掘り込んだ半地下式窖窯である。煙出し部は現状では幅0.9mの半円状の平面形が残る程度で、立ち上がりの形状や高さは明らかではない。ただし、煙出し部中央付近に、焼成部床面の検出レベルで、その床面の下に潜る瓦の一群が見えており、焼成部床面が今回検出した面よりさらに下に第3面目があることが考えられるとともに、煙出し部が下に残っている可能性がある。

焼成部の平面形は、煙出し部に向かってゆるやかに弧を描くカマボコ断面形に似た形である。第1検出床面には、窯の長軸(主軸)に直交するように破碎した平瓦を積みあげており、傾斜面に平瓦を階段状に積みあげ床面を造っている。燃焼部付近には、丸瓦を主軸に直交する方向で1列、数段に重ね並べて、焼成床面端を造る。床面の角度は、約8°とかなりゆるやかである。第2検出床面は、破碎した平瓦を粘土で張り付けた状況で、床面の角度は第1検出床面とほぼ同じである。壁面は、丸瓦を並べてある付近では、高さ0.5mを測るが、煙出し部付近では高さ0.15mと、後世の削平によりほとんど残らない。壁面は、堅く焼け絞まって赤橙色を呈する。

燃焼部は、東壁側に天井部分が一部アーチ状に残っている。床面は隅丸長方形で、ほぼ平らであるが、焼成部付近で急角度に立ち上がり、段となる。床面には粘土を貼った痕跡はなく、地山である拳大の礫を含む層が赤褐色に変色しており、直上に薄い炭層を検出した。段中央部には、高さ約0.25m・幅約0.3mの自然石が置かれ、段表面は、自然石を巻くように粘土が貼られて暗灰色に堅く焼き絞まっている。この段の背後に煙出し部で先述したように当初の焼成部床面があると考えられ、場合によっては1号窯の床面と同様の形状になる可能性がある。燃焼部床面直上に天井部が崩落したと考えている完形の平瓦、丸瓦とともに4個体の大ぶりの自然石が出土している。これら自然石は、分煙柱状に積み上げられて、天井部分の支柱となっていたと考えている。

焚き口は、東西の基底部に直方体の割石をそれぞれに置き、東側の部分はその上に粘土と平瓦や丸瓦を交互に積んで窯の軸に直交する形で造るとともに、窯の内面は粘土を貼っている。西側は、東側のような構造にせず、石の上に塼を使って造り上げている。また、窯の最終焼成時には瓦と土を使って閉塞しており、土は赤く焼けていた。

前庭部は、地山を幅約2mほどを隅丸形状に削ってスペースを確保し、3号窯の前庭部と隣接している。灰原が始まる付近には、完形に近い多数の丸瓦、平瓦が出土しており、その下層では一面に黒色の炭層が堆積している。

窯体内からは丸・平瓦のほか、軒瓦(興福寺創建瓦)が出土している。このほか、燃焼部

床面から、須恵器・甕片1点、用途不明鉄製品1点が出土している。

7号窯 7号窯は、窯の全長約4.35m・最大幅2.2m、焼成部の長さ約2.6m・燃焼部の長さ約1.15mを測る平窯である。この平窯は、燃焼部と焼成部の境に高低差0.5mの段差がある。この段差部分に丸瓦などを縦に並べて、粘土で固定して壁面を強化している。焼成部はほぼ水平で、瓦の破片を全面に敷きつめて床面をつくる。窯壁は、平瓦とスサ入り粘土を交互に積み上げて造る。窯体内部はスサ入り粘土で覆っている。煙出し部は側壁から直線的にのびる奥壁の両端と中央の3か所をトンネル状に刳り貫いたものである。7号窯の窯体構造とよく似た瓦窯には、その製品を藤原京へ供給した奈良県橿原市日高山瓦窯がある。

窯群の構成

今回検出した窯群は全部で7基を数える。このうち窖窯群5基と平窯群2基は、それぞれ造られた位置に計画性ないし規則性が見られる。

窖窯群は、各窯の主軸をほぼ平行にして、煙出し部を南東から北西にかけて、1直線状にはほぼ等間隔に並ぶように配置している。標高は89m前後に位置し、丘陵の地山の黄褐色粘質シルトの水平堆積の分布するか所に造られている。短期間に相次いで造られたと考えている。

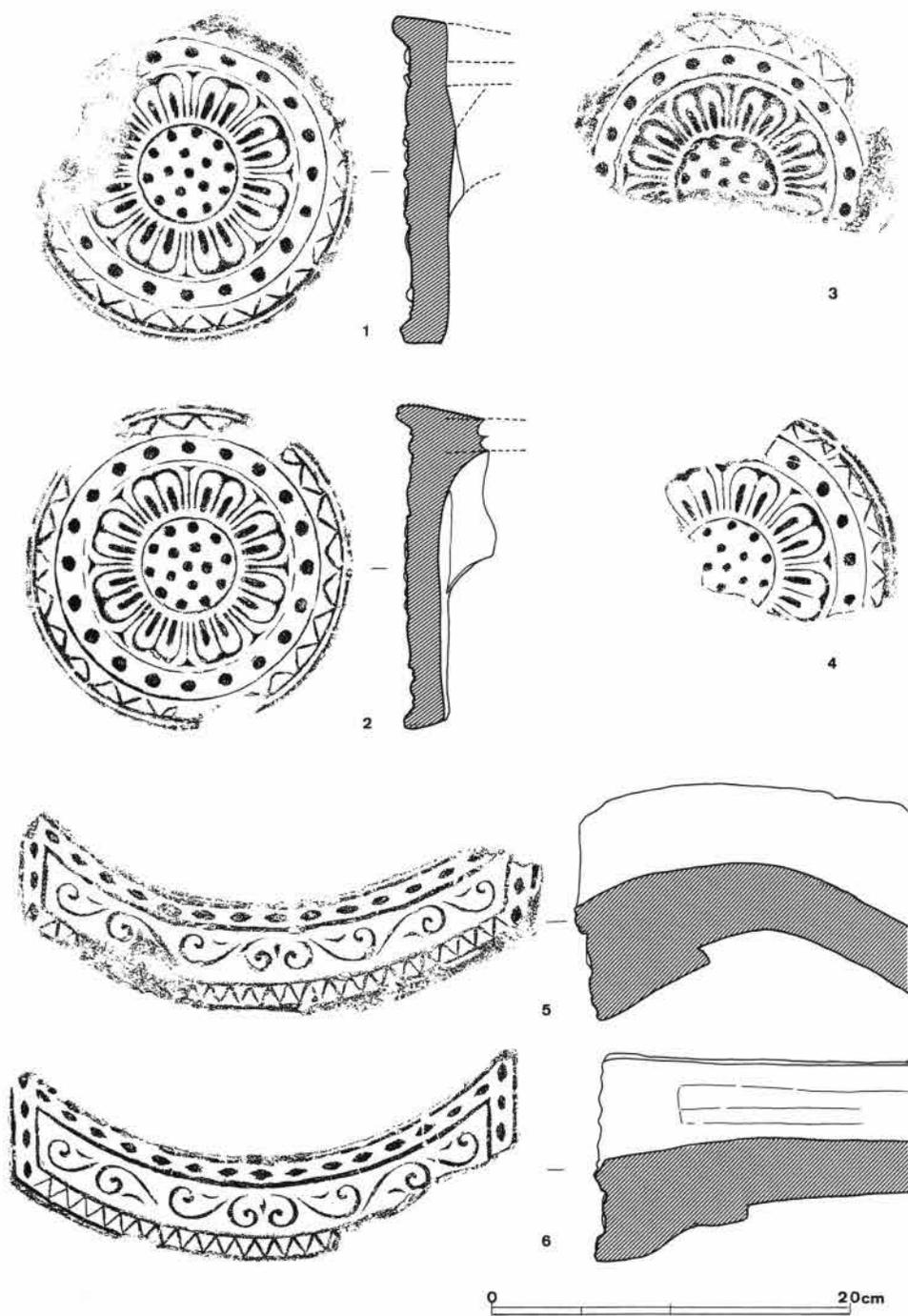
平窯群は、窯の主軸方向を窖窯群とほぼ同じにしているが、煙出し部の標高は89.5m前後と窖窯群よりやや高くする。煙出し部の位置は、窖窯群の直線配置に平行する位置に2基の窯を配置する。この位置のずれが時期差を示す可能性もあるが、窯を構築する際に、安定した地盤である粘土層を追い求めた結果、窯の構築位置が変化したとも考えられる。

S K 01 窯群の西側で検出した、大きな土坑状の窪地である。埋土は、黄褐色～灰白色粗砂の互層が厚く堆積していた。遺物は、南半で瓦窯と同時期の瓦が多量に出土するとともに、土師器片が若干出土した。この部分は、粘土～シルト層が厚く堆積していたと考えられる部分で、南側は地山の粗砂が現われており、北側の底部は礫層が現われている。この状況から、粘土採取の跡と考えている。

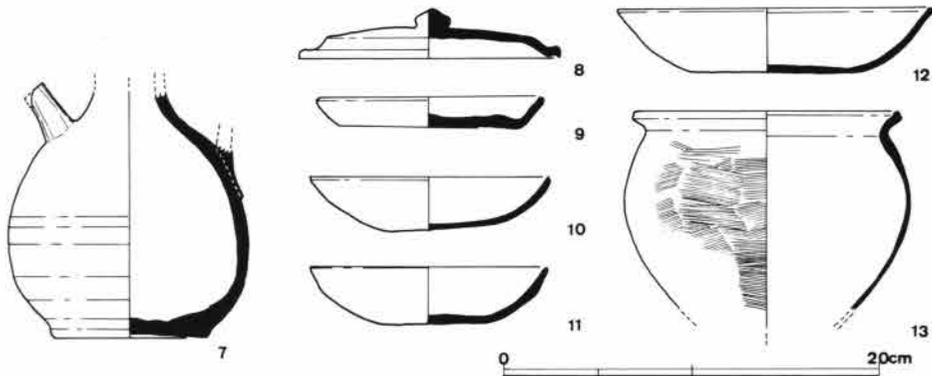
礫敷 第92図の北西端に示した礫敷は、拳大より大ぶりの河原石を敷き詰めた分布域を示している。地山の明黄褐色粗砂の上に並べてあり、地山崩落を防ぐ目的で設けたものと判断している。礫は、丘陵上部の地山に含まれているものを使っている。時期は、直上から近世の磁器片が出土していることから、近世の新田開発に関連する可能性がある。

c. 出土遺物

今回の出土遺物としては、奈良時代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦・隅瓦・窯体片などとともに、多量の炭が出土した。同時期の須恵器・土師器の出土も少なく、遺物



第93図 出土遺物実測図(1) (1/4)



第94図 出土遺物実測図(2) (1/4)
7.灰釉陶器 8・9.須恵器 10~13.土師器

の大半は瓦類である。そのほとんどは、瓦窯を検出した斜面周辺で出土しており、特にB～Lの西側に設置したトレンチではほとんど遺物は出土していない。また、江戸時代以降の遺物の出土も少なく、水田部の旧耕土中以外では、そのほとんどは同じく斜面周辺の特に整地土中からの出土が目立った。

1～4は、複弁8葉蓮華文軒丸瓦で、中房の蓮子は1+5+10を数える。いわゆる興福寺式の軒丸瓦(6301A形式)である。1は、黒色に炭素が吸着し、焼成状態は良好、瓦当背面には布目圧痕が残る。2は、灰白色を呈し、瓦当の残存状況は良好であるが、焼成はやや軟質である。今回の調査では、筈疵が進んだ顕著な例を抽出できていないが、焼成が悪い3の例などを除けば、おおむね瓦当の状況は1ないし2の状況である。焼成状態では、須恵質に近い例も見受けられる。

5・6は、均整唐草文軒平瓦で、中心葉を挟んで左右に3回反転の均整唐草文を配し、上外区と脇区には杏仁形の楕円形珠文をおき、下外区には線鋸歯文をおく。5は、5号窯の上面に堆積していた窯体片や焼土に混じって出土した。中央付近で「く」の字に曲がって折れた状況に焼かれている。焼成は須恵質で非常に堅く焼かれており、恐らく高温で焼かれたために曲がり折れた不良品であろう。6は、Jトレンチの流路内から出土したもので、灰白色を呈し、触った指が白くなるほど軟質である。瓦当の状況は良好で、文様はシャープに見えている。

7～13は、6・7号窯関連で出土した土器類である。6号窯上面から須恵器杯蓋・須恵器皿A各1点(8・9)、同窯東側煙出し内部から灰釉陶器水注(7)1点が出土している。

7は、口縁部と肩から口縁にかけて付いていた把手が欠けている。把手は、幅1.3cm・厚さ0.5cmほどの板状のものが付いていたと考えている。注ぎ口は、内面断面が直径約7

mmの円形を呈し、外面は大小の面取りを交互に施した変形八角形になっている。観察状況から竹管状のものを外から差し込んで穴を開け、その周りに粘土を巻き、方形に面取りをした後さらに細かい面取りを行って成形している。残存器高約13.6cmで、外面は底部から約6.5cmの高さまで削り調整が観察できる。外面底部は、直径8.5cmで中心部がゆるやかに窪んでいる。全体の色調は淡緑灰色、胎土は密、焼成は良好で硬質の仕上がりである。また、外面頸部～肩部全面、及び内部の底面に灰釉が付着している。8は、口径14.1cm・器高2.7cm、色調淡灰白色、胎土は密、焼成は良好である。9は、口径12.2cm・器高1.7cm、色調淡灰白色、胎土は密で砂粒が若干見える。焼成は良好である。7号窯上面からサヌカイト製石鏃1点、同窯体内から鉄釘、土師器・杯5点・甕1点が出土している。10～13は、7号窯の上面及び上層埋土中から出土した土師器である。いずれも比較的堅く焼け、色調も淡橙色である。10～12は、内外面とも基本的にナデ調整を施すが、11・12は外面底部に不規則なケズリ調整と指押えが観察できる。いずれも、窯の稼働していた8世紀はじめごろよりはかなり新しい時期の特徴を持つ土器であるため、その解釈を含め今後の検討を必要とする。

3. まとめ

梅谷瓦窯・中ノ島遺跡の試掘調査は今年度で第2回目を数える。今回の試掘調査では、田畑部の中ノ島遺跡で見つかった窯に伴う灰原(第1次調査)の範囲を明らかにするとともに、丘陵部(梅谷瓦窯)での窯の存在を明らかにするために試掘調査を実施した。試掘調査の結果、丘陵部で窖窯5基、平窯2基、計7基の瓦窯を確認した。そのうち、今年度は窖窯2基(1・2号窯)と1基の平窯(7号窯)の窯体構造を明らかにするため、一部発掘調査を実施したところ、2基の窖窯は、やや特異な窯体構造を呈した半地下式の瓦窯であることが明らかとなった。また、7号窯の平窯は、藤原京の造営に関連した橿原市日高山瓦窯の窯体構造に近似している。このように、ほぼ同時期に複数構造の瓦窯が操業していたと考えられる梅谷瓦窯跡群は、窖窯から平窯への変化を考える上でも有効な資料と思われる。なお、今回の試掘調査では工房などの関連施設は確認できなかったが、土器などの出土状況や、製品の運搬の便、施設を作れる地形などを考慮すると、東側の宅地付近の可能性はある。

(有井広幸)

(4) 市坂瓦窯

1. 調査の経過

市坂瓦窯は、奈良時代の大規模な瓦工房が確認された上人ヶ平遺跡の南西側の谷に所在する。^(註1) 周辺は戦後、筍栽培用の竹林として開墾され、谷には多数の瓦片が散布していることから、付近に瓦窯が存在することは早くから知られており、『京都府遺跡地図』では6基以上の瓦窯が存在するとされている。今回の発掘調査は、市坂瓦窯に存在する窯跡の基数と遺存状況を確認することを主な目的として行ったものである。

2. 調査概要

瓦窯の立地する谷は幅10mほどの狭いもので、北西に向かって開いている。調査は、谷の両側の斜面裾の崖面を削ることから開始した。北東側の崖面では谷の中程の、やや狭くくびれた部分から南東で灰原を確認した。また、南西側の崖面ではさらに奥の段差付近から南東で灰原を確認した。

次いで、谷の北東側斜面に1～4トレンチ、南西側斜面に5・6トレンチを設定し、窯体の確認に努めた。このうち、3基の窯体を確認した3トレンチは、人力掘削によって拡張して窯体を面的に確認した。また、南西側斜面の谷の奥では、筍畑造成の際の厚い盛り土を除去するために重機を使用し、面的に調査を行うこととした(2区)。

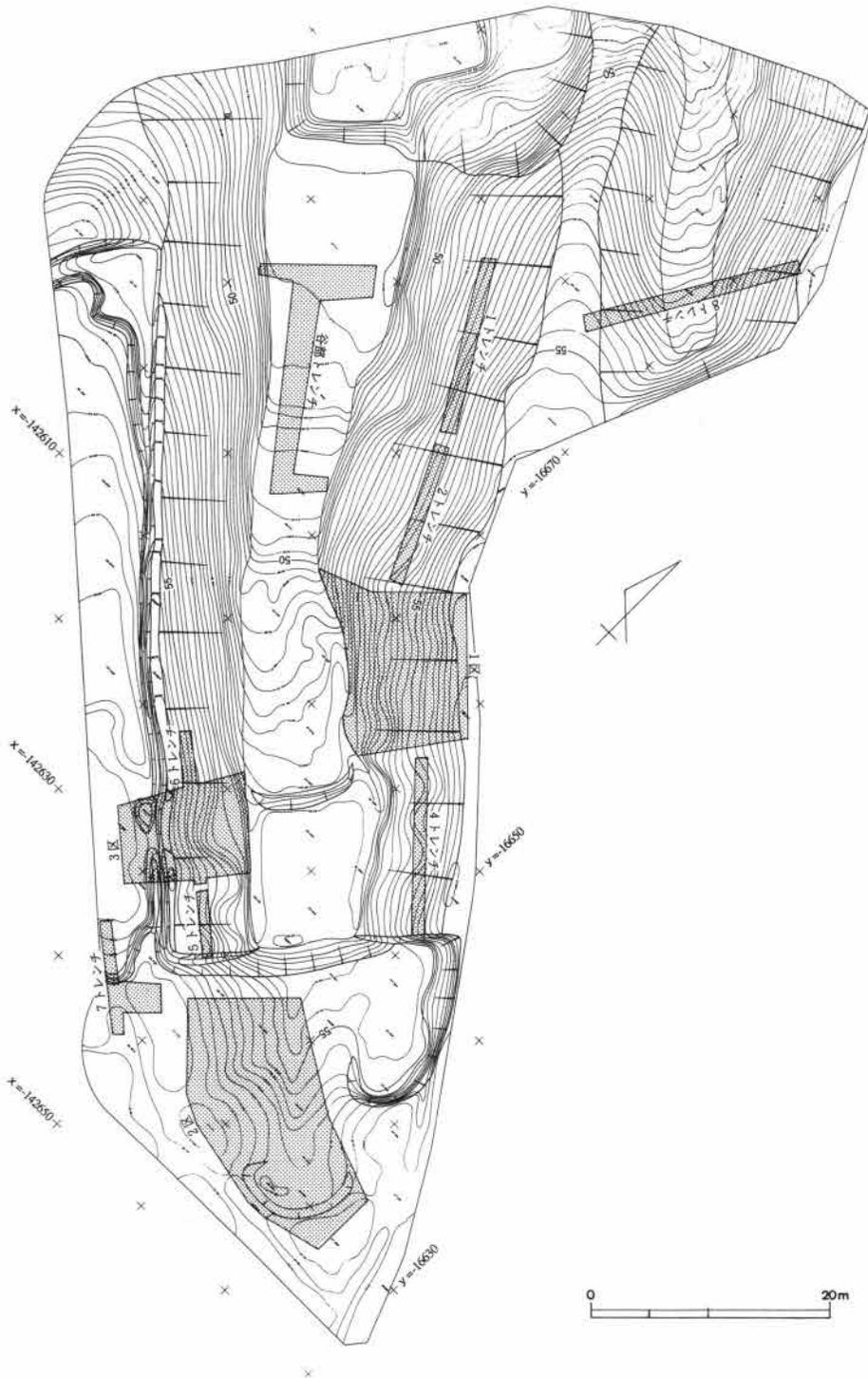
また、2区で埴輪片が出土したため、小規模な古墳の存在する可能性を想定して7トレンチを設定し、上人ヶ平遺跡の調査で検出された瓦片や小石を敷いた路面に続く谷には8トレンチを設定した。

各トレンチの概要は以下のとおりである。

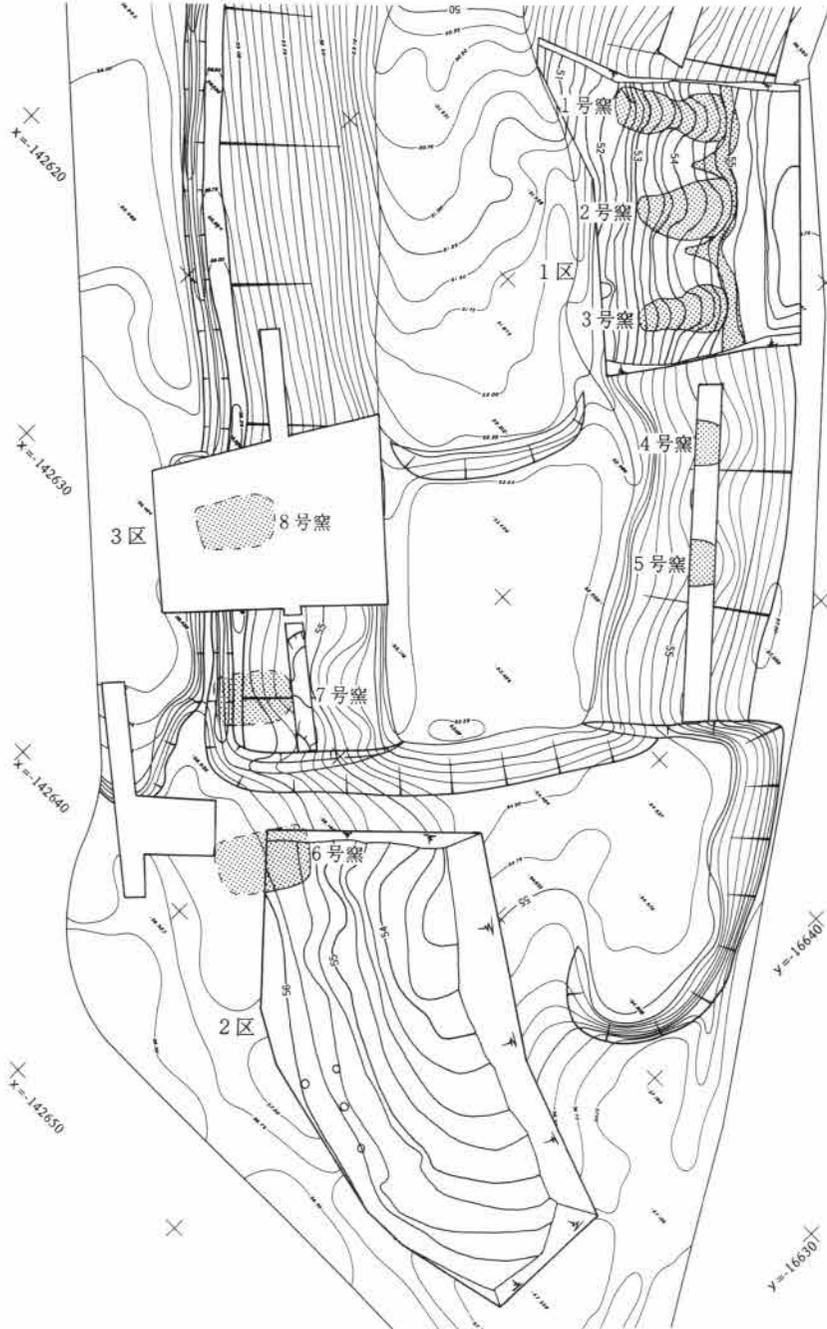
1・2トレンチ 窯体、遺物ともに検出されず、裾の崖面の観察でも灰原が見つからないので、この地点には窯跡は存在しないことが判明した。

3トレンチ 窯体と見られる地山の赤変などから、3基の窯跡が存在することを確認し、北西から順に1～3号窯とした。また、排水溝と考えられる遺構も検出した。窯跡の遺存状況が4トレンチに比べて良好であると判断されたために面的に拡張し、1区とした。

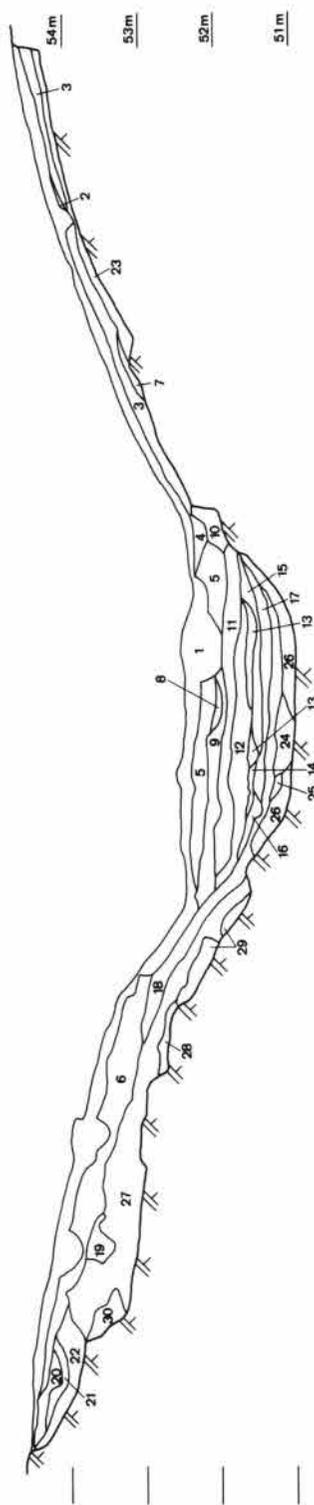
4トレンチ 窯体の一部と見られる赤変した地山を確認し、地形や裾の崖面の観察と合わせて2基の窯跡が存在するものと判断し、北西から順に4・5号窯とした。裾の崖面にも赤変した地山が認められることから、窯体の一部はすでに削平されている可能性がある。



第95図 地形測量図及びトレンチ配置図(1/600)



第96図 市坂瓦窯平面図(1/300)



- | | | | | | | |
|-------------|-------------|----------------------|-------------|-------------|-----------------------|-------------|
| 1. 表土 | 2. 暗茶灰色砂質土 | 3. 暗灰黄色粘質土 | 4. 暗灰色粘質土 | 5. 暗灰黄色砂質土 | 6. 茶黄色粘質土 | 7. 明灰黄色粘質土 |
| 8. 暗灰茶色粘質土 | 9. 暗灰黄色粘質土 | 10. 暗灰茶色粘質土 | 11. 明灰黄色粘質土 | 12. 灰黄色粘質土 | 13. 灰黄色礫混じり粘質土(瓦片を含む) | 14. 灰黄色砂質土 |
| 15. 灰黄色粘質土 | 16. 黄灰色粘質土 | 17. 暗灰黄色粘質土(瓦片を多く含む) | 18. 灰茶色粘質土 | 19. 明茶褐色砂質土 | 20. 明茶灰色礫混じり粘質土 | 21. 明茶灰色粘質土 |
| 22. 茶褐色粘質土 | 23. 黄灰色粘質土 | 24. 暗灰茶色粘質土 | 25. 暗灰黄色粘質土 | 26. 暗灰黄色粘質土 | 27. 明灰茶色礫混じり砂 | 28. 灰色粘質土 |
| 29. 明灰茶色粘質土 | 30. 明茶灰色粘質土 | | | | | |

第97図 8トレンチ土層断面図(1/100)

5・6トレンチ 窯体の一部と見られる赤変した地山と前庭部の掘り込みと思われる地山の肩を検出し、それぞれ1基の窯体が存在することを確認し、7・8号窯とした。8号窯の調査を行うために6トレンチを拡張し、3区とした。

7トレンチ 小古墳の存在を想定して設定したが、その痕跡は認められなかった。トレンチ東隅で2区西端で確認した窯(6号窯)の奥壁部分と考えられる窯体の一部を確認した。

8トレンチ 上人ヶ平遺跡の調査で検出された瓦片や小石を敷いた路面の続きを想定して設定したが、路面の痕跡は確認できず、谷の上方から流れ込んだ瓦片などが出土した。

谷部トレンチ 谷の堆積状況を見るためにトレンチを設定した。トレンチの東端の浅い部分で3トレンチで検出した窯から流れ込んだと考えられる灰原を確認した。このことから、窯が築かれる以前に現状に近い状態まで土砂の堆積が進んでいたことが判明した。

1区 3トレンチを拡張し、斜面全体の表土を掘削したところ、3基の窯の陥没痕跡と、各窯の上方をめぐる排水溝のプランの全容

を捉えることができた。

2区 筒畑開墾時の盛り土が堆積していたため重機によって面的に掘削したところ、調査区の西端で窯体の一部と見られる赤変した地山を確認し、6号窯とした。また、この付近では埴輪片も出土した。さらに、調査区南辺中央部ではピットを4基検出した。掘立柱建物跡になる可能性がある。

3区 6トレンチで確認した窯体が焚き口部分に当たると思われたため、斜面全体と尾根の頂部に拡張して表土掘削を行った。この結果、焼成室のプランが判明した。また、焼成室の天井が残っている可能性が高いものと思われた。

3. まとめ

今回の調査の結果、北西側斜面に5基、南西側斜面に3基の瓦窯が存在することが明らかとなった。窯の配置では、北西側斜面の窯が狭い間隔で並んでいるのに対して、南西側斜面では窯の間隔が広いことが判明した。この平成5年度の試掘調査の結果を踏まえ、平成6年度には、2号窯と8号窯の窯体内の調査を行うこととなった。

(森島康雄)

- 注1 石井清司・森正哲次・有井広幸「4. 木津地区所在遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注2 石井清司・伊賀高弘ほか『上人ヶ平遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第15冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注3 松井忠春・長谷川達「日本住宅公団木津東部地区遺跡分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』 京都府教育委員会) 1982
- 注4 小山雅人・戸原和人・松井忠春「3. 木津地区所在遺跡昭和60年度」(『京都府遺跡調査概報』第21冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 注5 調査参加者(50音順・敬称略)
有馬三喜子・池田晃仁・石井伸卓・五百磐頭一・岩本 貴・遠藤美帆・小関菜都子・香川知子
鹿島昌也・勝見直子・日下隆春・小林万須美・佐々木達也・白石純吾・新谷二三代・高橋立彦
谷後恒美・谷本美和・辻谷真夕・辻 道子・筒井由香・永尾幸江・中川悟郎・中西 修・中野
行真・中村久登・仁科幸子・浜谷亜紀子・林 恵子・林 益美・菱田直実・平野麻子・福永実
知代・藤沢地恵・古川良子・堀 純子・堀 優子・松岡邦裕・宮本浩行・三好 愛・山本幸彦
吉永清美・吉村優子
- 注6 戸原和人・荒川 史・伊賀高弘「4. 木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注7 小田富士雄『立山山窯跡群』(『八女古窯跡群調査Ⅳ・総集編』 八女古窯跡調査団) 1972

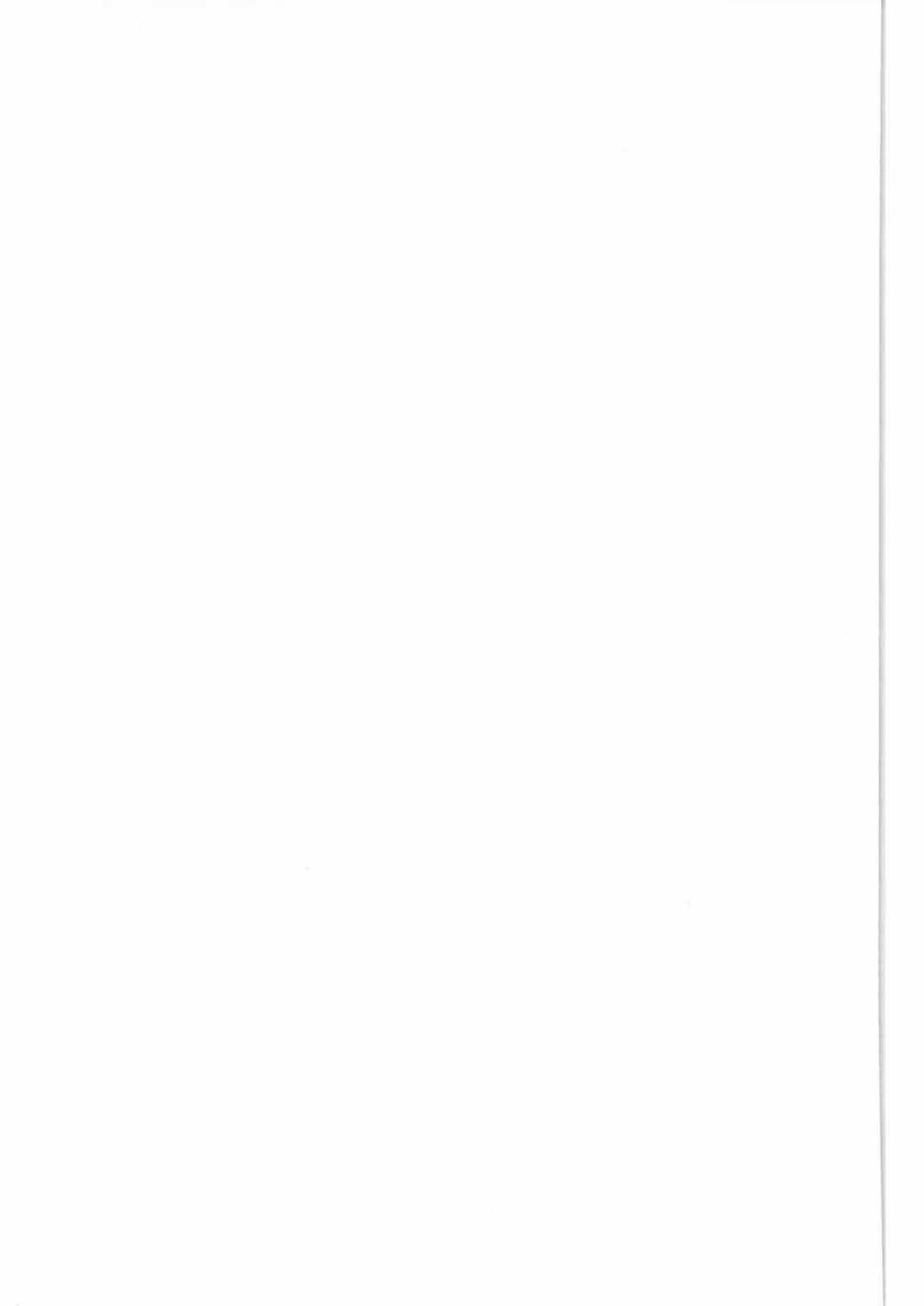
注8 注2に同じ。

注9 注3に同じ。

注10 注4に同じ。

注11 注2に同じ。

版 圖



図版第1 長岡京跡左京第304次（京都工区）



(1) A-1地区トレンチ全景（東から）



(2) A-1地区土器出土状況（北から）

図版第2 長岡京跡左京第304次（京都工区）

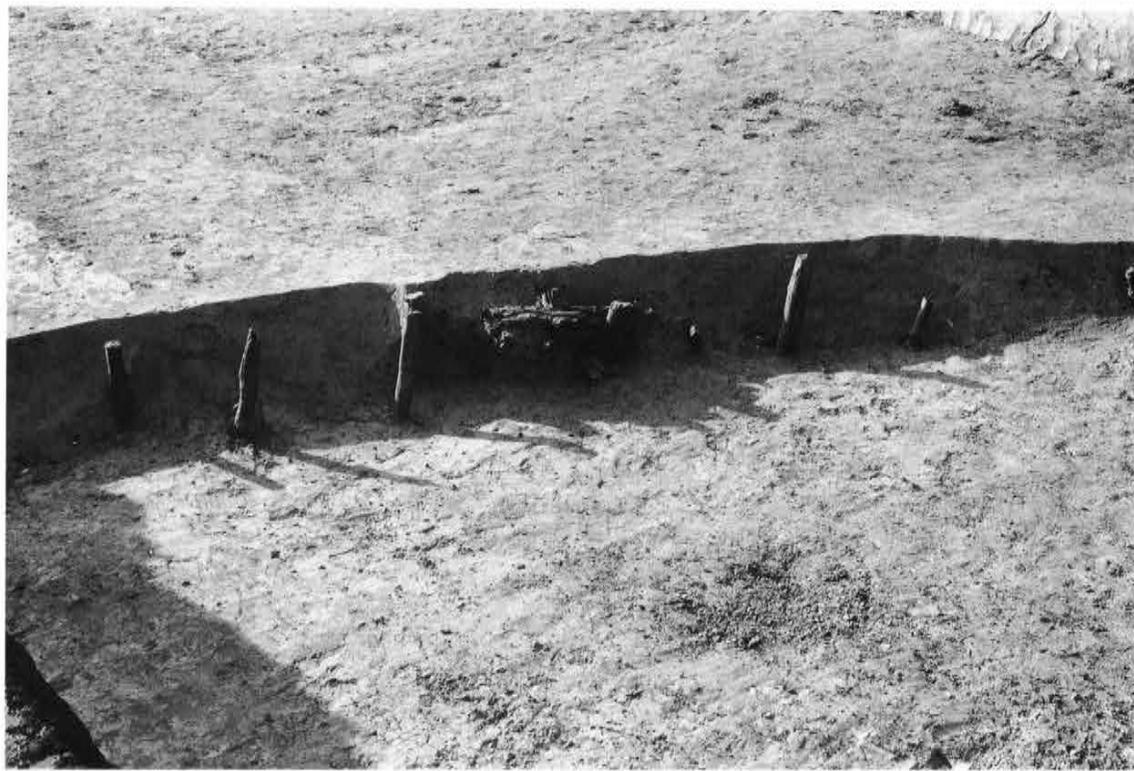


(2) A-2 a 地区西半（南西から）



(1) A-2 a 地区東半（南西から）

図版第3 長岡京跡左京第304次（京都工区）



(1) 旧河道 SR 304103 肩部杭列（東から）



(2) 旧河道 SR 304105・106（東から）

図版第4 長岡京跡左京第304次（京都工区）



(1) A-2 a 地区南東壁旧河道 SR 304106堆積層（北西から）



(2) A-2 a 地区南東壁旧河道 SR 304105堆積層（北西から）



(3) ミニチュアカマド



(4) 土馬



(1) 墨書人面土器



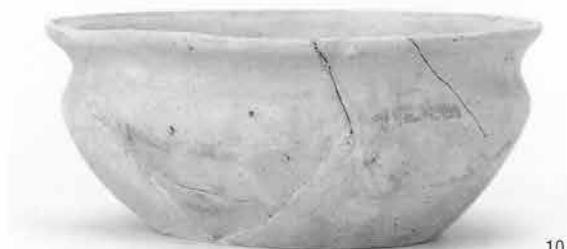
(2) ミニチュアカマド



20



8



10



14



6



1



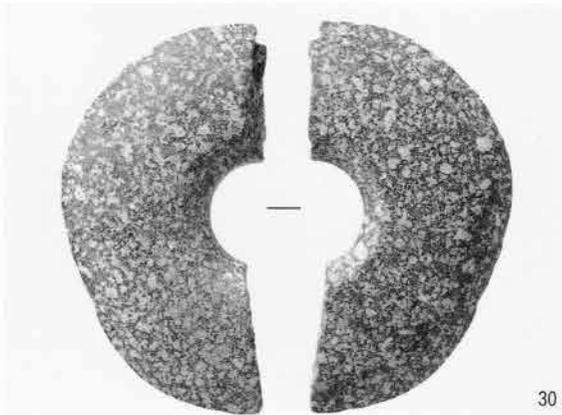
24



5



23



30

図版第7 長岡京跡左京第304次（京都工区）



a



b

A-2 a 地区出土遺物(2) (SR 304106)

a : 墨書人面土器 b : 土馬・ミニチュアカマド

図版第8 長岡京跡左京第304次（京都工区）

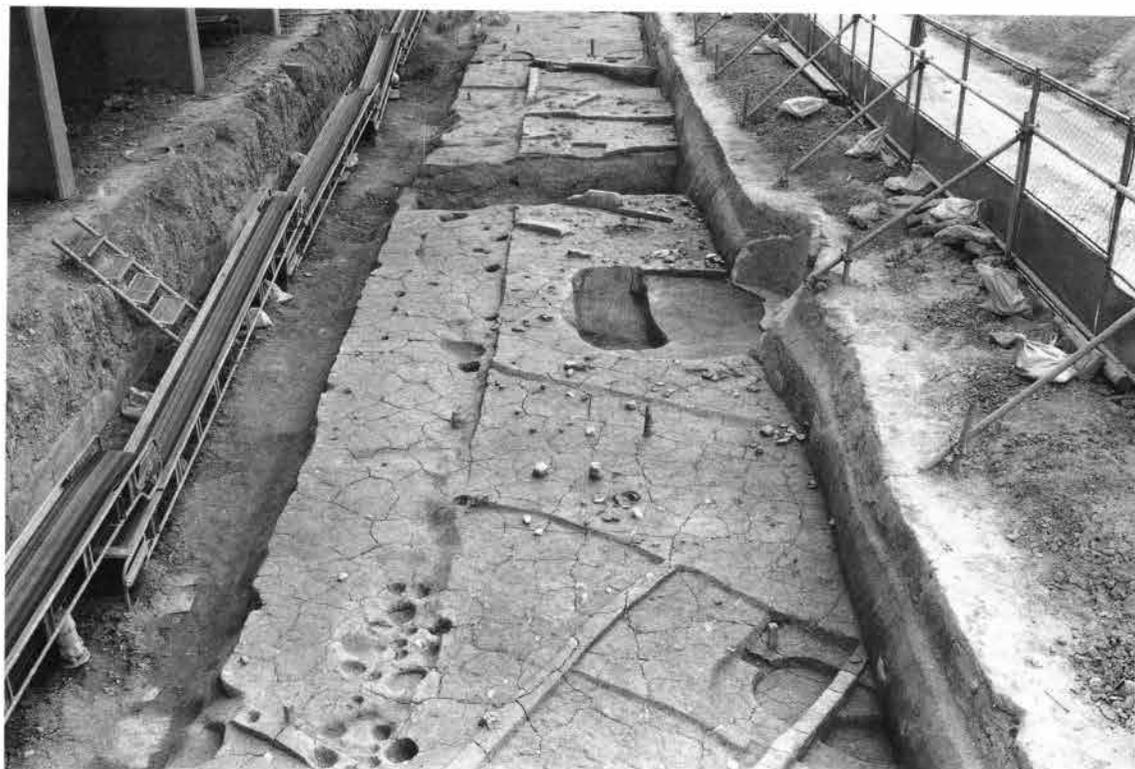


(1) A-2 b 地区北壁（南から）

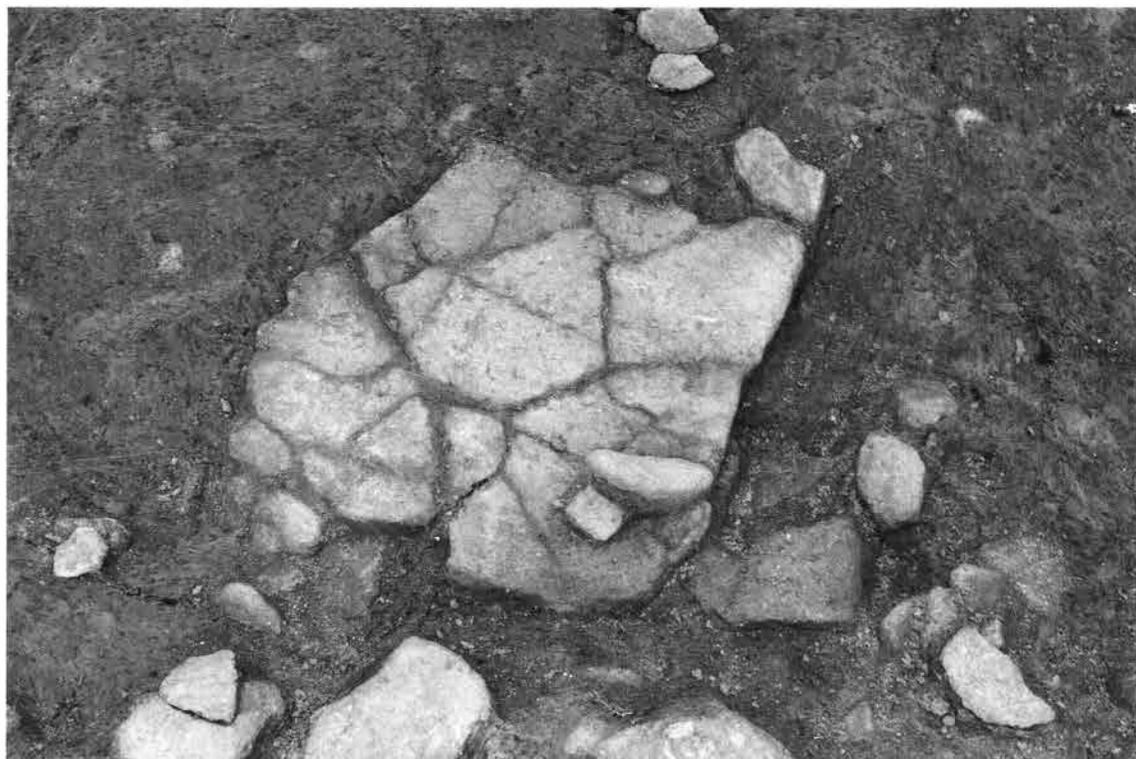


(2) A-2 b 地区東壁（西から）

図版第9 長岡京跡左京第286次（京都工区）



(1) B-1地区トレンチ東半部（東から）



(2) B-1地区縄文土器出土状況（南から）



(1) B-1地区縄文の土杭（SK 28603）（南から）



(2) B-1地区縄文土器出土状況（西から）



(1) B-2地区東端の土杭群と素掘り溝（東から）

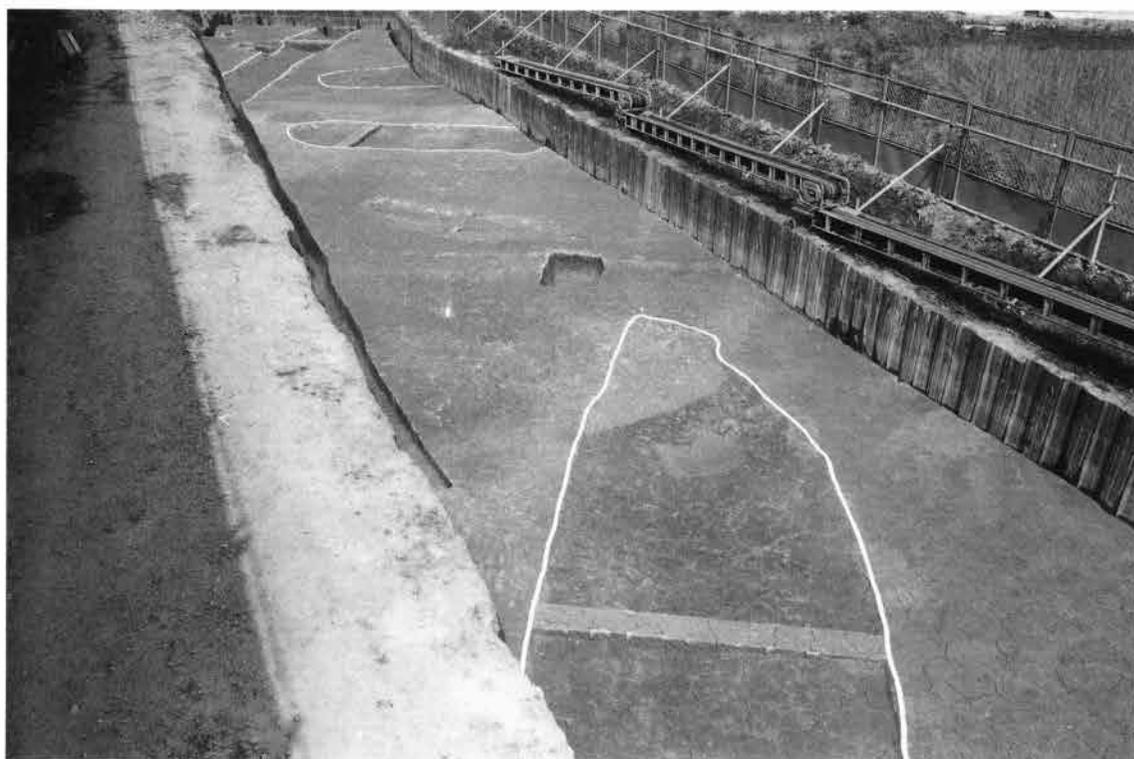


(2) B-2地区北東部の素掘り溝群（南西から）

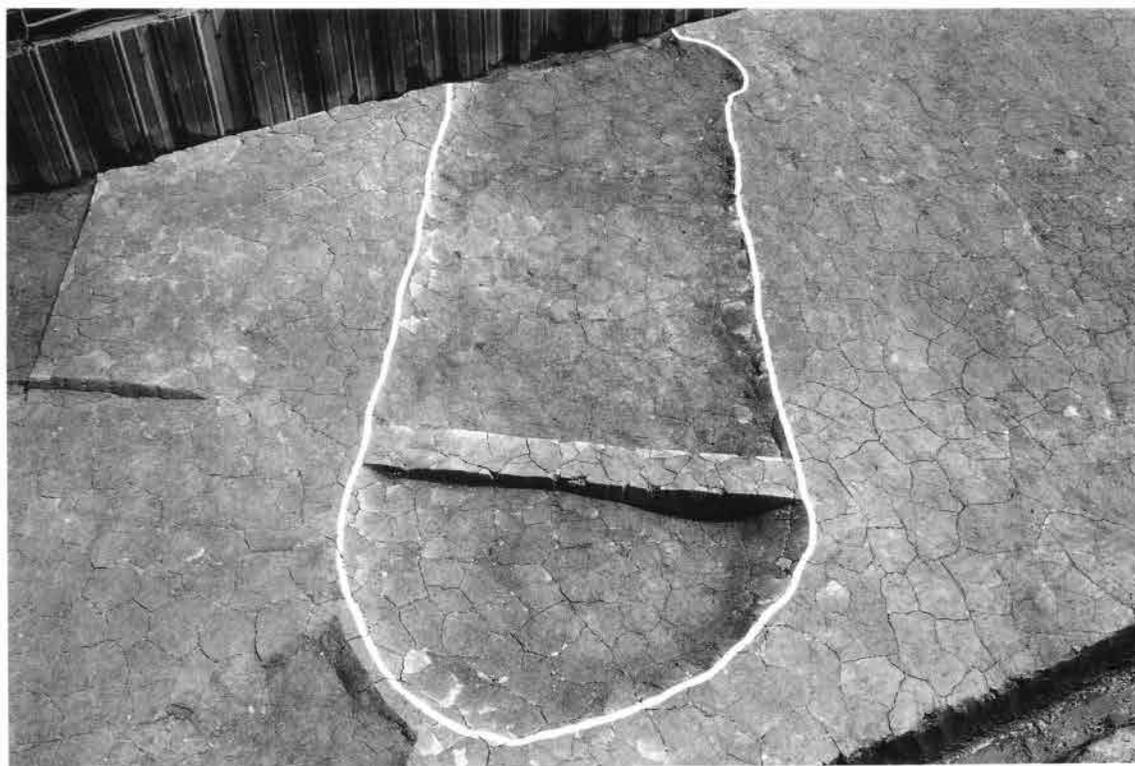
図版第12 長岡京跡左京第286次（京都工区）



(1) B-2地区調査地全景・溝SD 286106ほか（北東から）



(2) B-2地区溝SD 286102ほか（西から）



(1) B-2地区溝 SD 286101（北から）



(2) B-2地区溝 SD 286103・柵列跡 SA 286104（西から）



(2) C-1 a 地区全景（北東から）



(1) C-1 a 地区全景（南西から）



(2) a トレンチ SB 31353・SA 31354 (東から)



(3) C-1 a 地区溝 SD 31334 (南から)



(1) C-1 a 地区建物跡 SB 31353 (北東から)



(2) C-1 b地区土壇 SK 31301 (北から)



(3) C-1 b地区土壇 SK 31302 (東から)



(1) C-1 b地区全景 (南西から)



(2) C-1 b地区 SX 31316 西側肩部付近（北西から）



(3) C-1 b地区 SX 31316 全景（南西から）



(1) C-1 b地区 SX 31316（西から）



(1) C-1 b 地区 SX 31316 土層観察状況



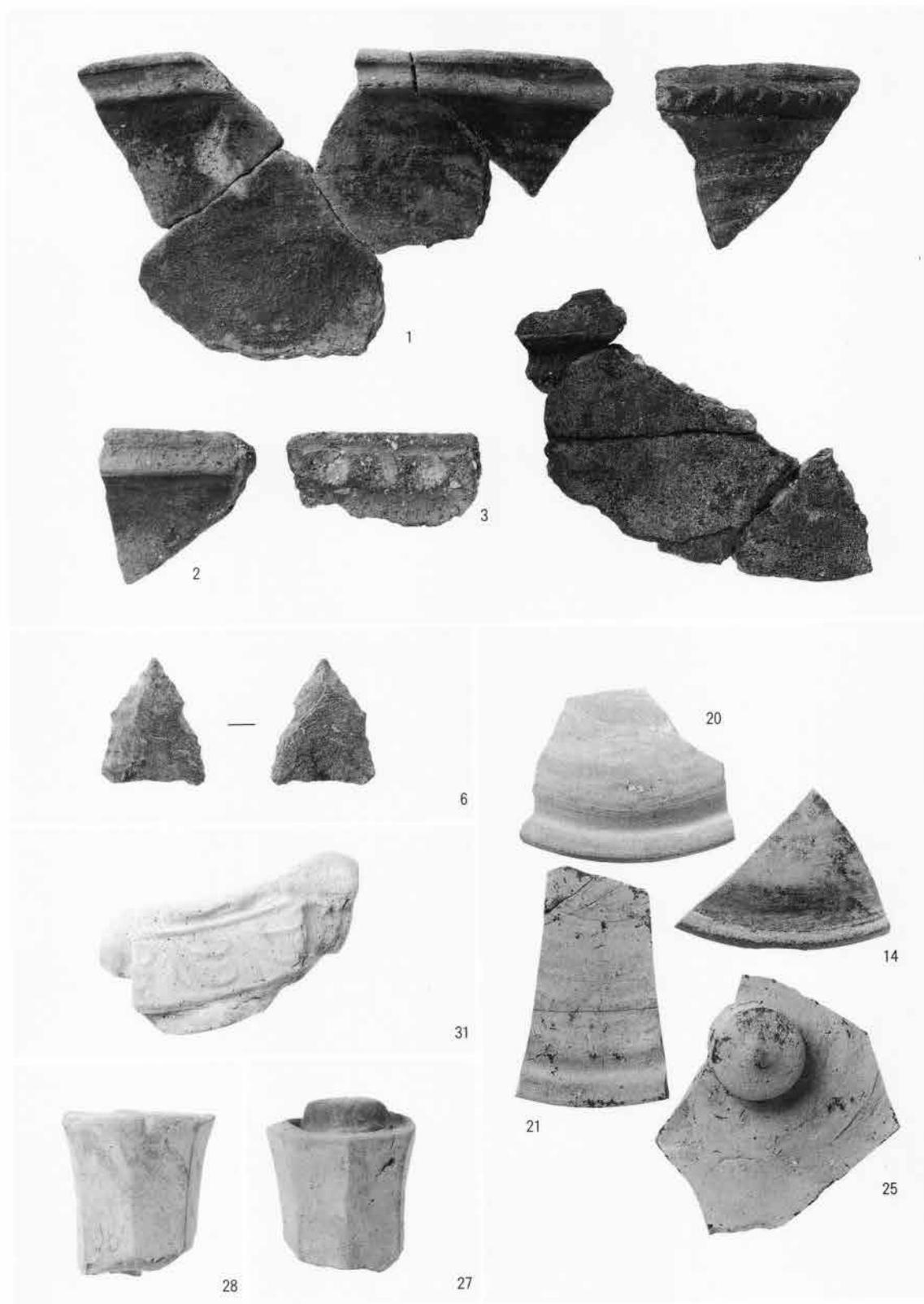
(2) C-1 b 地区 SX 31316 噴泥（平面）4'層中間西



(3) C-1 b 地区 SX 31316 噴泥（断面）



(4) C-1 b 地区 SX 31316 噴泥（断面）



C-1 地区出土遺物（番号は第19図に対応）



(2) C-2 a 地区溝 SD 286119・286120 (南西から)

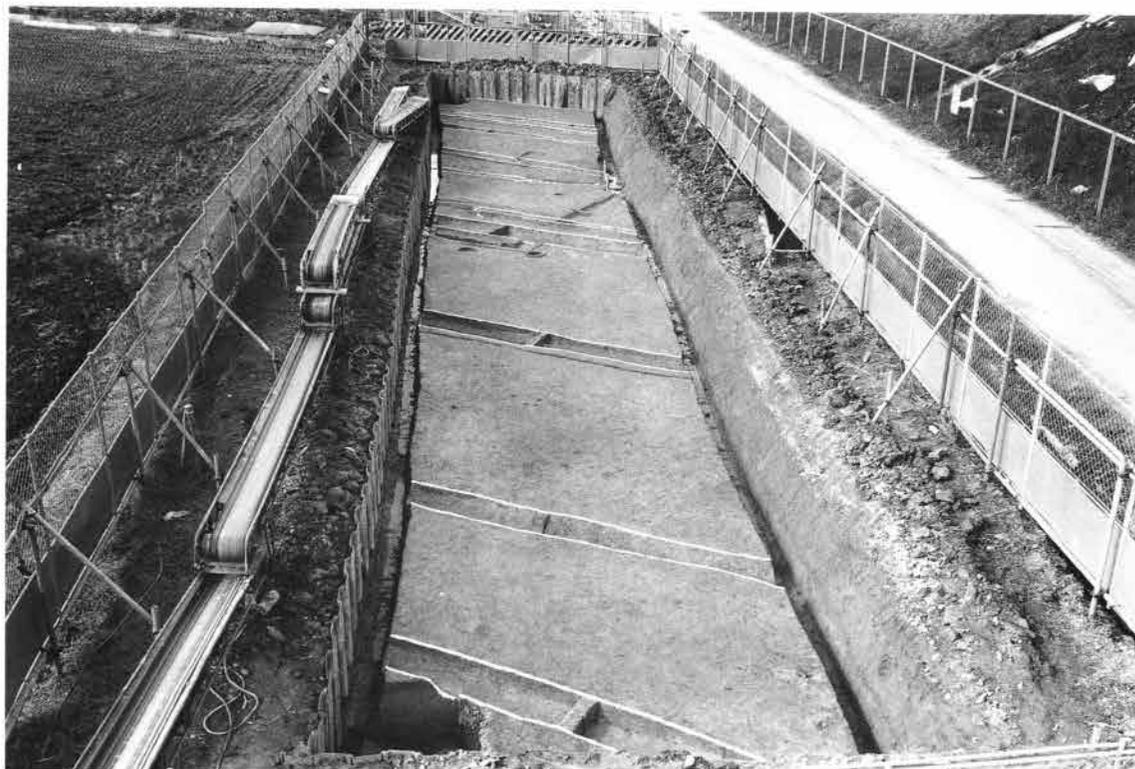


(3) C-2 a 地区溝 SD 286120 土層断面 (南東から)



(1) C-2 a 地区全景 (北東から)

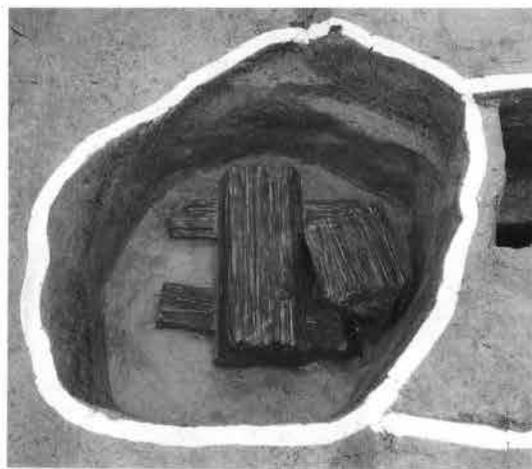
図版第21 長岡京跡左京第286次（京都工区）



(1) C-2 b地区全景（北東から）上層



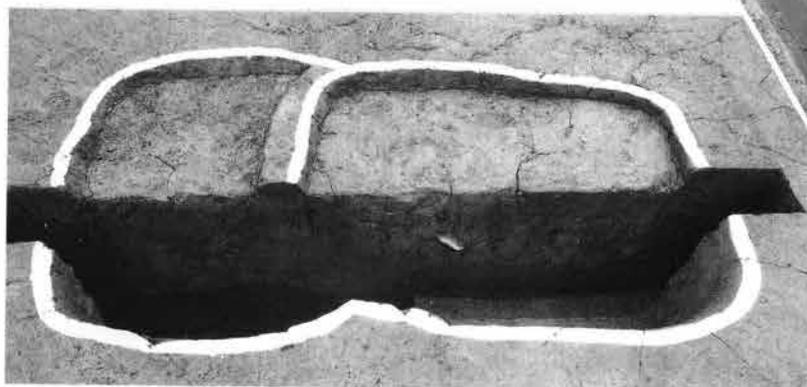
(2) C-2 b地区全景（北東から）下層



(2) C-2 b 地区建物跡 SB 286227 柱穴 (P 7) (南から)



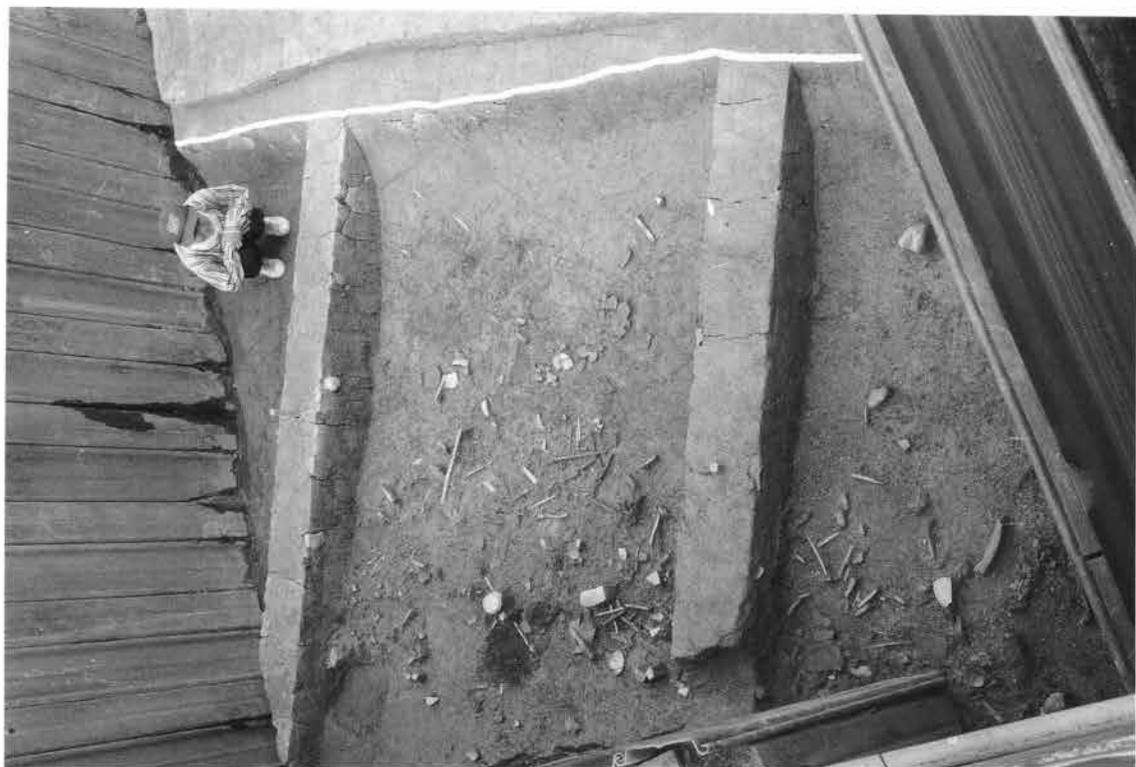
(1) C-2 b 地区建物跡 SB 286227
(西から)



(3) C-2 b 地区建物跡 SB 286227 柱穴 (P 3・8) (北から)



(4) C-2 b 地区溝 SD 286226 (南東から)



(2) C-2 c 地区溝 S D 286311 (南から)



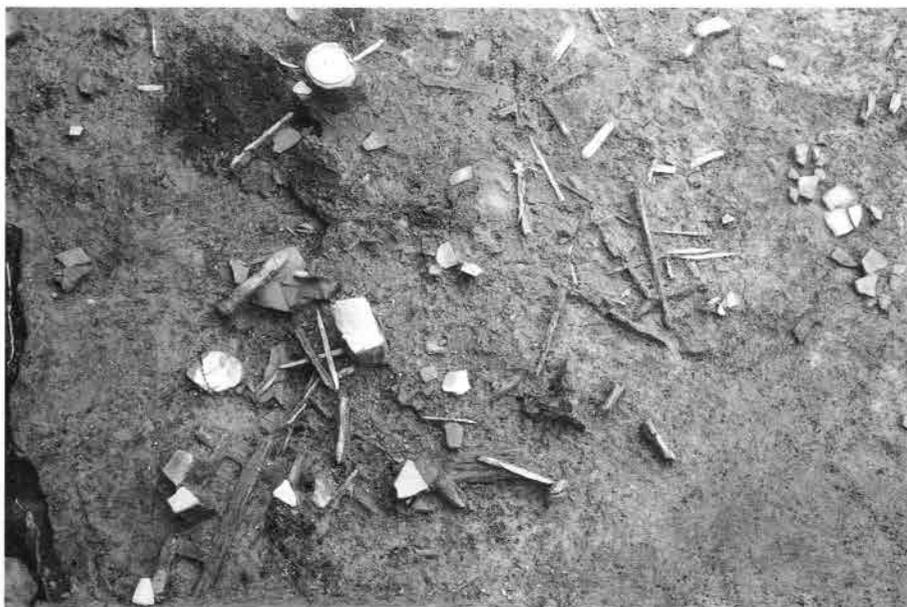
(1) C-2 c 地区西部全景 (北東から)



(1) C-2 c 地区溝 SD 286311 (南から)



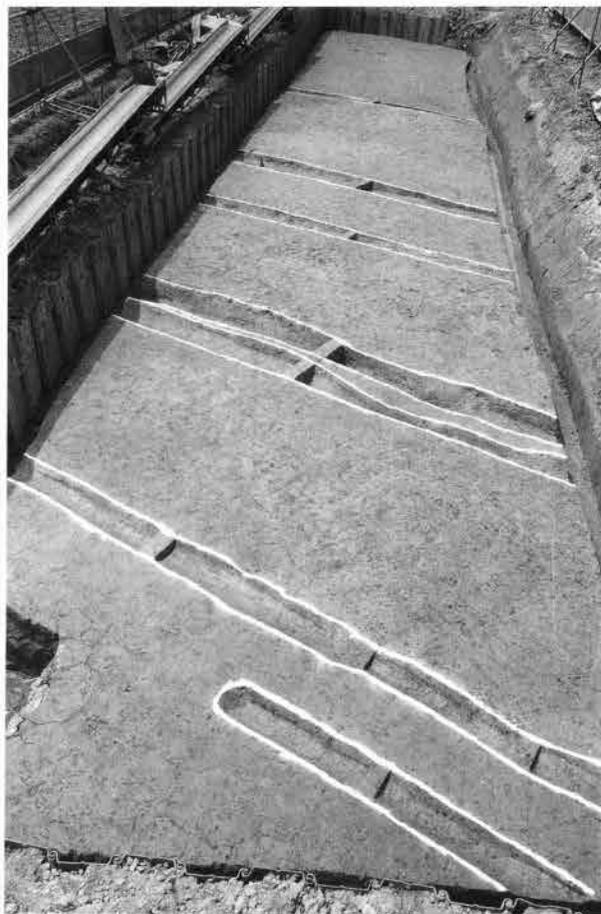
(2) C-2 c 地区溝 SD 286311 土層断面 (北から)



(3) C-2 c 地区溝 SD 286311 遺物出土状況(1)



C-2 c 地区溝 SD 286311 遺物出土状況(2)



(1) C-2 d 地区上層全景（北東から）



(2) C-2 d 地区下層全景（南西から）



(3) C-2 d 地区溝 SD 286408（南から）



(4) C-2 d 地区溝 SD 286409
（北西から）



第27図1



2



5



8



10



12



16



第27図24



25



第28図1



2



第28図3



5



6



7



4



9



第28図11



12



13



14



15



19



18



21



24



(2) E-1地区西部中世溝（東から）



(3) E-1地区溝SD31705（南から）



(1) E-1地区全景（北東から）

図版第31 長岡京跡左京第317次（京都工区）



(1) E-2・E-3地区全景（西から）



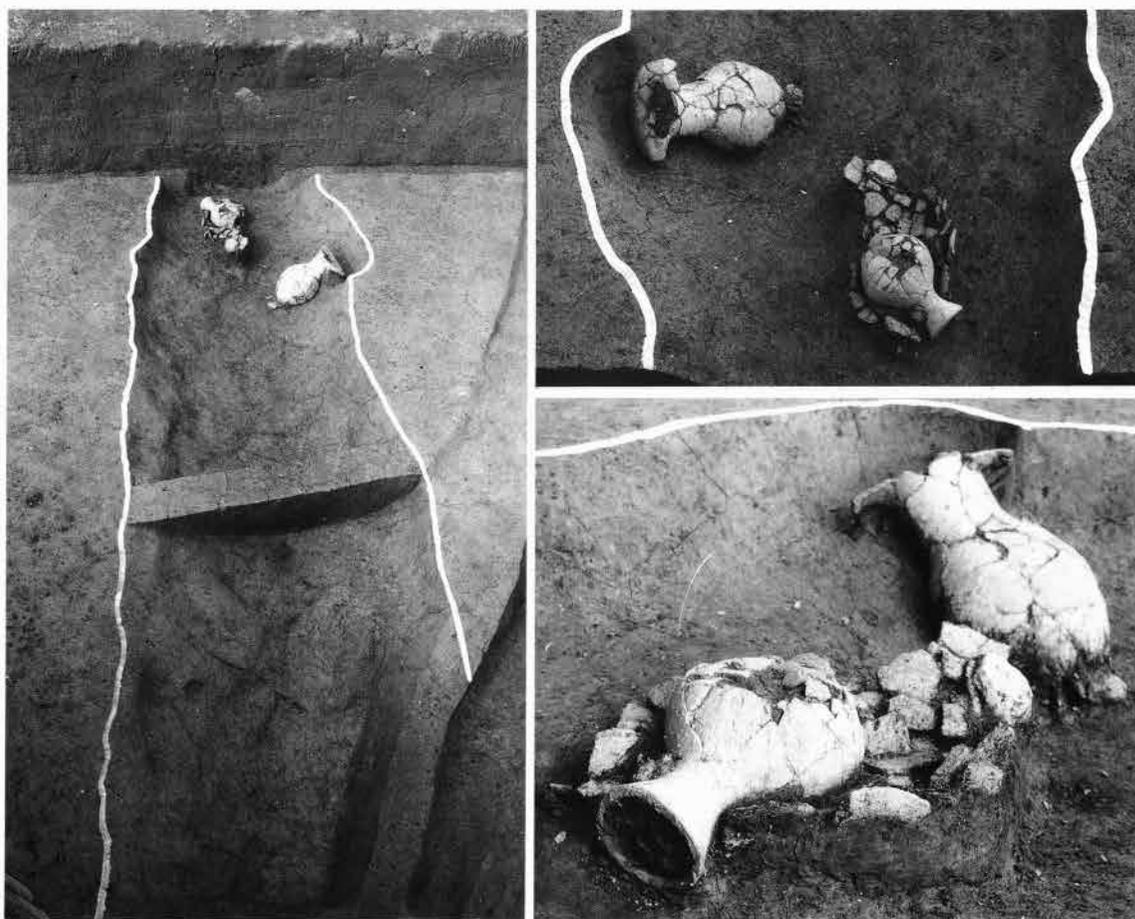
(2) E-2地区全景（南西から）



(3) E-2地区東部全景（北東から）



(1) E-2 地区溝 SD 317139・SD 317138 (南東から)



(2) E-2 地区溝 SD 317137 遺物出土状況



1



2



3

E-2 地区溝 SD 317137 出土遺物（番号は第34図に対応）

図版第34 長岡京跡左京第317次（京都工区）



(1) E-3地区全景（西から）



(2) E-3地区南北溝（南から）



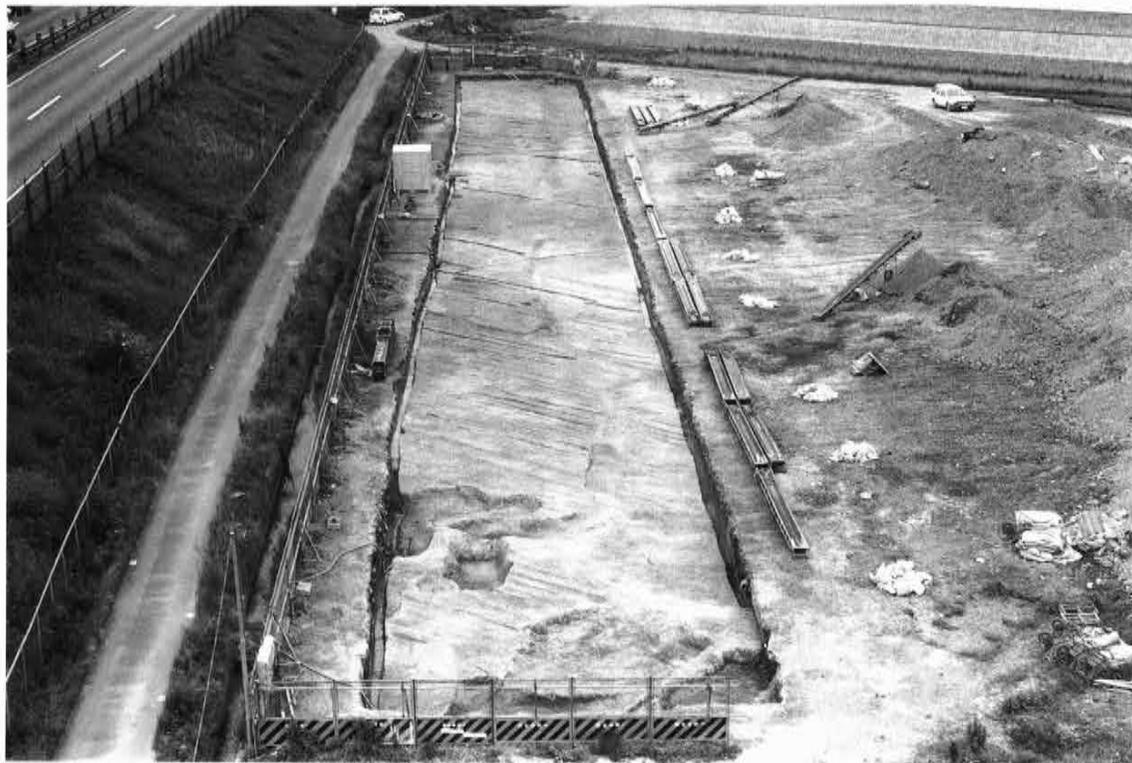
(3) E-3地区SX 317141（南から）



(1) B-1 a・B-2 a地区全景 (北東から)



(2) B-1 a地区全景



(1) B-1 a 地区溝群（南西から）



(2) B-1 a 地区建物跡 SB 303003（東から）

図版第37 長岡京跡左京第303次（PA工区）



(1) B-1 a 地区南西部（北東から）



(2) B-1 a 地区溝 SD 303004（西から）



1



27



7



26



1



10



20



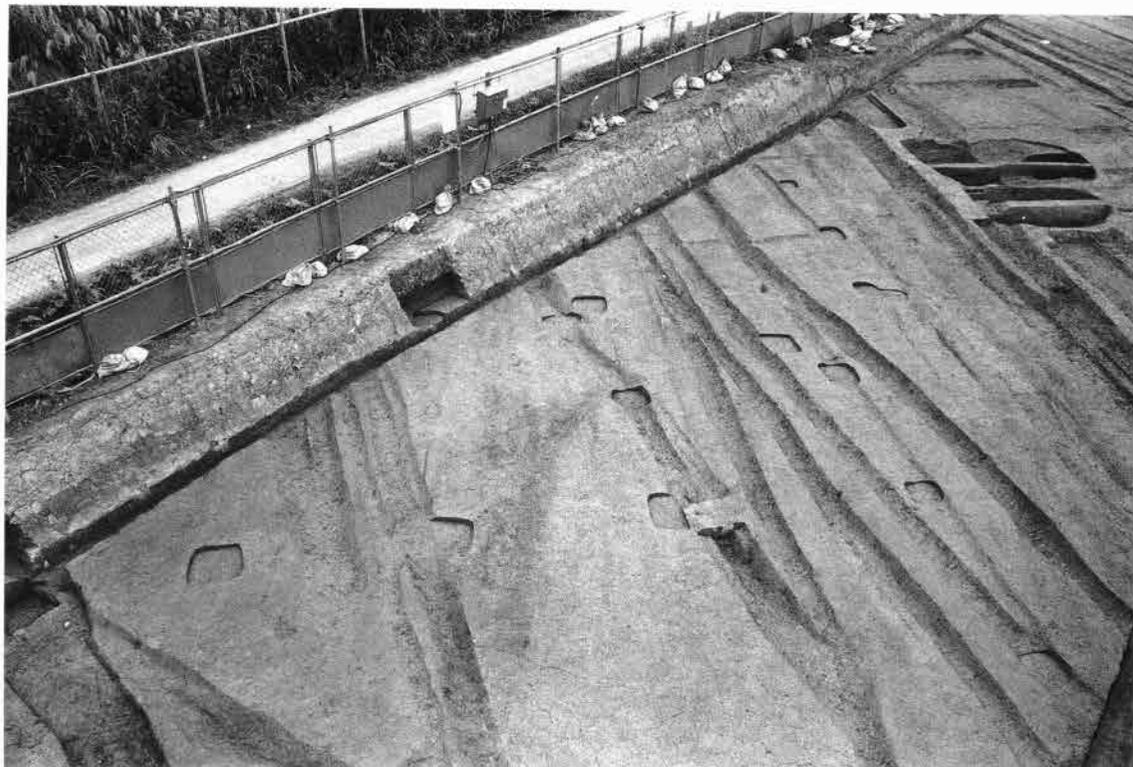
29



3



4



(1) B-1 b地区掘立柱建物跡検出状況（南から）



(2) B-1 b地区素掘り溝群検出状況（東から）

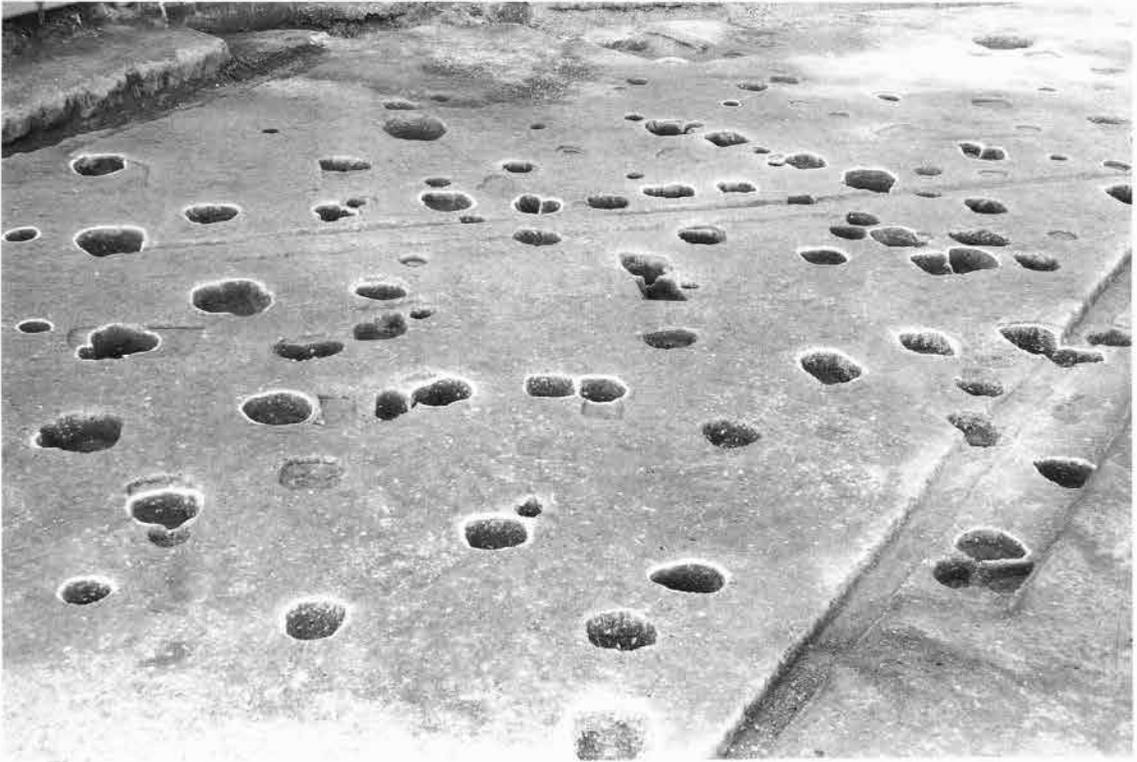


(1) B-2 a 地区トレンチ全景

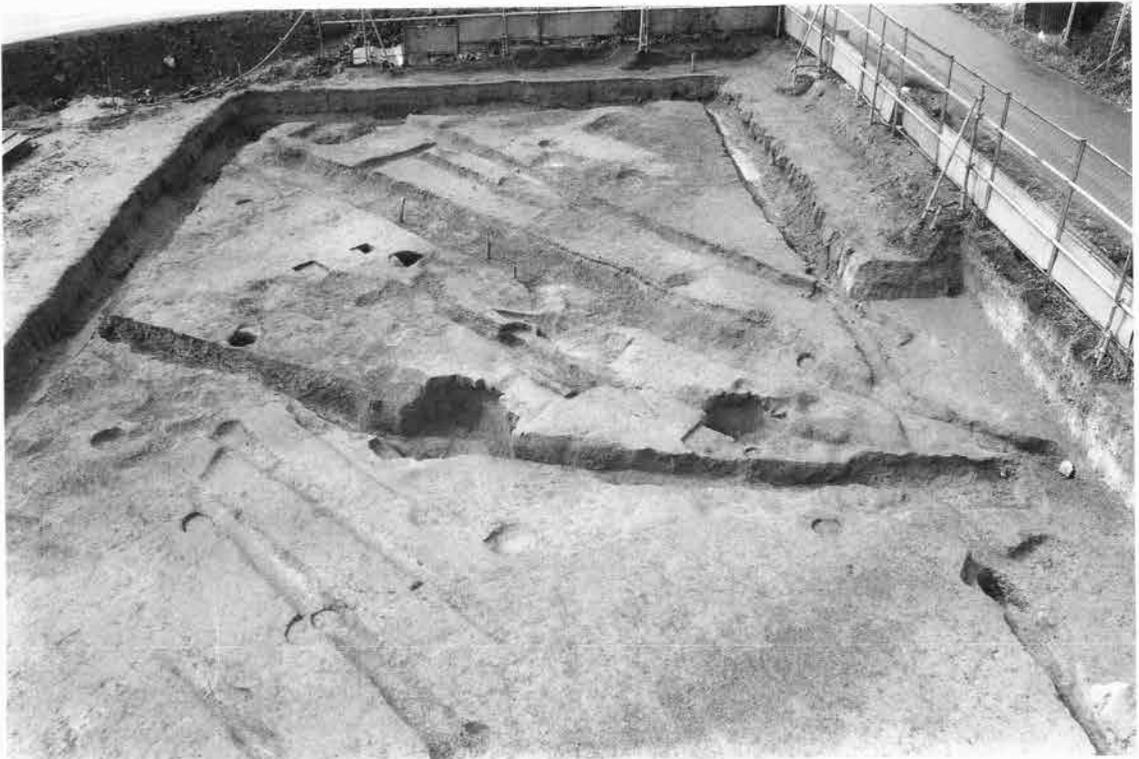


(2) B-2 a 地区中世溝群（南西から）

図版第41 長岡京跡左京第315次（PA工区）



(1) B-2 a 地区掘立柱建物跡群（南から）



(2) B-2 a 地区溝 SD 315003（北東から）



2



18



6



15



3



10



25



28



8



図版第43 長岡京跡左京第314次 (PA 工区)



(1) D-2 a 地区トレンチ全景 (西から)



(2) D-2 a 地区掘立柱建物跡検出状況 (東から)



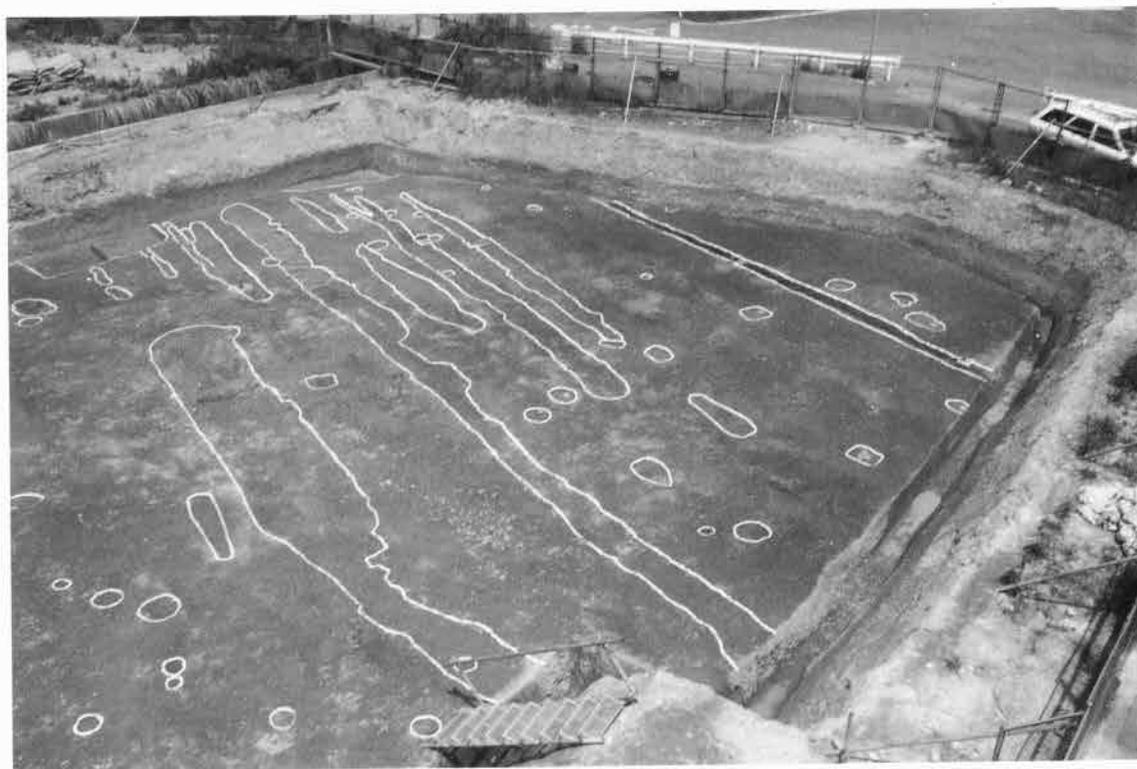
(1) C-4 c 地区全景（南西から）



(2) C-4 c 地区建物跡 SB 395821（北から）



(1) C-5 a地区全景（東から）



(2) C-5 a地区素掘り溝群と建物跡 SB 428106検出状況（南東から）



(1) C-5 a 地区建物跡 SB 428106完掘状況（南から）



(2) C-5 a 地区溝 SD 428108・109完掘状況（南東から）



(3) C-5 a 地区建物跡 SB 428106-柱穴 P 3



(4) C-5 a 地区建物跡 SB 428106-柱穴 P 5



(1) C-5 a 地区建物跡 SB 428106-柱穴 P 1



(2) C-5 a 地区建物跡 SB 428106-柱穴 P 2



1



2



9



13



12



14



16

(1) C-5 a 地区出土遺物



(2) C-5 b 地区全景（西から）



(1) 竪穴式住居跡 SH 02全景 (南西から)



(2) 竪穴式住居跡 SH 03全景 (南東から)



(1) 土器溜まり SX 08 (南から)



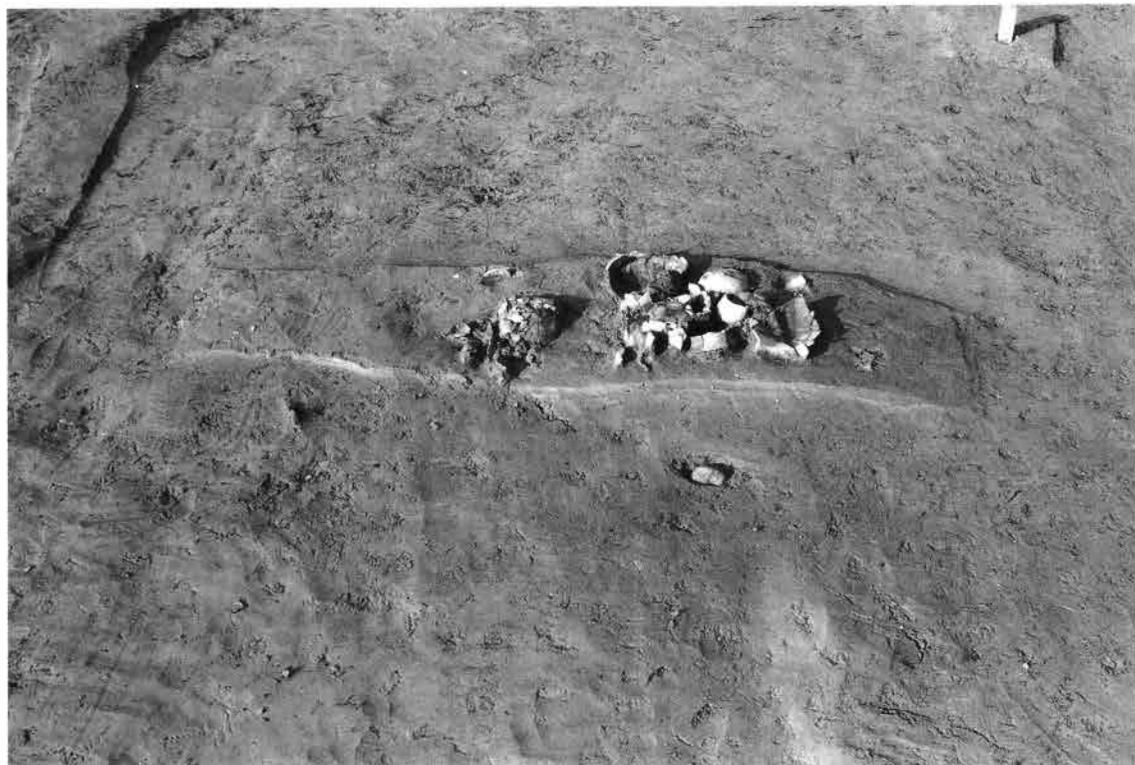
(2) 土器溜まり SX 07 (北から)



(1) 埋葬主体部 SX 06全景 (東から)



(2) B地区水田畦畔検出状況



(1) 水田畦畔遺物出土状況(南から)



(2) B地区南西部水田畦畔検出状況



62-2



59-4



58-1



59-1



58-5

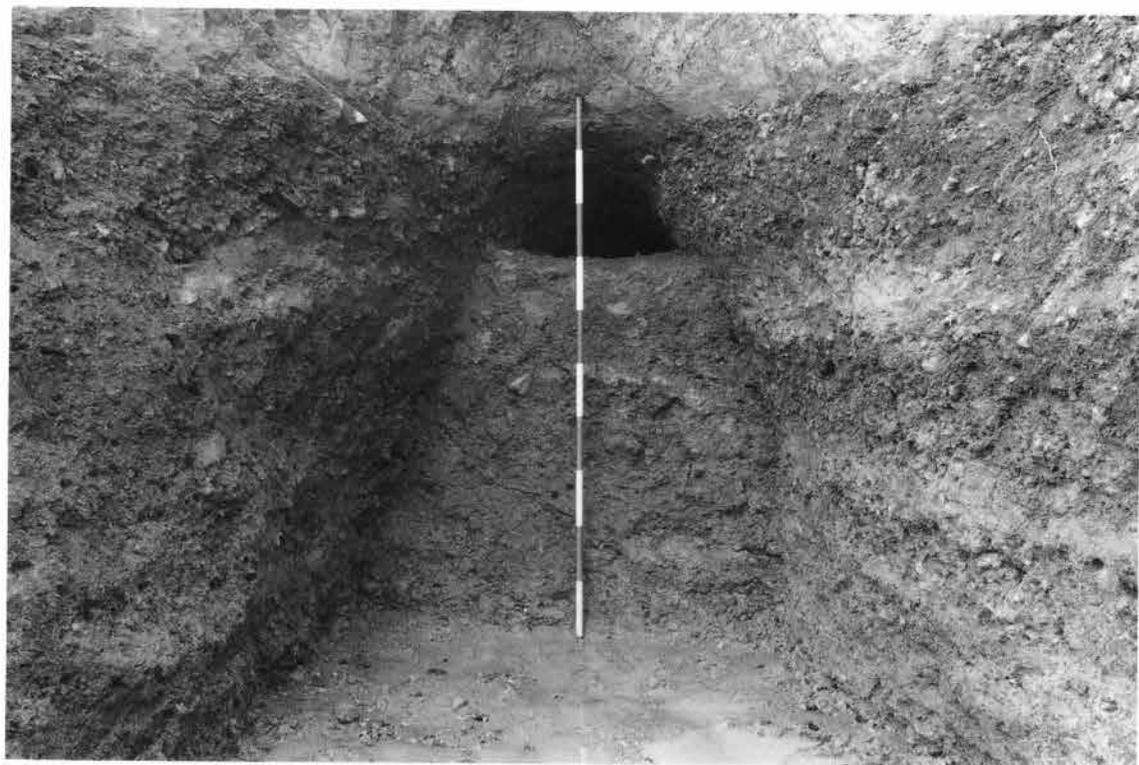


59-2

主要出土遺物



(1) 荒坂横穴群調査地遠景（東から）



(2) 22号横穴玄門部（北東前庭部から）



(1) 18号横穴前庭部 (東から)



(2) 20号・21号横穴前庭部 (東から)



(1) 調査前風景（北西から）



(2) 1トレンチ全景（北から）



(1) 調査前風景（西から）



(2) 埴輪窯全景（南から）



(1) 2号窯焼成部最奥付近埴輪出土状況



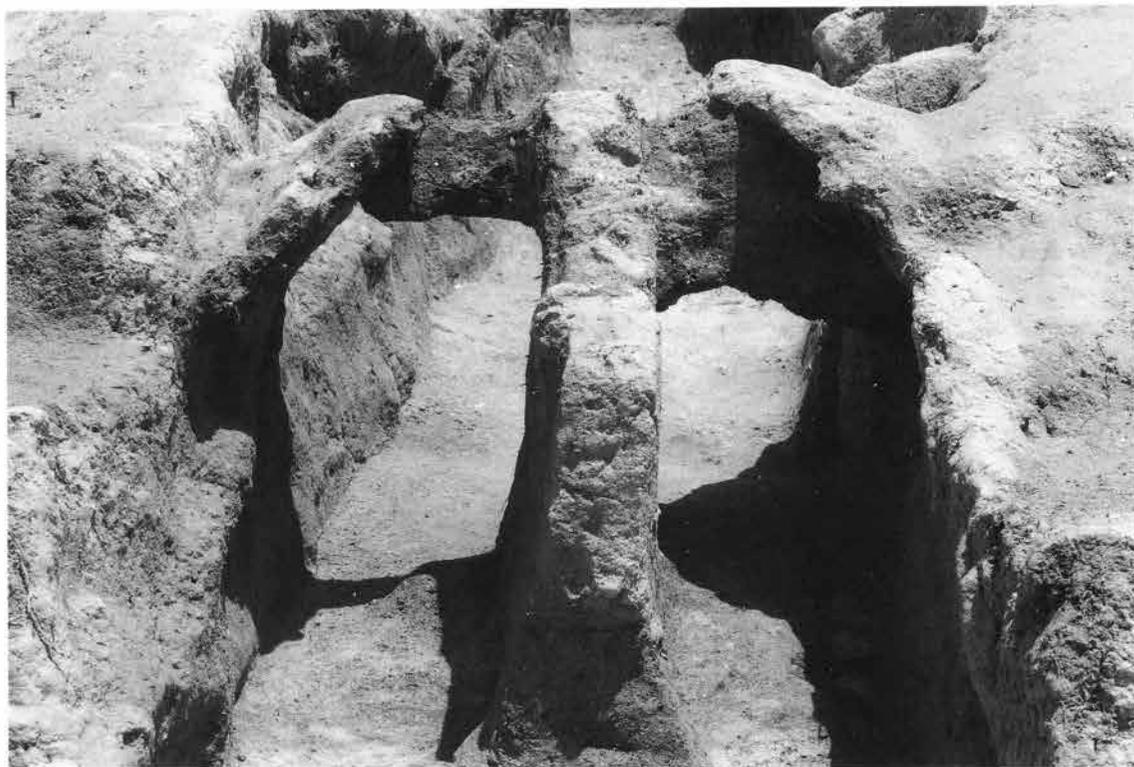
(2) 2号窯焼成部中央付近埴輪出土状況(1)



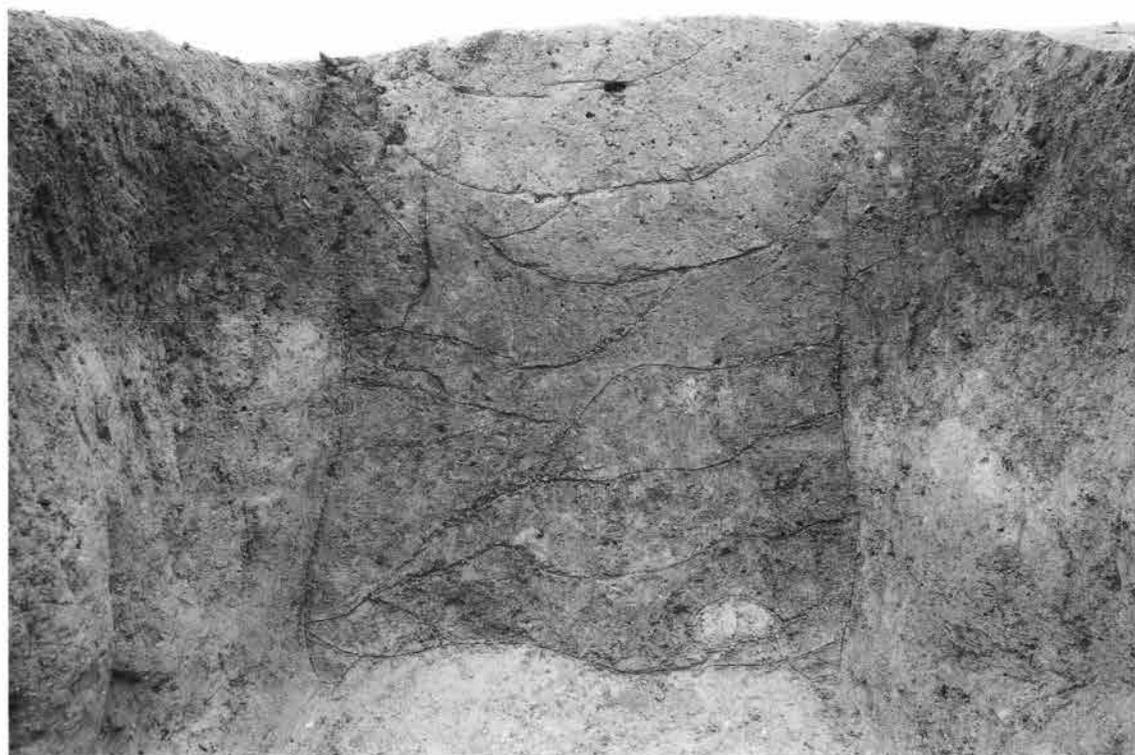
(1) 2号窯焼成部中央付近埴輪出土状況(2)



(2) 2号窯焼成部中央付近埴輪出土状況(3)



(1) 1号窯焼成部天井残存状況(南から)



(2) 3号窯中央部横断面



(1) 埴輪窯～灰原全景（南から）



(2) 灰原及び流路掘削状況（西から）



(1) 埴輪棺出土状況（東から）



(2) 埴輪棺東側鉄鍬出土状況



7



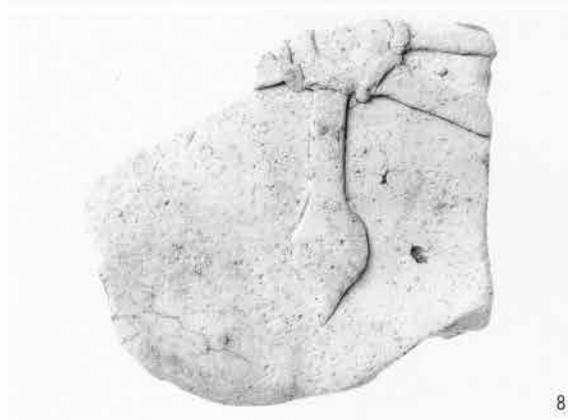
2



1



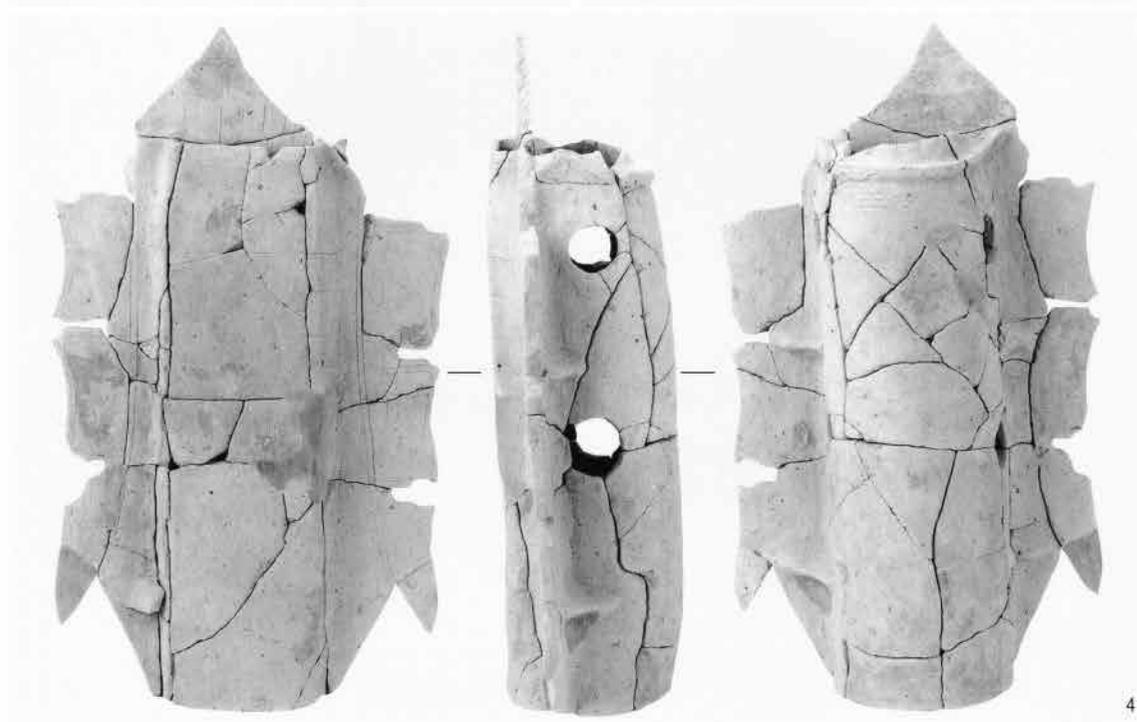
5



8



11



4



15



13



14



10



12



9



(1) 調査前全景（北から）



(2) 3号窯窯体内土層断面（南西から）



(1) 1・2・3号埴輪窯全景（北東から）



(2) 調査地全景（北西から）



(1) 2・3号埴輪窯掘削状況（北東から）



(2) 3号埴輪窯窯体内遺物出土状態（北東から）



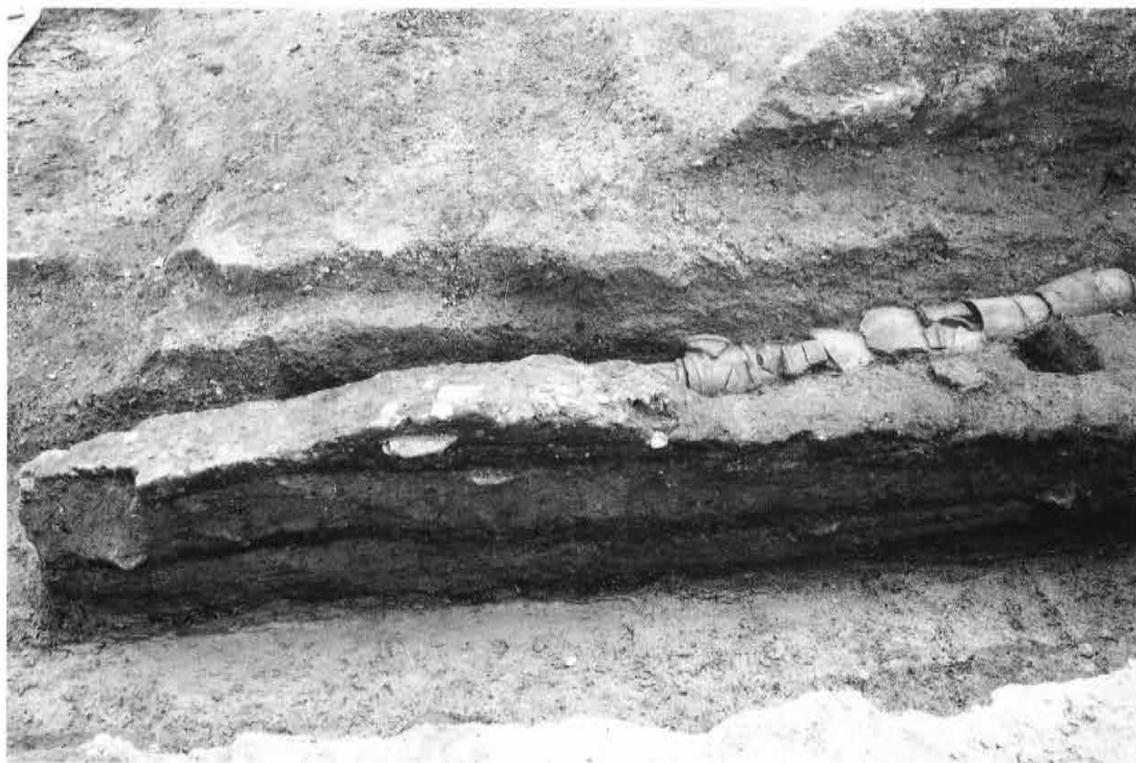
(1) 2号埴輪窯窯体内全景（北東から）



(2) 2号埴輪窯窯体内排水施設（北東から）



(1) 2号埴輪窯北側排水施設 (南東から)



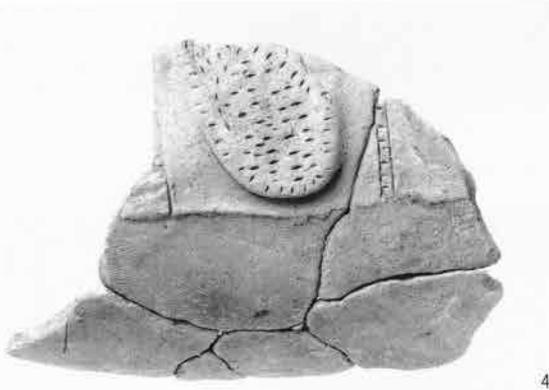
(2) 2号埴輪窯燃焼部土層断面 (北西から)



(1) SD 01上層埴輪出土状態（北西から）



(2) SD 01上層埴輪出土状態（東から）



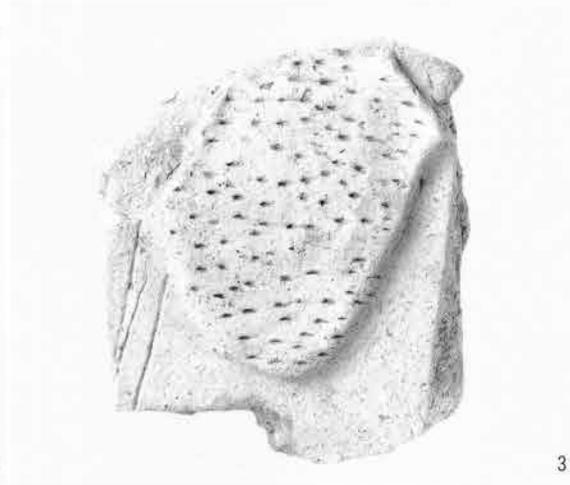
4



5



16



3



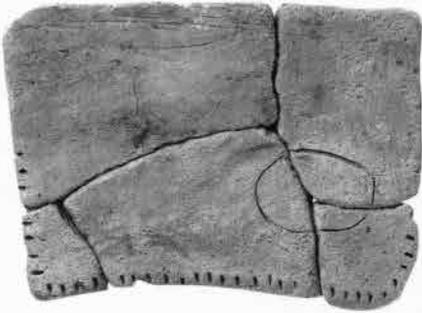
1



8



2



9



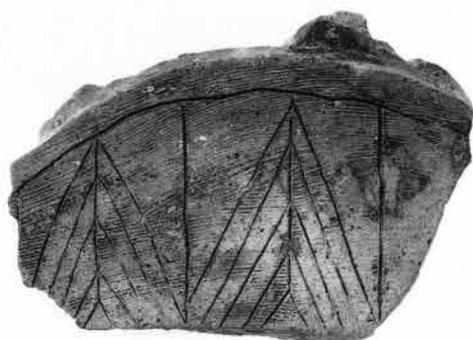
6



7



14



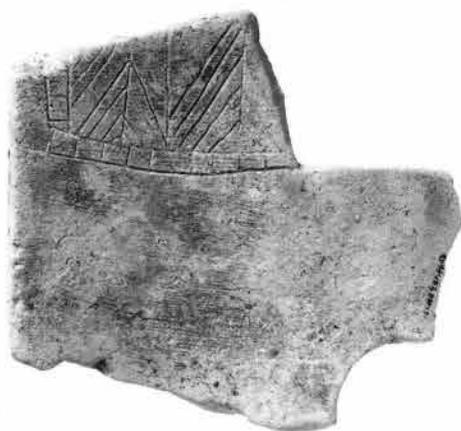
10



17



15



12



20



13



18



(1) 調査地全景（北から）



(2) 調査地地山堆積状況（西から）



(1) Aトレンチ全景 (東から)



(2) Jトレンチ全景 (南から)



(1) 窯跡群全景1 (北から)



(2) 窯跡群全景2 (北から)



(1) 調査地丘陵頂部全景（東から）



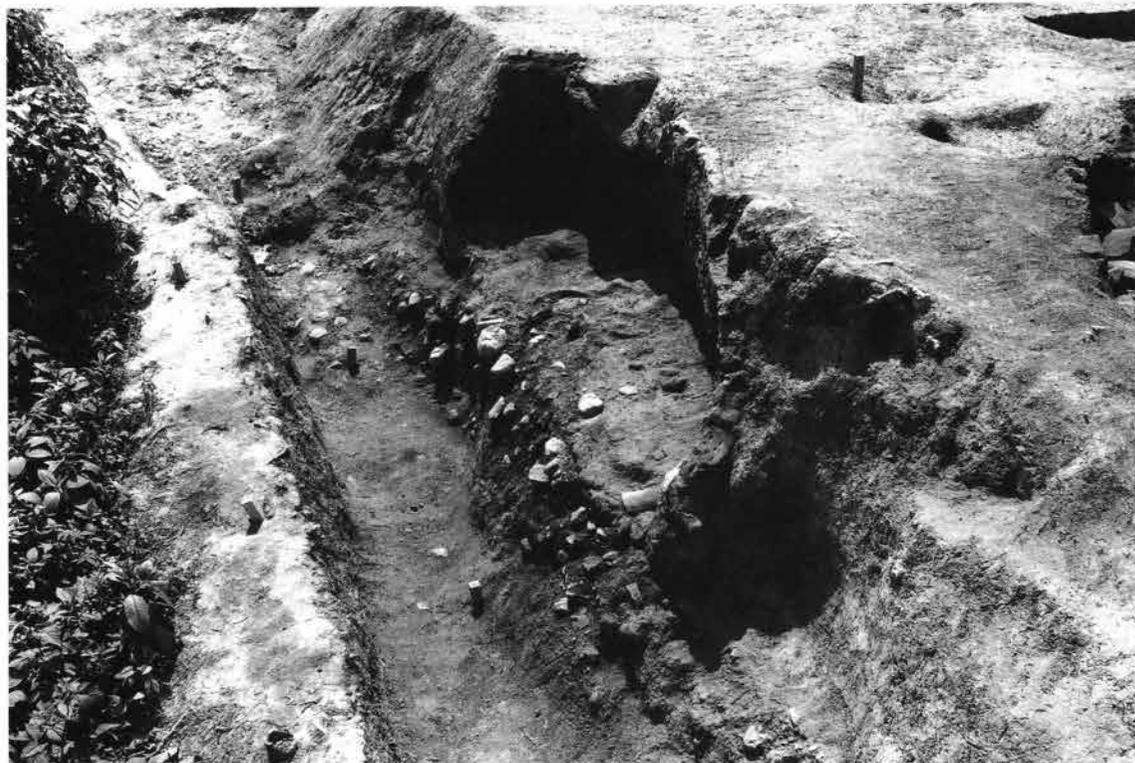
(2) SK 01完掘状況（北から）



(1) 礫敷検出状況（東から）



(2) 整地土堆積状況（調査地北西斜面付近）



(1) 1号窯完掘状況（北から）



(2) 2号窯焼成部第1面検出状況（北から）



(1) 2号窯燃焼部掘削状況（北から）



(2) 2号窯焼成部第2床面検出状況



(1) 7号窯燃焼部掘削状況（北西から）



(2) 7号窯掘削状況（北から）



(1) 6号窯上面灰釉陶器出土状況（南から）



(2) 5号窯上面瓦出土状況



1



2



6



8



12



9



10



11



7



(1) 市坂瓦窯と上人ヶ平遺跡（上が西北西）



(2) 調査前風景（北西から）

図版第86 市坂瓦窯



(1) 1～3号窯検出状況（南西から）



(2) 8号窯焼き口検出状況（北東から）

報告書抄録

ふりがな								
書名	京都府遺跡調査概報							
副書名								
巻次	61							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	戸原和人・竹井治雄・石尾政信・岩松 保・中川和哉・鍋田 勇・森島康雄・岸岡貴英・竹原一彦・石井清司・有井広幸							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 向日市寺戸町南垣内40-3 TEL 075(933)3877							
発行年月日	西暦 1995 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきよ うあとさきよ うひがしつち かわいせき 長岡京跡左京 第286・304・ 313・317次・ 東土川遺跡	ふしみくこがに しでちょう、み なみくくぜひが しつちかわちよ う	109	10			19940506 ～ 19950225	1,700	道路拡幅
ながおかきよ うあとさきよ うひがしつち かわいせき 長岡京跡左京 第303・314・ 315次・東土川 遺跡	みなみくくぜひ がしつちかわ ちよう 南区久世東土川 町金井田	107	10			19940906 ～ 19950225	1,000	道路拡幅
ながおかきよ うあとうきよ うしもうえの みなみ 長岡京跡右京 第428次・下植 野南遺跡	おおやまざき ちようしもうえ のてらかど 大山崎町下植野 寺門	303	18			19940407 ～ 19950304	1,600	道路拡幅
うちさとはっ ちよういせき 内里八丁遺跡	やわたしうちさ とはちちよう・ うちさとひゅう がどう 八幡市内里八 丁・内里日向堂 他	210	37			19950423 ～ 19960207	1,300	道路建設

あらさかおう けつぐん 荒坂横穴群	たなべちようま ついちさき 田辺町松井地先	342	31			19950819 ～ 19951022	1,450	道路建設
まついこふん じょうりゅう き 松井古墳状隆 起	たなべちようま ついちさき 田辺町松井地先	342				19950809 ～ 19950914	60	道路建設
かわらだにい せき 瓦谷遺跡	きづちよういち さかかわらだに 木津町市坂瓦谷	362	65			19930805 ～ 19940304	3,500	宅地造成
しょうにんが ひらはにわが ま 上人ヶ平埴輪 窯	きづちよういち さかしょうにん がひら 木津町市坂上 人ヶ平	362	66			19930902 ～ 19940304	550	宅地造成
うめだにがよ うあと、なか のしまいせき 梅谷瓦窯跡、 中ノ島遺跡	きづちよううめ だになかのしま 木津町梅谷中ノ 島	362	25			19930412 ～ 19940304	3,000	宅地造成
いちさかがよ う 市坂瓦窯	きづちよういち さかしょうにん がひら 木津町市坂上 人ヶ平	362	11			19931110 ～ 19940304	800	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡左京 第303次・東土 川遺跡	都城	平安	溝、条坊側溝	須恵器・土師器	
長岡京跡左京 第315次・東土 川遺跡	集落、都城	弥生、古墳、平安	溝、条坊側溝	弥生土器・須恵 器・土師器・布目 瓦・軒瓦	
長岡京跡左京 第315次・東土 川遺跡	集落、都城	古墳、平安	溝、掘立柱建物跡、 条坊側溝	須恵器・土師器	
内里八丁遺跡	集落跡	古墳	水田跡、竪穴住居	古式土師器・須恵 器	
荒坂横穴群	横穴	古墳後期	横穴5、溝	なし	

松井古墳状隆起					自然地形
瓦谷遺跡	埴輪窯、墓	古墳	埴輪窯、埴輪棺	埴輪、鉄器	
上人ヶ平埴輪窯	窯跡	古墳	埴輪窯	埴輪	
梅谷瓦窯跡、中ノ島遺跡	窯跡	奈良	瓦窯、甕窯、平窯、灰原	瓦類	興福寺創建瓦窯
市坂瓦窯	窯跡	奈良	瓦窯		

京都府遺跡調査概報 第61冊

平成7年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)